茨城県教育財団文化財調査報告第239集

薬師入遺跡

阿見吉原土地区画整理事業地内
埋蔵文化財調査報告書 Ⅱ

平成17年3月

茨城県竜ヶ崎土木事務所
財団法人 茨城県教育財団

茨城県教育財団文化財調査報告第239集
薬師入遺跡
財団法人 茨城県教育財団

茨城県教育財団文化財調査報告第239集

薬師入遺跡

阿見吉原土地区画整理事業地内
埋蔵文化財調査報告書　Ⅱ

平成17年3月

茨城県竜ヶ崎土木事務所
財団法人　茨城県教育財団

薬師入遺跡全景

古墳時代住居跡出土土器

序

茨城県は，21世紀の社会を展望し，県全域にわたる調和のとれた発展を図るために，県内の交通体系の整備を進めています。また，首都圏中央連絡自動車道の整備に伴い，その計画路線のある阿見町には，インターチェンジの設置が予定されています。阿見吉原土地区画整理事業は，インターチェンジへの接続道路にもなる地域幹線道路の整備と共に，インターチェンジ周辺部に商業及び業務系施設や住宅地の形成を図り，当地域及び周辺地域の活性化と秩序ある発展に寄与することを目的として計画されています。

この事業地内には，阿見町の埋蔵文化財包蔵地である篠崎Ａ遺跡や薬師入遺跡が所在します。

財団法人茨城県教育財団は，茨城県竜ヶ崎土木事務所から阿見吉原土地区画整理事業地内の埋蔵文化財発掘調査事業について委託を受け，平成14年12月から平成15年１月まで，さらに平成15年11月から平成16年３月まで薬師入遺跡の発掘調査を実施しました。

本書は，薬師入遺跡の発掘調査の成果を収録したもので，本書が学術的な研究資料としてはもとより，郷土の歴史に対する理解を深め，ひいては教育・文化の向上の一助として御活用いただければ幸いです。

なお，発掘調査から報告書の刊行に至るまで，委託者である茨城県竜ヶ崎土木事務所から多大な御協力を賜りましたことに対し，厚く御礼申し上げます。

また，茨城県教育委員会，阿見町教育委員会をはじめ，関係各位からいただいた御指導，御協力に対し，感謝申し上げます。

平成17年３月

財団法人　茨城県教育財団

理事長　齋　藤　佳　郎

例　　言

1　本書は，茨城県竜ヶ崎土木事務所の委託により，財団法人茨城県教育財団が平成14・15年度に発掘調査を実施した茨城県稲敷郡阿見町大字吉原字薬師入に所在する薬師入遺跡の発掘調査報告書である。

2　発掘調査期間及び整理期間は，以下の通りである。

調査　平成14年12月１日～平成15年１月31日，平成15年11月１日～平成16年３月31日

整理　平成16年10月１日～平成17年１月31日

3　発掘調査は，平成14年度調査第一課長阿久津久，平成15年度調査課長川井正一のもと，以下の者が担当した。

平成14年度

首席調査員兼班長　鯉渕和彦　平成14年12月１日～平成15年１月31日

首席調査員　山口厚　平成14年12月１日～平成15年１月31日

調査員　小林健太郎　平成14年12月１日～平成15年１月31日

平成15年度

首席調査員兼班長　鯉渕和彦　平成15年11月１日～平成16年３月31日

主任調査員　近藤恒重　平成16年３月１日～平成16年３月31日

副主任調査員　駒澤悦郎　平成15年11月１日～平成16年３月31日

調査員　小林健太郎　平成15年11月１日～平成16年３月31日

4　整理及び本書の執筆・編集は，整理第一課長瓦吹堺のもと，副主任調査員駒澤悦郎が担当した。

凡　　例

1　地区設定は，日本平面直角座標第Ⅸ系座標に準拠し，Ｘ軸＝-1,520m，Ｙ軸＝36,280mの交点を基準点（Ａ１a1）とした。なお，この原点は，世界測地系による基準点である。

調査区は，この基準点を基に遺跡範囲内を東西・南北40m四方の大調査区に分割し，さらに，この大調査区を東西・南北に各々10等分し，４m四方の小調査区を設定した。

大調査区の名称は，アルファベットと算用数字を用い，北から南へＡ，Ｂ，Ｃ…，西から東へ１，２，３…とし，「Ａ１区」，「Ｂ２区」のように呼称した。さらに，小調査区は，北から南へａ，ｂ，ｃ…ｊ，西から東へ１，２，3…0とし，名称は，大調査区の名称を冠して「Ａ１a1区」，「Ｂ２b2区」のように呼称した。

2　実測図・一覧表・遺物観察表等で使用した記号は，次のとおりである。

遺構　ＳＩ－住居跡　ＳＫ－土坑　ＳＤ－溝　ＳＦ－道路跡　ＳＸ－火葬土坑
　　Ｐ－柱穴

遺物　ＴＰ－拓本記録土器　ＤＰ－土製品　Ｑ－石器・石製品　Ｍ－金属製品　Ｇ－ガラス製品

土層　Ｋ－撹乱

3　土層観察と遺物における色調の判定は，土色帖（小山正忠・竹原秀雄編著『新版標準土色帖　９版』日本色研事業株式会社　1989年５月）を使用した。

4　遺構・遺物実測図の表記については，次のとおりである。

(1)　遺跡全体図は縮尺300分の１とし，各遺構の実測図は60分の１の縮尺で掲載することを基本とした。

(2)　遺物は原則として３分の１の縮尺で掲載した。種類や大きさにより異なる場合もあり，それらについては個々に縮尺をスケールで表示した。

(3)　遺構・遺物実測図中の表示は，次の通りである。

焼土・赤彩　炉・繊維土器　粘土　硬化面・柱痕跡

● 土器　○ 土製品　□ 石器・石製品　△ 金属製品　★ ガラス製品

-——- 住居床面硬化範囲

5　遺物観察表・一覧表の表記については，次の通りである。

(1)　計測値の（ ）内の数値は現存値を，［ ］内の数値は推定値を示した。計測値の単位はcm，ｇで示した。

(2)　遺物観察表の備考の欄は，残存率及びその他必要と思われる事項を記した。

6　「主軸」は，炉を通る軸線あるいは長軸（径）を通る軸線とした。「主軸・長軸方向」は主軸が座標北からみて，どの方向にどれだけ振れているかを角度で表示した（例：Ｎ-10°-Ｅ）。なお，推定値は［ ］を付して示した。

抄　　録

ふ り が な	やくしいりいせき
書　　名	薬師入遺跡
副 書 名	阿見吉原土地区画整理事業地内埋蔵文化財調査報告書
巻　　次	Ⅱ
シ リ ー ズ 名	茨城県教育財団文化財調査報告
シリーズ番号	第239集
編 著 者 名	駒澤悦郎
編 集 機 関	財団法人　茨城県教育財団
所　在　地	〒310-0911　茨城県水戸市見和１丁目356番地の2　　TEL 029(225)6587
発 行 機 関	財団法人　茨城県教育財団
所　在　地	〒310-0911　茨城県水戸市見和１丁目356番地の2　　TEL 029(225)6587
発　行　日	2005(平成17)年３月25日

ふりがな 所収遺跡	ふりがな 所在地	コード	北緯	東経	標高	調査期間	調査面積	調査原因
薬師入遺跡 (やくしいりいせき)	茨城県稲敷郡阿見町大字吉原字薬師入2717番地の10ほか (いばらきけんいなしきぐんあみまちおおあざよしはらあざやくしいりいせき)	08443 ｜ 118	35度 58分 53秒	140度 14分 22秒	24.1 ～ 25m	20021201 ～ 20030131 20031001 ～ 20040331	11,939㎡	阿見吉原土地区画整理事業に伴う事前調査

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
薬師入遺跡	包蔵地	旧石器	石器集中地点 2か所	石器（石核，ナイフ形石器，石刃，剥片）	旧石器時代は，2か所の小規模な石器製作跡が確認され，当地域の石器集中地点の様相を伺い知ることができる。弥生時代後期後半の集落跡は小規模で，弥生時代後期末葉から古墳時代前期の竪穴住居跡からは，在地系及び南関東系の弥生土器や土師器が出土している。古墳時代中期になると，１辺が８ｍを超えるような大形の竪穴住居も構築され，素材から製品に至る滑石製の模造品が多数出土している。中世から近世は，火葬土坑をはじめ，土坑や道路跡が確認され，葬送及び耕作域として土地利用されたと考えられる。
	集落跡	縄文	竪穴住居跡　1軒 陥し穴　2基 炉穴　1基 土坑　2基	縄文土器（深鉢），石器（石鏃・磨製石斧・磨石・剥片）	
		弥生	竪穴住居跡　4軒	弥生土器（壺・甕）	
		古墳	竪穴住居跡　29軒 炉跡　2基 土坑　2基	土師器（高坏・器台・甕・台付甕・壺・坩・ミニチュア土器），石製品（剣形模造品・双孔円板・臼玉），自然遺物（炭化米）	
	その他	中世～近世	火葬土坑　1基 道路跡　1条 溝　2条 土坑　25基	陶器（天目茶碗），土師質土器（カワラケ）	

目　　次

序
例言
凡例
抄録
目次
第１章　調査経緯……1
　第１節　調査に至る経緯……1
　第２節　調査経過……1
第２章　位置と環境……3
　第１節　地理的環境……3
　第２節　歴史的環境……3
第３章　調査の成果……11
　第１節　遺跡の概要……11
　第２節　基本層序……11
　第３節　遺構と遺物……12
　　１　旧石器時代の遺構と遺物
　　(1)　調査の方法……12
　　(2)　第１号石器集中地点……13
　　(3)　第２号石器集中地点……14
　　２　縄文時代の遺構と遺物……16
　　(1)　竪穴住居跡……16
　　(2)　陥し穴……17
　　(3)　炉　穴……19
　　(4)　土　坑……19
　　３　弥生時代の遺構と遺物……20
　　４　古墳時代の遺構と遺物……30
　　(1)　竪穴住居跡……30
　　(2)　炉　跡……107
　　(3)　土　坑……108
　　５　中世の遺構と遺物……110
　　(1)　火葬土坑……110
　　(2)　道路跡……111
　　(3)　溝……111
　　(4)　土　坑……113
　　６　遺構外出土の遺物……117
　第４節　まとめ……121
　　１　土地利用の変遷……121
　　２　古墳時代前期における土器・集落・住居形態の様相……122
　　(1)　土器の形態と器種組成の変化について……122
　　(2)　集落の変遷と外来系土器について……128
　　(3)　住居形態とその変化について……129
写真図版

第１章　調　査　経　緯

第１節　調査に至る経緯

茨城県は，一般国道468号首都圏中央連絡自動車道の建設に伴って周辺部の開発を図り，周辺地域の活性化を目的とした土地区画整理事業を計画している。そうした中，茨城県竜ヶ崎土木事務所は，稲敷郡阿見吉原地区土地区画整理事業を進めている。

平成５年12月17日，茨城県知事は，茨城県教育委員会教育長に対して，阿見吉原地区土地区画整理事業地内における埋蔵文化財の所在の有無及びその取り扱いについて照会した。これを受けて茨城県教育委員会は平成８年度に現地踏査を，平成11年１月20日～22日，26日～29日に試掘調査を実施し，遺跡の所在を確認した。平成11年３月18日，茨城県教育委員会教育長は，茨城県知事（都市整備課扱い）あてに，事業地内に薬師入遺跡が所在する旨回答した。

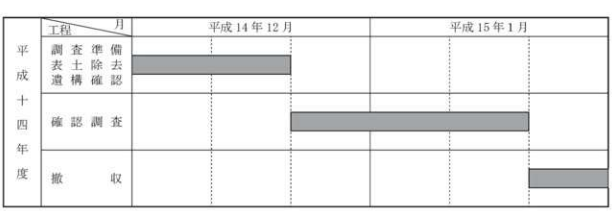
平成14年２月28日，茨城県竜ヶ崎土木事務所長は，茨城県教育委員会教育長に対して，文化財保護法第57条の３第１項の規定に基づき，土木工事等のための埋蔵文化財包蔵地の発掘について通知した。茨城県教育委員会教育長は，計画変更が困難であることから，記録保存のための発掘調査が必要であると判断し，平成14年２月28日，茨城県竜ヶ崎土木事務所長あてに，工事着手前に発掘調査を実施するよう通知した。

平成14年３月20日，茨城県竜ヶ崎土木事務所長は，茨城県教育委員会教育長に対して，阿見吉原地区土地区画整理事業に係わる埋蔵文化財発掘調査の実施について協議した。平成14年３月28日，茨城県教育委員会教育長は，茨城県竜ヶ崎土木事務所長あてに，薬師入遺跡について，発掘調査の範囲及び面積等について回答し，併せて埋蔵文化財の調査機関として，財団法人茨城県教育財団を紹介した。

財団法人茨城県教育財団は，茨城県竜ヶ崎土木事務所長から埋蔵文化財発掘調査事業について委託を受け，平成14年12月１日から平成15年１月31日，平成15年11月１日から平成16年３月31日まで，薬師入遺跡の発掘調査を実施することとなった。

第２節　調　査　経　過

調査は，平成14年12月１日から平成15年１月31日までの２か月間，平成15年11月１日から平成16年３月31日までの５か月間の計７か月間実施した。以下，調査経過について，その概要を表で示す。



	工程＼月	平成15年11月	12月	平成16年１月	２月	３月
平成十五年度	調査準備 表土除去 遺構確認	■	■	■		
	遺構調査	■	■	■	■	■
	遺物洗浄 注記作業 写真整理	■	■	■	■	■
	補足調査 撤収					■

第１図　薬師入遺跡調査区設定図

第2章　位置と環境

第1節　地理的環境

薬師入遺跡は，県の南部，霞ヶ浦南西岸の稲敷郡阿見町大字吉原字薬師入2717番地の10ほかに所在している。

阿見町は東西約９km，南北約11kmで，地勢は標高24～30mとほぼ平坦であり，洪積台地と河川流域の低地，約５kmにわたる霞ヶ浦沿岸の標高１～３mの低湿地帯からなる。台地は筑波・稲敷台地と呼ばれ，千葉県北部から茨城県南部に広がる常総台地の一部を形成している。この台地は数多くの河川によって開析され，樹枝状の入り組んだ複雑な地形を形づくっている。主な河川は，利根川水系の支流でつくば市小野川町に源を発する小野川をはじめ，南部では阿見１区付近を水源として南流する桂川（若栗川）や，土浦市の乙戸沼を水源として，桂川を合わせて小野川に集まって，霞ヶ浦へと注ぐ乙戸川がある。北部では新治郡桜村北西域を水源とし，土浦市南部を経て阿見町北端で霞ヶ浦に流入する花室川，北東部では阿見町１区北域を水源とし，南東に流れて美浦村舟子で霞ヶ浦に注ぐ清明川がある。こうした河川に沿って発達している沖積低地は，標高10～20mで，ほとんどが谷津田となっている。町域の東部から東南部にかけては，河川の浸蝕を受けて大きく起伏する台地が見られ，これに対して北西部から西部にかけては，河川の浸蝕を受けることが少なく，極めて平坦な台地が広がっている。

台地の地質は，下部から第四紀洪積世下総層群下部の地蔵堂層・藪層（15～80万年前），最終間氷期に形成された古東京湾を埋積した下総層群上部の成田（青灰色シルト）層（12～13万年前），これを覆う常総層下部の竜ヶ崎層，常総層上部の箱根山の噴火による常総粘土層，その上部には関東ローム層が堆積し，最上部は沖積世沖積層となっている[1]。この地域の地形形成に深く関与した乙戸川，桂川，清明川によって開析された流域は，標高10～20mの沖積低地を形成しており，台地との比高は５～10mである。また，これらの河川に挟まれた台地は，多くの細流によって樹枝状に開析され，いくつもの細長く延びる舌状台地が形成されている。

当遺跡は，町域の南部，県指定文化財の木造薬師如来坐像が伝えられる吉原山西光寺から東に約350mの地点に所在し，桂川左岸の標高24.1～25mの舌状台地上に立地している。この台地は南北約1400m，東西約800mで，南側に沖積低地を望み，西側及び東側から北側にかけて細長い谷津が入り込んでいる。

当遺跡と周辺の土地利用の現状は，台地上は主に畑地及び平地林で，桂川流域の沖積低地は水田である。

第2節　歴史的環境

当遺跡〈1〉は，旧石器時代から近世まで断続的に土地利用された複合遺跡である。当遺跡の周辺は利根川水系に属し，水利の便に富み，台地縁には樹枝状に入り込んだ谷津が発達した環境であるため，旧石器時代から人々の生活の舞台となり，それを裏付けるように周辺には旧石器時代から近世までの遺跡が数多く確認されている。ここでは，当遺跡に関連する周辺の遺跡を中心に，時代ごとに述べる[2]。

旧石器時代の遺跡は，町域では乙戸川流域と清明川流域に比較的多く存在する。前者は石器集中地点が確認された谷ノ沢遺跡[3]〈2〉，ナイフ形石器や有舌尖頭器などが出土した実穀寺子遺跡[4]〈3〉，剥片が出土した牛久市源臺遺跡[5]〈4〉がある。後者は石器集中地点が確認された星谷遺跡[6]〈5〉，有舌尖頭器が出土した中ノ台遺跡[7]〈7〉や君島天神遺跡[8]〈8〉である。このほか，小野川流域では有舌尖頭器が出土した牛久市木戸内Ａ遺跡[9]〈9〉，石刃核が出土した牛久市女化Ｃ遺跡[10]や同市天王峯遺跡[11]〈10〉，削器が出土した牛久市スカキ台遺跡[12]〈11〉が

あり，ナイフ形石器文化から有舌尖頭器文化までの各時期の石器群が確認されている。

縄文時代の遺跡も，清明川流域及び霞ヶ浦沿岸の台地縁辺部に多く点在している。霞ヶ浦と町域の北部を南流する清明川に挟まれた幅狭の台地上に位置する竹来遺跡〈6〉は，中期から後期の大規模集落跡で，数多くの竪穴住居跡とフラスコ状土坑が発見されている[13]。隣接する根田貝塚〈12〉は中期の斜面貝塚，見留目貝塚〈13〉は中期の地点貝塚，廻戸貝塚は後期から晩期の貝塚である。島津遺跡群の島津１・２・３・４地点〈14〉は，県域屈指の大規模集落跡で，中期の竪穴住居跡100軒，土坑800基などが発見されている[14]。また，霞ヶ浦沿岸の典型的な馬蹄形貝塚である前期から中期の宮平貝塚群〈15〉は，町指定史跡となっている。桂川流域では，中期の大規模集落跡である牛久市赤塚遺跡[15]〈16〉をはじめ，陥し穴などが発見された当遺跡〈1〉や下原遺跡[16]〈17〉，牛久市ナギ山遺跡〈18〉，手接遺跡[17]〈19〉，吉原遺跡〈20〉などが知られている。乙戸川流域では，陥し穴や早期から後期の土器片が発見された於山遺跡[18]をはじめ，下小池東遺跡[19]〈21〉や福田遺跡〈22〉などがある。

弥生時代の遺跡は極めて少ない。乙戸川流域では，道記遺跡〈23〉から弥生土器片が出土している。桂川流域の当遺跡〈1〉や下原遺跡〈17〉，桜立遺跡[20]〈24〉では，集落跡や弥生土器片が発見されている。清明川流域の竹来遺跡〈6〉では，後期の竪穴住居跡１軒が発見され[21]，その他，宮脇遺跡[22]や阿見東遺跡[23]，頭田遺跡〈25〉などが知られている。牛久市域を含めた遺跡の分布傾向は，主に清明川流域及び霞ヶ浦沿岸，乙戸川及び桂川流域，牛久沼東岸の３か所の地域に大別され，いずれの地域も後期を中心としている。当遺跡から南々東3.6kmに位置する牛久市姥神遺跡[24]〈26〉や南々東5.3kmに位置する天王峯遺跡〈10〉では，霞ヶ浦西・南岸周辺地域を中心に分布する上稲吉式土器や，県西部や栃木県南部を中心に分布する二軒屋式土器をはじめ，東京湾東岸地域で見られる甕形土器[25]が出土しており，複雑な弥生土器の分布圏の交錯が予想される。

古墳時代になると遺跡数が急増し，町域全体に広がりを見せている。遺跡の立地は，花室川流域の台地上，清明川流域及び霞ヶ浦沿岸の台地上，桂川及び乙戸川流域の台地上の３か所の地域に大別される。また，集落や古墳は，それぞれの河川，あるいは河川から入り込んだ支谷に面した舌状台地の縁辺部に立地していることが多く，これは水田を経営していた河川の後背湿地や谷津田に面した高燥の土地を居住域とし，集落に近接した場所に墳墓を築造したためと考えられる。桂川及び乙戸川流域の集落跡は，前期の桜立遺跡〈24〉や下原遺跡〈17〉，牛久市スカキ台遺跡〈11〉である。桜立遺跡〈24〉は，当薬師入遺跡から連続する台地上の北東500mの地点に位置し，同時性及び関連性が極めて高いと考えられる[26]。実穀寺子遺跡〈3〉では中期，下小池東遺跡〈21〉では中期から後期の集落跡が発見されているが，中期以降の集落跡の発見は多く，ほとんどの遺跡で，剣・鏡・玉の石製模造品の出土が認められ，これらを用いた集落内祭祀が広く執り行われていたことを示している[27]。清明川流域及び霞ヶ浦沿岸では，島津遺跡〈14〉で中期から後期の集落跡が発見され，阿見東遺跡では石製模造品の工房跡が確認されている[28]。後期の集落跡としては竹来遺跡〈6〉があり，竪穴住居跡９軒などが調査されている[29]。さらに町域には，前期以降，特に中期から後期と推定される古墳も数多く分布している。牛久市源臺遺跡〈4〉や姥神遺跡〈26〉では，前期の周溝墓が発見されている。源臺遺跡からは方形周溝墓５基と円形周溝墓１基，姥神遺跡からは方形周溝墓３基が確認されている[30]。いずれも時期は３世紀後葉から４世紀前葉の県域では初期段階の墳墓に位置づけられている[31]。花室川流域の台地上では，当地域の中核的な古墳群とされる立の越古墳群や円墳４基からなる丸山古墳群などが知られている。清明川流域及び霞ヶ浦沿岸の台地上には，円墳９基からなる君島古墳群〈27〉，円墳８基からなる後原古墳群〈28〉，円墳４基からなる古女子古墳群〈29〉，円墳２基からなる橋向古墳群〈30〉，若栗古墳群〈31〉，若宮古墳群〈32〉などが分布している。桂川及び乙戸川流域の台地上には，ガラス玉や鉄製品（直刀・鉄鏃）が出土した後期の実穀古墳群[32]をはじめ，円墳５基からなる内記古墳群は，箱式石棺を用いた後期の群集墳と考えられている[33]。その他，塚越古墳群〈33〉，

吉原(よしはらはい)古墳群〈34〉，牛頭塚(ごずづか)古墳群〈35〉などが知られている。このような状況は，古墳時代中期以降，この地方に有力な豪族が出現したことを示し，河川流域の低地開発と生産基盤の飛躍的な発達が成し遂げられたことを物語っており，集落が町域全体に拡大した結果と考えられる。

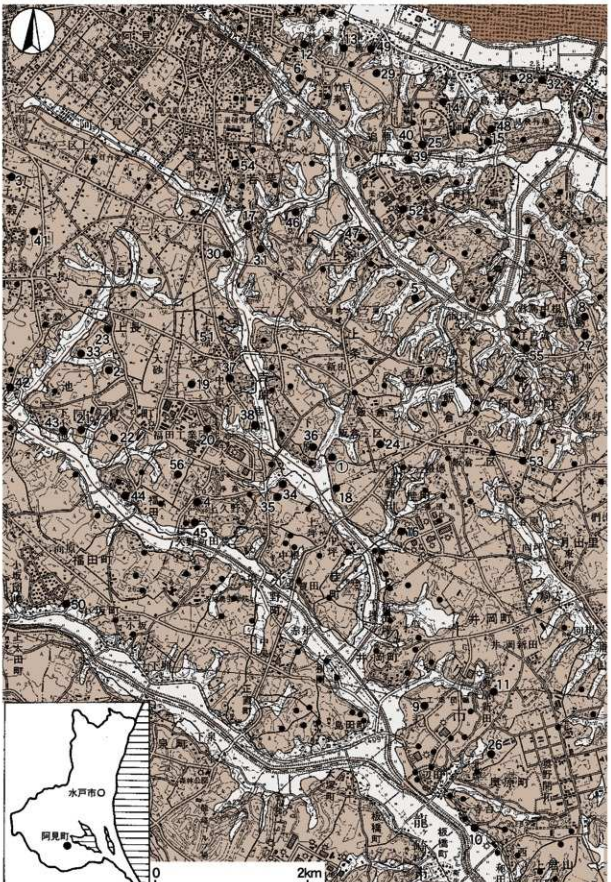
奈良・平安時代の町域は信太郡に属し，高来郷・子方郷・志万郷・嶋津郷・阿祢郷の一部に比定され，その郡域はおよそ現在の稲敷郡域と推定される。郡・郷名に関して，牛久市ヤツノ上遺跡から出土した土師器坏に，「阿祢厨」の墨書が認められ，信太郡阿祢郷に関連する資料として注目されている[24]。この時代の桂川流域の集落跡では，篠崎(しのざき)A遺跡〈36〉をはじめ，花房(はなぶさ)遺跡〈37〉や大日(だいにち)遺跡〈38〉などが調査されている。当薬師入遺跡と谷津田を挟んで対峙する篠崎A遺跡〈36〉からは，9世紀前葉から中葉の仏教関連遺物が出土し，寺院に付属する専従集団の居住区や僧侶の修行地と推定されている[25]。大日遺跡〈38〉からも，蔵骨器に灰釉陶器を用いた火葬墓2基が発見されている[26]。県域で火葬墓が盛行するのは，8世紀後半から9世紀後半のほぼ一世紀とみられ，この時期は村落内寺院が多く営まれる時期でもあり，当地域でも仏教の一般集落への浸透とともに，火葬の風習も広く受け入れられていったと考えられる。牛久市姥神遺跡〈26〉は，乙戸川流域を代表する中核的な集落跡である。信太郡衙が置かれた場所と推測されている江戸崎町君山の下君山廃寺付近に隣接しており，密接な関係が想定されている[27]。清明川流域及び霞ヶ浦沿岸の集落跡としては，宮脇遺跡，阿見東遺跡，竹来遺跡〈6〉，島津遺跡〈14〉，烏瓜台(からすうりだい)遺跡〈39〉などが知られている。宮脇遺跡の調査では，円面硯の破片や大規模な掘り込み地業跡が発見[28]されていることから，信太郡衙が宮脇遺跡や阿福神社付近に置かれたとする説もある。なお，江戸崎下君山付近の台地上には，江戸崎町と牛久市の境界が直線的に通り，その延長上に直線道が認められ，古代駅路の東海道と推定されている[29]。この直線道が町域にも延びている可能性は高く，今後の調査の進展が期待される。また，烏瓜台遺跡〈39〉では須恵器窯跡[30]，梶内台(かじうちだい)遺跡〈40〉では鍛冶炉[31]が確認されていることから，町域で須恵器や鉄製品の生産が行われていたことが理解される。

11世紀から12世紀にかけての町域は，常陸平氏の勢力下に入り，信太荘として成立したと考えられる。その後の東寺による支配も南北朝の動乱によって終焉を迎えると，高氏や上杉氏，土岐氏や小田氏の支配下に入り，佐竹氏が常陸統一を目前にした16世紀後半頃には，土岐氏が信太荘一円を支配するようになった。中世の遺跡には城館跡や土塁などがあり，城館跡は乙戸川流域の上小池(かみこいけ)城跡〈42〉，下小池(しもこいけ)城跡[32]〈43〉，福田(ふくだ)城跡〈44〉，牛久市久野城跡〈45〉，桂川流域の若栗(わかくり)寄井(よりい)館跡〈46〉などが知られている。清明川流域では上条(かみじょう)城跡〈47〉，島津(しまづ)城跡〈48〉，掛馬(かけうま)館跡〈49〉などがあり，いずれも信太荘を舞台に覇権を争った土岐氏や小田氏，牛久市小坂(おさか)城〈50〉を築いた岡見氏の支配下におかれていたとされている。雀ノ久保(すずがくぼ)遺跡や新堀(しんぼり)遺跡〈51〉，内堀(うちぼり)遺跡[33]〈52〉には土塁が見られ，割目(わりめ)遺跡[34]〈53〉の堀跡は，戦国時代に土岐氏が構築したとされている。塚は若栗(わかくり)大日塚〈54〉や堂坂(どうさか)庚申塚〈55〉，石塚(いしづか)庚申塚〈56〉などがあり，その名が示すように，多くの場合が民間信仰の対象として構築されたと考えられる。近世になると，天正18（1590）年，北条方に味方した土岐氏は，佐竹氏に江戸崎城を攻められて滅び，旧土岐氏領土の信太，河内の地は芦名氏に与えられた。慶長7（1602）年，佐竹氏の秋田移封後は，複数の幕藩領主による複雑な支配変遷をとげている。近現代になると，霞ヶ浦飛行場や海軍航空隊，軍歌にもなった海軍予科練習部の設置などによって軍事拠点化し，昭和20（1945）年，町制施行によって旧阿見町が成立し，昭和30（1955）年に周辺3か村と合併して現在の阿見町が成立した[35]。

※　文中の〈　〉内の番号は，第2図及び周辺遺跡一覧表中の該当遺跡番号と同じである。

註

1）大森昌衛ほか「茨城の地質をめぐって」『日曜の地学』8　築地書館　1979年9月
日本の地質『関東地方』編集委員会『日本の地質3　関東地方』共立出版　1986年10月



第２図　薬師入遺跡周辺遺跡分布図（国土地理院５万分１地形図「土浦・玉造・龍ヶ崎・佐原」）

表1　薬師入遺跡周辺遺跡一覧表

番号	遺跡名	時代						番号	遺跡名	時代					
		旧石器	縄文	弥生	古墳	奈・平	中・近			旧石器	縄文	弥生	古墳	奈・平	中・近
①	薬師入遺跡	○	○	○	○		○	29	古女子古墳群				○		
2	谷ノ沢遺跡	○	○					30	橋向古墳群				○		
3	実穀寺子遺跡	○			○	○		31	若栗古墳群				○		
4	牛久市源蠢遺跡	○	○	○	○	○		32	若宮古墳群				○		
5	星合遺跡	○	○		○	○		33	塚越古墳群				○		
6	竹来遺跡	○	○	○	○	○	○	34	吉原向古墳群				○		
7	中ノ台遺跡	○	○		○	○		35	午頭座古墳群				○		
8	君島天神遺跡	○	○		○	○		36	篠崎A遺跡		○		○	○	○
9	牛久市木戸向A遺跡	○	○		○			37	花房遺跡		○	○	○	○	
10	牛久市天王峯遺跡	○		○	○			38	大日遺跡		○		○	○	○
11	牛久市スカキ台遺跡	○	○	○	○			39	烏瓜台遺跡				○	○	
12	根田貝塚		○		○			40	梶内台遺跡				○		
13	見留目貝塚		○		○			41	実穀寺子東遺跡				○		
14	島津遺跡群		○		○			42	上小池城跡						○
15	宮平貝塚群		○					43	下小池城跡						○
16	牛久市赤塚遺跡		○					44	福田城跡						○
17	下原遺跡		○	○	○	○		45	牛久市久野城跡						○
18	牛久市ナギ山遺跡		○		○		○	46	若栗寄井館跡						○
19	手接遺跡		○		○	○		47	上条城跡						○
20	吉原遺跡		○		○	○		48	島津城跡						○
21	下小池東遺跡		○		○			49	掛馬館跡						○
22	福田遺跡		○		○	○		50	牛久市小坂城跡						○
23	道記遺跡		○	○	○			51	新堀遺跡						○
24	桜立遺跡			○	○			52	内堀遺跡						○
25	頭田遺跡		○	○	○		○	53	割目遺跡						○
26	牛久市姥神遺跡		○	○	○	○		54	若栗大日塚						○
27	君島古墳群		○		○			55	堂坂庚申塚						○
28	後原古墳群				○			56	石塚庚申塚						○

2) 茨城県教育庁文化課『茨城県遺跡地図（地名表編・地図編）』茨城県教育委員会　2001年３月
3) 綿引英樹ほか「一般国道468号首都圏中央連絡自動車道新設工事地内埋蔵文化財調査報告書Ⅵ　谷ノ沢遺跡　手鎌遺跡　花房遺跡　大日遺跡」『茨城県教育財団文化財調査報告』第212集　2004年３月
4) 浅野和久「荒川本郷地区特定土地区画整理事業地内埋蔵文化財調査報告書（Ⅰ）　実穀古墳群・実穀寺子遺跡１」『茨城県教育財団文化財調査報告』第144集　1999年３月
宮崎修土ほか「荒川本郷地区特定土地区画整理事業地内埋蔵文化財調査報告書Ⅱ　実穀寺子遺跡２」『茨城県教育財団文化財調査報告』第151集　1998年３月
5) 谷島三郎ほか『常陸源蓙遺跡』牛久市教育委員会　1989年３月
6) 矢ノ倉正男ほか「同見東部工業団地造成工事地内埋蔵文化財調査報告書　星合遺跡・中ノ台遺跡」『茨城県教育財団文化財調査報告』第137集　1997年３月
7) 註6）に同じ
8) 阿見町史編さん委員会『阿見町史』阿見町　1983年３月
9) 茨城県考古学協会旧石器時代シンポジウム実行委員会『茨城県における旧石器時代研究の到達点－その現状と課題－　発表要旨・資料集』茨城県考古学協会　2002年12月
10) 牛久市史編さん委員会編『牛久市史　原始古代中世』牛久市　2004年３月
11) 河野辰男ほか『天王峯遺跡報告書』天王峯遺跡発掘調査会　1984年９月
河野辰男ほか『天王峯遺跡報告書（第二次調査）』天王峯遺跡発掘調査会　1988年４月
12) 河野辰男ほか『すかき台遺跡』牛久市すかき台遺跡発掘調査会　1991年４月
13) 小川和博ほか『茨城県稲敷郡竹袁遺跡－茨城県稲敷郡阿見町所在の埋蔵文化財第二次調査－』阿見町教育委員会　1999年３月
14) 汀安衛『茨城県稲敷郡阿見町島津遺跡調査報告書』阿見町教育委員会　1997年３月
島津遺跡発掘調査会『島津遺跡（島津１・２・３・４区）』茨城県・阿見町教育委員会　1998年９月
島津遺跡発掘調査会『島津遺跡（貝塚１・２区）』茨城県・阿見町教育委員会　1998年９月
15) 河野辰男ほか『赤塚遺跡発掘調査報告書』茨城県牛久町赤塚遺跡発掘調査会　1984年４月
16) 小川和博ほか『下原遺跡－茨城県稲敷郡阿見町所在の古代集落の調査－』阿見町教育委員会　1998年３月
17) 註3）に同じ
18) 矢ノ倉正男「主要地方道土浦江戸崎線道路改良工事地内埋蔵文化財調査報告書　於山遺跡」『茨城県教育財団文化財調査報告』第96集　1995年３月
19) 汀安衛ほか『下小池東遺跡発掘調査報告書』阿見町教育委員会　1979年３月
河野辰男ほか『下小池東遺跡第12号第13号住居址発掘調査報告書』阿見町教育委員会　1981年１月
20) 河野辰男ほか『桜立遺跡発掘調査報告書』桜立遺跡発掘調査会　1982年12月
高木國男ほか『桜立遺跡（第三期）』桜立遺跡（第三期）発掘調査会　1988年９月
21) 註13）に同じ
22) 高木国男ほか『宮脇遺跡』茨城県・阿見町教育委員会　1985年３月
高木国男ほか『宮脇遺跡（第Ⅱ期）』茨城県・阿見町教育委員会　1990年３月
藤原均『茨城県稲敷郡阿見町宮脇遺跡第３次調査報告書』阿見町教育委員会　1993年９月
23) 藤原均ほか『茨城県稲敷郡阿見町阿見東遺跡第１地点調査報告書』阿見町阿見東遺跡調査会　1992年５月
24) 河野辰男ほか『茨城県牛久市文化財調査報告　奥原遺跡発掘調査報告書』奥原遺跡発掘調査会　1989年12月
25) 牛久市天王峯遺跡の第11号住居跡出土の甕形土器に類似するものは，千葉県木更津市山伏作遺跡などで出土している。
26) 註20）に同じ
27) 註19）に同じ
28) 註23）に同じ
29) 註13）に同じ
30) 註５・24）に同じ
31) 註10）に同じ
32) 註４）に同じ
33) 註８）に同じ
34) 川井正一「牛久市ヤツノ上遺跡」『研究ノート』11号　2002年６月
35) 小林健太郎「阿見吉原土地区画整理事業地内埋蔵文化財調査報告書Ⅰ　篠崎Ａ遺跡」『茨城県教育財団文化財調査報告』第217集　2004年３月
36) 註３）に同じ
37) 註10）に同じ
38) 註22）に同じ
39) 木下良「常陸国古代駅路に関する一考察－直線的計画古道跡の検出を主として－」『國學院雑誌』85－１　1984年
40) 茨城県史編集会『茨城県史料　考古史料編　奈良・平安時代』茨城県　1996年３月
41) 高木国男ほか『梶内台遺跡』茨城県阿見町教育委員会　1987年12月
42) 河野辰男ほか『下小池城跡保存調査報告書』阿見町教育委員会　1981年11月
43) 高木国男ほか『内堀遺跡（土塁）』内堀土塁発掘調査会　1985年３月
44) 河野辰男ほか『別目遺跡発掘調査報告書』茨城県稲敷郡阿見町教育委員会　1979年３月
45) 註８）に同じ

第３図　薬師入遺跡全体図

第3章　調査の成果

第1節　調査の概要

薬師入遺跡は，阿見町の南部，利根川水系桂川左岸の舌状台地上に立地し，台地の標高は24.1～25mである。調査前の現況は，畑地及び平地林であり，調査面積は11,939㎡である。

調査は平成14年12月1日から平成15年1月31日までの2か月間，平成15年11月1日から平成16年3月31日までの5か月間の計7か月間実施され，竪穴住居跡34軒，陥し穴2基，炉穴1基，炉跡2基，土坑29基，道路跡1条，溝2条，石器集中地点2か所が調査された。各時代の遺構は，旧石器時代の石器集中地点2か所，縄文時代の竪穴住居跡1軒，陥し穴2基，炉穴1基，土坑2基，弥生時代の竪穴住居跡が4軒，古墳時代の竪穴住居跡29軒，炉跡2基，土坑2基，中世から近世の火葬土坑1基，土坑25基，道路跡1条，溝2条である。

遺跡の主体は，弥生時代後期から古墳時代前期及び中期の集落跡である。弥生時代後期から古墳時代前期の集落跡は，一辺が4～6m程度の竪穴住居からなり，住居間の重複関係が認められず，出土遺物は少ない。中期の集落跡は，一辺が8mを超えるような大形の竪穴住居を中心に営まれ，出土遺物は土師器類をはじめ，滑石を用いた石製模造品が認められる。

遺物は，遺物収納コンテナ（60×40×20㎝）に40箱出土している。旧石器時代は石器（石核・ナイフ形石器・石刃・剥片），縄文時代は縄文土器（深鉢），石器（石鏃・磨製石斧・磨石・剥片）であり，弥生時代は弥生土器（壺・甕）である。また，古墳時代は土師器（高坏・器台・甕・台付甕・壺・坩・ミニチュア土器），石製品（剣形模造品・双孔円板・臼玉），自然遺物（炭化米）であり，中世から近世の陶器（天目茶碗），土師質土器（カワラケ）が出土している。

第2節　基本層序

調査区南部（D4f2・3）に試掘坑を設定して，深さ1.3mまで掘り下げて基本土層の観察を行った。土層は8層に分層され，第Ⅰ層が表土，第Ⅱ層がローム漸移層，第Ⅲ層以下が関東ローム層である。土層の観察結果は以下の通りである。

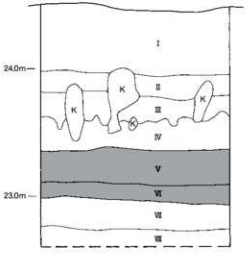
第Ⅰ層は暗褐色を呈する表土で，ローム粒子多量，ロームブロックを中量含み，層厚は40～50㎝である。

第Ⅱ層は褐色を呈するローム漸移層で，黒色土ブロックを微量に含む。層厚は6～10㎝であり，縄文土器を包含している。

第Ⅲ層は褐色を呈するソフトローム層で，黒色粒子を微量含む。クラックが発達し，ガラス質粒子・炭化粒子を微量含み，姶良Tn火山灰（AT）を含む層に対比され，層厚は10～30㎝である。

第Ⅳ層は褐色を呈するハードローム層で，ガラス質粒子・赤色スコリア粒子・炭化粒子を微量含んで締まりが強く，姶良Tn火山灰（AT）を含む層に対比され，層厚は5～30㎝である。

第Ⅴ層は褐色を呈するハードローム層で，黒色粒子・橙色ス



第4図　基本土層図

コリアを微量含む。姶良Ｔｎ火山灰を含む層の下の黒色帯であることから第２黒色帯上部に対比され，層厚は20～25cmである。

第Ⅵ層は褐色を呈するハードローム層で，橙色スコリアを微量含み，第２黒色帯下部に対比され，層厚は10～16cmである。

第Ⅶ層は褐色を呈するハードローム層で，硬く締まっている。層厚は18～25cmである。

第Ⅷ層は褐色を呈するハードローム層で，硬く締まっている。層厚は不明である。

なお，遺構の多くは，第Ⅱ層下部及び第Ⅲ層上面で確認され，第Ⅲ～Ⅴ層にかけて掘り込まれている。

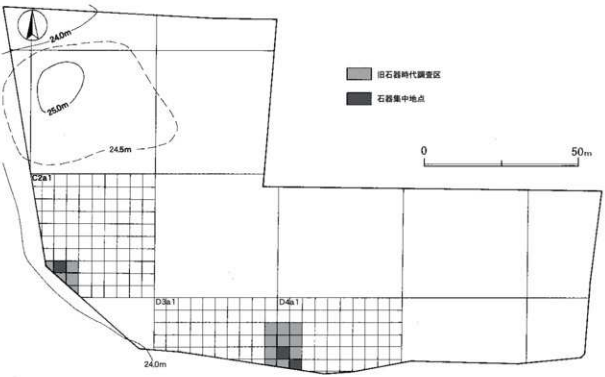
第３節　遺構と遺物

１　旧石器時代の石器集中地点と遺物

(1)　調査の方法（第５図）

遺構確認作業及び縄文時代以降の調査を進めていく中で，複数の旧石器時代の石器が出土したため，縄文時代以降の調査が終了後，旧石器時代の石器集中地点が確認できると想定される地点に調査区を設定し，ローム層の掘削を行った。調査区は，調査区域南西部の標高約23.8～24.2mの台地縁辺部から平坦部に位置し，第１調査区がC2h2・C2h3・C2h4・C2i3・C2i4・C2j4の６グリッドで，調査面積は約72㎡である。第２調査区がD3c0・D3d0・D3e0・D3f0・D4c1・D4c2・D4d1・D4d2・D4e1・D4e2・D4f1・D4f2の12グリッドで，調査面積は約160㎡である。

調査の結果，第１調査区のC2h2区と第２調査区のD4e1・D4f2区から，２か所の石器集中地点が確認された。出土層位及び石材構成が異なるため，前者を第１号石器集中地点，後者を第２号石器集中地点とした。



第５図　旧石器時代調査区設定図

(2) 石器集中地点

前述した通り，２か所の石器集中地点が確認された。第１号石器集中地点は，黒曜石を主体とし，第２号石器集中地点は，安山岩や頁岩などの在地石材を主体としている。以下，それぞれの石器集中地点の特徴と出土した石器について記述する。

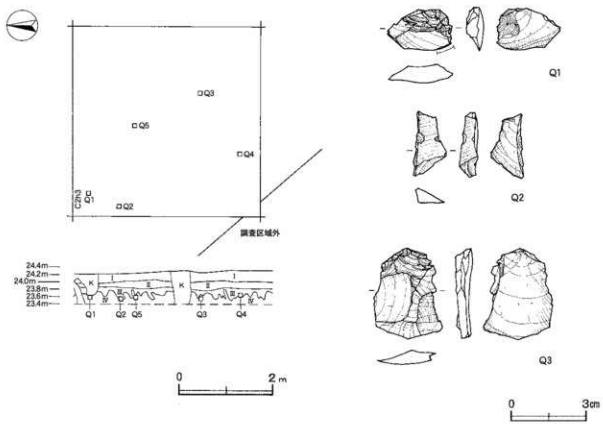
第１号石器集中地点（第６・７図）

位置　調査区域南西部の第１調査区C2h2区で，台地縁辺部に位置している。

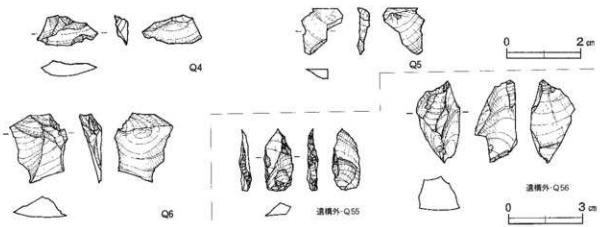
遺物出土状況　５点の剥片が散漫に出土している。垂直分布は標高23.546～23.764mで，基本層序の第Ⅳ層に相当する。また，隣接するC2g1区に位置する第１号住居跡の覆土中から，混入したナイフ形石器１点と石核１点が出土している。石材は透明感のある黒曜石で，当集中地点から出土した黒曜石と同一母岩と考えられる。

遺物　２次加工を有する剥片１点，剥片５点が認められ，石材別には黒曜石５点，瑪瑙１点である。黒曜石は透明感のある信州産と推定され，同一母岩から剥離されたと考えられるが，それらの接合関係は認められなかった。

所見　小規模な剥片剥離が行われ，不要とされた剥片と砕片が廃棄されたものと考えられる。当集中地点は，調査区域外の西側部分に分布を広げる可能性が高い。また，隣接する第１号住居跡の覆土中に混入した黒曜石製のナイフ形石器と石核は，本来，当石器集中地点に帰属していたと推定される。出土層位の第Ⅳ層は姶良Tn火山灰（ＡＴ）を含む層に対比されることから，出土した石器群は，ＡＴ降灰（22000～25000年前）前後の時期と考えられる。遠隔地石材の透明な信州産の黒曜石を用いているが，その出土量は非常に少ないことなどから，茨城県後期旧石器時代編年のⅡａ期新段階に位置づけられる。



第６図　第１号石器集中地点・出土遺物実測図



第７図　第１号石器集中地点出土遺物実測図

第１号石器集中地点出土遺物観察表（第６・７図）

番号	種　別	長さ	幅	厚さ	重量	材　質	特　　徴	出土位置	備　考
Q1	2次加工を有する剥片	1.6	2.6	0.7	2.3	黒曜石	横長剥片を素材とし，1側縁の両面に調整を施す　打面は単剥離面打面。微細剥離痕を有する　ナイフ形石器の可能性有り	Ⅳ層	PL32
Q2	剥片	2.6	1.3	0.8	1.4	黒曜石	縦長剥片，背面に節理面を残し，縁に折られている　打面は単剥離面打面	Ⅳ層	
Q3	剥片	3.6	2.8	0.65	5.0	瑪瑙	縦長剥片，背面は多方向の剥離痕からなる　下端に石核底面を残す	Ⅳ層	PL32
Q4	剥片	0.8	1.6	0.4	0.3	黒曜石	横長剥片，打面は複剥離面打面	Ⅳ層	
Q5	剥片	1.3	1.2	0.4	0.3	黒曜石	縦長剥片，打面は単剥離面打面	Ⅳ層	
Q6	剥片	2.8	2.3	0.9	3.0	黒曜石	縦長剥片，背面は同一方向の剥離痕からなる　打面は単剥離面打面	Ⅳ層	PL32

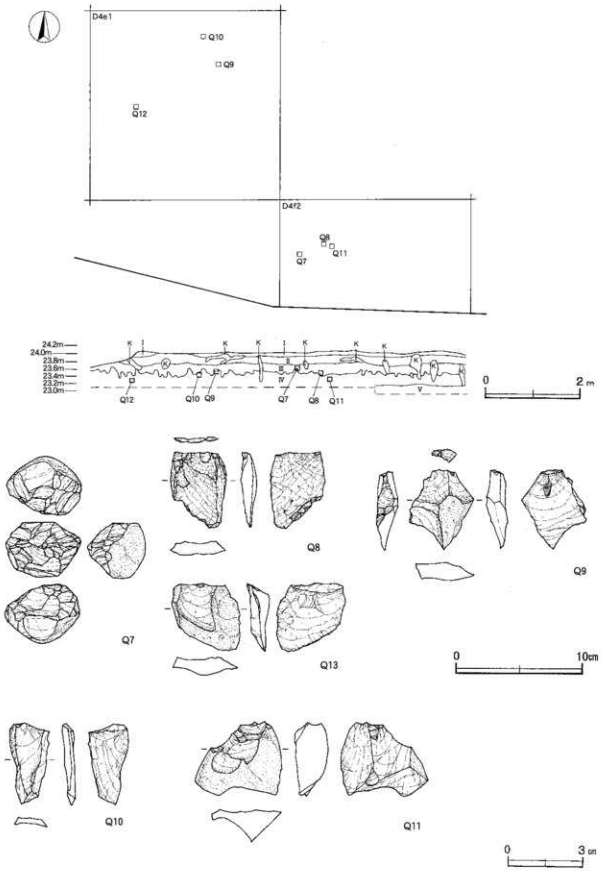
第２号石器集中地点（第８・９図）

位置　調査区域南部の第２調査区D4e1・D4f2区で，台地平坦部に位置している。

遺物出土状況　６点の石器が２か所から出土している。D4e1区から３点が散漫に，D4f2区から石核を含む３点が隣接して出土している。垂直分布は標高23.450～23.713mで，基本層序の第Ⅲ層下部～第Ⅳ層上部に相当する。また，当集中地点の撹乱層から，剥片３点が出土している。石材は珪質頁岩２点，安山岩１点で，当集中地点から出土した頁岩と安山岩と同一母岩と考えられる。

遺物　石核１点，２次加工を有する剥片３点，剥片５点が認められ，石材別には安山岩４点，珪質頁岩４点，頁岩１点である。母岩別には安山岩２点，頁岩３点が確認でき，安山岩のＱ９・Q16，頁岩のQ10・Q15は，それぞれ同一母岩から剥離されたと考えられる。ただし，接合関係は認められなかった。

所見　石核が存在することから，小規模な剥片剥離が行われ，不要とされた剥片類が廃棄されたものと考えられる。当集中地点は，調査区域外の南側部分に分布を広げる可能性が高い。また，当集中地点の撹乱層から出土した剥片３点は，本来，当石器集中地点に帰属していたと推定される。出土層位の第Ⅲ層はソフトローム，第Ⅳ層は姶良 Tn 火山灰（ＡＴ）を含む層と考えられることから，出土した石器群は，ＡＴ降灰後の時期と考えられる。出土層位や黒曜石を含まず，在地石材を用いていることなどから，茨城県後期旧石器時代編年のⅡc期に位置づけられる。



第８図　第２号石器集中地点・出土遺物実測図

第９図　第２号石器集中地点出土遺物実測図

第２号石器集中地点出土遺物観察表（第８・９図）

番号	種　別	長さ	幅	厚さ	重量	材　質	特　徴	出土位置	備　考
Q 7	石核	4.4	6.0	4.6	123.1	安山岩	小円礫を素材とし，上下に平坦な石核底面を作出．中央に形成された横位打面から，連続的に横長剥片を剥離している．	Ⅲ層下部～Ⅳ層上部	PL32
Q 8	2次加工を有する剥片	6.1	4.5	1.3	32.4	安山岩	縦長剥片，背面は同一方向の剥離痕からなる　1側縁に背面側から調整を施す　打面は単剥離面打面	Ⅲ層下部～Ⅳ層上部	PL32
Q 9	2次加工を有する剥片	6.4	5.1	1.7	40.0	珪質頁岩	背面は縦面の一部と多方向の剥離痕からなる　右側縁には背面側から急角度の調整を施している　打面は複剥離面打面　2側縁下部に微細剥離痕有り	Ⅲ層下部～Ⅳ層上部	PL33
Q10	剥片	3.2	1.6	0.3	1.5	珪質頁岩	縦長剥片，背面は同一方向の剥離痕からなり，縦に折られている　打面は単剥離面打面	Ⅲ層下部～Ⅳ層上部	PL32
Q11	剥片	2.9	3.4	1.3	10.5	頁岩	横長剥片，背面は縦面の一部と同一方向の剥離痕からなる　主要剥離面は節理面で不規則な剥離をなす	Ⅲ層下部～Ⅳ層上部	PL33
Q12	剥片	0.6	0.8	0.2	0.1	安山岩	横長の調整剥片	Ⅲ層下部～Ⅳ層上部	
Q13	剥片	5.4	5.5	1.8	34.8	珪質頁岩	縦長剥片，背面は縦面の一部と同一方向の剥離痕からなる　打面は単剥離面打面	Ⅲ層下部～Ⅳ層上部	PL33
Q14	2次加工を有する剥片	2.4	2.9	0.8	3.7	珪質頁岩	横長剥片を素材とし，1側縁下部に主要剥離面側から微細な調整を施す　打面は単剥離面打面	Ⅲ層下部～Ⅳ層上部	PL33
Q15	剥片	1.4	1.6	0.9	1.1	安山岩	横長の調整剥片	Ⅲ層下部～Ⅳ層上部	

2　縄文時代の遺構と遺物

今回の調査で確認した縄文時代の遺構は，竪穴住居跡１軒，陥し穴２基，炉穴１基，土坑２基である。これらの遺構は標高23.8～24.2ｍの台地縁辺部から平坦部に位置し，時期は早期から後期と推定される。以下，それぞれの遺構の特徴と出土した遺物について記述する。

(1)　竪穴住居跡

第30号住居跡（第10図）

位置　調査区北西部のB1a9区で，標高24.4ｍの台地縁辺部に位置している。

確認状況　２か所の炉と調査区域際の土層断面で掘り込みの一部を確認したため，竪穴住居跡と推定した。斜面地形のために削平が著しく，平面形の確認はできなかった。

規模と形状　壁は高さ４～14㎝で，外傾して立ち上がっている。形状は不明である。

床　削平が著しく，不明である。

炉　隣接した２か所の地床炉を確認した。炉１は規模が大きく主炉と考えられる。皿状に掘りくぼめられ，確認した深さは15㎝である。火床面などは確認されず，覆土に２層からなる。炉１の南側約50㎝に位置している炉２は，皿状に掘りくぼめられ，確認した深さは12㎝である。火床面は火熱を受けて赤変硬化している。覆土は３層からなる。

炉１土層解説
1　にぶい赤褐色　焼土ブロック少量，ロームブロック・炭化物微量
2　褐　色　ロームブロック少量，焼土粒子・炭化粒子微量

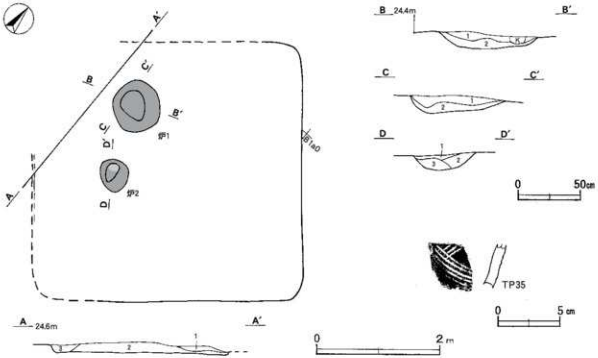
炉２土層解説
1　にぶい赤褐色　焼土粒子中量，ロームブロック・炭化粒子微量
2　赤 褐 色　焼土ブロック中量，ロームブロック微量
3　暗 褐 色　ロームブロック中量，焼土粒子微量

覆土　３層からなる。第１・２層は焼土ブロックを多量に含んでいる。堆積状況は不明である。

土層解説
1　にぶい赤褐色　焼土ブロック中量，ロームブロック微量
2　赤 褐 色　ロームブロック・焼土ブロック少量，炭化物微量
3　褐　色　ロームブロック少量，炭化粒子微量

遺物出土状況　縄文土器片１点が，炉２の覆土中から出土している。

所見　出土した縄文土器片は前期後葉の諸磯Ｃ式土器と考えられ，複数の炉を有していることからも，方形を呈する前期の住居跡の可能性が考えられる。



第10図　第30号住居跡・出土遺物実測図

第30住居跡出土遺物観察表(第10図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
TP35	縄文土器	壺	－	(3.4)	－	石英・長石	明褐	普通	体部外面に集合沈線文で弧状モチーフを描出	覆土中	PL31

(2)　陥し穴

第25号土坑（第11図）

位置　調査区南西部のD2a7区で，標高24.0mの台地平坦部に位置している。

重複関係　南壁上部を第15号住居跡に掘り込まれている。

規模と形状　長径1.56m，確認した短径0.86mの楕円形で，深さは106cmである。壁はほぼ直立し，北壁の一部がフラスコ状に掘り込まれ，オーバーハングして立ち上がっている。底面はほぼ平坦で，長径方向はN－83°－Wである。

覆土　14層からなる。最下層の第14層はロームブロックを多量に含んでいることから，壁の崩落や埋め戻された可能性がある。その他は土質や堆積状況から自然堆積と考えられる。

土層解説

1　褐　色　ロームブロック少量，炭化粒子微量
2　褐　色　ロームブロック少量
3　褐　色　ロームブロック中量
4　暗褐色　ロームブロック・炭化粒子微量
5　褐　色　ロームブロック微量
6　暗褐色　ロームブロック少量
7　暗褐色　ロームブロック少量，焼土粒子・炭化粒子微量
8　暗褐色　ロームブロック微量
9　暗褐色　ロームブロック中量
10　褐　色　ロームブロック・炭化粒子微量
11　褐　色　ロームブロック中量，炭化粒子微量
12　褐　色　ロームブロック・焼土粒子微量
13　褐　色　ロームブロック中量，焼土粒子微量
14　褐　色　ロームブロック多量

所見　周辺から，前期から中期に比定される縄文土器が出土しているが，覆土から出土した遺物は無い。時期は，形態から早期から中期と考えられるが明確ではない。

第32号土坑（第11図）

位置　調査区北部のB3b9区で，標高23.8mの台地平坦部に位置している。

重複関係　上部を第36号住居跡に掘り込まれている。

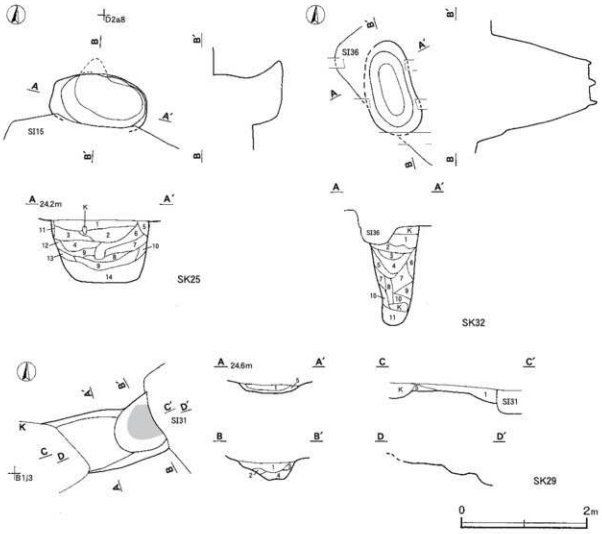
規模と形状　長径1.54m，短径0.82mの楕円形で，深さは154cmである。壁は長径方向で外傾して立ち上がり，短軸方向でほぼ直立している。底面はほぼ平坦で，3か所に小穴が穿たれている。長径方向はN－16°－Wである。

覆土　11層からなる。最下層の第11層はロームブロックを多量に含むことから，壁の崩落や埋め戻された可能性がある。その他は土質や堆積状況から自然堆積と考えられる。

土層解説

1　暗褐色　ロームブロック中量，炭化粒子微量
2　暗褐色　ロームブロック微量
3　褐　色　ロームブロック中量，炭化粒子微量
4　暗褐色　ロームブロック中量
5　褐　色　ロームブロック少量
6　褐　色　ロームブロック微量
7　暗褐色　ロームブロック・炭化粒子微量
8　暗褐色　ロームブロック少量
9　暗褐色　ロームブロック少量，炭化粒子微量
10　褐　色　ロームブロック少量，炭化粒子微量
11　褐　色　ロームブロック中量

所見　周辺から，前期から中期に比定される縄文土器が出土しているが，覆土から出土した遺物は無い。時期は，形態から早期から中期と考えられるが明確ではない。



第11図　第25･32･29号土坑実測図

(3) 炉穴

第29号土坑（第11図）

位置　調査区北西部のB1j3区で，標高24.2mの台地平坦部に位置している。

重複関係　火焚部の東側は第31号住居跡に掘り込まれ，足場の西側は撹乱を受けて遺存状況は不良である。

規模と形状　長径1.32m，短径1.00mの楕円形で，深さは火焚部が15cm，足場が22cmである。壁は緩やかに外傾して立ち上がっている。長径方向はN－69°－Eである。火焚部は凹凸のある皿状を呈し，底面は火熱を受けて赤変硬化している。

覆土　5層からなる。堆積状況から自然堆積と考えられる。

土層解説
1　極暗褐色　焼土ブロック少量，ロームブロック・炭化物微量
2　黒　褐　色　ロームブロック・焼土粒子・炭化粒子微量
3　暗　褐　色　ロームブロック・焼土粒子・炭化粒子微量
4　暗赤褐色　焼土ブロック中量
5　暗　褐　色　ロームブロック少量

所見　周辺から，前期から中期に比定される縄文土器が出土しているが，覆土から出土した遺物は無い。時期は，形態から早期と考えられる。

(4) 土坑

第26号土坑（第12図）

位置　調査区北西部のB2a3区で，標高24.4mの台地平坦部に位置している。

確認状況　炉穴と考えられる第29号土坑から約4m西に位置している。遺存状況は良好である。

規模と形状　長径1.27m，短径0.55mの長楕円形で，深さは40cmである。壁は外傾して立ち上がっている。長径方向はN－30°－Wである。底面はほぼ平坦である。

覆土　5層からなる。堆積状況は周囲からの土砂の流入を示し，自然堆積と考えられる。

土層解説
1　暗　褐　色　ロームブロック・焼土粒子微量
2　暗　褐　色　ロームブロック少量
3　暗　褐　色　ロームブロック少量，炭化粒子微量
4　黒　褐　色　ロームブロック微量
5　褐　　色　ロームブロック微量

遺物出土状況　縄文土器片5点が，覆土中から出土している。

所見　時期は，出土遺物から前期後半の浮島式期と考えられ，性格は不明である。

第26号土坑出土遺物観察表(第12図)

番号	種　別	器種	口径	器高	底径	胎　土	色　調	焼成	手　法　の　特　徴	出土位置	備　考
TP39	縄文土器	深鉢	－	(2.3)	－	石英・長石・雲母	赤褐	普通	体部外面に波状貝殻文を施す　内面ナデ	覆土中	PL31
TP40	縄文土器	深鉢	－	(2.0)	－	石英・長石・雲母	明赤褐	普通	体部外面に波状貝殻文を施す　内面ナデ	覆土中	PL31

第31号土坑（第12図）

位置　調査区北西部のB1j1区で，標高24.4mの台地平坦部に位置している。

確認状況　炉穴と考えられる第29号土坑から約2m南に位置している。遺存状況は良好である。

規模と形状　長径1.70m，短径0.55mの楕円形で，深さは24cmである。壁は外傾して立ち上がっている。長径方向はN－12°－Wである。底面はほぼ平坦である。

覆土　5層からなる。堆積状況は周囲からの土砂の流入を示し，自然堆積と考えられる。

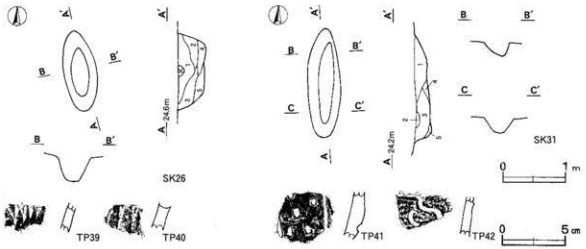
土層解説
1　暗　褐　色　ロームブロック・炭化粒子微量
2　暗　褐　色　ロームブロック少量
3　暗　褐　色　ロームブロック・炭化物少量
4　黒　褐　色　ロームブロック微量
5　褐　　色　ロームブロック中量

遺物出土状況　縄文土器片5点が，覆土中から出土している。

所見　時期は，出土遺物から後期初頭の称名寺式期と考えられ，性格は不明である。

第31号土坑出土遺物観察表（第12図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
TP41	縄文土器	深鉢	－	(3.6)	－	石英・長石・雲母	橙	普通	体部外面に2本の沈線を巡らせ，棒状工具による刺突文を施す　内面ナデ	覆土中	PL31
TP42	縄文土器	深鉢	－	(3.0)	－	石英・長石・雲母	明褐	普通	体部外面に沈線で文様を描出　内面ナデ	覆土中	PL31



第12図　第26・31号土坑・出土遺物実測図

表２　陥し穴一覧表

番号	位置	長軸方向 長径方向	平面形	規模 長径×短径（m）	規模 深さ（cm）	覆土	底面	壁面	主な出土遺物	備考 （時期・旧→新）
25	D2a7	N－83°－W	楕円形	1.56 ×(0.86)	106	自然	平坦	外傾	－	縄文時代　本跡→SI15
32	B3b9	N－16°－W	楕円形	(1.54 × 0.82)	154	自然	平坦	外傾	－	縄文時代　本跡→SI36

表３　土坑一覧表

番号	位置	長軸方向 長径方向	平面形	規模 長径×短径（m）	規模 深さ（cm）	覆土	底面	壁面	主な出土遺物	備考 （時期・旧→新）
26	B2a3	N－12°－W	楕円形	1.27×0.55	40	自然	平坦	外傾	縄文土器（深鉢）	縄文時代前期後葉
31	B1j1	N－36°－W	楕円形	1.70×0.55	24	自然	平坦	緩傾	縄文土器（深鉢）	縄文時代後期前葉

３　弥生時代の遺構と遺物

今回の調査で確認した弥生時代の遺構は，竪穴住居跡４軒である。これらは主に台地縁辺部から平坦部にかけて位置し，時期は後期と考えられる。以下，それぞれの遺構の特徴と出土した遺物について記述する。

第12号住居跡（第13～16図）

位置　調査区西部のC２15区で，標高24.2mの台地縁辺部に位置している。

確認状況　住居形態の類似している第13号住居跡の南西約10mに位置し，遺存状況は良好である。

形状　長軸3.36m，短軸3.28mの隅丸方形である。壁は高さ40～45cmで，外傾して立ち上がっている。主軸方向は作り替えによってN－36°－Wから，N－52°－Eに転換していると推測される。

床　ほぼ平坦である。壁際は軟弱で，主柱穴の内側を中心として，炉の周囲がよく踏み固められている。

ピット　6か所。Ｐ１～Ｐ４は配置から主柱穴で，深さは44～48cmである。覆土はロームブロックを少量含む暗褐色及び褐色土である。Ｐ５・Ｐ６は炉と対峙して位置することから，出入り口施設に関連すると考えられ，深さはＰ５が28cm，Ｐ６が34cmである。Ｐ６の覆土上面は踏み固められていることから，Ｐ６からＰ５への作り替えが推測できる。

炉　2か所。炉１は地床炉で床面から８cmほど掘りくぼめられ，中央部北東側で主柱穴の内側に位置している。炉床は火熱により赤変硬化し，覆土は２層からなる。炉２も地床炉で床面から８cmほど掘りくぼめられ，中央部北西側で主柱穴の内側に位置している。炉床は部分的に火熱により赤変硬化し，覆土は２層からなる。炉の使用状況から，炉２から炉１への作り替えが推測される。

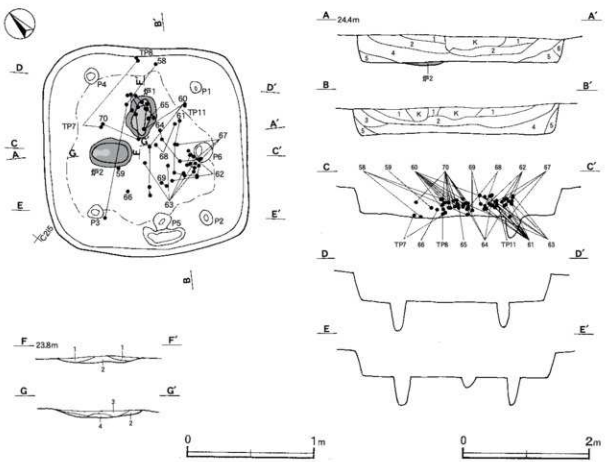
炉土層解説

1　黒褐色　焼土ブロック少量，ローム粒子・炭化物微量
2　暗赤色　焼土ブロック中量，ローム粒子・炭化物微量
3　黒褐色　焼土ブロック中量，ロームブロック少量，炭化物微量
4　暗赤色　焼土ブロック中量，ローム粒子微量

覆土　6層からなる。第１・２層はロームブロックを微量含む黒褐色土で，第３～６層はロームブロックを少量含む暗褐色土を基調とし，土質及び堆積状況から，自然堆積と考えられる。

土層解説

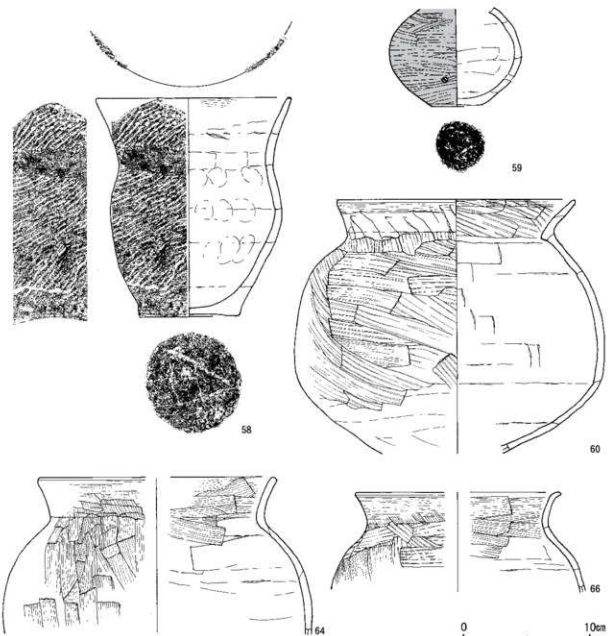
1　黒褐色　ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子微量
2　黒褐色　ロームブロック・焼土粒子・炭化粒子微量
3　暗褐色　ロームブロック・炭化粒子微量
4　暗褐色　ロームブロック少量，焼土粒子・炭化材微量
5　褐　色　ロームブロック・炭化材少量
6　褐　色　ロームブロック中量



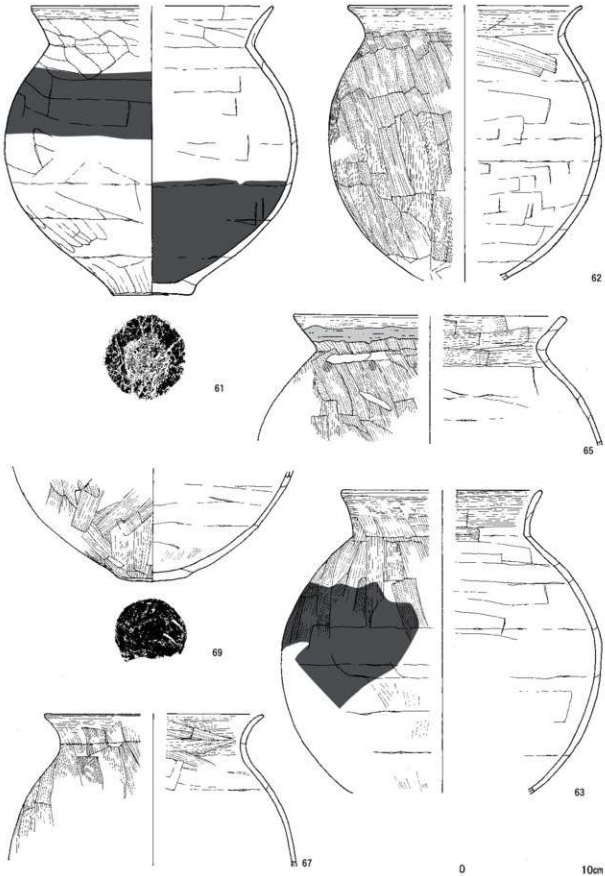
第13図　第12号住居跡実測図

遺物出土状況　弥生土器片45点（壺）が覆土下層から床面にかけて散在した状態で出土している。ほぼ完形の58は，西コーナー部に近い床面から横位の状態で出土している。また，土師器片892点（坩１，高坏５，壺３，甕813，細片70）が，覆土上層～中層にかけてまとまって出土している。ほとんどが甕形土器で，埋没途中の窪地に一括廃棄したような状態で出土している。

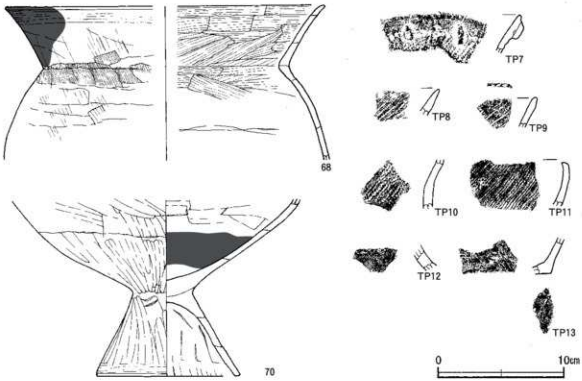
所見　一辺４ｍに達しない小形の住居であり，形態的には主柱穴をもち，地床炉が中央部北側で主柱穴の内側に位置し，貯蔵穴を伴わないという特徴が見られ，第13号住居跡に類似している。また，コーナー部が丸いことを除いて，第11号住居跡とも類似している。炉と出入口施設は，炉１とＰ５，炉２とＰ６がそれぞれ対応し，後者から前者への作り替えが想定される。床面から出土した弥生土器と，覆土上層～中層からまとまって出土した土師器には共伴関係はなく，明らかな時間的断絶が認められる。時期は，床面から出土した58などから，後期後半（３世紀前半）と考えられる。



第14図　第12号住居跡出土遺物実測図（１）



第15図　第12号住居跡出土遺物実測図（2）



第16図　第12号住居跡出土遺物実測図（3）

第12号住居跡出土遺物観察表（第14～16図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考	
58	弥生土器	壺	15.4	17.4	7.8	石英・長石	にぶい橙	普通	口辺部外面円形刺突文，頸部外面無文，地文は付加条（一種）縄文，口辺部内面ハケ目後ヘラナデ，体部内面指頭圧痕	中層～床面	90%　底部外面木葉痕	PL29
59	土師器	坩	－	(7.7)	－	石英・長石	明赤褐	普通	外面赤彩・ヘラミガキ，内面・底部外面ヘラナデ，体部下端単孔（焼成前）	下層	80%	PL26
60	土師器	甕	18.8	(20.1)	－	石英・長石・赤色粒子	橙	普通	口辺部外面ヘラナデ後横ナデ，体部外面ハケ目・ヘラナデ，口辺部内面ハケ目，体部内面ヘラナデ	中層～下層	40%	PL30
61	土師器	甕	19.4	23.1	6.5	石英・長石・小礫	にぶい橙	普通	口辺部外面ヘラナデ後横ナデ，口辺部内面・体部・底部外面ヘラナデ	中層～下層	40%	煤付着
62	土師器	甕	18.8	(21.8)	－	石英・長石・赤色粒子	にぶい黄橙	普通	口辺部外面ハケ目後横ナデ，口辺部内面・体部外面ハケ目，体部内面ヘラナデ	下層	15%	
63	土師器	甕	15.8	(24.5)	－	石英・長石	にぶい橙	普通	口辺部外面ハケ目後横ナデ，体部外面ハケ目・ヘラナデ，口辺部内面ハケ目，体部内面ヘラナデ	中層～下層	20%	煤付着
64	土師器	甕	18.4	(12.3)	－	長石	にぶい橙	普通	口辺部外面ハケ目後横ナデ，口辺部内面・体部外面ハケ目，体部内面ヘラナデ	中層～下層	10%	
65	土師器	甕	21.4	(10.1)	－	石英・赤色粒子	にぶい橙	普通	口辺部外面ハケ目後横ナデ・赤彩，体部外面ハケ目・円形赤彩文，口辺部内面ハケ目，体部内面ヘラナデ	下層	5%	
66	土師器	甕	16.2	(7.8)	－	石英・長石・赤色粒子	橙	普通	口辺部外面ハケ目後横ナデ，口辺部内面・体部外面ハケ目，体部内面ヘラナデ	下層	5%	
67	土師器	甕	17.4	(12.0)	－	石英・長石	にぶい橙	普通	口辺部外面ハケ目後横ナデ，口辺部内面・体部外面ハケ目，体部内面ヘラナデ	中層～床面	5%	
68	土師器	甕	25.6	(12.4)	－	石英・長石	にぶい黄橙	普通	口辺部外面ハケ目後横ナデ，口辺部内面ハケ目，体部ハケ目後ヘラナデ	下層	5%	煤付着
69	土師器	甕	－	(9.0)	5.7	石英・長石・赤色粒子	にぶい橙	普通	外面ハケ目，内面ハケ目後ヘラナデ，底部ヘラケズリ	下層	10%	
70	土師器	台付甕	－	(14.0)	11.4	石英・長石	明赤褐	普通	折り返し口辺部下端貼瘤，地文は付加条（一種）縄文，脚部外面ヘラナデ	中層～下層	40%	煤付着
TP7	弥生土器	壺	－	(3.0)	－	石英・長石・雲母	黒褐	普通	口辺部外面に円形刺突文と貼瘤を連らす	下層		
TP8	弥生土器	壺	－	(2.2)	－	石英・長石・雲母	黒褐	普通	口辺部外面に付加条（一種）縄文を施す	下層		
TP9	弥生土器	壺	－	(2.3)	－	石英・長石・雲母	にぶい橙	普通	口辺部外面に付加条（一種）縄文，口唇部に刻みを施す	覆土中		
TP10	弥生土器	壺	－	(3.9)	－	石英・長石・雲母	黒褐	普通	体部外面に付加条（一種）縄文を施す　内面ナデ	覆土中		
TP11	弥生土器	壺	－	(3.5)	－	石英・長石・雲母	橙	普通	体部外面に付加条（一種）縄文を施す　内面ナデ	中層		
TP12	土師器	壺	－	(2.0)	－	石英・長石・赤色粒子	にぶい赤褐	普通	体部外面にS字状結節文，底部縄文を施す　内面ナデ	覆土中	PL32	
TP13	弥生土器	壺	－	(2.8)	－	石英・長石	にぶい橙	普通	口辺部外面に付加条（一種）縄文を施す　底部外面ナデ	覆土中		

第13号住居跡（第17・18図）

位置　調査区西部のC2h9区で，標高24.1mの台地平坦部に位置している。

確認状況　住居形態の類似している第12号住居跡の北東約10mに位置している。南部を除いてトレンチャーの撹乱を受けており，遺存状況は不良である。

形状　長軸3.86m，短軸3.76mの隅丸方形である。壁は高さ20～24cmで，外傾して立ち上がっている。主軸方向はN－27°－Wである。

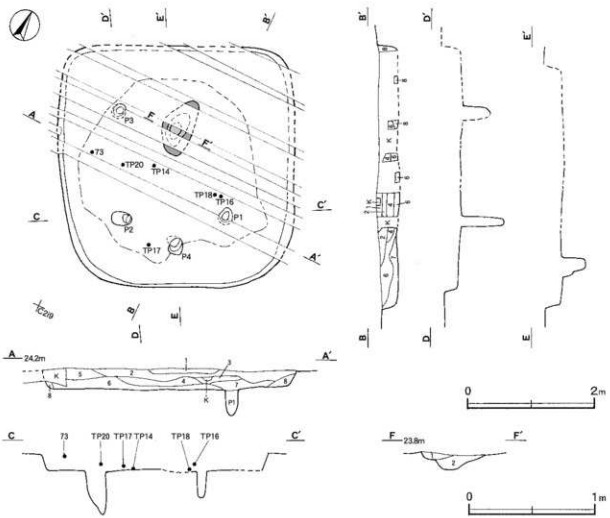
床　緩やかな凹凸が見られる。壁際は軟弱で，主柱穴の内側によく踏み固められている。

ピット　4か所を確認した。P1～P3は配置から主柱穴で，深さは43～70cmである。本来，主柱穴は4か所と推定されるが，北東部のピットは失われている。覆土はロームブロックを少量含む暗褐色及び褐色土である。P4は炉と対峙して位置することから，出入り口施設に関連すると考えられ，深さは38cmである。

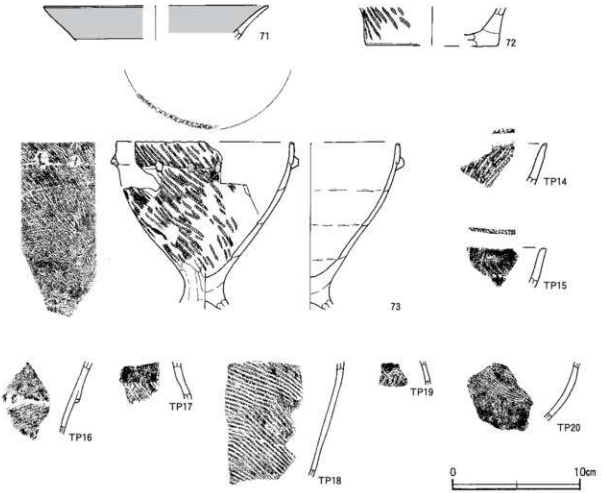
炉　地床炉で床面から14cmほど掘りくぼめられ，中央部北側で主柱穴の内側に位置している。炉床は火熱により赤変硬化し，覆土は2層からなる。

炉土層解説

1　黒褐色　ロームブロック・焼土ブロック少量，炭化物微量　　2　暗赤褐色　焼土粒子多量，ローム粒子・炭化粒子微量



第17図　第13号住居跡実測図



第18図　第13号住居跡出土遺物実測図

覆土　８層からなる。第１～５層は含有物の少ない黒褐色及び暗褐色土で，第６～８層はロームブロックや炭化材を少量含む暗褐色土を基調としている。土質及び堆積状況から，自然堆積と考えられる。

土層解説

1　黒褐色　ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子微量
2　黒褐色　ロームブロック・焼土粒子・炭化物微量
3　暗褐色　ロームブロック・焼土粒子・炭化粒子微量
4　黒褐色　ローム粒子・焼土粒子・炭化物微量
5　黒褐色　ローム粒子・炭化粒子微量
6　暗褐色　ロームブロック少量，焼土ブロック・炭化材微量
7　暗褐色　ロームブロック・炭化材少量，焼土ブロック微量
8　暗褐色　ロームブロック中量，炭化粒子微量

遺物出土状況　弥生土器片108点（壺101，甕７）が覆土上層から中層にかけて散在した状態で出土している。ほとんどが小破片で，図示できない。器形のわかる72は，覆土上層から潰れた状態で出土している。また，混入した土師器片７点（高坏１，甕２，細片４），剥片１点が出土している。

所見　一辺４ｍに達しない小形の住居であり，形態的には主柱穴を有し，地床炉が中央部北側で主柱穴の内側に位置し，貯蔵穴を伴わないという特徴が見られ，第12号住居跡に類似している。また，コーナー部が丸いことを除いて，古墳時代前期中葉（４世紀前半）の第11号住居跡とも類似している。時期は，出土遺物の様相などから，後期後半（３世紀前半）と考えられる。

第13号住居跡出土遺物観察表(第18図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
71	土師器	高坏	[17.8]	(2.7)	－	石英・長石	橙	普通	内・外面赤彩	覆土中	5%
72	弥生土器	壺	－	(3.1)	[10.4]	石英・長石・雲母	にぶい黄橙	普通	地文は付加条（一種）縄文，内面ナデ	覆土中	5%

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎 土	色 調	焼成	手 法 の 特 徴	出土位置	備 考
73	弥生土器	台付甕	[13.8]	(13.2)	－	石英・長石	黄灰	普通	口辺部・体部ロクロナデ，底部外面回転ヘラケズリ，高台貼り付け後ナデ	中層	40% PL29 内面摩滅
TP14	弥生土器	壺	－	(3.2)	－	石英・長石	にぶい黄橙	普通	口辺部外面に付加条（一種）縄文，口唇部に刻み を施す	床面	
TP15	弥生土器	壺	－	(3.2)	－	石英・長石・雲母	明赤褐	普通	口唇部・口辺部外面に付加条（一種）縄文を施す	覆土中	
TP16	弥生土器	壺	－	(5.7)	－	石英・長石・雲母	明褐	普通	折り返し口辺部外面下端に２個１対の貼瘤，体部外面付加条（一種）縄文を施す	下層	PL32
TP17	弥生土器	壺	－	(2.8)	－	石英・長石・雲母	明赤褐	普通	頸部外面無文，体部外面付加条（一種）縄文を施す，内面ナデ	下層	
TP18	弥生土器	壺	－	(9.4)	－	石英・長石・雲母	明褐	普通	口辺部外面に付加条（一種）縄文を施す	下層	
TP19	弥生土器	壺	－	(1.9)	－	石英・長石・雲母	褐	普通	体部外面に櫛歯状工具で波状文を施す	覆土中	
TP20	土師器	甕	－	(4.6)	－	石英・長石・雲母	褐	普通	体部外面にハケ目を施す　内面ヘラナデ	下層	

第15号住居跡（第19図）

位置　調査区南西部のD2a7区で，標高24.0mの台地縁辺部に位置している。

確認状況　住居形態の類似している第12号住居跡の南東約11m，第13号住居跡の南西約13mに位置している。遺存状況は良好である。

重複関係　北壁の西側で第25号土坑を掘り込んでいる。

形状　長軸4.19m，短軸3.68mの隅丸長方形である。壁は高さ45～55cmで，外傾して立ち上がっている。主軸方向はN－68°－Wである。

床　ほぼ平坦である。全体的に軟弱で，主柱穴の内側が部分的に踏み固められている。

ピット　５か所。Ｐ１～Ｐ４は配置から主柱穴で，深さは51～65cmである。覆土はロームブロックを少量含む暗褐色及び褐色土である。Ｐ５は炉と対峙して位置することから，出入り口施設に関連すると考えられ，深さは31cmである。

ピット土層解説

1　暗 褐 色　ロームブロック少量，炭化物微量
2　暗 褐 色　ロームブロック少量，炭化粒子微量
3　褐　　色　ローム粒子多量
4　褐　　色　ロームブロック中量，炭化物微量

炉　地床炉で床面から７cmほど掘りくぼめられ，中央部の東側で主柱穴の内側に位置している。炉床は火熱により赤変硬化している。覆土は単一層である。

炉土層解説

1　黒 褐 色　焼土ブロック中量，ロームブロック・炭化物微量

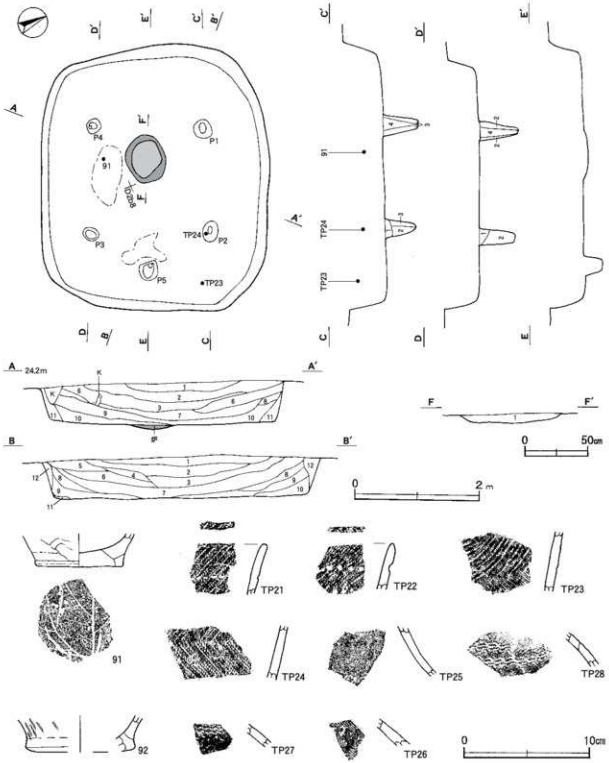
覆土　12層からなる。第１～４層は含有物の少ない黒色及び黒褐色土で，第５～12層はロームブロックや炭化物を少量含む暗褐色土である。土質及び堆積状況から，自然堆積と考えられる。

土層解説

1　黒　　色　ローム粒子・炭化粒子微量
2　黒　　色　ロームブロック・炭化粒子微量
3　黒 褐 色　ロームブロック・焼土粒子・炭化粒子微量
4　黒 褐 色　ロームブロック・炭化粒子微量
5　暗 褐 色　ローム粒子・炭化粒子微量
6　暗 褐 色　ロームブロック少量，焼土粒子・炭化粒子微量
7　暗 褐 色　ロームブロック・焼土ブロック少量，炭化粒子微量
8　暗 褐 色　ロームブロック少量，炭化粒子微量
9　暗 褐 色　ロームブロック・炭化物少量，焼土ブロック微量
10　暗 褐 色　ロームブロック少量，焼土粒子・炭化物微量
11　暗 褐 色　ロームブロック多量，炭化物微量
12　暗 褐 色　ロームブロック中量

遺物出土状況　弥生土器片83点（壺）が覆土中層から下層にかけて散在した状態で出土している。いずれも破片で，廃棄されたものや周囲から流入したものと考えられる。また，混入した土師器片12点（高坏１，壺８，甕３）が出土している。

所見　一辺４m前後の小形の住居であり，形態的には主柱穴を有し，地床炉が中央部の東側で主柱穴の内側に位置し，貯蔵穴を伴わないという特徴が見られ，第12・13号住居跡に類似している。また，コーナー部が丸いことを除いて，第11号住居跡とも類似している。時期は，出土遺物の様相などから，後期後半（３世紀前半）と考えられる。



第19図　第15号住居跡・出土遺物実測図

第15号住居跡出土遺物観察表(第～図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
91	土師器	壺	-	(2.5)	[7.0]	長石・赤色粒子	にぶい赤褐	普通	内・外面ナデ	中層	5% 底部外面木葉痕
92	弥生土器	壺	-	(2.8)	[8.8]	石英・長石・雲母	にぶい黄橙	普通	地文は付加条（一種）縄文	覆土中	5% 内面摩滅
TP21	弥生土器	壺	-	(3.9)	-	石英・長石・雲母	にぶい褐	普通	口唇部・口辺部外面に付加条（一種）縄文を施し、1列の刺突文を巡らす	覆土中	
TP22	弥生土器	壺	-	(3.6)	-	石英・長石・雲母	明褐	普通	口唇部・口辺部外面に付加条（一種）縄文を施し、2列の刺突文を巡らす	覆土中	PL32

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
TP23	弥生土器	壺	－	(4.8)	－	石英・長石・雲母	明赤褐	普通	口辺部外面に付加条（一種）縄文を羽状に施す	中層	
TP24	弥生土器	壺	－	(4.0)	－	石英・長石	にぶい褐	普通	口辺部外面に付加条（一種）縄文を施す	中層	PL32
TP25	弥生土器	壺	－	(4.7)	－	石英・長石	にぶい黄橙	普通	口唇部外面に条線文を施し，口辺部外面に手彫竹管状工具による爪形文と刺突文を交互に巡らす	覆土中	
TP26	土師器	壺	－	(2.2)	－	石英・長石・赤色粒子	にぶい褐	普通	体部外面に矩，単節縄文を羽状に施す　内面ナデ	覆土中	
TP27	土師器	壺	－	(1.8)	－	石英・長石・赤色粒子	明赤褐	普通	体部外面にＳ字状結節文を施す　内面ナデ	覆土中	
TP28	土師器	壺	－	(2.6)	－	石英・長石・赤色粒子	にぶい橙	普通	体部外面にＳ字状結節文を施す　内面ナデ	覆土中	

第16号住居跡（第20図）

位置　調査区南部のD3b1 区で，標高24.2mの台地平坦部に位置している。

確認状況　全体的に削平を受けており，床及び炉の一部が確認され，遺存状況は極めて不良である。

形状　長軸3.98m，短軸3.62mの隅丸方形と推定される。削平されて壁の立ち上がりは確認できなかった。主軸方向はN－36°－Eと推定される。

床　ほぼ平坦である。全体的に軟弱である。

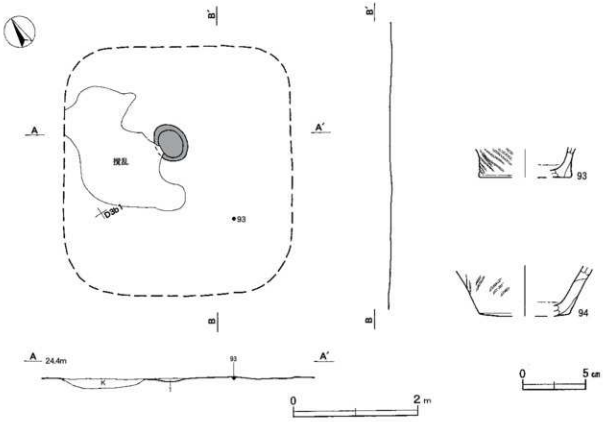
ピット　削平により，不明である。

炉　地床炉で床面から５cmほど掘りくぼめられ，中央部北側に位置している。炉床は軟弱で，火熱の痕跡は見られない。覆土は単一層である。

炉土層解説

1　暗赤褐色　焼土ブロック少量，ローム粒子・炭化粒子微量

覆土　床面上にロームブロックや炭化物を少量含む暗褐色土が部分的に堆積していた。層厚が極めて薄く，図示できない。



第20図　第16号住居跡・出土遺物実測図

遺物出土状況　弥生土器片70点（壺），土製紡錘車１点が覆土下層から床面にかけて散在した状態で出土している。いずれも破片で，廃棄されたものや周囲から流入したものと考えられる。また，混入した縄文土器片１点も出土している。

所見　一辺４ｍに達しない小形の住居であり，時期は，出土遺物の様相などから，後期後半（３世紀前半）と推定される。

第16号住居跡出土遺物観察表(第20図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴		出土位置	備考
93	弥生土器	壺	－	(2.4)	[7.4]	石英・長石	明赤褐	普通	内面ナデ，地文は付加条（一種）縄文		床面	5% 内面摩滅
94	弥生土器	壺	－	(4.0)	[7.4]	石英	明赤褐	普通	内面ナデ，地文は付加条（一種）縄文		覆土中	5%

表４　弥生時代住居跡一覧表

番号	位置	主軸方向 長軸方向	平面形	規模（m） (長軸×短軸)	壁高 (cm)	床面	壁溝	内部施設					覆土	主な出土遺物	備考 (時期・旧→新)
								主柱穴	主入口	ピット	炉	竈			
12	C2i5	N－36°－W	隅丸方形	3.36×3.28	40～45	平坦	－	4	2	－	－	2	自然	弥生土器（壺）	後期後葉
13	C2h9	N－27°－W	隅丸方形	3.96×3.76	20～24	平坦	－	3	1	－	－	1	自然	弥生土器（壺）	後期後葉
15	D2a7	N－68°－W	隅丸長方形	4.19×3.68	45～55	平坦	－	4	1	－	－	1	自然	弥生土器（壺）	後期後葉　SK25→SI15
16	D3b1	N－32°－E	隅丸方形	[3.98×3.62]	－	平坦	－	－	－	－	－	1	自然	弥生土器（壺）	後期後葉

４　古墳時代の遺構と遺物

今回の調査で確認した古墳時代の遺構は，竪穴住居跡29軒，炉跡２基，土坑２基である。これらの遺構は主に台地縁辺部から平坦部にかけて位置し，中心となる時期は前期及び中期と考えられる。以下，それぞれの遺構の特徴と出土した遺物について記述する。

(1)　竪穴住居跡

第１号住居跡（第21図）

位置　調査区西部のＣ２g2 区で，標高24.1ｍの台地縁辺部に位置している。

確認状況　全体的にトレンチャーの撹乱を受けており，部分的に壁や床及び内部施設を確認した。遺存状況は極めて不良である。

形状　長軸3.70ｍ，短軸3.45ｍの方形である。壁は高さ10～20㎝で，外傾して立ち上がっている。主軸方向はＮ－25°－Ｗである。

床　ほぼ平坦である。確認した範囲では軟弱で，炉の周囲が踏み固められている。

ピット　２か所。その他は撹乱により不明である。Ｐ１は炉と対峙して位置することから，出入り口施設に関連すると考えられ，覆土は３層からなる。Ｐ２は性格不明で，深さは５㎝である。

ピット土層解説
１　暗褐色　ローム ブロック少量，焼土粒子・炭化粒子微量　　３　褐　色　ローム ブロック中量
２　褐　色　ローム ブロック少量，炭化粒子微量

炉　地床炉で床面から10㎝ほど掘りくぼめられ，中央部の北側に位置している。炉床は火熱により赤変硬化している。覆土は２層からなる。

炉土層解説
１　にぶい赤褐色　焼土ブロック多量，炭化物少量，ローム粒子微量　　２　にぶい赤褐色　焼土ブロック多量，ローム粒子・炭化粒子微量

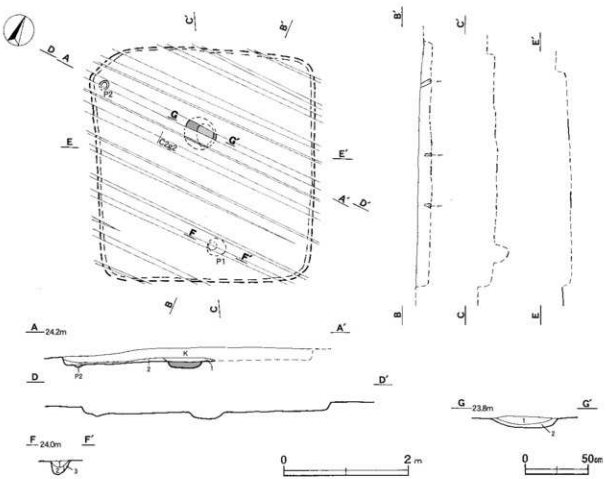
覆土　2層からなる。撹乱により，堆積状況は不明である。

土層解説

1　黒 褐 色　焼土ブロック・炭化材中量、ロームブロック微量　　2　暗 褐 色　ロームブロック少量、焼土粒子・炭化粒子微量

遺物出土状況　土師器片5点（壺1，甕4）が覆土上層から出土している。いずれも細片のため，図示できない。

所見　一辺4mに達しない小形の住居である。時期は，出土遺物の様相や，炉が中央部北側に位置していることから，前期と推定される。



第21図　第1号住居跡実測図

第2号住居跡（第22・23図）

位置　調査区西部のC2c9区で，標高23.9mの台地平坦部に位置している。

確認状況　全体的にトレンチャーの撹乱を受けており，部分的に壁や床及び内部施設を確認した。遺存状況は極めて不良である。

形状　長軸6.45m，短軸5.93mの方形である。壁は高さ10～35cmで，ほぼ直立している。主軸方向はN－32°－Wである。

床　ほぼ平坦である。壁際は軟弱で，主柱穴の内側を中心として，炉の周囲がよく踏み固められている。P3の北側には，火熱により赤変した焼土範囲が見られる。

ピット　8か所。P1～P4は配置から主柱穴で，深さは75～86cmである。覆土は4層からなり，第1層は締

まりの弱い黒褐色及び暗褐色土で，柱痕跡と考えられる。第２～４層は，ロームブロックを少量含む暗褐色及び褐色土で，埋土である。Ｐ５は炉と対峙して位置することから，出入り口施設に関連すると考えられ，階段状を呈し，最深部の深さは73cmである。Ｐ６～Ｐ８は性格不明で，深さは７～35cmである。

ピット土層解説

1 黒 褐 色 ロームブロック少量，炭化物微量
2 暗 褐 色 ロームブロック少量，炭化粒子微量
3 暗 褐 色 ロームブロック少量
4 褐 色 ロームブロック中量
5 黒 褐 色 ロームブロック・炭化物微量
6 褐 色 ロームブロック少量，炭化粒子微量

貯蔵穴 上部にテラス状の平坦面が東側を除いてめぐっている。底面はほぼ平坦で，深さは69cmである。覆土は６層からなり，第１～５層は焼土ブロックを少量含む黒褐色及び暗褐色土，第６層はロームブロックを中量含む褐色土で，土質及び堆積状況から，埋め戻されたと考えられる。

貯蔵穴土層解説

1 黒 褐 色 ロームブロック少量，焼土粒子・炭化物微量
2 褐 色 ロームブロック・焼土ブロック少量，炭化物微量
3 暗 褐 色 焼土ブロック中量，ロームブロック・炭化物少量
4 黒 褐 色 ロームブロック中量，焼土ブロック・炭化粒子少量
5 黒 褐 色 ロームブロック中量，焼土粒子・炭化物微量
6 褐 色 ロームブロック中量

炉 地床炉で床面から14cmほど掘りくぼめられ，中央部の北側で主柱穴の内側に位置している。炉床は火熱により赤変硬化している。覆土は２層からなる。

炉土層解説

1 にぶい赤褐色 焼土ブロック中量，ロームブロック・炭化物少量
2 にぶい赤褐色 ロームブロック・焼土ブロック少量

覆土 11層からなる。覆土上層から中層の第１・２・８・９層はロームブロックを少量含む暗褐色土で，壁際に三角形状に堆積している第７層はロームブロックを少量含む暗褐色土で，土質及び堆積状況から，自然堆積と考えられる。他層は焼土ブロックや炭化材を多く含む暗褐色及び黒褐色土で，焼失に伴って形成されたと考えられる。

土層解説

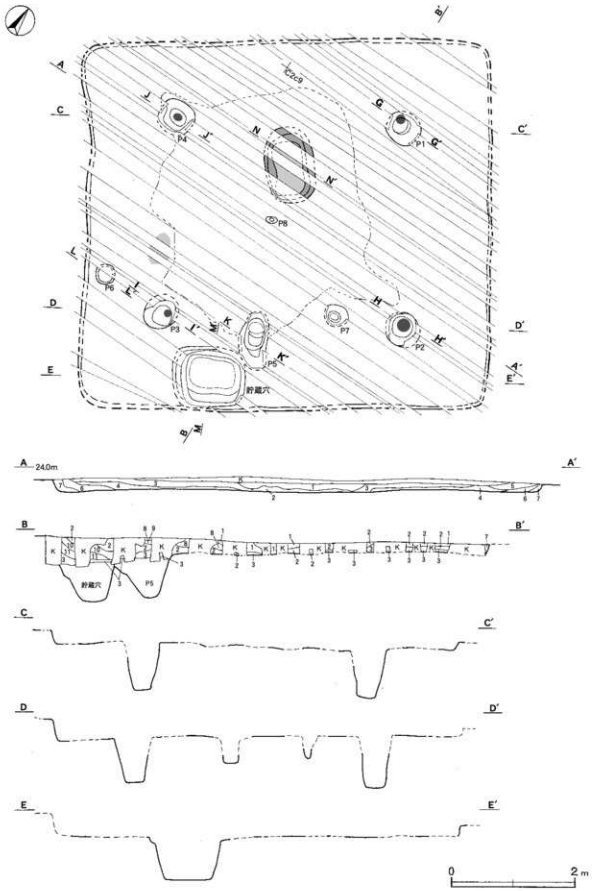
1 暗 褐 色 ロームブロック少量，焼土粒子・炭化物微量
2 暗 褐 色 ロームブロック少量，焼土粒子・炭化粒子微量
3 黒 褐 色 炭化材中量，ロームブロック・焼土ブロック少量
4 黒 褐 色 ロームブロック・焼土粒子・炭化材少量
5 暗 褐 色 ロームブロック・焼土粒子・炭化物少量
6 黒 褐 色 焼土ブロック中量，ロームブロック・炭化物少量
7 暗 褐 色 ロームブロック少量，焼土粒子・炭化粒子微量
8 暗 褐 色 ロームブロック微量
9 暗 褐 色 ロームブロック・炭化粒子微量
10 暗 褐 色 ロームブロック・焼土粒子・炭化粒子少量
11 暗 褐 色 ロームブロック・焼土ブロック少量，炭化物微量

遺物出土状況 土師器片167点（器台３，坩６，高坏19，壺24，甕114，ミニチュア土器１），球状土錘１点が覆土上層と床面を中心に出土している。いずれも破片で，廃棄されたものや周囲から流入したものと考えられる。また，第３～６層から，焼土ブロックや炭化材が多量に出土している。これらの範囲はほぼ全域に及び，ほとんどが床面より上位に分布している。焼失した痕跡と認められ，炭化材の形状には丸太材と角材や板材などが見られ，壁に直交や中央から放射状に分布したりしていることから，上屋の建築材と推定される。

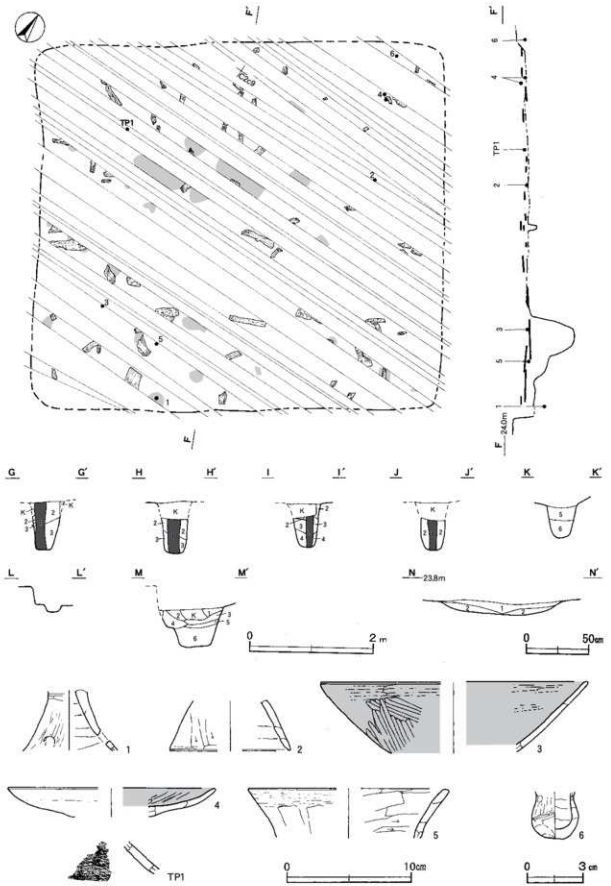
所見 焼失した住居と推測される。しかし，遺棄された遺物が見られず，床面より上位から焼土ブロックや炭化材が出土していることなどから，廃絶後の意図的な焼却と推測される。４か所の主柱穴で柱痕跡が確認されていることから，柱は抜き取らず，上屋の解体もなされなかったと考えられる。炉は中央部の北側に位置し，炉と対峙する位置に出入口施設に関連するピットと，隣接して貯蔵穴を設ける住居形態は，第２・20・25・28号住居跡に類似している。時期は，出土遺物の様相などから，前期中葉（４世紀初頭～４世紀前葉）と考えられる。

第２号住居跡出土遺物観察表（第23図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
1	土師器	器台	－	(4.7)	－	石英・長石・赤色粒子	黄橙	普通	外面ヘラミガキ,内面ヘラナデ	床面	40% 外面摩滅
2	土師器	器台	－	(4.0)	[9.6]	石英・長石	橙	普通	外面ヘラケズリ	床面	5%
3	土師器	高坏	[21.4]	(5.6)	－	石英・長石	橙	普通	坏部ヘラミガキ,内・外面赤彩	下層	5% 内面摩滅



第22図　第２号住居跡実測図



第23図　第２号住居跡・出土遺物実測図

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎 土	色 調	焼成	手 法 の 特 徴	出土位置	備 考
4	土師器	高坏	[16.6]	(2.2)	－	石英・長石	橙	普通	内面赤彩ヘラミガキ	下層	5% 外面摩滅
5	土師器	甕	[16.0]	(3.9)	－	石英・長石・赤色粒子	橙	普通	外面横ナデ・ヘラナデ,内面ヘラナデ・ヘラケズリ	下層	5%
6	土師器	ミニチュアミ型	－	(2.5)	0.8	石英・長石	明赤褐	普通	外面ヘラミガキ・指頭ナデ	床面	70% PL25
TP1	土師器	壺	－	(2.6)	－	石英・長石	橙	普通	体部外面に網目状撚糸文を施す 内面ナデ	下層	

第３号住居跡（第24図）

位置　調査区西部のＣ２e0 区で，標高24.0ｍの台地平坦部に位置している。

確認状況　全体的にトレンチャーの撹乱を受けており，部分的に壁や床及び内部施設を確認した。遺存状況は極めて不良である。

形状　長軸3.85ｍ，短軸3.55ｍの隅丸方形である。壁は高さ15～27㎝で，外傾して立ち上がっている。主軸方向はＮ－33°－Ｗである。

床　ほぼ平坦である。全体的に軟弱で，炉の周囲が踏み固められている。

ピット　６か所。Ｐ１～Ｐ４は配置から主柱穴で，深さは50～74㎝である。覆土は４層からなり，ロームブロックを少量含む暗褐色である。Ｐ５は炉と対峙して位置することから，出入り口施設に関連すると考えられ，深さは15㎝である。Ｐ６は性格不明で，深さは10㎝である。

ピット土層解説

1　暗 褐 色　ロームブロック・炭化粒子微量
2　暗 褐 色　ロームブロック少量，炭化粒子微量
3　暗 褐 色　ロームブロック少量
4　暗 褐 色　ロームブロック中量，炭化粒子微量
5　褐　　色　ロームブロック中量，炭化物微量

炉　地床炉で床面から11㎝ほど掘りくぼめられ，中央部の北側で主柱穴の内側に位置している。炉床は火熱により赤変硬化している。覆土は２層からなる。

炉土層解説

1　暗赤褐色　焼土ブロック中量，ロームブロック・炭化物微量
2　赤 褐 色　焼土ブロック多量，ロームブロック・炭化物微量

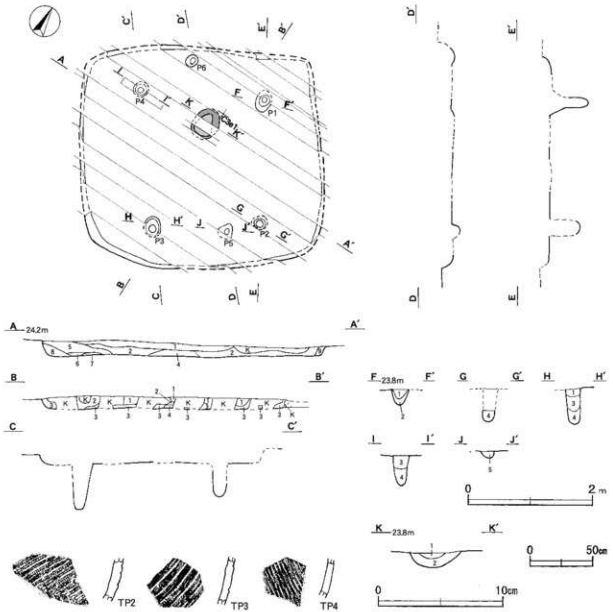
覆土　９層からなる。上層の第１層は焼土ブロックを多く含むにぶい赤褐色土で，第２～４層は床面上に不自然に堆積する層で，いずれも埋め戻されたと考えられる。第５・６・８・９層は，壁際に三角形状に堆積している。

土層解説

1　にぶい赤褐色　焼土ブロック中量，ロームブロック・炭化物微量
2　暗 褐 色　ロームブロック・炭化物微量
3　褐　　色　ロームブロック・炭化物微量
4　褐　　色　ロームブロック微量
5　黒 褐 色　ロームブロック・炭化粒子微量
6　黒 褐 色　ロームブロック少量，焼土粒子・炭化物微量
7　暗赤褐色　焼土ブロック中量，ローム粒子・炭化粒子微量
8　暗 褐 色　ロームブロック・炭化粒子微量
9　褐　　色　ロームブロック中量

遺物出土状況　弥生土器片21点（壺），土師器片３点（高坏１，壺１，甕１）が覆土上層から中層にかけて散在した状態で出土している。いずれも破片で，廃棄されたものや周囲から流入したものと考えられる。

所見　一辺４ｍに達しない小形の住居であり，形態的には主柱穴をもち，地床炉が中央部の北側で主柱穴の内側に位置し，貯蔵穴を伴わないという特徴が見られ，第12号住居跡や第13号住居跡に類似している。また，コーナー部が丸いことを除いて，第11号住居跡とも類似している。覆土の第１～４層は埋め戻されたと考えられる。第１層の焼土層の形成については不明であるが，焼失した隣接する第２号住居跡との関連が想定され，前期中葉には廃絶されて，すでに埋没していたと考えられる。出土遺物の様相を加味して，時期は古墳時代前期前葉（３世紀中葉～３世紀末葉）と考えられる。



第24図　第３号住居跡・出土遺物実測図

第３号住居跡出土遺物観察表(第24図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
TP2	弥生土器	壺	-	(3.4)	-	石英・長石・雲母	にぶい橙	普通	体部外面に付加条（一種）縄文を施す	覆土中	
TP3	弥生土器	壺	-	(3.8)	-	石英・長石・雲母	橙	普通	体部外面に付加条（一種）縄文を施す	覆土中	
TP4	弥生土器	壺	-	(3.0)	-	石英・長石・雲母	褐	普通	体部外面に付加条（一種）縄文を施す	覆土中	

第４号住居跡（第25図）

位置　調査区中央部のC3b1区で，標高24.0mの台地平坦部に位置している。

確認状況　全体的にトレンチャーの撹乱を受けており，部分的に壁や床及び内部施設を確認した。遺存状況は極めて不良である。

重複関係　第１号土坑に中央部を掘り込まれている。

形状　長軸3.82m，短軸3.72mの方形と推定される。壁は高さ20～26cmで，ほぼ直立している。主軸方向はN

−57°−Wである。

床　ほぼ平坦である。確認した範囲では軟弱で，炉の周囲が踏み固められている。

ピット　撹乱により不明である。

炉　地床炉で床面から10cmほど掘りくぼめられ，北西壁の中央部寄りに偏って位置している。炉床は火熱により赤変硬化している。覆土は2層からなる。

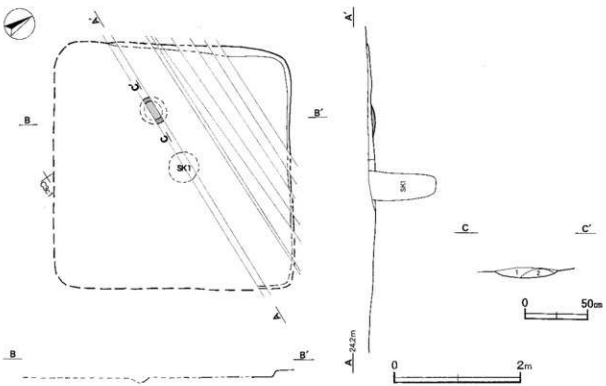
炉土層解説
1　暗赤褐色　焼土ブロック・ロームブロック少量，炭化物微量　　2　にぶい褐色　焼土ブロック多量，炭化粒子微量

覆土　単一層からなる。撹乱により，堆積状況は不明である。

土層解説
1　暗　褐　色　ロームブロック・焼土ブロック・炭化物微量

遺物出土状況　土師器片6点（壺5，甕1）が第1層から出土している。いずれも細片のため，図示できない。

所見　一辺4mに達しない小形の住居である。出土遺物の様相や，炉が北西壁の中央部寄りに偏っていることから，時期は前期後半～中期前半と推定される。



第25図　第4号住居跡実測図

第5号住居跡（第26～28図）

位置　調査区中央部のC3c0区で，標高23.9mの台地平坦部に位置している。

確認状況　全体的にトレンチャーの撹乱を受けており，部分的に壁や床及び内部施設を確認した。

重複関係　第33号土坑を掘り込んでいる。

形状　長軸9.90m，短軸9.05mの方形と推定される。壁は高さ36～70cmで，ほぼ直立している。主軸方向はN−32°−Wである。

床　中央部はほぼ平坦で，周囲は緩やかな凹凸が見られる。主柱穴の内側を中心に踏み固められ，全体的に火熱により赤変し，壁際は軟弱である。壁溝が四壁の直下で確認され，深さは6～10cmである。掘り方は壁際を中心に確認され，ロームブロックを中量含む褐色土が充填されている。

ピット　6か所。P１～P４は配置から主柱穴で，深さは85～115㎝である。覆土はロームブロックを少量含む暗褐色及び褐色土である。P５は炉と対峙して位置することから，出入り口施設に関連すると考えられ，深さは 42 ㎝である。P６は性格不明で，深さは 29 ㎝である。

貯蔵穴　上部にテラス状の平坦面がめぐっている。底面はほぼ平坦で，深さは94㎝である。覆土は10層からなり，第１・２・４・５層は焼土ブロックを少量含む黒褐色及び暗褐色土で，焼土ブロックを多量含む第３層を間に挟んでいる。土質及び堆積状況から，第３層を主体として埋め戻されたと考えられる。第６～８層は焼土ブロックを微量含むほどで，最下層の第８層は粘性及び締まりが強く，土質及び堆積状況から自然堆積と考えられる。

貯蔵穴土層解説

1	暗褐色	ロームブロック少量，焼土粒子・炭化物微量	6	褐色	ロームブロック中量，焼土ブロック・炭化粒子微量
2	暗褐色	ロームブロック少量，焼土ブロック・炭化物微量	7	暗褐色	ロームブロック少量，焼土ブロック・炭化粒子微量
3	赤褐色	焼土ブロック多量，炭化材中量，ローム粒子微量	8	黒褐色	ロームブロック微量
4	暗褐色	ロームブロック・焼土粒子・炭化粒子微量	9	暗褐色	ロームブロック・炭化材中量，焼土ブロック微量
5	黒褐色	ロームブロック少量，焼土ブロック・炭化粒子微量	10	褐色	ロームブロック・焼土ブロック微量

炉　地床炉で床面から８㎝ほど掘りくぼめられ，中央部の北東側で主柱穴の内側に位置している。炉床は部分的に火熱により赤変硬化している。覆土は１層からなる。

炉土層解説

1	赤褐色	焼土ブロック中量，ロームブロック・炭化物少量

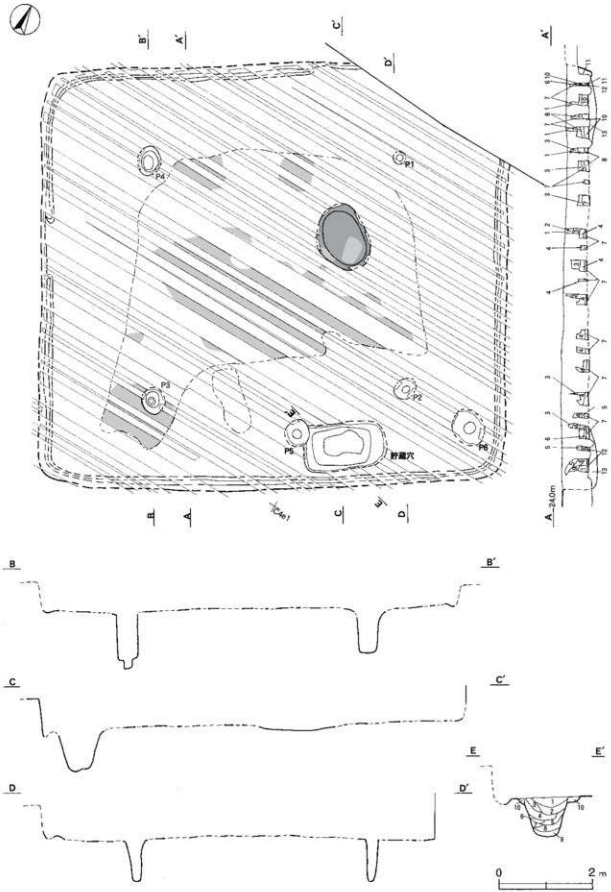
覆土　13層からなる。第１～６層はロームブロックや焼土ブロックを少量含む暗褐色及び黒褐色土で，土質及び堆積状況から，自然堆積と考えられる。第７・８層は焼土ブロックを中量含む焼土層で，全域に広がり，中層から下層にかけて皿状に堆積し，中央部では床に達している。第９～11層は壁際に三角形状に堆積している。第12層上面は床面に相当し，第13層は床の埋土である。土質及び堆積状況から，第１～６，９～11層は自然堆積で，第７・８層は焼失に伴って形成されたと考えられる。

土層解説

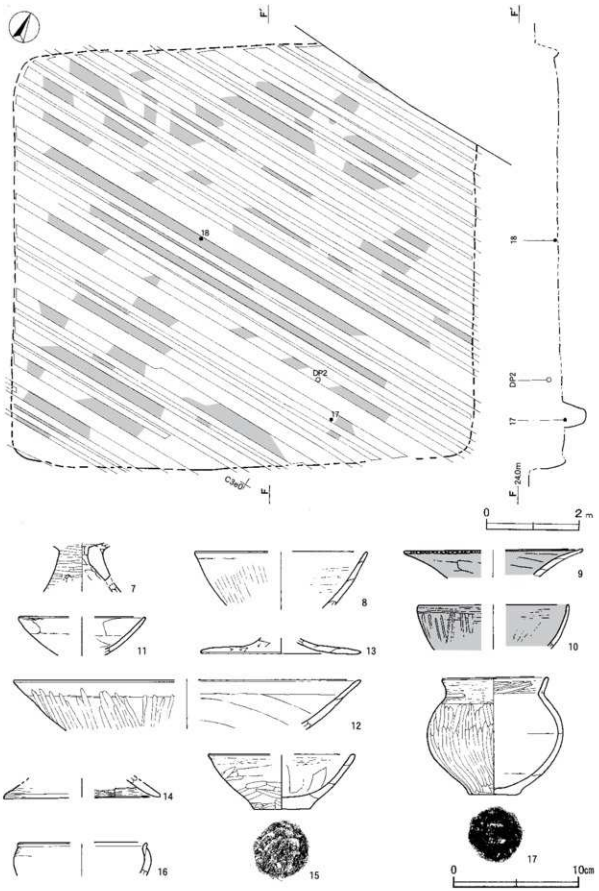
1	暗褐色	ロームブロック・焼土粒子・炭化物微量	8	赤褐色	焼土ブロック中量，ロームブロック・炭化物微量
2	黒褐色	ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子微量	9	暗褐色	ロームブロック・焼土粒子・炭化粒子微量
3	暗褐色	ロームブロック・焼土ブロック少量，炭化物微量	10	暗褐色	ロームブロック少量，焼土粒子・炭化粒子微量
4	暗褐色	ロームブロック少量，焼土粒子・炭化物微量	11	褐色	ロームブロック少量
5	暗褐色	ロームブロック・焼土ブロック・炭化物少量	12	褐色	ロームブロック少量，焼土粒子・炭化粒子微量
6	暗褐色	ロームブロック・焼土ブロック・炭化物微量	13	褐色	ロームブロック中量，炭化粒子微量
7	暗赤褐色	焼土ブロック中量，ロームブロック・炭化物少量			

遺物出土状況　土師器片933点（椀４，器台１，高坏87，壺208，甕626，ミニチュア土器７），球状土錘３点が覆土上層と床面を中心に出土している。いずれも破片で，廃棄されたものや周囲から流入したものと考えられる。また，第７・８層から焼土ブロックや炭化材がほぼ全域にわたって検出され，中央部の床も火熱により赤変し，焼失した痕跡と認められる。撹乱がひどいため，大半の炭化材は形状を留めておらず，量的にも多くはなかった。また，混入した土師器坏片１点，土師質土器片２点，凝灰岩製砥石１点が出土している。

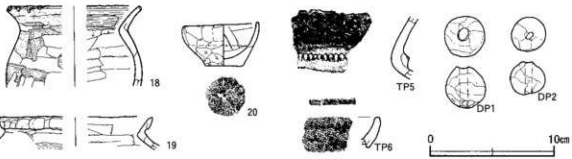
所見　一辺９ｍを超える大形の住居で，焼失したと推測される。しかし，遺棄された遺物が見られず，壁際の三角形状の堆積土の上位から焼土や炭化材が出土していることから，中央部の床は火熱により赤変しているが，廃絶されてわずかに窪地化した段階での意図的な焼却と推測される。炉は中央部の北東側に位置し，炉と対峙する位置に出入口施設に関連するピットと，隣接して貯蔵穴を設ける住居形態は，第２・20・25・28号住居跡に類似している。時期は，出土遺物の様相などから，前期中葉（４世紀初頭～４世紀前葉）と考えられる。



第26図　第５号住居跡実測図



第27図　第５号住居跡・出土遺物実測図



第28図　第５号住居跡出土遺物実測図

第５号住居跡出土遺物観察表（第27～28図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
7	土師器	器台	－	(3.9)	－	石英・長石・赤色粒子	灰褐	普通	外面ヘラミガキ,内部ヘラナデ	覆土中	20%
8	土師器	高坏	[13.8]	(4.8)	－	石英・長石	にぶい橙	普通	ヘラミガキ	覆土中	10%　内・外面摩滅
9	土師器	高坏	[14.4]	(2.2)	－	石英・長石	明赤褐	普通	赤彩,ヘラナデ,口唇部円形の連続刺突文	覆土中	5%
10	土師器	高坏	[12.2]	(3.6)	－	長石	明赤褐	普通	赤彩,ヘラミガキ	覆土中	5%
11	土師器	高坏	[10.0]	(3.0)	－	石英	橙	普通	ヘラナデ	覆土中	5%
12	土師器	高坏	[28.0]	(3.9)	－	石英・長石	明赤褐	普通	外面ヘラミガキ,内面ヘラナデ	覆土中	5%
13	土師器	高坏	－	(1.3)	13.0	石英・長石・赤色粒子	褐	普通	外面ヘラケズリ,内・外面ナデ	P6	15%
14	土師器	高坏	－	(1.5)	[12.4]	石英・長石	明赤褐	普通	外面ヘラミガキ,内面ハケ目	覆土中	5%
15	土師器	椀	[11.8]	4.4	4.4	石英・長石・赤色粒子	にぶい黄橙	普通	口辺部横ナデ,体部外面ヘラナデ後ヘラミガキ,体部内面ヘラナデ,底部外面ヘラナデ	覆土中	35%
16	土師器	椀	[10.2]	(2.6)	－	長石	にぶい黄橙	普通	内・外面ナデ	覆土中	5%
17	土師器	小形甕	8.4	9.4	4.3	石英・長石	橙	普通	口辺部外面横ナデ,体部外面ヘラミガキ,口辺部内面横ナデ後ヘラミガキ,底部外面ヘラナデ	貯蔵穴	70%　PL29 体部内面摩滅
18	土師器	甕	[10.6]	(6.5)	－	長石	にぶい黄褐	普通	口唇部本口状工具によるキザミ,外面ハケ目後ナデ,口辺部内面ハケ目後ヘラケズリ,体部内面ヘラナデ	床面	5%
19	土師器	甕	[12.2]	(2.6)	－	長石	明赤褐	普通	折り返し口辺部指頭圧痕,体部外面ハケ目,口辺部内面ヘラナデ	P6	5%
20	土師器	ミニチュア土器	6.0	3.5	3.1	石英・長石	褐	普通	口辺部外面ヘラナデ,体部外面ヘラケズリ,内面ヘラナデ,底部外面ヘラナデ	壁溝・覆土中	60%　PL25
TP5	土師器	壺	－	(5.0)	－	石英・長石・雲母・赤色粒子	明赤褐	普通	頸部外面ハケ目後ヘラナデ,刻みを有する粘土帯を側らす　内面ナデ	覆土中	PL32
TP6	土師器	壺	－	(2.4)	－	石英・長石	にぶい橙	普通	口唇部・口辺部外面に朝日状撚糸文を施す　内面ナデ	覆土中	

番号	種別	径	厚さ	孔径	重量	材質	特徴	出土位置	備考
DP1	球状土錘	3.2	3.3	0.8	33.5	粘土	ナデ調整，中央部片側穿孔	覆土中	PL31
DP2	球状土錘	2.8	2.6	0.6	19.8	粘土	ナデ調整，中央部片側穿孔	中層～下層	PL31

第６号住居跡（第29～34図）

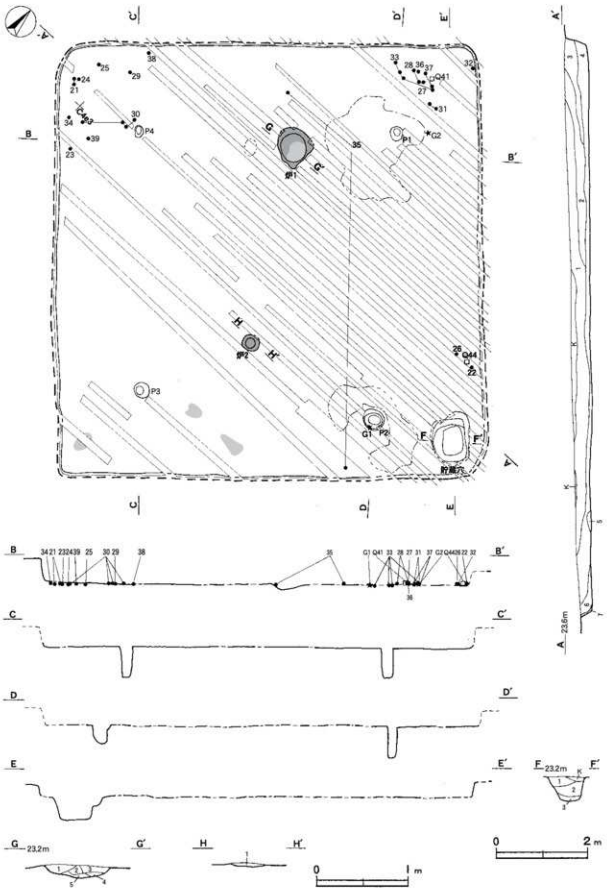
位置　調査区中央部のＣ4d4 区で，標高23.9ｍの台地平坦部に位置している。

確認状況　全体的にトレンチャーの撹乱を受けており，部分的に壁や床及び内部施設を確認した。遺存状況は極めて不良である。

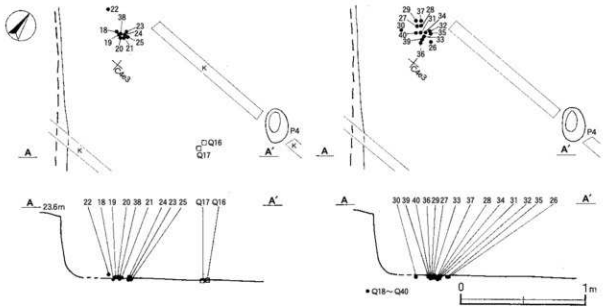
形状　長軸9.20ｍ，短軸9.18ｍの方形と推定される。壁は高さ26～40㎝で，ほぼ直立している。主軸方向はＮ－40°－Ｗである。

床　ほぼ平坦である。全体的に軟弱で，炉１やＰ１・Ｐ２の周囲は踏み固められている。７か所の火熱によって赤変した範囲が見られる。

ピット　４か所。Ｐ１～Ｐ４は配置から主柱穴で，深さは 39 ～ 70 ㎝である。覆土はロームブロックを少量含む褐色土を基調としている。



第29図　第６号住居跡実測図（１）



第30図　第６号住居跡実測図（２）

貯蔵穴　部分的にテラス状の平坦面がめぐっている。底面はほぼ平坦で，深さは52cmである。覆土は３層からなり，ロームブロックを中量含む褐色土を基調とし，土質及び堆積状況から，埋め戻されたと推測される。

貯蔵穴土層解説
1　褐　色　ロームブロック少量
2　暗 褐 色　ロームブロック中量，炭化材少量
3　褐　色　ロームブロック多量

炉　２か所。炉１は地床炉で床面から14cmほど掘りくぼめられ，北西壁の中央部寄りに偏って位置している。炉床は部分的に火熱により赤変硬化している。覆土は５層からなる。炉２は地床炉で床面からわずかにくぼむほどで，中央部の南東側に位置している。規模は炉１の半分程度であり，掘り込みも浅いことから炉１が主炉で，炉２が副炉と考えられる。

炉土層解説
1　黒 褐 色　焼土ブロック少量，ロームブロック・炭化物微量
2　暗 褐 色　ロームブロック・焼土ブロック微量
3　暗 褐 色　ロームブロック少量，焼土粒子微量
4　暗 褐 色　ロームブロック少量，焼土ブロック微量
5　暗 褐 色　焼土ブロック中量，ローム粒子・炭化物微量

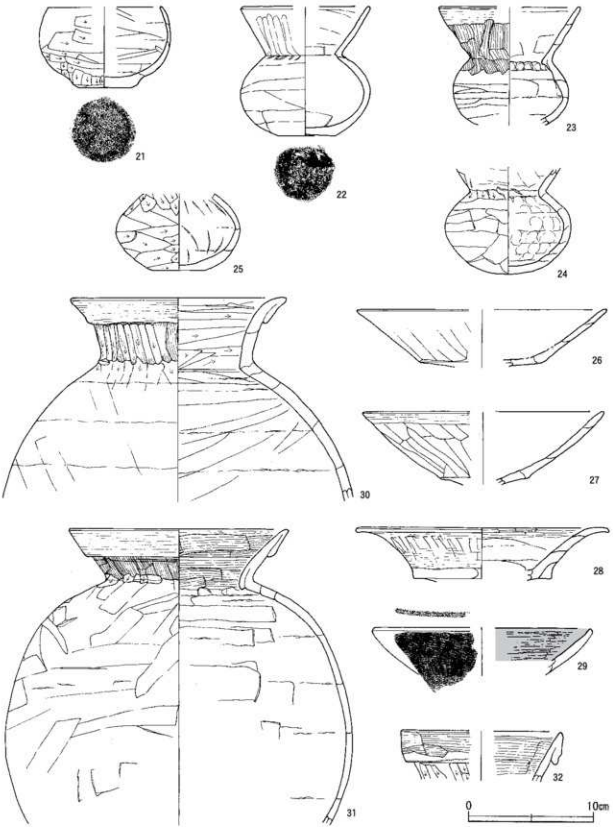
覆土　７層からなる。第１～４層はロームブロックや焼土ブロックを少量含む暗褐色及び黒褐色土を基調とし，第５～７層はロームブロックを少量含む褐色土で，壁際に三角形状に堆積している。土質及び堆積状況から，自然堆積と考えられる。

土層解説
1　黒 褐 色　ロームブロック・焼土ブロック・炭化物微量
2　黒　色　ロームブロック・焼土粒子・炭化物微量
3　黒 褐 色　ロームブロック・炭化粒子微量
4　暗 褐 色　ロームブロック中量，焼土ブロック・炭化物微量
5　褐　色　ローム粒子多量
6　褐　色　ロームブロック少量
7　褐　色　ロームブロック中量

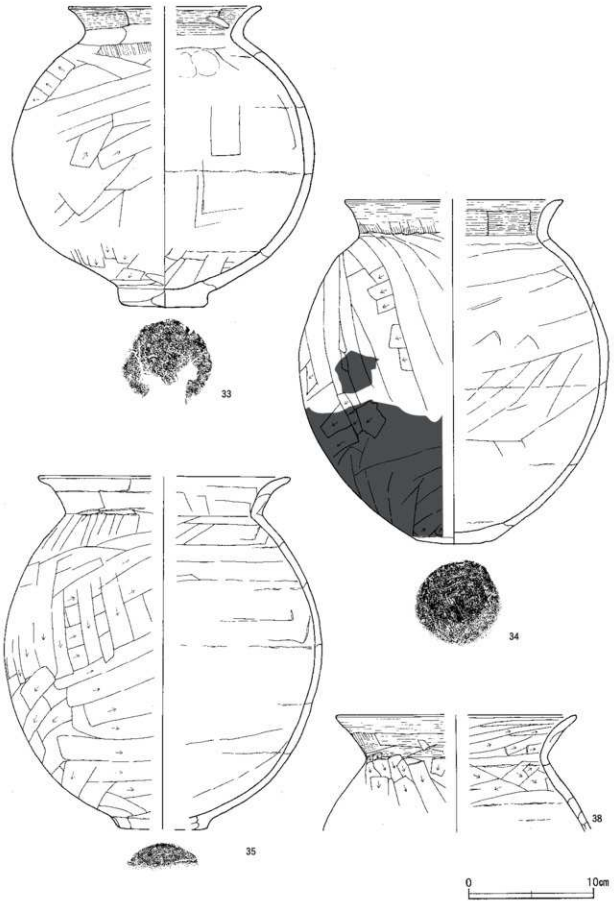
遺物出土状況　土師器片1088点（椀14，器台１，坩46，高坏53，壺25，甕889，細片60），球状土錘１点，滑石製模造品33点（剣形品１，有孔円板１，臼玉24，未製品３，砕片４），鉄滓２点が覆土中層から下層にかけて廃棄されたような状況で出土している。北・西コーナー部の床面を中心として，形状を比較的留めた土師器や滑石製臼玉などがまとまってまとまって出土している。また，混入した土師質土器片４点も出土している。

所見　一辺９ｍを超える大形の住居である。炉は北西壁の中央部寄りに偏り，コーナー部に貯蔵穴を設け，出入口施設に関連するピットがないなど住居形態に特徴が見られ，第９・14・22・23号住居跡に類似している。遺物では，西コーナー部の床面からまとまって出土した滑石製臼玉をはじめ，剣形模造品や有孔円板が出土しており，滑石製模造品を用いた祭祀が執り行われていたことが推測される。覆土中からは滑石製の未製品や砕

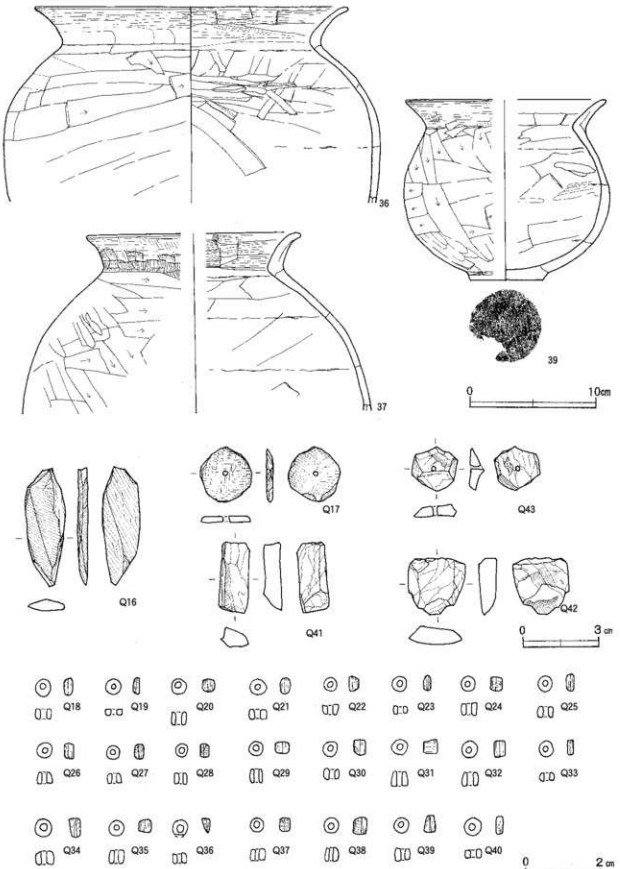
片なども出土しているが，住居内で製作していた痕跡は希薄で，廃棄されたものや周囲から流入したものと考えられる。時期は，出土遺物の様相などから中期前葉（５世紀前葉）と考えられる。



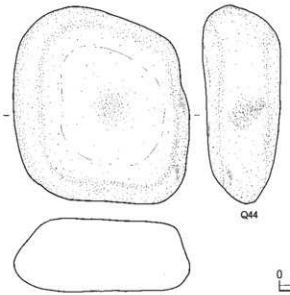
第31図　第６号住居跡出土遺物実測図（１）

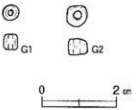


第32図　第６号住居跡出土遺物実測図（２）



第33図　第６号住居跡出土遺物実測図（３）





第34図　第６号住居跡出土遺物実測図（４）

第６号住居跡出土遺物観察表（第31～34図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
21	土師器	椀	[8.8]	6.4	5.0	長石・赤色粒子	橙	普通	外面ヘラケズリ，内面ヘラナデ後ヘラミガキ，底部外面ヘラナデ・ヘラケズリ	床面	35%
22	土師器	坩	[10.0]	10.2	4.6	長石	橙	普通	内・外面ヘラナデ，底部外面ナデ	床面	85%　PL26
23	土師器	坩	[11.2]	(9.3)	－	石英・長石	橙	普通	口辺部外面横ナデ・ハケ目，体部外面ヘラナデ，内面ヘラナデ，胎土目痕	床面	50%
24	土師器	坩	－	(8.4)	－	石英・長石・赤色粒子	灰黄褐	普通	外面ヘラナデ，胎土目痕ヘラケズリ，口辺部内面ヘラナデ，体部内面指頭圧痕	床面	40%
25	土師器	坩	－	(6.0)	4.2	石英・長石・赤色粒子	明赤褐	普通	外面ヘラナデ後ヘラケズリ，体部内面ヘラナデ，底部外面ナデ	床面	60%
26	土師器	高坏	[19.8]	(4.5)	－	石英・長石	明赤褐	普通	内外面ヘラナデ	床面	30% 内面摩滅
27	土師器	高坏	[19.0]	(5.8)	－	石英・長石・白色粒子	明赤褐	普通	外面横ナデ・ヘラナデ，内面ナデ	床面	30% 内面摩滅
28	土師器	高坏	20.2	(4.2)	－	石英・長石・赤色粒子	橙	普通	外面ヘラナデ後横ナデ，内面ヘラナデ後ヘラミガキ	床面	30%
29	土師器	高坏	[17.2]	(3.7)	－	石英・長石	に ぶい 褐	普通	外面・口唇部網目状熱痕文，内面赤彩・ヘラミガキ	床面	5%
30	土師器	壺	17.0	(16.1)	－	石英・長石・赤色粒子	橙	普通	折り返し口辺部外面横ナデ，頸部外面ハケ目後ヘラケズリ，体部内・外面ヘラナデ後ヘラケズリ	床面	30%
31	土師器	壺	17.2	(23.2)	－	石英・長石・赤色粒子	に ぶい 橙	普通	折り返し口辺部外面横ナデ，頸部外面ハケ目後ヘラケズリ，口辺部内面ハケ目，体部内・外面ヘラナデ	床面	20%
32	土師器	壺	[12.6]	(3.9)	－	石英・長石・赤色粒子	に ぶい 褐	普通	折り返し口辺部外面ハケ目，頸部外面ヘラケズリ，口辺部内面ハケ目	床面	5%
33	土師器	甕	[15.2]	23.5	7.0	長石	に ぶい 赤褐	普通	口辺部外面ハケ目後横ナデ，体部外面ハケ目後ヘラナデ・ヘラケズリ，口辺部内面ハケ目，体部内面・底部外面ヘラナデ	床面	60%
34	土師器	甕	[17.4]	27.2	6.3	石英・長石	に ぶい 橙	普通	口辺部外面ハケ目後横ナデ，体部外面ヘラケズリ後ヘラナデ，口辺部内面ハケ目，体部内面・底部外面ヘラナデ	床面	55%　煤付着
35	土師器	甕	[20.0]	27.9	[7.2]	石英・長石	に ぶい 赤褐	普通	内外面ヘラナデ・ヘラケズリ，底部外面ヘラケズリ	床面	30%
36	土師器	甕	24.6	(15.4)	－	石英・長石・赤色粒子	に ぶい 橙	普通	口辺部外面ヘラナデ後横ナデ，体部外面ヘラナデ，ヘラケズリ，口辺部内面ハケ目，体部内面ヘラナデ	床面	20%
37	土師器	甕	[17.0]	(14.1)	－	石英・長石・赤色粒子	に ぶい 赤褐	普通	口辺部ハケ目後横ナデ，体部外面ヘラナデ・ヘラケズリ，内面ヘラナデ	床面	10%
38	土師器	甕	[19.0]	(9.1)	－	石英・長石	に ぶい 赤褐	普通	口辺部ハケ目後横ナデ，体部外面ヘラケズリ，内面ヘラナデ後ヘラケズリ	床面	10%
39	土師器	甕	[15.6]	14.2	5.6	長石・赤色粒子	に ぶい 橙	普通	口辺部ハケ目後横ナデ，体部外面ヘラナデ後ヘラケズリ，体部内面・底部外面ヘラナデ	床面	50%

番号	種別	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特徴	出土位置	備考
Q16	剥形模造品	4.6	1.5	0.5	4.9	滑石	全面研磨調整，両面中央部稜，断面菱形	床面	
Q17	有孔円板	2.1	2.1	0.3	1.9	滑石	両面平滑，全面研磨調整，中央部穿孔，孔径0.15cm	床面	PL34
Q41	剥片	2.8	1.3	0.8	3.9	滑石	側面切断痕，表面擦痕	床面	
Q42	剥片	2.3	2.7	0.7	5.0	滑石	裏面擦痕	覆土中	
Q43	有孔円板 未成品	1.7	2.7	0.6	1.9	滑石	六角形，両面擦痕，側面切断痕，中央部穿孔，孔径0.2cm	覆土中	
Q44	磨石	15.6	14.0	6.2	2201.8	安山岩	扁平な楕円礫の両面に研磨痕	床面	PL31

番号	種別	径	厚さ	孔径	重量	材質	特徴	出土位置	備考
Q18	臼玉	0.39	0.25	0.14	0.09	滑石	両面平滑，全面研磨調整，中央部穿孔	床面	PL34
Q19	臼玉	0.42	0.16	0.14	0.08	滑石	両面平滑，全面研磨調整，中央部穿孔	床面	PL34
Q20	臼玉	0.38	0.35	0.15	0.09	滑石	両面平滑，全面研磨調整，中央部穿孔	床面	PL34
Q21	臼玉	0.44	0.25	0.15	0.09	滑石	両面平滑，全面研磨調整，中央部穿孔	床面	PL34
Q22	臼玉	0.33	0.21	0.15	0.08	滑石	両面平滑，全面研磨調整，中央部穿孔	床面	PL34
Q23	臼玉	0.39	0.21	0.15	0.08	滑石	両面平滑，全面研磨調整，中央部穿孔	床面	PL34
Q24	臼玉	0.43	0.31	0.14	0.10	滑石	両面平滑，全面研磨調整，中央部穿孔	床面	PL34
Q25	臼玉	0.41	0.24	0.15	0.09	滑石	両面平滑，全面研磨調整，中央部穿孔	床面	PL34
Q26	臼玉	0.41	0.25	0.15	0.09	滑石	両面平滑，全面研磨調整，中央部穿孔	床面	PL34
Q27	臼玉	0.34	0.23	0.15	0.08	滑石	両面平滑，全面研磨調整，中央部穿孔	床面	PL34
Q28	臼玉	0.34	0.26	0.14	0.08	滑石	両面平滑，全面研磨調整，中央部穿孔	床面	PL34
Q29	臼玉	0.34	0.34	0.14	0.09	滑石	両面平滑，全面研磨調整，中央部穿孔	床面	PL34
Q30	臼玉	0.42	0.28	0.14	0.10	滑石	両面平滑，全面研磨調整，中央部穿孔	床面	PL34
Q31	臼玉	0.42	0.36	0.15	0.10	滑石	両面平滑，全面研磨調整，中央部穿孔	床面	PL34
Q32	臼玉	0.42	0.31	0.15	0.10	滑石	両面平滑，全面研磨調整，中央部穿孔	床面	PL34
Q33	臼玉	0.41	0.17	0.14	0.08	滑石	両面平滑，全面研磨調整，中央部穿孔	床面	PL34
Q34	臼玉	0.43	0.33	0.15	0.09	滑石	両面平滑，全面研磨調整，中央部穿孔	床面	PL34
Q35	臼玉	0.39	0.33	0.13	0.09	滑石	両面平滑，全面研磨調整，中央部穿孔	床面	PL34
Q36	臼玉	0.43	0.23	0.15	0.08	滑石	両面平滑，全面研磨調整，中央部穿孔	床面	PL34
Q37	臼玉	0.36	0.29	0.15	0.09	滑石	両面平滑，全面研磨調整，中央部穿孔	床面	PL34
Q38	臼玉	0.42	0.31	0.16	0.09	滑石	両面平滑，全面研磨調整，中央部穿孔	床面	PL34
Q39	臼玉	0.40	0.27	0.13	0.09	滑石	両面平滑，全面研磨調整，中央部穿孔	床面	PL34
Q40	臼玉	0.43	0.20	0.15	0.08	滑石	両面平滑，全面研磨調整，中央部穿孔	床面	PL34
G1	小玉	0.4	0.4	0.13	0.1	水色ガラス	両面研磨調整，側面擦痕，中央部穿孔	床面	PL34
G2	小玉	0.4	0.5	0.21	0.2	青色ガラス	擦痕，中央部穿孔	床面	PL34

第７号住居跡（第35図）

位置　調査区中央部のC4g7区で，標高24.0mの台地平坦部に位置している。

確認状況　全体的にトレンチャーの撹乱を受けており，部分的に壁や床及び内部施設を確認した。遺存状況は極めて不良である。

形状　長軸5.52m，短軸4.57mの長方形と推定される。壁は高さ８～10cmで，ほぼ直立している。主軸方向はN－31°－Wである。

床　ほぼ平坦である。確認した範囲では軟弱で，炉の周囲が踏み固められている。

ピット　１か所。深さは14cmで性格は不明である。その他は撹乱により不明である。

炉　地床炉で床面から10cmほど掘りくぼめられ，中央部の北側の壁寄りに偏って位置している。撹乱により詳細は不明で，覆土は単一層である。

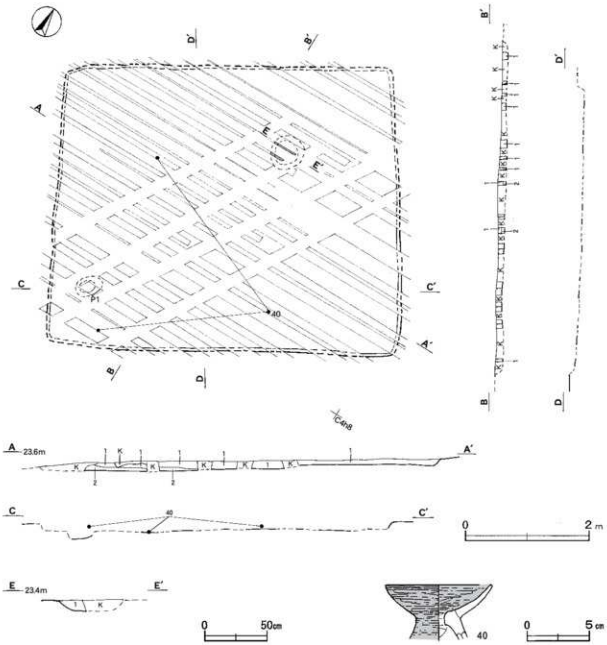
炉土層解説
1　褐　色　焼土ブロック少量，ローム粒子・炭化粒子微量

覆土　２層からなる。撹乱により，堆積状況は不明である。

土層解説
1　褐　色　ロームブロック中量　　2　黒 褐 色　ロームブロック少量

遺物出土状況　土師器片85点（器台６，坩２，高坏５，甕41，細片31）が東コーナー部の覆土下層から床面にかけて廃棄されたような状況で出土している。また，混入した縄文土器片１点も出土している。

所見　時期は，出土遺物の様相や，炉が中央部の北側の壁寄りに偏っていることから，前期後半～中期前半と推定される。



第35図　第７号住居跡・出土遺物実測図

第７号住居跡出土遺物観察表（第35図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
40	土師器	器台	8.5	(4.3)	－	石英・赤色粒子	にぶい赤褐	普通	脚受部赤彩・ヘラミガキ，脚部外面ヘラミガキ	中層～床面	40%

第８号住居跡（第36～38図）

位置　調査区東部のＣ５g9 区で，標高23.7ｍの台地平坦部に位置している。

確認状況　全体的にトレンチャーの撹乱を受けており，部分的に壁や床及び内部施設を確認した。遺存状況は極めて不良である。

形状　長軸4.47ｍ，短軸4.02ｍの長方形である。壁は高さ５～18㎝で，外傾して立ち上がっている。主軸方向

はN－49°－Wである。

床　ほぼ平坦である。壁際を除いて踏み固められている。壁際の軟弱な範囲は，南西壁側で約1mと他所よりも広く，その境界は明瞭である。南西壁側の床には，敷物などが存在していた可能性が考えられる。

貯蔵穴　底面はほぼ平坦で，深さは50cmである。覆土はローム ブロックを中量含む褐色土で，埋め戻されている。炉と対峙して位置しているが，覆土の様相と形態から貯蔵穴と判断した。

炉　地床炉で床面から8cmほど掘りくぼめられ，中央部の北側に位置している。炉床は火熱により赤変硬化している。覆土は2層からなる。

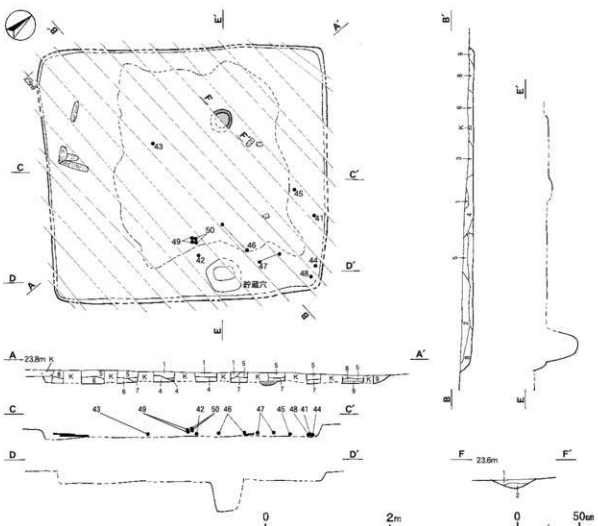
炉土層解説

1　黒 褐 色　ロームブロック・焼土ブロック・炭化物微量
2　暗赤褐色　焼土ブロック中量，ロームブロック・炭化粒子微量

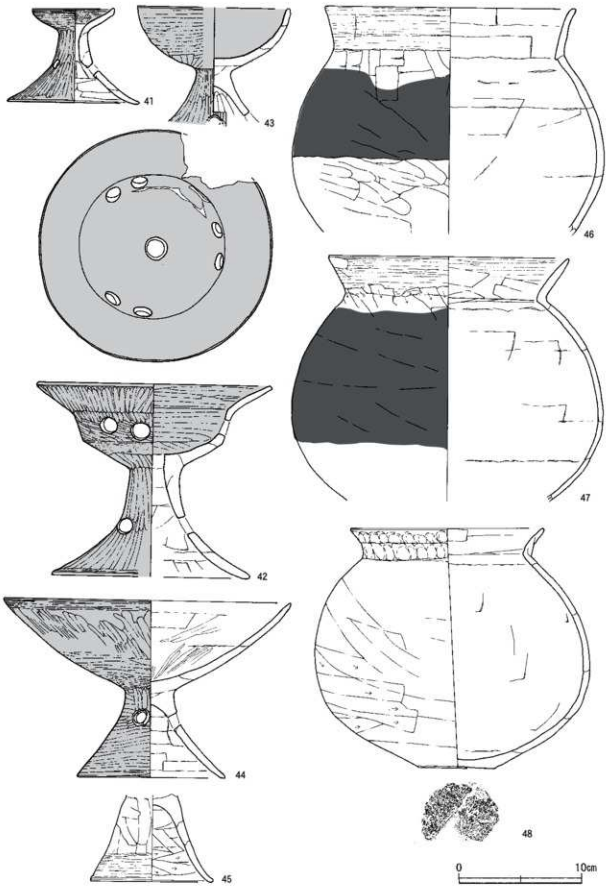
覆土　9層からなる。ロームブロック・焼土ブロック・炭化物を少量含む暗褐色及び黒褐色土を基調としている。第6層は焼土ブロックを中量含み，暗赤褐色を呈する。覆土は削平により20cmほどと薄く，堆積状況は不明である。

土層解説

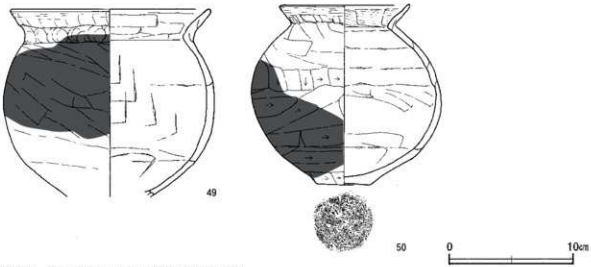
1　暗 褐 色　ロームブロック・焼土粒子・炭化粒子微量
2　暗 褐 色　ロームブロック・焼土粒子・炭化物微量
3　極暗褐色　ロームブロック・焼土ブロック・炭化物少量
4　黒 褐 色　ロームブロック・焼土粒子・炭化物微量
5　極暗褐色　ロームブロック中量，焼土ブロック・炭化物微量
6　暗赤褐色　焼土ブロック中量，ロームブロック・炭化物微量
7　黒 褐 色　ロームブロック少量，焼土フロック・炭化物微量
8　暗 褐 色　ロームブロック少量，焼土粒子・炭化粒子微量
9　褐　　色　ロームブロック中量，焼土粒子・炭化粒子微量



第36図　第8号住居跡実測図



第37図　第８号住居跡出土遺物実測図（１）



第38図　第８号住居跡出土遺物実測図（２）

遺物出土状況　土師器片270点（器台12，高坏14，壺２，甕202，細片40）が東コーナー部付近を中心として，覆土下層から床面にかけて廃棄されたような状態で出土している。ほぼ完形のものや大形破片の出土が目立っている。炭化材は角材と推定され，覆土下層から床面にかけて散在した状態で出土している。

所見　住居形態の特徴は，炉を通る主軸が，竪穴の中心軸よりも北東に60cmほど偏っていることである。内部施設のあり方は異なるが，第25・26・28・32・35号住居跡にも見られる。これは，炉を中心とした活動空間が北東部に偏っており，南西壁側は床に敷物などが存在していた可能性があることから寝間と考えられ，内部の使用目的を示唆していると推測される。また，炉と対峙した位置に貯蔵穴を設ける住居形態は，第33・34号住居跡に類似している。時期は出土遺物の様相などから，前期中葉（４世紀初頭～４世紀前葉）と考えられる。

第８号住居跡出土遺物観察表(第37･38図)

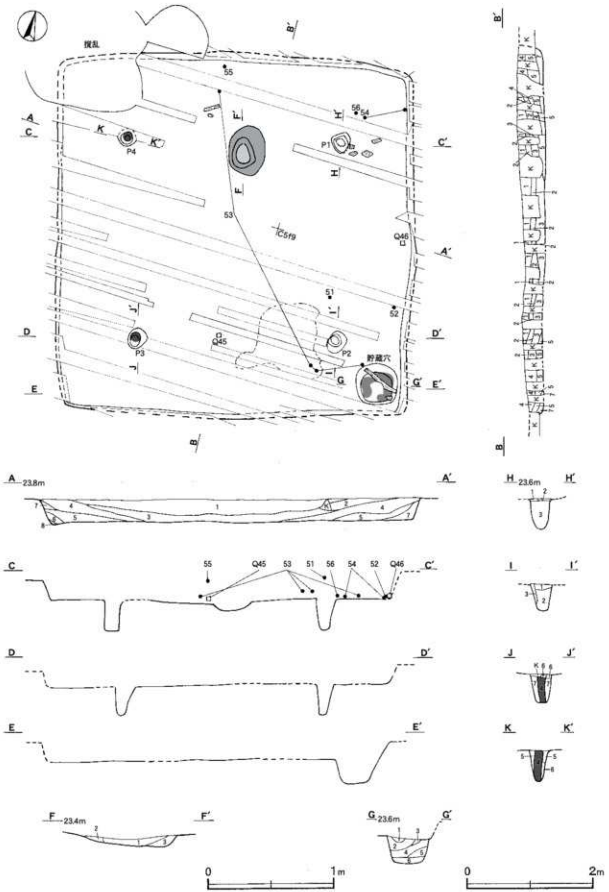
番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
41	土師器	器台	6.5	7.7	10.7	石英・長石	赤褐	普通	器受部赤彩，ヘラミガキ後ナデ，中央部穿孔，脚部外面赤彩，ヘラミガキ，内面ヘラナデ，３重	床面	75%　PL25
42	土師器	器台	18.8	15.5	[15.8]	石英	橙	普通	器受部内・外面赤彩，ヘラミガキ，体部２対３小孔に各６要，中央部穿孔，脚部外面赤彩・ヘラミガキ，内面ヘラナデ，３重	床面	70%
43	土師器	高坏	(12.2)	(9.4)	－	石英・長石	赤	普通	坏部赤彩，ヘラミガキ，脚部外面赤彩・ヘラミガキ，内面ヘラナデ，３重	下層	30%　PL27 内面摩滅
44	土師器	高坏	23.3	14.3	12.0	石英・長石	明赤褐	普通	坏部外面赤彩・横ナデ・ヘラミガキ，内面ヘラナデ後ヘラミガキ，脚部外面赤彩・ヘラミガキ，内面ヘラナデ，３重	床面	45%
45	土師器	高坏	－	(6.8)	9.8	石英・長石	橙	普通	外面ヘラナデ・横ナデ，内面ヘラナデ後ヘラケズリ	下層	30%
46	土師器	甕	20.2	(18.2)	－	石英	にぶい褐	普通	口辺部外面ヘラナデ後横ナデ，体部外面ヘラナデ，内面ヘラナデ	下層	30%　煤付着
47	土師器	甕	19.4	(19.7)	－	石英・長石・赤色粒子	褐	普通	口辺部外面横ナデ・ヘラケズリ，体部ヘラナデ，口辺部内面ヘラナデ後横ナデ	下層	40%　煤付着
48	土師器	甕	15.7	19.4	6.0	石英・長石・小礫	にぶい橙	普通	口辺部外面輪積痕・指頭圧痕，体部外面ヘラナデ・ヘラケズリ，内面・底部外面ヘラナデ	床面	50%
49	土師器	甕	16.2	(15.1)	－	石英・赤色粒子	灰褐	普通	口辺部外面輪積痕・指頭圧痕，体部ヘラナデ	中層～下層	70%　PL29 煤付着
50	土師器	甕	10.6	14.5	4.6	石英・長石・赤色粒子	にぶい橙	普通	口辺部外面ヘラナデ後横ナデ，体部外面ヘラナデ・ヘラケズリ，口辺部内面ハケ目，体部内面・底部外面ヘラナデ	中層～下層	90%　PL29 煤付着

第９号住居跡（第39･40図）

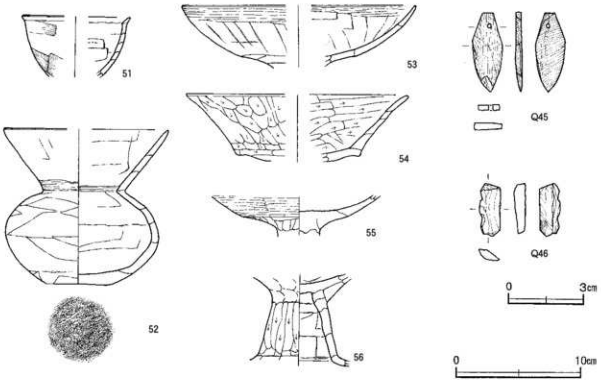
位置　調査区東部のＣ５ｆ８区で，標高23.8ｍの台地平坦部に位置している。

確認状況　全体的にトレンチャーの撹乱を受けており，壁は大半が撹乱されているが，床及び内部施設はほぼ全容を確認できた。遺存状況は不良である。

形状　長軸5.88ｍ，短軸5.71ｍの方形である。壁は高さ22～30cmで，外傾して立ち上がっている。主軸方向はＮ－16°－Ｗである。



第39図　第９号住居跡実測図



第40図　第９号住居跡出土遺物実測図

床　ほぼ平坦で，中央部がわずかにくぼんでいる。全体的に軟弱で，Ｐ２の西側付近に硬化面が見られる。

ピット　４か所。Ｐ１～Ｐ４は配置から主柱穴で，深さは41～54cmである。覆土は13層からなり，Ｐ３・Ｐ４で確認された第４層は，締まりの弱い黒褐色及び暗褐色土で，柱痕跡と考えられる。Ｐ１・Ｐ２では柱が抜き取られたと考えられ，第５～７層は，ロームブロックを中量含む褐色土で，埋土である。

ピット土層解説

1　黒 褐 色　ロームブロック・炭化粒子微量
2　褐　　色　ロームブロック中量，炭化粒子微量
3　褐　　色　ロームブロック多量
4　黒 褐 色　ロームブロック・炭化物微量
5　褐　　色　ロームブロック中量，炭化粒子微量
6　暗 褐 色　ロームブロック少量，炭化物少量
7　褐　　色　ロームブロック少量

貯蔵穴　底面はほぼ平坦で，深さは41cmである。内部から黄褐色粘土塊と角材状の炭化材が出土している。覆土は６層からなり，第１～３層は粘土ブロックを含まない黒褐色及び褐色土で，土質及び堆積状況から，自然堆積と考えられる。第５層が黄褐色粘土塊で，第６層上面から出土している。

貯蔵穴土層解説

1　黒 褐 色　ロームブロック・炭化物少量
2　褐　　色　ロームブロック少量，炭化粒子微量
3　褐　　色　ロームブロック微量
4　黒 褐 色　ロームブロック・粘土粒子・炭化材微量
5　にぶい黄褐色　粘土ブロック多量
6　暗 褐 色　ロームブロック少量，粘土粒子微量

炉　地床炉で床面から13cmほど掘りくぼめられ，北壁中央部寄りに偏って位置している。炉床は火熱により赤変硬化している。覆土は３層からなる。

炉土層解説

1　褐　　色　ロームブロック・焼土ブロック・炭化物微量
2　褐　　色　ロームブロック・焼土ブロック・炭化粒子微量
3　褐　　色　ローム粒子微量

覆土　８層からなる。第１～４層はロームブロックや焼土ブロックを少量含む暗褐色及び黒褐色土を基調とし，第５～８層はロームブロックを少量含む褐色土で，壁際に三角形状に堆積している。土質及び堆積状況から，自然堆積と考えられる。

土層解説

1　黒 褐 色　ロームブロック・焼土粒子・炭化粒子微量
2　黒 褐 色　ロームブロック・焼土ブロック・炭化物微量
3　暗 褐 色　ロームブロック少量，焼土ブロック・炭化物微量
4　暗 褐 色　ロームブロック中量，焼土ブロック・炭化物少量
5　褐　　色　ロームブロック微量
6　褐　　色　ロームブロック少量，炭化粒子微量
7　褐　　色　ロームブロック中量，炭化粒子微量
8　暗 褐 色　ロームブロック少量

遺物出土状況　土師器片162点（椀１，器台１，坩18，高坏25，壺２，甕115），滑石製模造品２点（剣形品，剥片）が東部の両コーナー部付近を中心に，覆土下層から床面にかけて廃棄されたような状態で出土している。ほとんどは破片であり，ほぼ完形の52とＱ46は東壁直下の床面，Ｑ45は中央部の南側の床面からそれぞれ出土している。炭化材は覆土下層から床面にかけて散在した状態で検出され，貯蔵穴からも，黄褐色粘土塊と共に角材状の炭化材が出土している。それらの性格は不明であり，上屋などが焼失した痕跡も見られないことから，周囲から廃棄されたものと推測される。

所見　炉は北壁の中央部寄りに偏り，コーナー部には貯蔵穴を設け，出入口施設に関するピットがないなど住居形態に特徴が見られ，第６・14・ 22・23号住居跡に類似している。時期は，出土遺物の様相などから，中期前葉（５世紀前葉）と考えられる。

第９号住居跡出土遺物観察表（第40図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
51	土師器	椀	[10.4]	(4.9)	－	石英・長石	にぶい黄橙	普通	外面ハケ目後ナデ，内面ヘラナデ	上層	5%
52	土師器	坩	[10.4]	12.5	5.0	石英・長石・白色粒子	橙	普通	内・外面ヘラナデ，底部外面ナデ	床面	90%　PL26
53	土師器	高坏	[19.0]	(5.0)	－	石英・長石・赤色粒子	黄褐	普通	内・外面ヘラナデ後横ナデ	中層	30%
54	土師器	高坏	[18.0]	(5.2)	－	長石・赤色粒子	にぶい橙	普通	内・外面ヘラケズリ	床面	10%
55	土師器	高坏	－	(3.2)	－	石英・長石・雲母	明赤褐	普通	内・外面赤彩，外面ヘラミガキ	上層	10% 内面摩滅
56	土師器	高坏	－	(7.3)	－	石英・長石・赤色粒子	にぶい橙	普通	坏部内・外面ヘラナデ，脚部外面ヘラケズリ，内面ヘラナデ	下層	10%

番号	種別	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特徴	出土位置	備考
Q45	剣形模造品	3.2	1.2	0.3	1.9	滑石	両面平滑，全面研磨調整，上部穿孔，孔径0.15cm	床面	PL34
Q46	剥片	2.1	0.9	0.5	1.0	滑石	裏面擦痕	床面	

第10号住居跡（第41図）

位置　調査区東部のＣ5f2区で，標高23.8mの台地平坦部に位置している。

確認状況　全体的にトレンチャーの撹乱を受け，特に西部は完全に削平されている。遺存状況は極めて不良である。

形状　長軸5.78m，短軸4.82mの長方形と推定される。遺存状況が比較的良好な北東壁上部には，テラス状の平坦部がめぐっており，階段状を呈している。壁は高さ８～20cmで，北東壁は外傾して立ち上がり，他所はほぼ直立している。主軸方向はＮ－33°－Ｗである。

床　ほぼ平坦で，北コーナー部がわずかにくぼんでいる。確認した範囲では極めて軟弱である。

ピット　４か所。Ｐ１～Ｐ４は配置から主柱穴で，深さは40～49cmである。他は撹乱により不明である。覆土は６層からなり，Ｐ１・Ｐ２で確認された第１層は，締まりの弱い暗褐色土で，柱痕跡と考えられる。Ｐ３・Ｐ４では柱が抜き取られたと考えられ，第２・３層は，ロームブロックを中量含む褐色土で，埋土である。

ピット土層解説

1　暗褐色　ロームブロック少量，炭化粒子微量
2　褐　色　ロームブロック少量
3　褐　色　ロームブロック少量，炭化粒子微量
4　褐　色　ロームブロック少量，炭化物微量
5　暗褐色　ロームブロック少量
6　褐　色　ロームブロック中量，炭化粒子微量

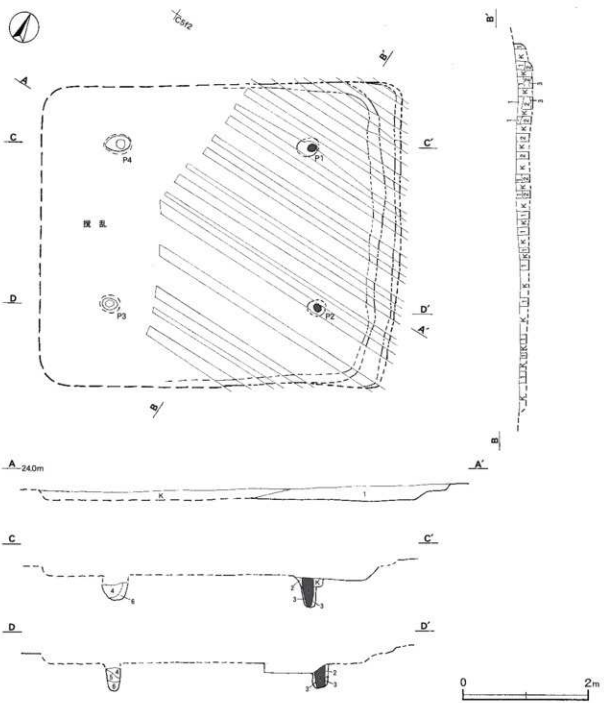
覆土　３層からなる。撹乱により，堆積状況は不明である。

土層解説

1　褐　色　ロームブロック少量，炭化粒子微量
2　黒褐色　ロームブロック微量
3　褐　色　ローム粒子中量

遺物出土状況　土師器片３点（坩１，甕２）が第１層から出土している。いずれも細片のため，図示できない。

所見　遺存状況が不良で，詳細に形状や時期を検討することができない。炉や硬化面が見られず，居住した痕跡が著しく希薄である。Ｐ１・Ｐ２で柱痕跡が確認されていることから，上屋が存在したことは間違いないが，使用された期間は極めて短いと推測される。また，北東壁上部にテラス状の平坦部がめぐるなど，通常の住居形態と異なっていることも併せて，居住とは別の機能も考えられるが，詳細は不明である。時期は，出土遺物の様相などから，前期と推定される。



第41図　第10号住居跡実測図

第11号住居跡（第42・43図）

位置　調査区西部のC2g3区で，標高24.1mの台地平坦部に位置している。

確認状況　全体的にトレンチャーの撹乱を受けており，部分的に壁や床及び内部施設を確認した。遺存状況は極めて不良である。

形状　長軸3.78m，短軸3.52mの方形と推定される。壁は高さ45～56cmで，外傾して立ち上がっている。主軸方向はN－15°－Wである。

床　ほぼ平坦である。確認した範囲では軟弱で，南部のＰ５の周囲が踏み固められている。

ピット　６か所。Ｐ１～Ｐ４は配置から主柱穴で，深さは48～61cmである。覆土はローム ブロックを少量含む暗褐色土である。Ｐ５は炉と対峙して位置することから出入り口施設に関連すると考えられ，深さは32cmである。Ｐ６は深さは16cmで，性格は不明である。

炉　地床炉で床面から11cmほど掘りくぼめられ，中央部の北側で主柱穴の内側に位置している。炉床は火熱により赤変硬化している。覆土は２層からなる。

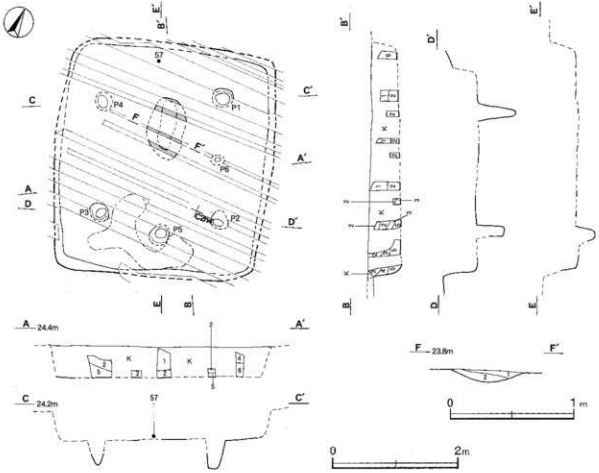
炉土層解説

1　暗 赤 色　焼土ブロック中量，ロームブロック・炭化物微量　　2　暗 赤 色　焼土ブロック中量，ロームブロック・炭化物少量

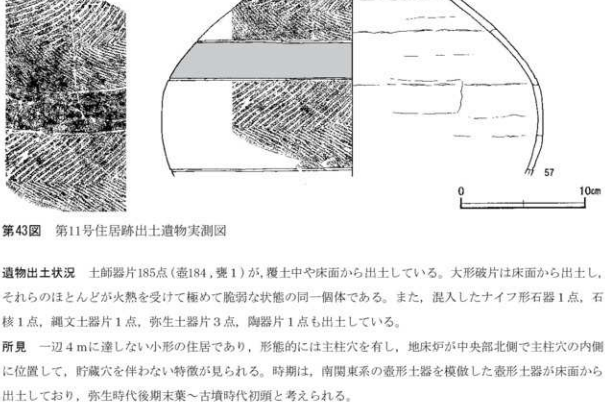
覆土　６層からなる。第１・２層はロームブロックを微量含む黒褐色土で，第３～６層はロームブロックを少量含む褐色土を基調とし，壁際に三角形状に堆積している。土質及び堆積状況から，自然堆積と考えられる。

土層解説

1　黒 褐 色　ロームブロック・炭化粒子微量
2　黒 褐 色　ロームブロック・炭化物微量
3　褐　　色　ロームブロック少量
4　暗 褐 色　ロームブロック少量
5　褐　　色　ロームブロック・炭化材少量
6　褐　　色　ロームブロック少量，焼土粒子微量



第42図　第11号住居跡実測図



第43図　第11号住居跡出土遺物実測図

遺物出土状況　土師器片185点（壺184，甕1）が，覆土中や床面から出土している。大形破片は床面から出土し，それらのほとんどが火熱を受けて極めて脆弱な状態の同一個体である。また，混入したナイフ形石器1点，石核1点，縄文土器片1点，弥生土器片3点，陶器片1点も出土している。

所見　一辺4mに達しない小形の住居であり，形態的には主柱穴を有し，地床炉が中央部北側で主柱穴の内側に位置して，貯蔵穴を伴わない特徴が見られる。時期は，南関東系の壺形土器を模倣した壺形土器が床面から出土しており，弥生時代後期末葉～古墳時代初頭と考えられる。

第11号住居跡出土遺物観察表（第43図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
57	弥生土器	壺	－	(17.5)	－	石英・長石・小礫	にぶい橙	普通	外面横位沈線区画・赤彩，区画内羽状構成の付加条（一種）縄文，内面ヘラナデ	床面	10%　PL30

第14号住居跡（第44～47図）

位置　調査区中央部のC3i2区で，標高24.2mの台地平坦部に位置している。

重複関係　第2号土坑に中央部を掘り込まれている。遺存状況はほぼ良好である。

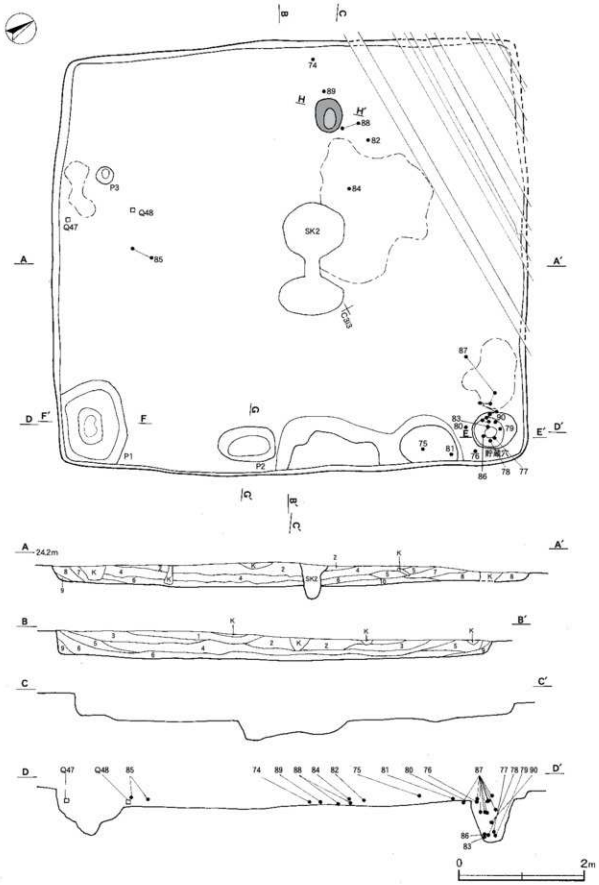
形状　長軸7.55m，短軸6.92mの方形である。壁は高さ5～38cmで，外傾して立ち上がっている。主軸方向はN－62°－Wである。

床　中央部が緩やかにくぼみ，周囲はほぼ平坦である。全体的に軟弱で，炉の東側や貯蔵穴と考えられるP1の西側など，部分的に踏み固められている。東壁の中央部の北側には，壁直下から幅0.4～0.8m，長さ3mにわたって高さ約10cmの土壇状の高まりが見られ，上面はほぼ平坦である。炉と対峙して位置することから，出入口施設に関連すると考えられる。

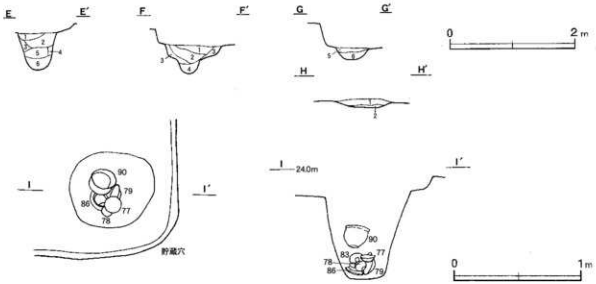
ピット　3か所。P1は，底面の中央部がくぼみ，断面は漏斗状を呈して，深さは50cmである。覆土は4層からなり，上層及び下層はロームブロックを少量含む黒褐色及び暗褐色土であり，中層はロームブロック中量含む褐色土で，土質及び堆積状況から埋め戻されたと考えられる。性格は貯蔵穴の可能性が高い。P2・P3は性格不明で，深さはP2が26cm，P3が13cmである。

ピット土層解説

1　黒褐色　ロームブロック・焼土ブロック・炭化物微量
2　暗褐色　ロームブロック少量，焼土粒子・炭化粒子微量
3　褐　色　ロームブロック中量，焼土粒子・炭化粒子少量
4　暗褐色　ロームブロック少量，焼土粒子微量
5　暗褐色　ロームブロック・焼土ブロック・炭化物微量
6　暗褐色　ロームブロック少量，炭化粒子微量



第44図　第14号住居跡実測図（1）



第45図　第14号住居跡実測図（2）

貯蔵穴　底面はほぼ平坦で，深さは67㎝である。覆土は6層からなり，ロームブロックを微量含む暗褐色土を基調とし，土質及び堆積状況から自然堆積と考えられる。

貯蔵穴土層解説

1　暗褐色　ロームブロック・炭化物少量，焼土ブロック微量
2　暗褐色　ロームブロック少量，炭化粒子微量
3　褐　色　ロームブロック中量，炭化粒子微量
4　極暗褐色　炭化物少量，ロームブロック微量
5　暗褐色　ロームブロック・焼土粒子・炭化粒子微量
6　暗褐色　ロームブロック少量，焼土粒子・炭化粒子微量

炉　地床炉で床面から8㎝ほど掘りくぼめられ，西壁の中央部寄りに偏って位置している。炉床は火熱により赤変硬化している。覆土は2層からなる。

炉土層解説

1　暗赤褐色　焼土ブロック中量，ロームブロック・炭化物微量
2　赤　色　焼土ブロック中量，ロームブロック・炭化物微量

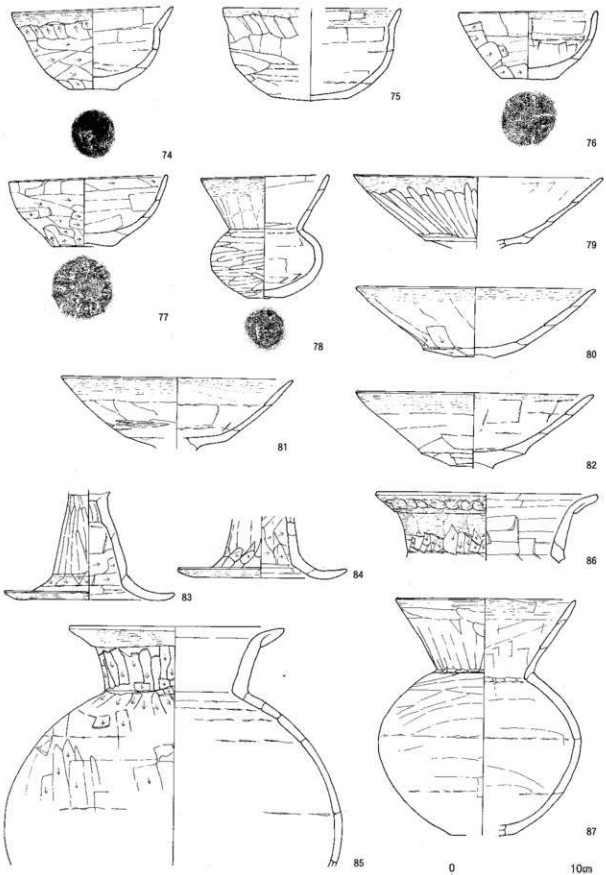
覆土　10層からなる。第1～6層はロームブロックや焼土粒子を微量含む暗褐色及び黒褐色土を基調とし，第7～10層はロームブロックを少量含む暗褐色及び褐色土で，壁際を中心に堆積している。土質及び堆積状況から，自然堆積と考えられる。

土層解説

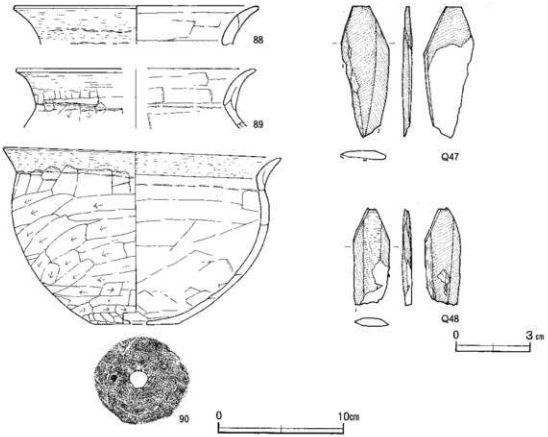
1　極暗褐色　ロームブロック・焼土粒子・炭化粒子微量
2　黒褐色　ローム粒子・焼土粒子・炭化物微量
3　極暗褐色　ロームブロック少量，焼土粒子・炭化粒子微量
4　黒褐色　ロームブロック・炭化物少量，焼土粒子微量
5　暗褐色　ロームブロック・焼土粒子・炭化粒子微量
6　暗褐色　ロームブロック・焼土ブロック・炭化物微量
7　暗褐色　ロームブロック少量
8　暗褐色　ロームブロック少量，炭化物微量
9　褐　色　ロームブロック中量
10　褐　色　ロームブロック中量，炭化粒子微量

遺物出土状況　土師器片497点（椀23，坩46，高坏57，壺49，甕321，甑1），滑石製模造品2点（剣形品）が廃棄されたような状況で覆土上層から中層にかけて出土している。覆土下層から床面にかけては，炉及びP1の周辺にまとまりが見られ，南壁の中央部寄りの覆土下層から2点の滑石製の剣形模造品が出土している。貯蔵穴の覆土下層から底面にかけては，高坏や坩，壺などの大形破片が集積されており，その上位からは77・90がほぼ正位の状態で出土している。また，混入した弥生土器片19点も出土している。

所見　炉は西壁の中央部寄りに偏って位置し，コーナー部に貯蔵穴を設け，炉と対峙した位置に出入り口施設に関連する土壇状の高まりを有するなど住居形態に特徴が見られ，第6・9・22・23号住居跡に類似している。土師器の大形破片が，貯蔵穴の覆土下層から底面に集積されて出土し，覆土を挟んだ上位から甑と椀がほぼ正位の状態で出土している。貯蔵穴は自然に埋没したと考えられることから，貯蔵穴の周囲に置かれていたものが転落したと推測されるが，下位に大形破片が集積された意味は不明である。覆土下層から出土した2点の滑石製剣形模造品は，周囲からの流入もしくは廃棄されたものと考えられる。時期は，出土遺物の様相などから，中期前葉（5世紀前葉）と考えられる。



第46図　第14号住居跡出土遺物実測図（1）



第47図　第14号住居跡出土遺物実測図（２）

第14号住居跡出土遺物観察表（第46・47図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
74	土師器	椀	13.0	6.7	3.9	石英・長石・雲母	にぶい橙	普通	口辺部横ナデ，体部外面ヘラケズリ，内面・底部外面ヘラナデ	下層	90%　PL28
75	土師器	椀	[14.4]	7.5	－	石英・赤色粒子	橙	普通	口辺部外面ヘラナデ後横ナデ，体部外面ヘラナデ，内面ヘラナデ	下層	30%　PL28
76	土師器	椀	11.0	5.5	4.4	石英・赤色粒子	にぶい橙	普通	口辺部外面ヘラナデ後ヘラケズリ，内面横ナデ後ヘラナデ，底部ヘラケズリ	下層	75%　PL28
77	土師器	坏	12.7	5.8	5.0	石英・長石・雲母	にぶい黄橙	普通	内・外面ヘラナデ後ヘラケズリ，底部外面ナデ	貯蔵穴	95%　PL28
78	土師器	坩	10.2	10.0	3.0	石英・赤色粒子	にぶい橙	普通	口辺部外面ヘラナデ後横ナデ，体部外面ヘラミガキ，内面ヘラナデ，底部外面ヘラケズリ	貯蔵穴	95%　PL26
79	土師器	高坏	20.1	(5.8)	－	石英・長石・赤色粒子	橙	普通	外面横ナデ後ヘラナデ，内面ヘラナデ	貯蔵穴	60%　内面摩滅
80	土師器	高坏	19.3	(6.5)	－	石英・赤色粒子	にぶい黄橙	普通	口辺部ヘラナデ後ヘラケズリ・横ナデ，内面横ナデ	下層	40%　内面摩滅
81	土師器	高坏	18.8	(5.7)	－	石英・長石・赤色粒子	橙	普通	内・外面ヘラナデ後横ナデ	下層	40%　転用砥具
82	土師器	高坏	19.2	(5.6)	－	石英・長石・白色粒子	にぶい橙	普通	坏部外面下端ヘラケズリ，内面ヘラナデ後横ナデ	下層	40%　転用砥具
83	土師器	高坏	－	(8.7)	13.8	石英・赤色粒子	橙	普通	外面ヘラナデ・ヘラケズリ・横ナデ，内面ヘラケズリ・ヘラナデ	貯蔵穴	45%
84	土師器	高坏	－	(4.9)	13.6	石英・長石・赤色粒子	橙	普通	外面ヘラナデ・ヘラケズリ・横ナデ，内面ヘラケズリ・ヘラナデ	下層	20%
85	土師器	壺	17.5	(19.1)	－	石英・長石・赤色粒子	にぶい橙	普通	折り返し口辺部横ナデ，頸部・体部外面ヘラケズリ	下層	25%　内面摩滅
86	土師器	壺	17.7	(5.4)	－	石英・長石・白色粒子	にぶい橙	普通	折り返し口辺部指頭圧痕後横ナデ，頸部外面ナデ後ヘラケズリ，内面ヘラナデ	貯蔵穴	15%
87	土師器	小形壺	14.4	19.0	(5.0)	石英・長石	赤橙	普通	口辺部ヘラナデ後横ナデ，体部ヘラナデ	下層	60%
88	土師器	甕	19.8	(3.2)	－	石英・長石・赤色粒子	にぶい橙	普通	体外面横ナデ，内面ヘラナデ	下層	5%
89	土師器	甕	[19.4]	(4.8)	－	石英・長石	にぶい橙	普通	口辺部ヘラナデ後横ナデ，体部外面ヘラケズリ，内面ヘラナデ	下層	5%
90	土師器	甑	22.6	14.2	7.0	石英・長石	明赤褐	普通	口辺部横ナデ，体部ヘラナデ後ヘラケズリ，内面ヘラナデ，底部外面ヘラケズリ	貯蔵穴	100%　単孔　PL29

番号	種別	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特徴	出土位置	備考
Q47	剣形模造品	(5.3)	1.9	0.40	(4.6)	滑石	片面両刃状，全面研磨調整，欠損	下層	PL34
Q48	剣形模造品	(4.0)	1.4	0.35	(2.9)	滑石	両面両刃状，全面研磨調整，断面六角形，欠損	下層	PL34

第18号住居跡（第48・49図）

位置　調査区中央部のC４j2区で，標高23.8mの台地平坦部に位置している。

確認状況　全体的にトレンチャーの撹乱を受けており，部分的に壁や床及び内部施設を確認した。遺存状況は極めて不良である。

形状　長軸3.76m，短軸3.52mの方形である。壁は高さ18～28cmで，外傾して立ち上がっている。主軸方向はN－50°－Wである。

床　ほぼ平坦である。壁際は軟弱で，中央部や炉の周囲が踏み固められている。

ピット　撹乱により不明である。

炉　地床炉で床面から６cmほど掘りくぼめられ，中央部の北側に位置している。炉床は火熱により赤変硬化している。覆土は単一層である。

炉土層解説

1　にぶい褐色　焼土ブロック中量，ロームブロック・炭化物微量

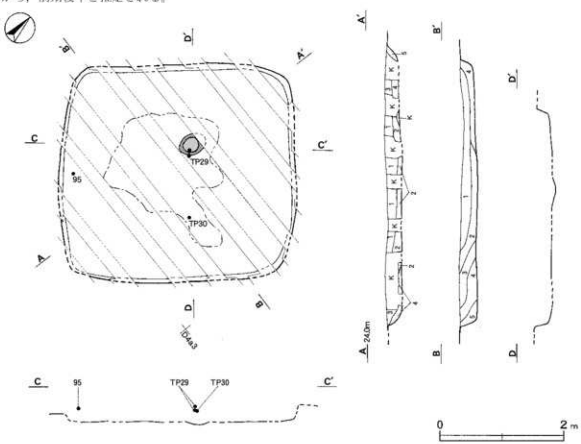
覆土　５層からなる。含有物の少ない暗褐色及び黒褐色土を基調とし，土質及び堆積状況から自然堆積と考えられる。

土層解説

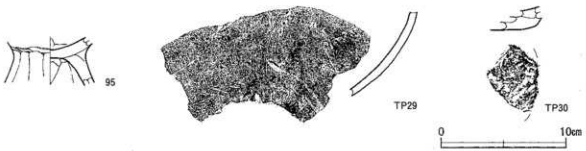
1　黒 褐 色　ロームブロック・焼土粒子・炭化粒子微量
2　黒 褐 色　ローム粒子・焼土粒子・炭化物微量
3　暗 褐 色　ロームブロック少量，焼土粒子・炭化物微量
4　黒 褐 色　ロームブロック・炭化物微量
5　暗 褐 色　ロームブロック少量，炭化粒子微量

遺物出土状況　土師器片103点（壺22，甕81）が覆土下層から床面にかけて散在した状態で出土している。いずれも破片で，廃棄されたものや周囲から流入したものと考えられる。

所見　一辺４mに達しない小形の住居である。時期は，出土遺物の様相や炉が中央部の北側に位置していることから，前期後半と推定される。



第48図　第18号住居跡実測図



第49図　第18号住居跡出土遺物実測図

第18号住居跡出土遺物観察表(第49図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
95	土師器	台付甕	-	(3.7)	-	長石・赤色粒子	橙	普通	ヘラナデ	中層	5%
TP29	土師器	甕	-	(6.6)	-	石英・長石・雲母	橙	普通	体部外面にハケ目を施す　内面ヘラナデ	中層	
TP30	土師器	甕	-	(1.9)	-	石英・長石	明赤褐	普通	底部外面ナデ	中層～下層	輻痕

第19号住居跡（第50図）

位置　調査区南部のD4b3区で，標高23.8mの台地平坦部に位置している。

確認状況　全体的にトレンチャーの撹乱を受けており，部分的に壁や床及び内部施設を確認した。遺存状況は不良である。

形状　長軸4.14m，短軸4.12mの方形である。壁は高さ13～18cmで，外傾して立ち上がっている。主軸方向はN－57°－Wである。

床　ほぼ平坦である。壁際は軟弱で，中央部や炉の周囲が踏み固められている。中央部には火熱により赤変した範囲が見られる。

ピット　撹乱により不明である。

炉　地床炉で床面から7cmほど掘りくぼめられ，北西壁の中央部寄りに偏って位置している。炉床は火熱により赤変硬化し，覆土は単一層である。

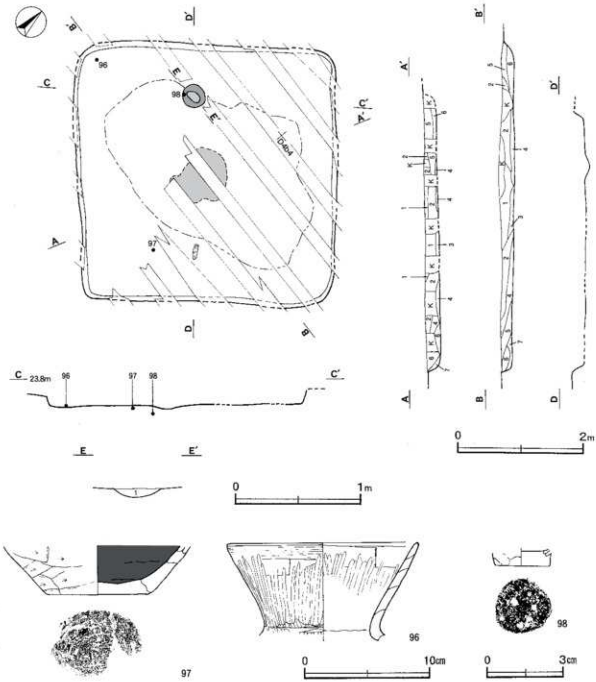
炉土層解説
1　暗赤褐色　焼土ブロック中量，炭化物少量，ローム粒子微量

覆土　7層からなる。含有物の少ない暗褐色及び黒褐色土を基調としている。土質及び堆積状況から，自然堆積と考えられる。

土層解説
1　黒褐色　ロームブロック・炭化粒子微量
2　暗褐色　ロームブロック少量，焼土粒子・炭化粒子微量
3　黒褐色　ローム粒子・焼土粒子・炭化物微量
4　黒褐色　ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子微量
5　暗褐色　ロームブロック・炭化粒子微量
6　暗褐色　ロームブロック少量，炭化粒子微量
7　暗褐色　焼土ブロック・炭化物少量，ローム粒子微量

遺物出土状況　土師器片38点（器台3，壺30，甕4，ミニチュア土器1）が覆土下層から床面にかけて散在した状態で出土している。いずれも破片で，廃棄されたものや周囲から流入したものと考えられる。

所見　床の赤変部分については，炉的な性格がうかがえる。住居形態では，内部施設のあり方が異なるものの，炉が壁の中央部寄りに偏っていることや，床の赤変部分が存在していることなど，第22・24・27号住居跡に類似している。時期は，出土遺物の様相などから，前期後半と推定される。



第50図　第19号住居跡・出土遺物実測図

第19号住居跡出土遺物観察表(第50図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
96	土師器	壺	15.4	(7.7)	－	石英・長石・赤色粒子	にぶい橙	普通	口辺部外面横ナデ・ヘラナデ後ヘラミガキ，内面ヘラナデ後ヘラミガキ	床面	10% 内面摩滅
97	土師器	壺	－	(3.9)	(7.8)	石英	にぶい赤褐	普通	外面ヘラケズリ，内面ナデ，底部外面ヘラナデ	下層	5%　煤付着
98	土師器	ミニチュア土器	－	(0.7)	2.1	白色粒子	橙	普通	内・外面指頭ナデ，底部外面ナデ	下層	5%

第20号住居跡（第51～53図）

位置　調査区南東部のD6e5区で，標高24.2mの台地平坦部に位置している。

確認状況　遺存状況は良好であるが，北東壁及び南東壁の一部が攪乱を受けている。

形状　長軸8.82m，短軸8.80mの方形である。壁は高さ27～58cmで，ほぼ直立して立ち上がっている。主軸方向はN－39°－Wである。

床　ほぼ平坦である。中央部がわずかにくぼんでいる。主柱穴の内側を中心に踏み固められ，壁際は軟弱である。壁溝は四壁の直下で確認され，深さは12～18cmである。

ピット　6か所。P１～P４は配置から主柱穴で，深さは54～80cmである。覆土は５層からなり，ロームブロックを少量含む黒褐色及び暗褐色土を基調としている。堆積状況から，柱はすべての柱穴で抜き取られたと考えられる。P５は炉と対峙して位置することから，出入り口施設に関連すると考えられ，深さは76cmである。P６は性格不明で，深さは７cmである。

ピット土層解説

1　黒　色　ロームブロック・焼土粒子・炭化物微量
2　黒 褐 色　ロームブロック少量，炭化粒子微量
3　暗 褐 色　ロームブロック少量，炭化粒子微量
4　褐　色　ロームブロック中量，炭化粒子微量
5　褐　色　ロームブロック中量，炭化物微量
6　暗 褐 色　ロームブロック少量，炭化物微量
7　暗 褐 色　ロームブロック中量，炭化粒子微量
8　褐　色　ロームブロック中量

貯蔵穴　底面はほぼ平坦で，深さは74cmである。覆土は６層からなり，褐色土と暗褐色土が互層をなしている。最下層は含有物の少ない黒褐色土で，踏み固められたように締まっている。土質及び堆積状況から，埋め戻されたものと推測される。

貯蔵穴土層解説

1　褐　色　ロームブロック・焼土粒子・炭化粒子微量
2　暗 褐 色　ロームブロック・炭化粒子少量
3　褐　色　ロームブロック少量
4　褐　色　ロームブロック中量，炭化粒子少量
5　暗 褐 色　ロームブロック微量
6　黒 褐 色　ロームブロック少量，炭化物微量

炉　地床炉で床面から10cmほど掘りくぼめられ，中央部の北西側で主柱穴の内側に位置している。炉床は火熱により赤変硬化し，覆土は３層からなる。

炉土層解説

1　黒 褐 色　ロームブロック・焼土ブロック・炭化物微量
2　暗 褐 色　ロームブロック・焼土ブロック・炭化物微量
3　にぶい赤褐色　焼土ブロック中量，ロームブロック・炭化粒子微量

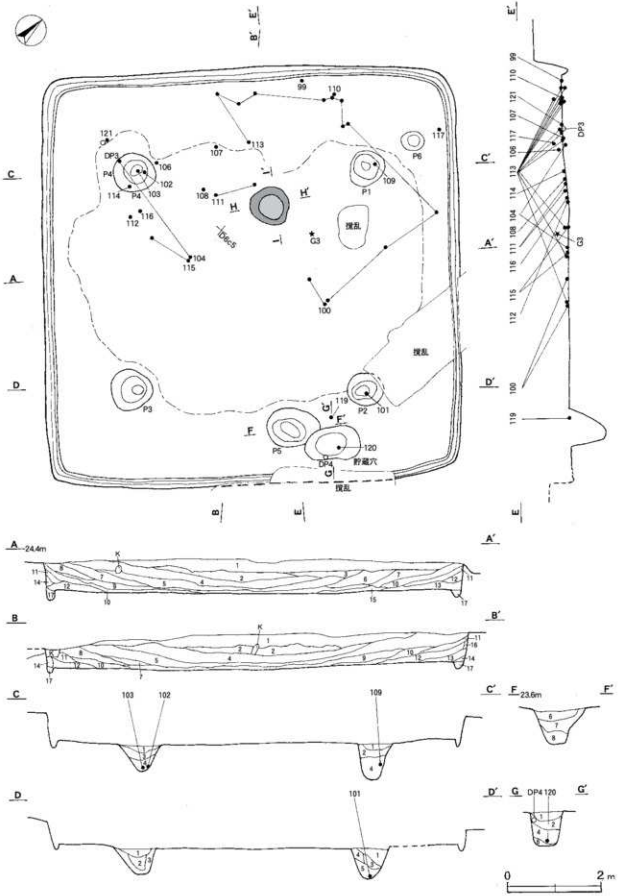
覆土　17層からなる。第１～９層はロームブロックと焼土粒子及び炭化物を少量含む黒褐色及び暗褐色土で，周囲から土砂が流入したレンズ状堆積を示している。第10～16層は，壁際に三角形状に堆積している褐色及び暗褐色土である。第17層は壁溝の埋土で，土質及び堆積状況から自然堆積と考えられる。

土層解説

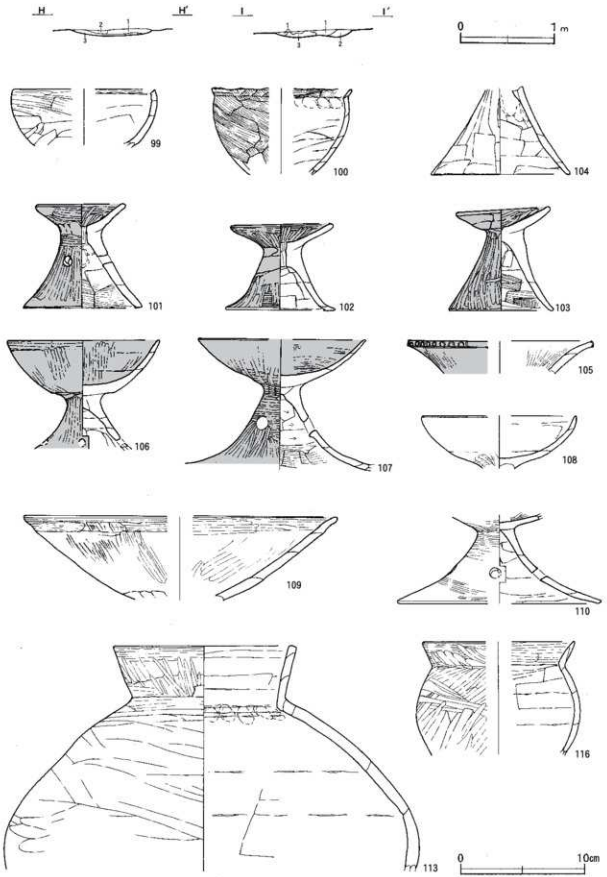
1　暗 褐 色　ロームブロック・炭化粒子微量
2　極暗褐色　ロームブロック・焼土粒子・炭化粒子微量
3　極暗褐色　ロームブロック・焼土粒子微量
4　黒 褐 色　ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子微量
5　黒 褐 色　ロームブロック・焼土ブロック・炭化物微量
6　黒 褐 色　ロームブロック・炭化粒子微量
7　暗 褐 色　ロームブロック少量，炭化粒子微量
8　暗 褐 色　ロームブロック少量，炭化物微量
9　暗 褐 色　ロームブロック・炭化材少量
10　褐　色　ロームブロック少量，炭化物微量
11　暗 褐 色　ロームブロック・炭化物微量
12　褐　色　ロームブロック少量，炭化粒子微量
13　褐　色　ロームブロック少量
14　暗 褐 色　ロームブロック・炭化物少量
15　褐　色　ロームブロック多量
16　暗 褐 色　ロームブロック少量
17　暗 褐 色　ロームブロック中量

遺物出土状況　土師器片935点（椀８，器台17，高坏98，壺343，甕461，甑１，ミニチュア土器７），球状土錘３点，ガラス玉１点が覆土中層から下層にかけて出土し，北コーナー部や炉及びP６の周囲から比較的まとまって出土している。ほとんどが破片で，廃棄されたものや周囲から流入したものと考えられる。主柱穴のP２の底面から完形の器台１点，P４の底面から完形の器台２点が埋納されたような横位の状態で出土し，主柱穴の柱抜き取りと一連の行為と推測される。また，混入した平安時代の土師器片８点も出土している。

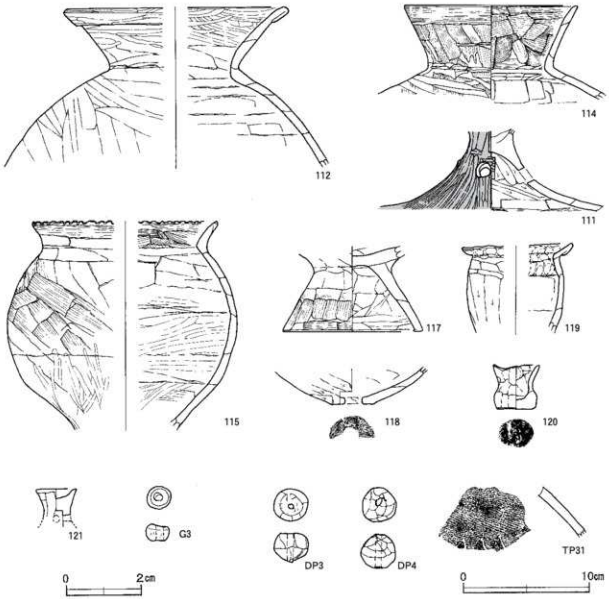
所見　一辺８mを超える大形の住居である。炉は中央部北西側で主柱穴の内側に位置し，炉と対峙する位置に出入口施設に関連するピットと，隣接して貯蔵穴を設ける住居形態は，第２・５・25・28号住居跡に類似している。特異な点は，主柱穴の柱抜き取りの際，その底面に完形の器台を埋納している点である。それらは一連の行為と推測され，上屋の解体を伴った住居の廃絶儀礼として注目される。時期は，出土遺物の様相などから，前期前葉（３世紀中葉～３世紀末葉）と考えられる。



第51図　第20号住居跡実測図



第52図　第20号住居跡・出土遺物実測図



第53図　第20号住居跡出土遺物実測図

第20号住居跡出土遺物観察表（第52・53図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
99	土師器	椀	[11.4]	(4.5)	－	長石・白色粒子	橙	普通	口唇部ハケ目，外面ハケ目後ヘラナデ・ヘラミガキ，内面ヘラナデ	床面	5%
100	土師器	椀	[11.2]	(6.8)	－	石英・赤色粒子	にぶい橙	普通	外面・口辺部内面ハケ目，体部内面指頭圧痕・ヘラナデ	床面	5%
101	土師器	器台	6.7	8.3	9.4	石英・長石	橙	普通	器受部赤彩，内・外面ヘラミガキ，中央面穿孔，脚部外面赤彩・ヘラミガキ，内面ハケ目・ヘラナデ，3窓	P2	100%　PL25
102	土師器	器台	7.9	6.9	8.8	石英・長石	橙	普通	器受部赤彩，内・外面ヘラミガキ後櫛ナデ，中央部穿孔，脚部外面赤彩・指頭ナデ・ヘラミガキ，内面ヘラナデ	P4	100%　PL25
103	土師器	器台	7.6	8.3	8.2	石英・長石・赤色粒子	橙	普通	器受部赤彩，外面ヘラナデ，内面ヘラミガキ，中央部穿孔，脚部外面赤彩・ヘラミガキ，内面ヘラナデ・ハケ目・ヘラミガキ	P4	100%　PL25
104	土師器	器台	－	(7.0)	11.2	石英・長石	にぶい橙	普通	内外面ヘラナデ	床面・P4	45%
105	土師器	高坏	[14.8]	(2.6)	－	石英・長石・赤色粒子	明赤褐	普通	外面赤彩・ヘラミガキ，内面ヘラミガキ，口唇部連続円形刺突文	覆土中	5% 内面摩滅
106	土師器	高坏	12.2	(8.7)	－	石英	にぶい赤褐	普通	坏部赤彩・ヘラミガキ，脚部外面赤彩・ヘラミガキ，内面ヘラナデ，4窓	下層	80% 内・外面摩滅 PL27
107	土師器	高坏	[13.4]	(10.5)	－	石英・長石	にぶい橙	普通	坏部赤彩・ヘラミガキ，脚部外面赤彩・ヘラミガキ，内面ヘラケズリ・ハケ目，3窓	床面	45%
108	土師器	高坏	12.4	(4.1)	－	石英・赤色粒子	にぶい黄橙	普通	外面ヘラミガキ，内面ヘラナデ	床面	20% 内・外面摩滅
109	土師器	高坏	[25.0]	(6.7)	－	石英	にぶい橙	普通	外面櫛ナデ・ハケ目後ヘラミガキ・ヘラナデ，内面ヘラミガキ	P1	10%

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
110	土師器	高坏	－	(7.2)	(16.2)	石英・長石	にぶい橙	普通	坏部ヘラミガキ，脚部外面ヘラミガキ，内面ヘラナデ，4窓	床面	30%
111	土師器	高坏	－	(6.5)	－	石英・長石・赤色粒子	にぶい赤褐	普通	外面赤彩，ヘラミガキ，内面ヘラケズリ・ヘラナデ・ハケ目，4窓	床面	40%
112	土師器	壺	17.2	(12.5)	－	石英・長石・雲母	にぶい橙	普通	折り返し口頸部・胴部ヘラナデ後ヘラミガキ，体部ヘラナデ	床面	15%
113	土師器	壺	14.5	(18.1)	－	石英・赤色粒子	にぶい橙	普通	口頸部外面横ナデ後ヘラミガキ，口頸部内面・体部ヘラナデ，指頭圧痕	下層～床面	30%
114	土師器	壺	13.8	(7.3)	－	石英・長石	にぶい褐	普通	口頸部外面ハケ後横ナデ・ヘラナデ，体部外面ハケ目後ヘラナデ，口頸部内面ハケ目，体部内面ヘラナデ	床面	10%
115	土師器	甕	(14.4)	(16.5)	－	石英・長石	にぶい褐	普通	口縁部モデル，口頸部ナデ後ヘラナデ・ハケ目，体部外面ヘラナデ後ハケ目・ヘラミガキ，内面ヘラナデ・ヘラミガキ	床面	25%
116	土師器	甕	(12.0)	(9.0)	－	石英・長石	橙	普通	口頸部外面横ナデ後ヘラナデ，体部外面ヘラミガキ・ヘラナデ，口頸部内面ヘラミガキ，体部内面ヘラナデ	床面	10%
117	土師器	台付甕	－	(6.7)	11.0	石英・長石	橙	普通	体部ヘラナデ，脚部外面ヘラナデ後ハケ目，内面ヘラナデ後ヘラミガキ	下層	5%
118	土師器	甑	－	(2.8)	3.4	石英・赤色粒子	褐灰	普通	体部外面ハケケズリ，内面ヘラナデ，底部外面ヘラケズリ，単孔	覆土中	5%
119	土師器	ミニチュア土器	[8.7]	(7.1)	－	長石	にぶい褐	普通	折り返し口頸部縦圧痕，体部外面ヘラナデ・ヘラケズリ，内面指頭圧痕・ヘラナデ	床面	25%
120	土師器	ミニチュア土器	3.6	3.4	3.0	長石・赤色粒子	灰褐	普通	指頭ナデ	貯蔵穴	45%　PL25
121	土師器	ミニチュア土器	1.1	(0.8)	－	石英・長石	にぶい褐	普通	指頭ナデ，体部穿孔1か所	床面	60%　PL25
TP31	土師器	壺	－	(4.9)	－	石英・長石・雲母	明褐	普通	体部外面に綾目状磨布文，沈線で山形文を描き，赤彩を施す，内面ナデ	覆土中	PL32

番号	種別	径	厚さ	孔径	重量	材質	特徴	出土位置	備考
DP3	球状土錘	2.7	2.3	0.5	16.4	粘土	ナデ調整，中央部一方向からの穿孔	床面	PL31
DP4	球状土錘	2.7	2.6	0.4	18.5	粘土	ナデ調整，中央部一方向からの穿孔	貯蔵穴	PL31

番号	種別	径	厚さ	孔径	重量	材質	特徴	出土位置	備考
G3	小玉	0.6	0.5	0.22	0.2	青緑色ガラス	擦痕，中央部穿孔	中層	PL34

第22号住居跡（第54・55図）

位置　調査区南部のD3c0区で，標高23.9mの台地平坦部に位置している。

確認状況　全体的にトレンチャーの攪乱と削平を受けており，部分的に壁や床及び内部施設を確認した。遺存状況は極めて不良である。

形状　長軸5.97m，短軸5.46mの方形である。壁は高さ6～26cmで，外傾して立ち上がっている。主軸方向はN－60°－Wである。

床　ほぼ平坦である。壁際は軟弱で，中央部は踏み固められている。炉の南西約50cmには火熱により赤変した範囲が見られる。

貯蔵穴　底面はほぼ平坦で，深さは45cmである。覆土は4層からなり，ロームブロックを少量から中量含む暗褐色及び褐色土からなる。下層は粘性と締まりが強く，土質及び堆積状況から，埋め戻されたものと推測される。

貯蔵穴土層解説

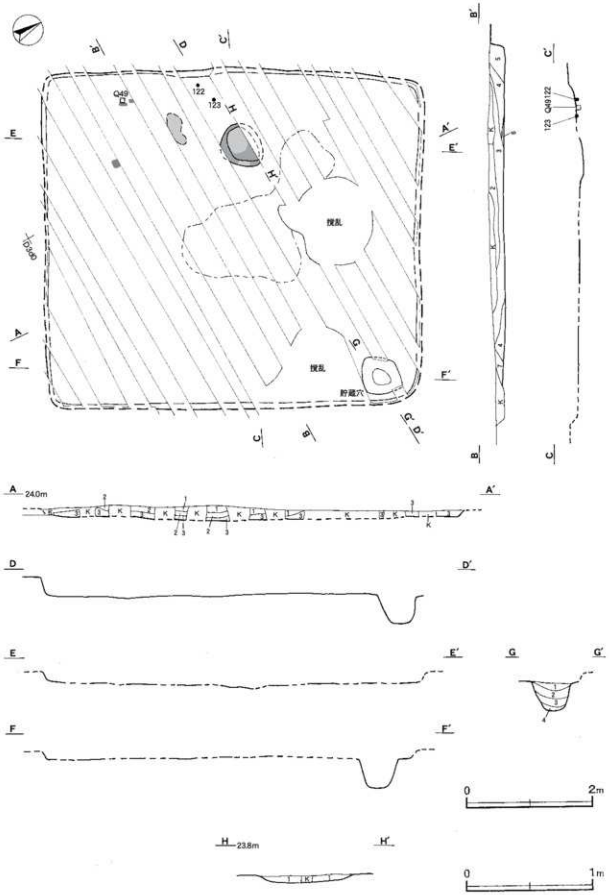
1　暗褐色　ロームブロック少量，炭化粒子微量
2　暗褐色　ロームブロック中量，炭化粒子微量
3　褐　色　ロームブロック少量
4　褐　色　ロームブロック多量

炉　地床炉で床面から8cmほど掘りくぼめられ，北西壁の中央部寄りに偏って位置している。炉床は火熱により赤変硬化し，覆土は単一層である。

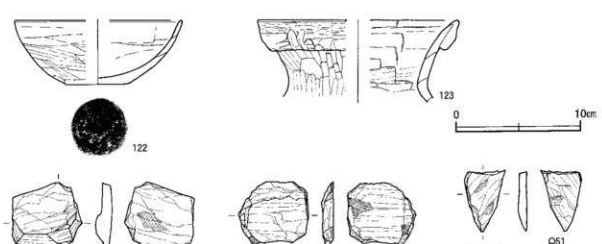
炉土層解説

1　暗赤褐色　焼土ブロック中量，ローム粒子・炭化物微量

覆土　7層からなる。第1～3層はロームブロックを微量含む暗褐色及び黒褐色土で，レンズ状堆積を示している。第4～7層はロームブロックを中量含む暗褐色土を基調とし，壁際を中心に堆積している。土質及び堆積状況から，自然堆積と考えられる。



第54図　第22号住居跡実測図



第55図　第22号住居跡出土遺物実測図

土層解説

1　黒褐色　ロームブロック・焼土粒子・炭化粒子微量
2　暗褐色　ロームブロック・焼土粒子・炭化粒子微量
3　暗褐色　ロームブロック少量，焼土粒子・炭化粒子微量
4　黒褐色　ロームブロック少量，炭化粒子微量
5　暗褐色　ロームブロック中量，炭化粒子微量
6　暗褐色　ロームブロック中量
7　暗褐色　ロームブロック中量，炭化物微量

遺物出土状況　土師器片162点（椀４，高坏15，壺60，甕83），滑石製模造品３点（未製品２，剥片１）が，炉の西部付近を中心とした覆土下層から床面にかけて廃棄されたような状態で出土し，ほとんどは破片である。Q49は床面，Q50・Q51は覆土下層からそれぞれ出土している。床面からは，少量の炭化材と性格不明の黒色粘土塊が出土している。

所見　コーナー部に貯蔵穴を設け，炉は北西壁の中央部寄りに偏り，出入り口施設に関連するピットがないなど住居形態に特徴が見られ，第６・９・14・23号住居跡に類似している。また，内部施設のあり方が異なるものの，炉が壁の中央部寄りに偏っていることや，床の赤変部分が存在していることなど，第19・24・27号住居跡とも類似している。床面から出土した少量の炭化材は，上屋などが焼失した痕跡が見られないことから，周囲から廃棄されたと推測される。時期は，出土遺物の様相などから，中期中葉（５世紀中葉）と考えられる。

第22号住居跡出土遺物観察表(第55図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
122	土師器	椀	13.4	5.2	4.7	石英・長石	にぶい橙	普通	体部外面ヘラナデ・ヘラミガキ，内面ヘラナデ，底部外面ヘラナデ	床面	55%　Pl.28
123	土師器	壺	16.4	(6.5)	－	長石・赤色粒子	にぶい橙	普通	折り返し口縁部外面横ナデ・指頭圧痕，頸部ヘラナデ	床面	5%

番号	種別	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特徴	出土位置	備考
Q49	剥片	2.6	2.8	0.6	6.7	滑石	側面切断痕，裏面擦痕	床面	
Q50	剥片	2.5	2.3	0.5	5.7	滑石	側面切断痕，裏面擦痕	覆土下層	Pl.34
Q51	剥片	2.4	1.7	0.4	1.7	滑石	両面擦痕	覆土下層	

第23号住居跡（第56・57図）

位置　調査区南部のD4a6区で，標高23.8mの台地平坦部に位置している。

確認状況　縦横にトレンチャーの撹乱を受けており，部分的に壁や床及び内部施設を確認した。遺存状況は不良である。

形状　長軸4.26m，短軸3.73mの方形である。壁は高さ34～50cmで，外傾して立ち上がっている。主軸方向はN－75°－Wである。

床　ほぼ平坦である。中央部は踏み固められている。壁溝は北東及び南東コーナー部を除いた四壁の直下で確認され，深さは5～10cmである。

貯蔵穴　底面はほぼ平坦で，深さは42cmである。覆土は3層からなり，ロームブロックを微量含む暗褐色土を基調とし，土質及び堆積状況から，自然堆積と考えられる。

貯蔵穴土層解説

1　暗 褐 色　ロームブロック・炭化粒子微量
2　褐　　色　ロームブロック少量
3　暗 褐 色　ロームブロック微量

炉　掘り込みを伴わない地床炉で，東壁の中央部寄りに偏って位置している。炉床は凹凸が見られ，覆土は単一層である。

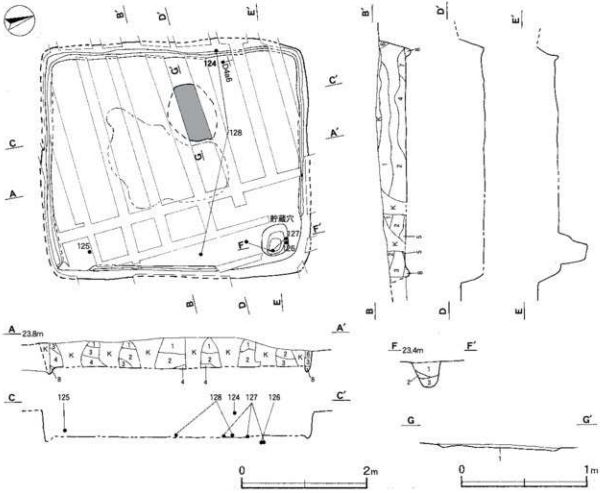
炉土層解説

1　暗赤褐色　焼土ブロック中量，ロームブロック・炭化物微量

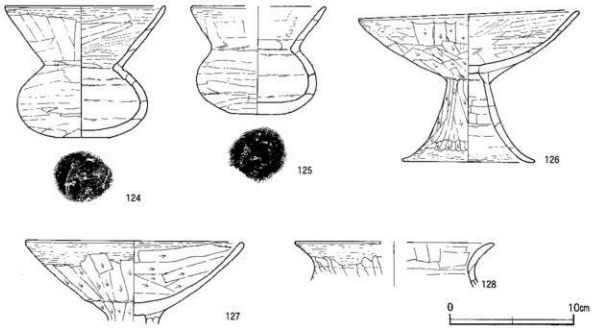
覆土　8層からなる。第1層は含有物の少ない黒色土で，第2層はロームブロックを中量含む褐色土で，全体的にレンズ状に堆積している。第3～5・7層はロームブロックを少量含む暗褐色土を基調とし，壁際を中心に堆積している。第8層は壁溝の埋土である。土質及び堆積状況から，自然堆積と考えられる。

土層解説

1　黒　　色　ロームブロック・炭化粒子微量
2　暗 褐 色　ロームブロック中量，炭化粒子微量
3　黒 褐 色　ロームブロック・炭化粒子微量
4　暗 褐 色　ロームブロック・炭化物少量
5　暗 褐 色　ロームブロック少量
6　褐　　色　ロームブロック少量，炭化粒子微量
7　暗 褐 色　ロームブロック少量，焼土粒子・炭化粒子微量
8　褐　　色　ロームブロック中量



第56図　第23号住居跡実測図



第57図　第23号住居跡出土遺物実測図

遺物出土状況　土師器片186点（坩16，高坏40，壺21，甕109）が覆土中層から下層にかけて廃棄されたような状況で出土している。覆土下層から床面にかけての遺物は，炉及び貯蔵穴の周辺にまとまりが見られる。126は貯蔵穴の覆土上層から出土し，124・125は壁際の中層から下層にかけて出土している。

所見　炉は東壁の中央部寄りに偏り，コーナー部に貯蔵穴を設け，出入り口施設に関連するピットがないなど住居形態に特徴が見られ，第６・９・14・22号住居跡に類似している。出土遺物の様相などから，時期は中期中葉（５世紀中葉）と考えられる。

第23号住居跡出土遺物観察表（第57図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
124	土師器	坩	13.0	10.7	4.4	石英・長石・礫	橙	普通	口辺部ヘラナデ後横ナデ，体部ヘラナデ，底部外面ヘラケズリ	中層	95%　PL26 内面摩滅
125	土師器	坩	11.0	8.6	4.6	石英・赤色粒子	にぶい橙	普通	内・外面ヘラナデ，底部外面ヘラケズリ	下層	70%　PL26 内・外面摩滅
126	土師器	高坏	17.7	12.2	10.6	長石・赤色粒子	橙	普通	外面横ナデ後ヘラケズリ，坏部内面ヘラナデ，脚部内面ヘラナデ後ヘラケズリ・横ナデ	貯蔵穴	90%　PL27
127	土師器	高坏	17.3	(6.3)	－	石英・長石	橙	普通	内・外面横ナデ後ヘラケズリ	床面	40%
128	土師器	甕	(16.0)	(3.6)	－	石英・長石	にぶい橙	普通	外面横ナデ後ヘラナデ，内面ヘラナデ	床面	5%

第24号住居跡（第58図）

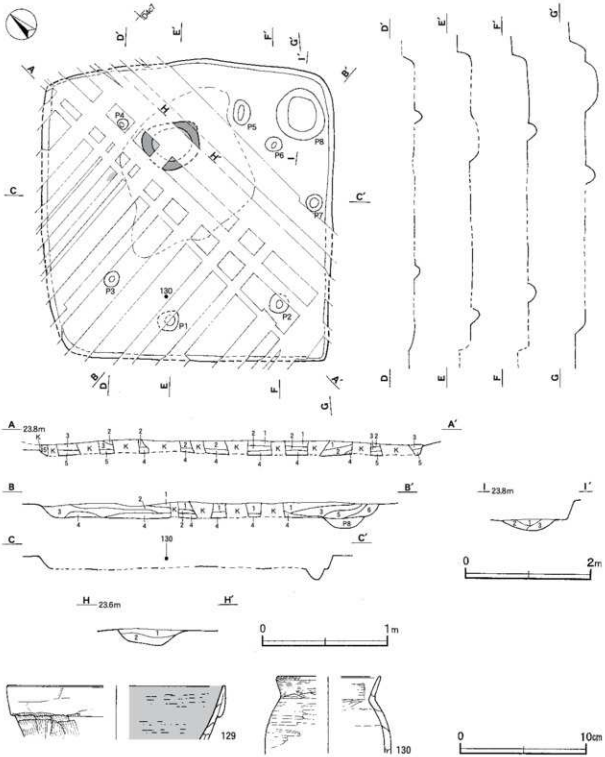
位置　調査区南部のD4C6区で，標高23.8mの台地平坦部に位置している。

確認状況　縦横にトレンチャーの攪乱を受けており，部分的に壁や床及び内部施設を確認した。遺存状況は不良である。

形状　長軸4.78m，短軸4.67mの方形である。壁は高さ８～25cmで，外傾して立ち上がっている。主軸方向はN－46°－Eである。

床　ほぼ平坦である。炉の周囲を中心に踏み固められている。

ピット　８か所。Ｐ１は炉と対峙して位置することから，出入り口施設に関連すると考えられる。Ｐ２～Ｐ８は性格不明である。Ｐ８はコーナー部に位置し，深さは19cmと浅く，貯蔵穴とは考えにくい。覆土は３層からなり，ロームブロックを微量含む暗褐色土を基調とし，土質及び堆積状況から，自然堆積と考えられる。その



第58図　第24号住居跡・出土遺物実測図

他のピットの深さは8～16cmで，覆土はロームブロックを少量含む暗褐色及び褐色土を基調としている。

ピット土層解説

1　暗 褐 色　ロームブロック・炭化粒子微量
2　黒 褐 色　ロームブロック・炭化粒子微量
3　暗 褐 色　ロームブロック少量，焼土粒子・炭化粒子微量

炉　地床炉で床面から14cmほど掘りくぼめられ，北東壁中央部寄りに偏っている。炉床は火熱により赤変硬化し，覆土は2層からなる。

炉土層解説
1　暗赤褐色　焼土ブロック中量，炭化物少量，ローム粒子微量　　2　にぶい赤褐色　焼土ブロック多量，炭化物少量，ローム粒子微量

覆土　6層からなる。含有物の少ない第1・2層は全体的にレンズ状を呈し，第4層は中央部の床面上に堆積している。また，第3・5・6層はロームブロックを少量含む暗褐色土を基調とし，壁際を中心に堆積している。土質及び堆積状況から，自然堆積と考えられる。

土層解説
1　暗褐色　ロームブロック・焼土粒子・炭化粒子微量
2　黒褐色　ロームブロック・焼土ブロック・炭化粒子微量
3　暗褐色　ロームブロック少量，焼土粒子・炭化粒子微量
4　褐　色　ロームブロック少量，焼土粒子・炭化粒子微量
5　暗褐色　ロームブロック少量，炭化粒子微量
6　暗褐色　ロームブロック少量

遺物出土状況　土師器片111点（椀1，坩2，高坏5，壺58，甕45）が，覆土下層から出土している。ほとんどが破片で，廃棄されたものや周囲から流入したものと考えられる。また，混入した縄文土器片2点が出土している。

所見　確認されたピットはいずれも浅く，配置も不規則なため柱穴とは考えにくい。コーナー部に位置しているP8も深さは19cmと浅く，性格は不明である。住居形態では，内部施設のあり方が異なるものの，炉が壁の中央部寄りに偏っていることや，床の赤変部分が存在していることなど，第19・22・27号住居跡と類似している。時期は，出土遺物の様相や，炉が壁の中央部寄りに偏っていることから，前期後半と推定される。

第24号住居跡出土遺物観察表(第58図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
129	土師器	壺	(17.6)	(4.2)	－	石英・長石	橙	普通	折り返し口辺部ヘラナデ・ハケ目，内面刷毛・ヘラミガキ	覆土中	5%
130	土師器	小形甕	(8.4)	(6.1)	－	石英	橙	普通	口唇部キザミ，口辺部横ナデ・ヘラナデ，体部外面ヘラミガキ	中層	5% 内面摩滅

第25号住居跡（第59・60図）

位置　調査区南部のD4f4区で，標高24mの台地平坦部に位置している。

重複関係　第1号溝に北西及び北東壁の上部を掘り込まれている。遺存状況は良好で，南部は調査区域外に含まれている。

形状　長軸4.82m，短軸4.58mの方形である。壁は高さ20～38cmで，外傾して立ち上がっている。主軸方向はN－35°－Wである。

床　ほぼ平坦である。壁際を除いてよく踏み固められている。

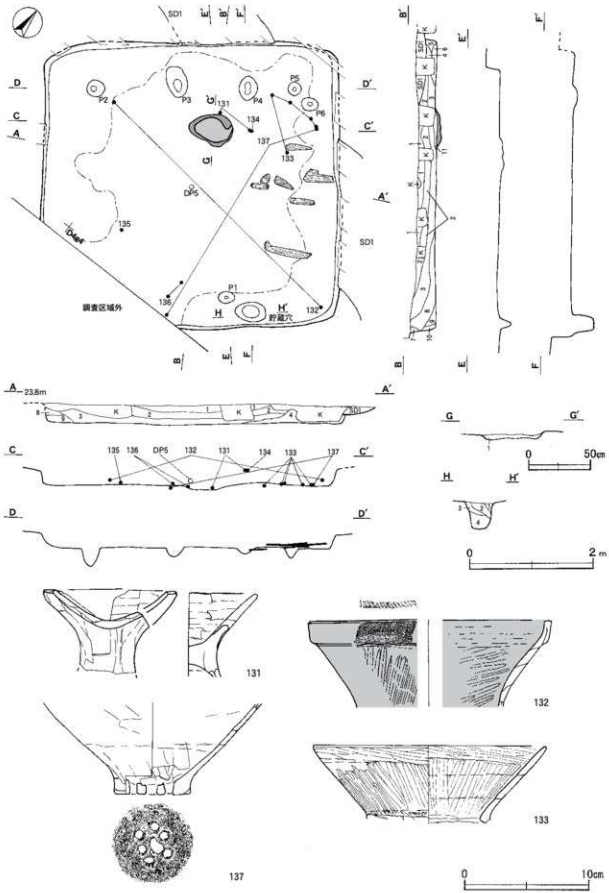
ピット　6か所。P1は炉と対峙して位置することから，出入り口施設に関連すると考えられ，深さは21cmである。覆土はロームブロックを微量含む暗褐色である。P2～P6は北西壁に沿ってほぼ一列に並んでいる。いずれも性格は不明で，深さは10～30cmである。覆土はロームブロックを微量含む暗褐色及び黒褐色土を基調としている。

貯蔵穴　底面はほぼ平坦で，深さは39cmである。覆土は4層からなり，黒褐色土と暗褐色土が互層をなしている。全体的に含有物が少なく，締まりも弱い。土質及び堆積状況から自然堆積と考えられる。

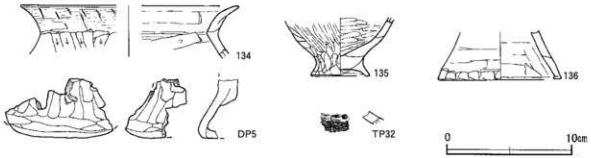
貯蔵穴土層解説
1　黒褐色　ロームブロック・炭化粒子微量
2　暗褐色　ロームブロック微量
3　黒褐色　ロームブロック微量
4　暗褐色　ロームブロック・炭化粒子微量

炉　地床炉で床面から7cmほど掘りくぼめられ，中央部の北西側に位置している。炉床は火熱により赤変硬化し，覆土は単一層である。

炉土層解説
1　暗赤褐色　焼土ブロック少量，ローム粒子・炭化粒子微量



第59図　第25号住居跡・出土遺物実測図



第60図　第25号住居跡出土遺物実測図

覆土　11層からなる。第1～3層はローム ブロックと焼土ブロック及び炭化物を少量含む黒褐色及び暗褐色土で，レンズ状堆積を示している。第4～10層は，ロームブロックを少量含む暗褐色土で，壁際に三角形状に堆積し，第4層を中心に，炭化材や焼土ブロックが含まれている。土質及び堆積状況から自然堆積と考えられる。第11層は炉の上面を中心とした範囲に認められる。

土層解説

1　黒 褐 色　ロームブロック・焼土粒子・炭化粒子微量
2　暗 褐 色　ロームブロック・焼土粒子・炭化粒子微量
3　黒 褐 色　ロームブロック・焼土ブロック・炭化物微量
4　暗 褐 色　ロームブロック・炭化粒子微量
5　暗 褐 色　ロームブロック少量，炭化粒子微量
6　暗 褐 色　ロームブロック少量，炭化物微量
7　暗 褐 色　ロームブロック少量
8　暗 褐 色　ロームブロック少量，焼土粒子・炭化物微量
9　黒 褐 色　ロームブロック・炭化物微量
10　暗 褐 色　ロームブロック微量
11　暗赤褐色　焼土ブロック中量，ローム粒子・炭化粒子微量

遺物出土状況　土師器片219点（椀3，炉器台2，高坏1，壺61，甕151，甑1），土製支脚1点が覆土中層から下層にかけて散在した状態で出土している。ほとんどが破片で，廃棄されたものや周囲から流入したものと考えられる。131は炉の周囲の覆土下層から床面にかけて出土した2点が接合し，DP5は中央部の床面から出土している。また，東部の覆土下層から床面にかけて，焼土ブロックや炭化材が出土し，上屋などの焼失をうかがわせるが，それらの量は少なく出土位置にも偏りが認められる。

所見　炭化材の量が少なく，出土位置にも偏りが認められることから，部分的に焼失した住居と推測される。炉は中央部の北西側に位置し，炉と対峙する位置に出入り口施設に関連するピットと，隣接して貯蔵穴を設ける住居形態は，第2・5・20・28号住居跡と類似している。また，炉を通る主軸が，竪穴の中心軸よりも一方に偏っているのは，第8・26・32・35号住居跡と類似している。時期は，出土遺物の様相などから，前期後葉（4世紀中葉～4世紀末葉）と考えられる。

第25号住居跡出土遺物観察表（第59・60図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
131	土師器	炉器台	10.8	(6.7)	－	石英・長石・赤色粒子	灰褐	普通	脚入部削出，内・外面ヘラナデ	下層～床面	30%
132	土師器	壺	[19.6]	(6.8)	－	石英・長石・赤色粒子	橙	普通	口唇部圧痕文原体押圧，折り返し口辺部外面網目状撚糸文施文，頸部赤彩・ヘラミガキ	中層	5%
133	土師器	壺	18.7	(6.1)	－	石英・長石	にぶい赤褐	普通	ヘラミガキ	床面	15%
134	土師器	甕	[17.6]	(4.1)	－	石英・赤色粒子	橙	普通	口辺部外面ヘラナデ後横ナデ，体部外面ヘラケズリ，口辺部内面・体部内面ヘラナデ	床面	5%
135	土師器	台付甕	－	(4.7)	4.6	石英・赤色粒子	にぶい黄橙	普通	体部内・外面ヘラミガキ，脚部指頭圧痕	床面	10%
136	土師器	台付甕	－	(3.8)	10.0	赤色粒子	橙	普通	外面ヘラナデ・指頭圧痕，内面ヘラナデ	下層	10%
137	土師器	甑	－	(7.3)	6.1	石英・長石	にぶい橙	普通	内外面ヘラナデ，底部外面ヘラナデ，工具	下層～床面	30%
TP32	土師器	壺	－	(1.1)	－	石英・長石	にぶい褐	普通	体部外面に網目状撚糸文，円形の貼付文を施す　内面ナデ	覆土中	

番号	種別	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特徴	出土位置	備考
DP5	支脚	(4.3)	(8.7)	(4.9)	(58.2)	粘土	外面ヘラナデ，内面指頭ナデ	床面	炉器台

第26号住居跡（第60・63図）

位置　調査区中央部のＣ４j7 区で，標高23.8mの台地平坦部に位置している。

確認状況　壁の上部や覆土はトレンチャーの撹乱を受けているものの，床及び内部施設はほぼ全容を確認できた。遺存状況はほぼ良好である。

形状　長軸5.25m，短軸4.87mの方形である。壁は高さ52～55cmで，外傾して立ち上がっている。主軸方向はＮ－45°－Ｗである。

床　ほぼ平坦である。壁際を除いて踏み固められている。

ピット　２か所。Ｐ１は炉と対峙して位置していることから出入り口施設に関連すると考えられ，深さは27cmである。覆土はロームブロックを微量含む暗褐色である。Ｐ２は性格不明で，深さは６cmである。

貯蔵穴　底面はほぼ平坦で，深さは30cmである。覆土は２層からなり，上層は含有物の少ない黒色土で，下層はロームブロックを中量含む褐色土で，土質及び堆積状況から，埋め戻されたと推測される。

貯蔵穴土層解説

1　黒　色　炭化物少量，ローム粒子・焼土粒子微量　　2　褐　色　ロームブロック中量

炉　地床炉で床面から12cmほど掘りくぼめられ，中央部の北側に位置している。炉床は軟弱で，火熱した痕跡は認められず，覆土は２層からなる。

炉土層解説

1　黒 褐 色　焼土ブロック少量，ロームブロック・炭化物微量　　2　暗 褐 色　焼土ブロック中量，ローム粒子・炭化粒子微量

覆土　11層からなる。第１～４層はロームブロックを微量ないし少量含む含有物の少ない暗褐色及び黒褐色土を基調とし，壁際の上層から中層を形成している。土質及び堆積状況から自然堆積と考えられる。第５～９層はロームブロックや焼土ブロックを少量含む暗褐色及び黒褐色土を基調とし，中層から下層を形成しているが，乱れた堆積状況を示している。第10層は焼土ブロックを中量含む暗赤褐色土で，壁際を中心とした床面や第11層上面に堆積し，第11層はロームブロックと焼土ブロックなどを微量含む黒色土で，床面のほぼ全域に堆積している。また，第10・11層を中心とする最下層は，多量の炭化米と少量の炭化材，焼土ブロックなどを含有していることから，焼失に伴って形成されたと考えられる。第５～11層は，乱れた堆積状況や壁際に三角形状に堆積していないことなどから，焼失後，時間をあけずに埋め戻されたと推測される。

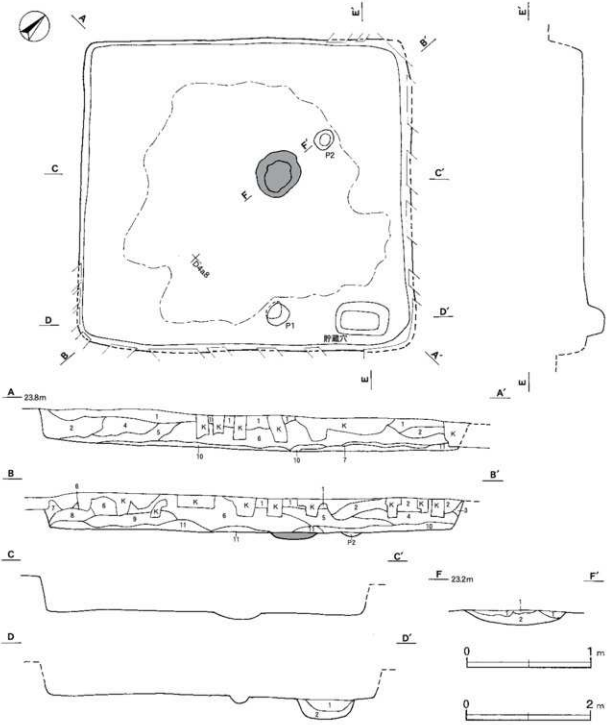
土層解説

1　黒 褐 色　ロームブロック・炭化粒子微量
2　暗 褐 色　ロームブロック・焼土粒子・炭化粒子微量
3　暗 褐 色　ロームブロック少量
4　黒 褐 色　ロームブロック少量，炭化粒子微量
5　暗 褐 色　ロームブロック少量，焼土粒子・炭化粒子微量
6　黒 褐 色　ロームブロック・焼土ブロック少量，炭化物微量
7　暗 褐 色　ロームブロック少量，焼土粒子・炭化物微量
8　暗 褐 色　ロームブロック少量，炭化物微量
9　暗 褐 色　ロームブロック・焼土ブロック少量，炭化粒子微量
10　赤褐色　焼土ブロック中量，ロームブロック・炭化物微量
11　黒　色　ロームブロック・焼土ブロック・炭化物微量

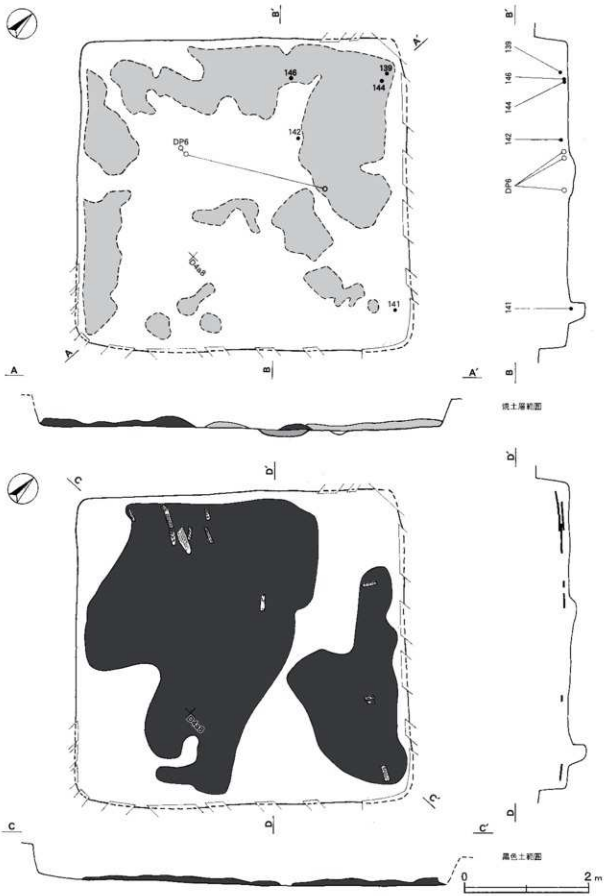
遺物出土状況　土師器片674点（椀２，器台４，坩１，高坏32，鉢３，壺176，甕455，ミニチュア土器１），土製品４点（不明）が覆土上層から中層を中心に出土している。ほとんどが破片であり，廃棄されたものや周囲から流入したものと考えられる。DP６は中央部の床面から出土していた３点が接合し，ミニチュア土器の146は北西壁直下の床面から出土している。また，第10・11層を中心とする覆土最下層からは，炭化材が散在した状態で検出され，覆土下層の全域から炭化米が多量に出土している。

所見　焼失住居である。しかし，遺棄された遺物が見られないことから，廃絶後の意図的な焼却である可能性が高い。炭化材は覆土最下層の第11層に包含される。壁に直行して分布しているものが多く，角材や篠などが確認されることから上屋の建築材と考えられる。炭化材の量は少ないが，覆土最下層の黒色土やその上位に堆積している焼土層の存在から判断して，かなりの燃焼であったと推測される。床面のほぼ全域に堆積している黒色土は有機質土であり，上屋などの建築材と推測される。さらに，壁際を中心とした床面に堆積している焼土層は，土屋根の存在を想起させる。出土した炭化米は，焼却時に住居内に保管・貯蔵されていたものか，ある

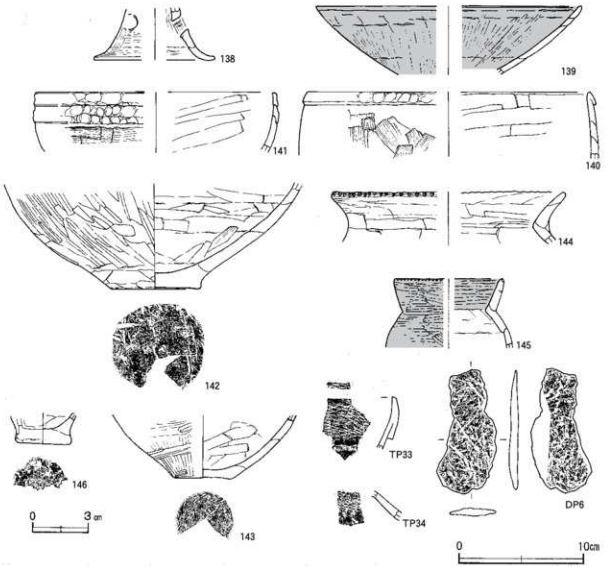
いは外部から持ち込まれたものかなど，不明な点が多いが，貯蔵されていた可能性が高い。炉は中央部の北側に位置し，コーナー部寄りに貯蔵穴を設け，炉と対峙した位置に出入り口施設に関連するピットを有するなど住居形態に特徴が見られ，第31・32・35号住居跡と類似している。また，炉を通る主軸が竪穴の中心軸よりも一方に偏っている点は，第８・25・28・32・35号住居跡と類似している。時期は，出土遺物の様相などから，前期中葉（４世紀初頭～４世紀前葉）と考えられる。



第61図　第26号住居跡実測図（１）



第62図　第26号住居跡実測図（2）



第63図　第26号住居跡出土遺物実測図

第26号住居跡出土遺物観察表(第63図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
138	土師器	器台	－	(4.3)	[9.6]	長石	にぶい橙	普通	外面ヘラミガキ,内面指頭ナデ,3意	覆土中	5%
139	土師器	高坏	[21.4]	(5.5)	－	長石・赤色粒子	にぶい赤褐	普通	赤彩・ヘラミガキ	下層	10%
140	土師器	鉢	[22.8]	(5.4)	－	石英・赤色粒子	にぶい橙	普通	折り返し口辺部外面指頭圧痕,体部外面ハケ目,内面ヘラナデ	下層	5%　煤の可能性あり
141	土師器	鉢	[19.4]	(4.8)	－	石英	橙	普通	口辺部外面輪積痕・指頭圧痕,体部外面ハケ目,内面ヘラナデ	床面	5%　煤の可能性あり
142	土師器	壺	－	(8.6)	7.5	石英・長石	にぶい褐	普通	体部ヘラナデ,底部外面ヘラケズリ	下層	10%
143	土師器	壺	－	(5.0)	4.6	石英・長石	にぶい橙	普通	体部外面ヘラミガキ,内面ヘラナデ,底部外面ヘラナデ	P2	5%
144	土師器	甕	[18.6]	(4.2)	－	石英・長石	橙	普通	口唇部木口状工具によるキザミ,口辺部外面横ナデ後ヘラナデ,内面ヘラナデ	下層	5%
145	土師器	小形甕	[8.8]	(5.6)	－	石英・赤色粒子	明赤褐	普通	口唇部キザミ,口辺部赤彩・ヘラミガキ,体部外面赤彩・ヘラミガキ,内面ヘラナデ	覆土中	5%
146	土師器	ミニチュア土器	－	(1.7)	2.8	石英・赤色粒子	橙	普通	外面ヘラナデ,内面・底部外面指頭ナデ	床面	10%
TP33	土師器	壺	－	(5.1)	－	石英・長石	赤褐	普通	口唇部・折り返し口辺部外面に網目状撚糸文を施す　内面ナデ	覆土中	
TP34	土師器	壺	－	(2.3)	－	石英・長石	明褐	普通	体部外面に網目状撚糸文を施す　内面ナデ	覆土中	

番号	種別	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特徴	出土位置	備考
DP6	不明土製品	10.1	4.8	0.7	22.7	粘土	両面粉痕,胎土に植物繊維を多量に含有	床面	

第27号住居跡（第64・65図）

位置　調査区東部のC5j4区で，標高23.8mの台地平坦部に位置している。

確認状況　全体的にトレンチャーの撹乱を受けており，部分的に壁や床及び内部施設を確認した。遺存状況は不良である。

形状　長軸4.01m，短軸3.98mの方形である。壁は高さ28～32cmで，外傾して立ち上がっている。主軸方向はN－33°－Eである。

床　ほぼ平坦である。壁際は広く軟弱で，炉の南側を中心に踏み固められている。炉の南約45cmの中央部北東側の床面には，火熱により赤変した部分が見られる。

ピット　撹乱により不明である。

炉　2か所。炉1は地床炉で床面から6cmほど掘りくぼめられ，炉2の西側に重複して位置している。炉2も地床炉で床面から4cmほど掘りくぼめられている。どちらも北東壁の中央部寄りに偏って位置し，炉床は火熱により赤変硬化している。形状及び使用状況から，炉2から炉1への作り替えが推測され，覆土は2層からなる。

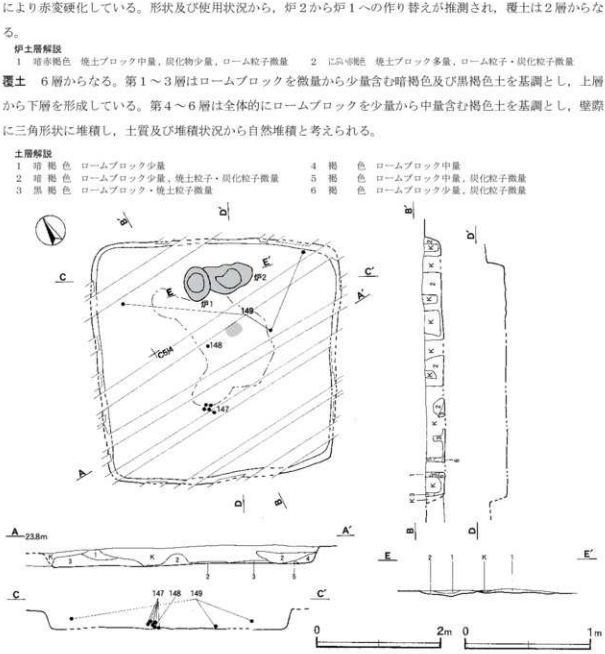
炉土層解説

1　暗赤褐色　焼土ブロック中量，炭化物少量，ローム粒子微量　　2　にぶい赤褐色　焼土ブロック多量，ローム粒子・炭化粒子微量

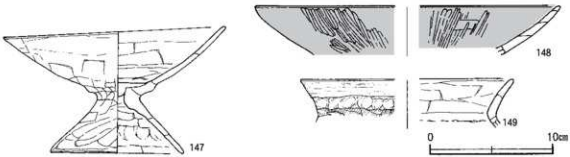
覆土　6層からなる。第1～3層はロームブロックを微量から少量含む暗褐色及び黒褐色土を基調とし，上層から下層を形成している。第4～6層は全体的にロームブロックを少量から中量含む褐色土を基調とし，壁際に三角形状に堆積し，土質及び堆積状況から自然堆積と考えられる。

土層解説

1　暗褐色　ロームブロック少量
2　暗褐色　ロームブロック少量，焼土粒子・炭化粒子微量
3　黒褐色　ロームブロック・焼土粒子微量
4　褐　色　ロームブロック中量
5　褐　色　ロームブロック中量，炭化粒子微量
6　褐　色　ロームブロック少量，炭化粒子微量



第64図　第27号住居跡実測図



第65図　第27号住居跡出土遺物実測図

遺物出土状況　土師器片198点（高坏26，壺19，甕153）が中央部の覆土下層から床面にかけて廃棄されたような状態で出土している。ほとんどの遺物は破片で，147は中央部の南側の覆土下層から床面にかけて潰れた状態で出土している。

所見　炉は北東壁の中央部寄りに偏り，ほぼ同位置での作り替えが推測され，その南約45cmの床の赤変部分も，炉的な性格がうかがえる。住居形態では，内部施設のあり方が異なるものの，炉が壁の中央部寄りに偏っていることや，床の赤変部分が存在していることから，第19・22・24号住居跡と類似している。時期は，出土遺物の様相や，炉が壁の中央部寄りに偏っていることから，前期中葉（４世紀初頭～４世紀前葉）と推定される。

第27号住居跡出土遺物観察表(第65図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
147	土師器	高坏	17.8	10.4	10.8	石英・長石	にぶい黄橙	普通	坏部ヘラナデ，中央部穿孔，脚部外面ヘラナデ，内面ヘラナデ・指頭圧痕	下層～床面	70%　Pl.27
148	土師器	高坏	25.0	(4.0)	－	石英	にぶい赤褐	普通	赤彩・ヘラミガキ	床面	5%
149	土師器	甕	(17.6)	(4.0)	－	石英・赤色粒子	にぶい橙	普通	外面横ナデ・指頭圧痕・ハケ目，内面ヘラナデ	中層～下層	5%

第28号住居跡（第66・67図）

位置　調査区南東部のD3b8区で，標高23.8mの台地平坦部に位置している。

確認状況　北西及び南東壁の一部は現代の廃穴により撹乱され，壁の上部や覆土はトレンチャーの撹乱を受けている。遺存状況は不良である。

形状　長軸6.58m，短軸5.92mの方形である。壁は高さ20～30cmで，外傾して立ち上がっている。主軸方向はN－49°－Wである。

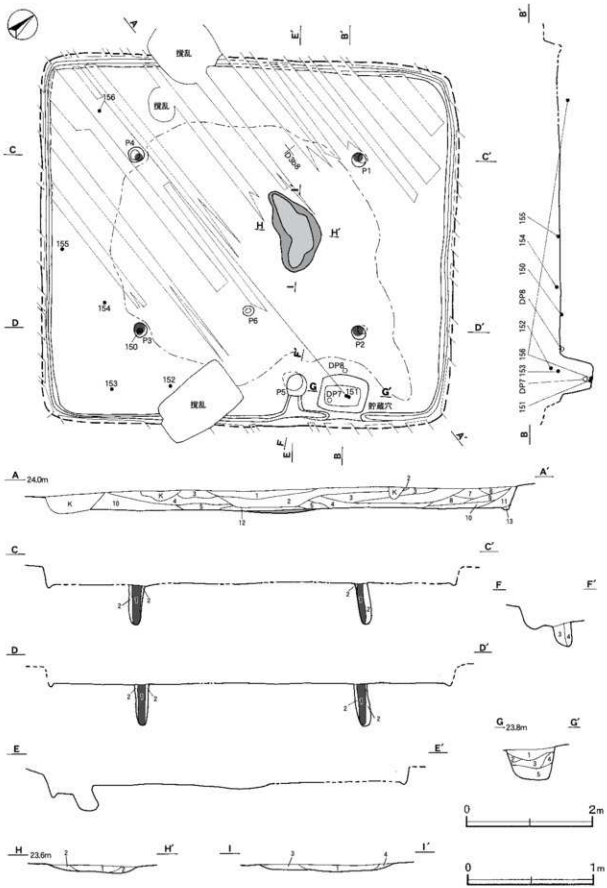
床　ほぼ平坦である。主柱穴の内側を中心に踏み固められ，壁際は軟弱である。壁溝は四壁の直下で確認され，深さは４～８cmである。

ピット　６か所。Ｐ１～Ｐ４は配置から主柱穴で，深さは63～67cmである。覆土は２層で，柱痕跡と埋土からなる。柱痕跡はロームブロックを少量含んだ締まりの弱い黒褐色土で，埋土はロームブロックを中量含む褐色土である。Ｐ５は炉と対峙して位置することから，出入り口施設に関連すると考えられる。南東壁側に斜めに掘り込まれており，深さは39cmである。Ｐ６は性格不明で，深さは26cmである。

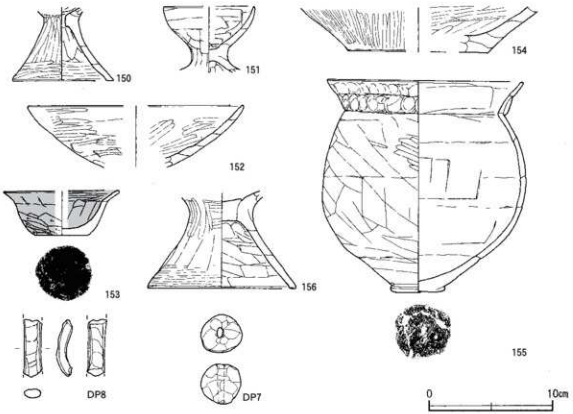
ピット土層解説

1　黒褐色　ロームブロック少量，焼土粒子・炭化粒子微量
2　褐　色　ロームブロック中量，焼土粒子・炭化粒子微量
3　暗褐色　ロームブロック少量，炭化粒子微量
4　褐　色　ロームブロック中量

貯蔵穴　底面はほぼ平坦で，深さは52cmである。覆土は５層からなり，ロームブロックを少量含む黒褐色土を基調として覆土上層から中層を形成している。覆土下層はロームブロックを中量含む締まりの弱い暗褐色土である。土質及び堆積状況から自然堆積と考えられる。



第66図　第28号住居跡実測図



第67図　第28号住居跡出土遺物実測図

貯蔵穴土層解説

1　黒　褐　色　炭化材少量，ロームブロック・焼土粒子微量
2　黒　褐　色　ロームブロック少量
3　黒　褐　色　ロームブロック・炭化物微量
4　褐　　色　ロームブロック少量，炭化粒子微量
5　暗　褐　色　ロームブロック中量，焼土粒子・炭化粒子微量

炉　地床炉で床面から８cmほど掘りくぼめられ，中央部の北側で主柱穴の内側に位置している。炉床は火熱により赤変硬化し，覆土は４層からなる。

炉土層解説

1　暗赤褐色　焼土ブロック中量，ローム粒子・炭化物微量
2　暗赤褐色　焼土ブロック少量，ロームブロック・炭化物微量
3　暗赤褐色　焼土ブロック少量，ロームブロック・炭化粒子微量
4　黒　褐　色　焼土ブロック・ロームブロック・炭化物微量

覆土　13層からなる。第１～５層はロームブロックと焼土粒子及び炭化物を微量から少量含む黒褐色及び暗褐色土で，周囲から土砂が流入したような堆積状況を示している。第６～11層は，壁際に三角形状に堆積している暗褐色土である。第12層は炉の上面を中心とした範囲に認められ，第13層は壁溝の埋土である。土質及び堆積状況から，自然堆積と考えられる。

土層解説

1　暗　褐　色　ロームブロック・焼土粒子・炭化粒子微量
2　暗　褐　色　ロームブロック少量，焼土粒子・炭化粒子微量
3　褐　　色　ロームブロック少量，炭化粒子微量
4　暗　褐　色　ロームブロック・焼土粒子・炭化物微量
5　黒　褐　色　ロームブロック少量，焼土ブロック・炭化物微量
6　暗　褐　色　ロームブロック・炭化粒子微量
7　暗　褐　色　ロームブロック・焼土ブロック・炭化粒子微量
8　暗　褐　色　炭化材少量，ロームブロック・焼土粒子微量
9　暗　褐　色　ロームブロック少量，炭化物微量
10　暗　褐　色　ロームブロック中量，焼土粒子・炭化粒子微量
11　暗　褐　色　ロームブロック・炭化物微量
12　黒　褐　色　ロームブロック・焼土ブロック・炭化物微量
13　黒　褐　色　ロームブロック微量

遺物出土状況　土師器片198点（器台４，高坏15，壺76，甕103），土製品２点（球状土錘，不明）が覆土中層から下層にかけて出土している。いずれも破片で，廃棄されたものや周囲から流入したものと考えられる。また，貯蔵穴の覆土中層から下層にかけて壺・甕・高坏の破片がまとまって出土し，151・156・DP７が相当する。150はＰ３の覆土上面，DP８は貯蔵穴付近の床面からそれぞれ出土している。南西部の覆土下層からは，焼土ブロックや炭化材が散在して出土している。限定的な分布から，廃棄されたものと考えられる。

所見　炉は中央部北側で主柱穴の内側に位置し，炉と対峙する位置に出入り口施設に関連するピットと，隣接して貯蔵穴を設ける住居形態は，第２・５・20・25号住居跡と類似し，また，炉を通る主軸が竪穴の中心軸よりも一方に偏っているのは，第８・26・32・35号住居跡に類似している。時期は，出土遺物の様相などから，前期中葉（４世紀初頭～４世紀前葉）と考えられる。

第28号住居跡出土遺物観察表（第67図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
150	土師器	器台	－	(6.0)	8.2	石英・長石	橙	普通	外面ヘラミガキ，内面ヘラナデ後ヘラミガキ	P3	50%
151	土師器	高坏	[7.4]	(5.3)	－	石英・長石・赤色粒子	橙	普通	坏部・脚部外面ヘラナデ，脚部内面指頭ナデ	貯蔵穴	25%
152	土師器	高坏	[17.6]	(5.0)	－	石英	橙	普通	外面ヘラナデ後ヘラミガキ，内面ヘラミガキ	中層	5%
153	土師器	鉢	[9.2]	3.6	4.3	石英・赤色粒子	にぶい橙	普通	外面ヘラナデ・赤彩後ヘラケズリ，内面赤彩，口辺部内面ヘラミガキ，体部内面ヘラナデ，底部外面ヘラケズリ	下層	70%　PL28
154	土師器	壺	－	(3.7)	[11.4]	長石・赤色粒子	にぶい橙	普通	体部ヘラミガキ，底部外面ヘラナデ	下層	5%
155	土師器	甕	16.0	17.2	4.4	石英・長石・赤色粒子	にぶい赤褐	普通	口辺部外面輪積痕・指頭圧痕，口辺部内面・体部ヘラナデ，底部外面ヘラナデ	床面	85%　PL30
156	土師器	台付甕	－	(7.9)	12.0	石英・長石	橙	普通	外面ヘラナデ後ヘラミガキ・横ナデ，内面ヘラナデ	貯蔵穴	10%

番号	種別	径	厚さ	孔径	重量	材質	特徴	出土位置	備考
D97	球状土錘	3.3	3.2	0.6	31.9	粘土	ナデ調整，中央部一方向からの穿孔	貯蔵穴	PL31

番号	種別	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特徴	出土位置	備考
D98	不明土製品	(4.6)	(1.4)	(0.7)	(7.7)	粘土	把手状，両面指頭圧痕，側面ナデ，両端欠損	床面	

第29号住居跡（第68・69図）

位置　調査区中央部のD５j9区で，標高23.9mの台地平坦部に位置している。

確認状況　南部の壁の上部や覆土，床面などはトレンチャーの撹乱を受けており，遺存状況は不良である。

形状　長軸6.32m，短軸6.14mの方形である。壁は高さ16～34cmで，外傾して立ち上がっている。主軸方向はN－45°－Wである。

床　ほぼ平坦である。全体的に軟弱で，炉の周囲は踏み固められている。

ピット　５か所。Ｐ１～Ｐ４は配置から主柱穴で，深さは50～67cmである。いずれの覆土も，ロームブロックを少量含む褐色土の単一層であり，柱痕跡などは確認できなかった。Ｐ５は深さ８cmと極めて浅く，主柱穴の内側に位置していることなどから，出入り口施設に関連するピットとは考え難く，性格は不明である。

ピット土層解説
1　褐　色　ロームブロック中量

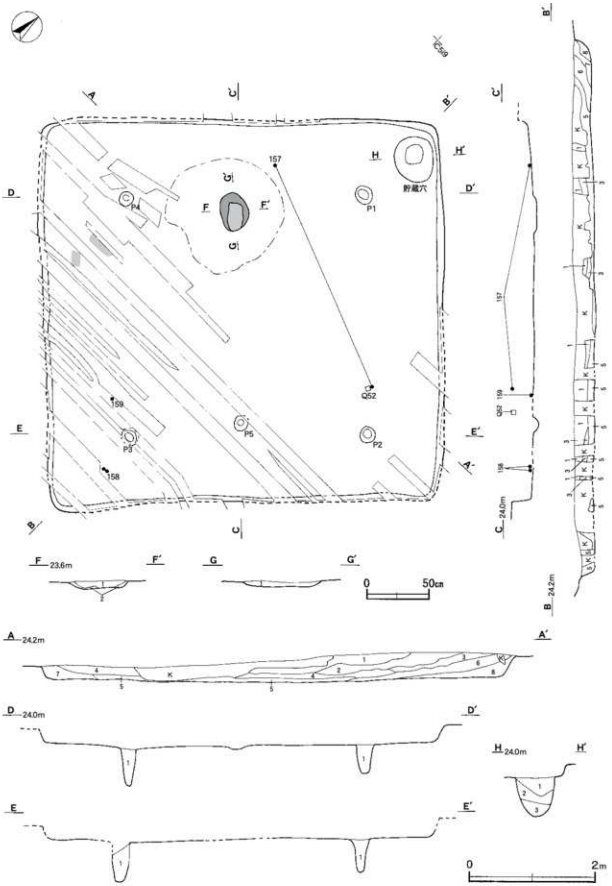
貯蔵穴　底面は皿状を呈し，深さは58cmである。覆土は３層からなり，ロームブロックを少量含む暗褐色及び褐色土を基調とし，土質及び堆積状況から自然堆積と考えられる。

貯蔵穴土層解説
1　暗褐色　ロームブロック少量，炭化粒子微量
2　褐　色　ロームブロック少量
3　暗褐色　ロームブロック少量，炭化物微量

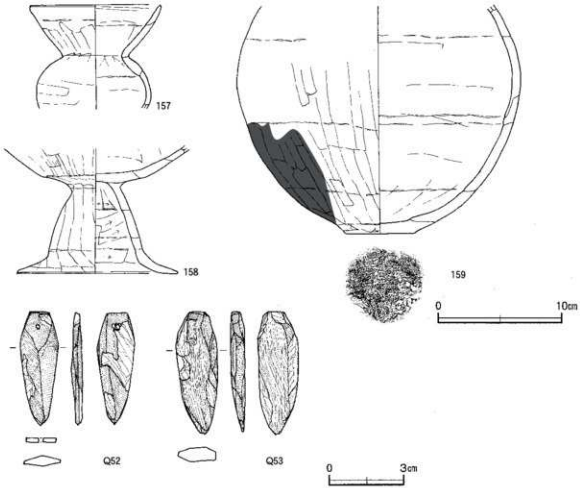
炉　地床炉で床面から６cmほど掘りくぼめられ，北西壁の中央部寄りに偏って位置している。炉床は火熱により赤変硬化し，覆土は２層からなる。

炉土層解説
1　黒褐色　焼土ブロック少量，ロームブロック・炭化物微量　　2　褐　色　ロームブロック少量

覆土　８層からなる。第１～４層はロームブロックを微量から少量含む黒褐色土を基調とし，上層から中層を形成して，レンズ状堆積を示している。第５層は下層で床面を広く覆い，第６～８層はロームブロックを少量から中量含む暗褐色土で，壁際に三角形状に堆積している。土質及び堆積状況から，自然堆積と考えられる。



第68図　第29号住居跡実測図



第69図　第29号住居跡出土遺物実測図

土層解説

1　黒褐色　ロームブロック・炭化粒子微量
2　黒褐色　ロームブロック・焼土粒子・炭化物微量
3　暗褐色　ロームブロック少量，焼土粒子微量
4　黒褐色　ロームブロック少量，炭化粒子微量
5　暗褐色　ロームブロック少量，焼土粒子・炭化粒子微量
6　暗褐色　ロームブロック中量，炭化物微量
7　暗褐色　ロームブロック少量，炭化粒子微量
8　褐　色　ロームブロック中量，炭化粒子微量

遺物出土状況　土師器片92点（坩22，高坏6，甕64），滑石製模造品2点（剣形品）が覆土中層から下層にかけて廃棄されたような状況で出土している。Q52・Q53は東部の覆土中層，158・159は南コーナー部付近の床面からそれぞれ出土している。

所見　炉は北西壁の中央部寄りに偏り，コーナー部に貯蔵穴を設け，出入り口施設に関連するピットがないなど住居形態に特徴が見られ，第6・9・14・22・23号住居跡と類似している。時期は，出土遺物の様相などから，中期中葉（5世紀中葉）と考えられる。

第29号住居跡出土遺物観察表（第69図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
157	土師器	坩	10.6	(8.4)	－	石英・長石	橙	普通	ヘラナデ	上層～下層	5% 内・外面摩滅
158	土師器	高坏	－	(10.3)	13.1	石英・長石	橙	普通	坏部ヘラナデ，脚部外面ヘラナデ，内面ヘラケズリ	床面	40% 坏部内面摩滅
159	土師器	甕	－	(18.5)	5.8	石英・赤色粒子	にぶい橙	普通	体部外面ヘラケズリ，内面ヘラナデ，底部外面ヘラケズリ	床面	4%　煤付着

番号	種別	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特徴	出土位置	備考
Q52	剣形模造品	4.5	1.6	0.5	3.8	滑石	片面両刃状，裏面中央部穂，全面研磨調整，上部穿孔，孔径0.2cm	中層	PL34
Q53	剣形模造品	4.9	1.6	0.5	6.2	滑石	両面平滑，全面研磨調整	覆土中	PL34

第31号住居跡（第70・71図）

位置　調査区北西部のA2j4区で，標高24.4mの台地平坦部に位置している。

重複関係　第29号土坑を掘り込んでいる。南東壁の上部を撹乱されているが，遺存状況は良好である。

形状　長軸4.60m，短軸4.53mの方形である。壁は高さ35～42cmで，外傾して立ち上がっている。主軸方向はN－35°－Wである。

床　ほぼ平坦で，壁際を除いて踏み固められている。中央部には火熱により赤変した5か所の範囲が見られる。

ピット　2か所。P1は炉と対峙して位置していることから，出入り口施設に関連すると考えられ，深さは18cmである。覆土は2層からなり，ローム ブロックを少量含む暗褐色を基調としている。P2は性格不明で，深さは6cmである。

ピット土層解説

1　暗 褐 色　ローム ブロック・炭化粒子微量　　2　暗 褐 色　ローム ブロック微量

貯蔵穴　底面は皿状を呈し，深さは33cmである。覆土は2層からなり，含有物の少ない暗褐色及び黒褐色土を基調としている。土質及び堆積状況から自然堆積と考えられる。

貯蔵穴土層解説

1　暗 褐 色　ローム ブロック・焼土ブロック・炭化物微量　　2　黒 褐 色　ローム ブロック・炭化粒子微量

炉　2か所。炉1は地床炉で掘り込みは極浅く，炉2の北西側に隣接している。炉2も地床炉で掘り込みは極浅く，ほぼ中央部に位置している。どちらの炉床もほぼ床面と同じ高さで，火熱により赤変硬化している。形状及び使用状況から，同時に使用されていたと推測され，覆土は単一層である。

炉土層解説

1　にぶい赤褐色　焼土ブロック中量，炭化材少量，ローム粒子微量

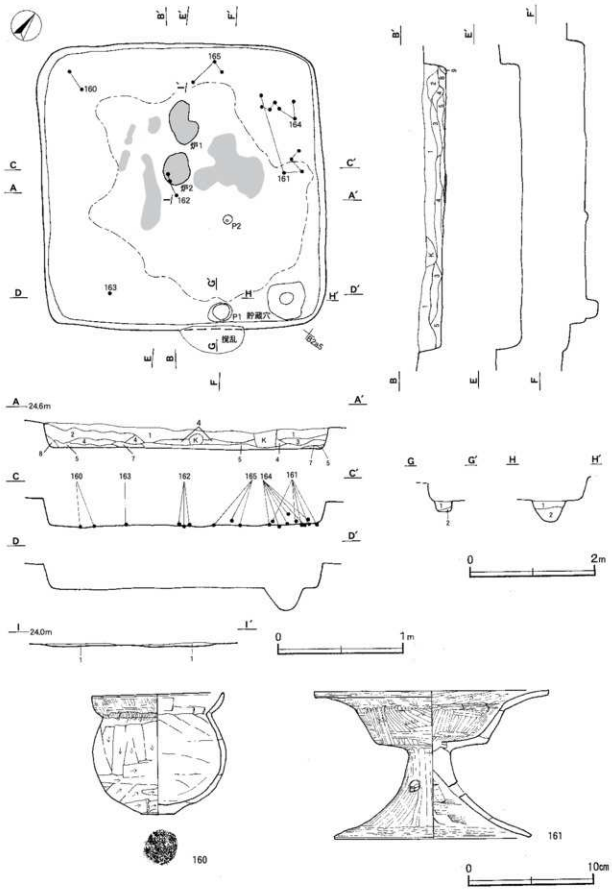
覆土　9層からなる。第1～4層はローム ブロックを少量から中量含む褐色及び黒褐色土を基調とし，上層から中層を形成している。第5～9層は暗褐色及び褐色土を基調とし，多量の炭化材と焼土粒子などを含有していることから焼失に伴って形成されたと考えられる。全体的に乱れた堆積状況を示しており，壁際に三角形状に堆積していないことなどから，焼失後，時間をあけずに埋め戻されたものと推測される。

土層解説

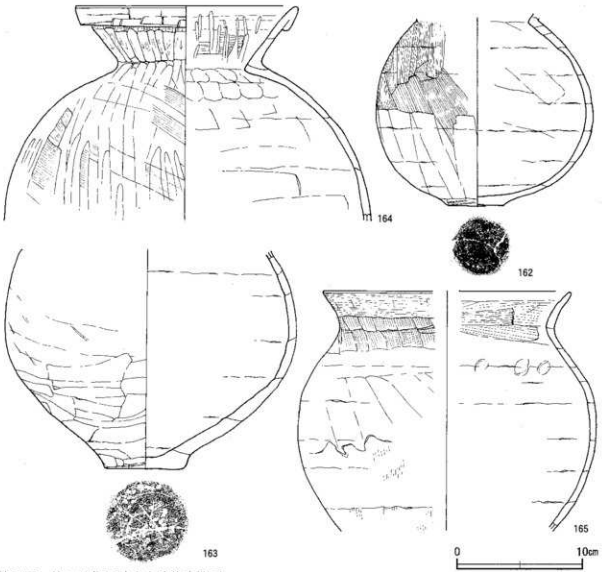
1　褐　　色　ローム ブロック中量
2　黒 褐 色　ローム ブロック少量
3　褐　　色　ローム ブロック少量
4　黒 褐 色　ローム ブロック少量，炭化粒子微量
5　暗 褐 色　炭化材中量，ローム ブロック少量，焼土粒子微量
6　褐　　色　ローム ブロック・炭化材少量
7　褐　　色　ローム ブロック・炭化物少量，焼土粒子微量
8　暗 褐 色　炭化物少量，ローム ブロック・焼土粒子微量
9　暗 褐 色　ローム ブロック・炭化物微量

遺物出土状況　土師器片478点（坩25，高坏30，壺208，甕215）が覆土下層から床面にかけて比較的まとまって出土している。ほとんどが破片で，接合関係が数多く見られることから，大半は廃棄されたものと考えられる。163は南コーナー部付近の床，164は北コーナー部付近の床面からそれぞれ出土し，その残存状況から廃棄時にはすでに破損していたと推測される。炭化材は，中央部から北部の覆土下層や床面から散在した状態で検出されている。

所見　焼失した住居と推測される。出土した炭化材の形状には角材や板材などが見られ，上屋の建築材と推定される。炭化材の量は少ないが，中央部の床が火熱により赤変していることから判断して，かなりの燃焼であったと推測される。出土した遺物は，接合関係が多数認められるが，ほとんどが破片であることから，焼失に前後して廃棄されたものが大半であると推測される。隣接して設けられた2か所の炉は掘り込みがほとんど見られず，長期にわたって使用されたとは考えにくい状況であり，作り替えの可能性もあるが，同時に使用されていたと推測される。また，炉が中央部の北側に位置し，コーナー部寄りに貯蔵穴を設け，炉と対峙した位置に出入り口施設に関連するピットを有するなど住居形態に特徴が見られ，第26・32・35号住居跡と類似している。時期は，出土遺物の様相などから，前期中葉（4世紀初頭～4世紀前葉）と考えられる。



第70図　第31号住居跡・出土遺物実測図



第71図　第31号住居跡出土遺物実測図

第31号住居跡出土遺物観察表(第70・71図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
160	土師器	小形甕	10.5	9.7	2.6	長石	にぶい橙	普通	口頸部外面ハケ目後横ナデ，体部外面ヘラケズリ，内面ヘラナデ，底部外面ヘラケズリ	床面	70%　PL.29
161	土師器	高坏	18.9	11.8	15.9	石英・長石・赤色粒子	橙	普通	脚部外面ハケ目後ヘラミガキ・横ナデ，脚部外面ヘラミガキ・横ナデ，内面ハケ目・横ナデ，3箇	下層～床面	75%　PL.28
162	土師器	壺	－	(15.3)	4.3	石英・長石	にぶい橙	普通	体部外面ハケ目後ヘラナデ，内面ヘラナデ，底部外面ヘラナデ	下層～床面	60%
163	土師器	壺	－	(17.5)	6.4	石英	にぶい橙	普通	外面ヘラナデ	床面	60%　内面摩滅，底部外面木葉痕
164	土師器	壺	17.8	(17.1)	－	長石	にぶい褐	普通	折り返し口頸部外面ヘラナデ，頸部ハケ目後ヘラケズリ・ヘラナデ，体部外面ハケ目後ヘラナデ，内面ヘラナデ・指頭圧痕	中層～床面	45%　PL.30
165	土師器	甕	19.8	(19.1)	－	石英・長石	にぶい褐	普通	口頸部ハケ目後横ナデ，体部外面ハケ目後ヘラナデ，内面ヘラナデ	下層～床面	15%

第32号住居跡（第72～74図）

位置　調査区北西部のB2a7区で，標高24.0mの台地平坦部に位置している。

確認状況　倒木痕により覆土及び床の一部は撹乱されているが，確認した住居跡の中では，遺存状況が最も良好である。

形状　長軸5.40m，短軸5.00mの方形である。壁は高さ20～53cmで，ほぼ直立して立ち上がっている。主軸方

向はN－37°－Wである。

床　ほぼ平坦である。壁際を除いて踏み固められている。壁際の軟弱な範囲は，南西壁側で1.2～1.4mほどと他所よりも広く，その境界は主柱穴のＰ３とＰ４を結んだラインにほぼ相当して，極めて明瞭であり，南西壁側の床には敷物などが存在していた可能性が考えられる。壁溝は北西壁と北東壁の大半を除いた四壁の直下で確認され，深さは４～10cmである。また，壁直下には深さ２～ 14cmの小穴が不規則に穿たれており，特に壁溝がめぐらない北西及び北東壁の直下に並んでいる。南東壁の中央部には，壁溝からほぼ直角に延びる間仕切溝が確認され，主柱穴のＰ２とＰ３を結んだラインの近くまで達しており，深さは６～８cmである。

ピット　４か所。Ｐ１～Ｐ４は配置から主柱穴で，深さは41～60cmである。Ｐ３・Ｐ４で柱痕跡が確認され，覆土は含有物の少ない締まりの弱い黒褐色土であり，埋土はローム ブロックを多量に含む褐色土であるが，Ｐ１・Ｐ２の状況は不明である。

ピット土層解説

1　黒 褐 色　ローム ブロック少量，炭化物微量
2　褐　　色　ローム ブロック多量

貯蔵穴　底面はほぼ平坦で，深さは24cmである。覆土は３層からなる。上層から中層にかけてローム ブロックを中量含む褐色土が厚く堆積し，下層は焼土ブロックや炭化材を中量含む暗褐色及び黒色土である。壁の上部が火熱により赤変していることや，炭化した板材が内部に落ち込んだ状況で出土していることから，焼失した後に埋め戻されたと推測される。

貯蔵穴土層解説

1　褐　　色　ローム ブロック中量，炭化粒子微量
2　暗 褐 色　ローム ブロック・焼土ブロック中量，炭化物微量
3　黒　　色　炭化材多量，焼土ブロック中量，ローム粒子微量

炉　地床炉で床面から10cmほど掘りくぼめられ，中央部北側に位置している。炉床は火熱により赤変硬化している。覆土は単一層である。

炉土層解説

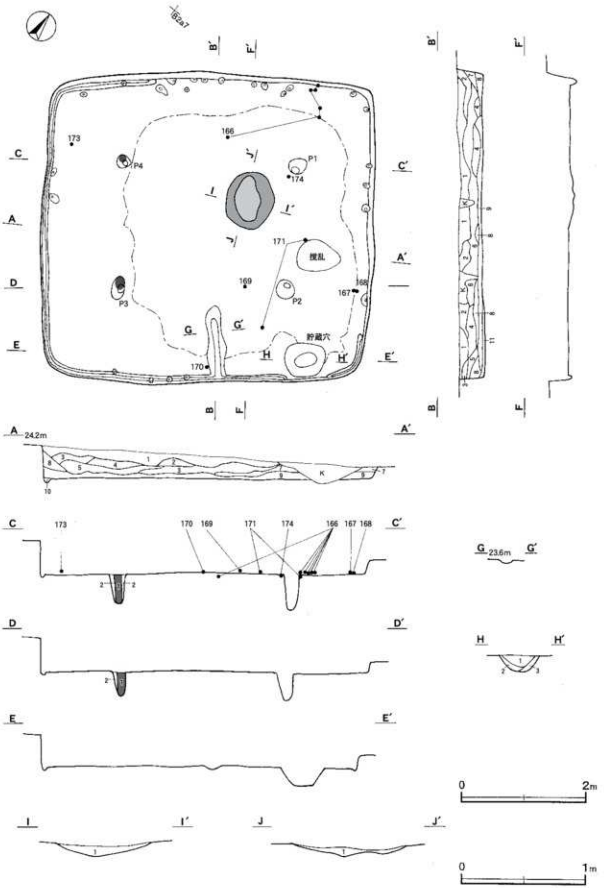
1　黒　　色　焼土ブロック・炭化物少量，ローム ブロック微量

覆土　11層からなる。第１～６層はローム ブロックを少量から中量含む暗褐色及び褐色土を基調とし，上層から中層を形成している。乱れた堆積状況を示し，埋め戻されたものと推測される。第７～９層は焼土ブロックや炭化材を中量から多量含む暗褐色及び黒褐色土を基調とし，床面のほぼ全域に堆積している。特に第９層は多量の炭化材や焼土ブロックなどを含有していることから，焼失に伴って形成されたと考えられる。また，第10層は壁溝の埋土で，第11層は間仕切溝の覆土である。全体的に乱れた堆積状況を示し，壁際に三角形状に堆積していないことなどから，焼失後，時間をあけずに埋め戻されたものと推測される。

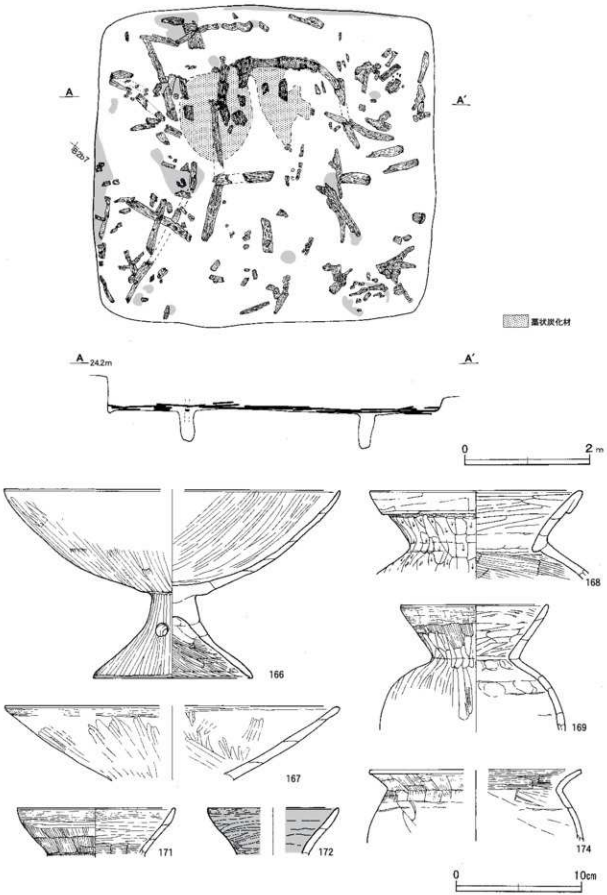
土層解説

1　褐　　色　ローム ブロック中量，炭化粒子微量
2　暗 褐 色　ローム ブロック少量，炭化物微量
3　黒 褐 色　ローム ブロック・炭化物微量
4　褐　　色　ローム ブロック中量，炭化材少量
5　褐　　色　ローム ブロック少量，焼土ブロック・炭化物微量
6　暗 褐 色　ローム ブロック少量，焼土粒子・炭化物微量
7　暗赤褐色　焼土ブロック中量，ローム ブロック・炭化物微量
8　黒 褐 色　炭化材多量，ローム ブロック少量
9　暗 褐 色　炭化材・焼土ブロック多量，ローム ブロック少量
10　褐　　色　ローム ブロック中量
11　暗 褐 色　ローム ブロック・焼土粒子微量

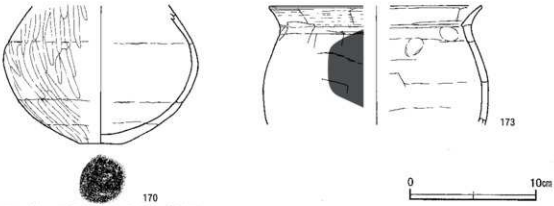
遺物出土状況　土師器片163点（器台１，坩１，高坏15，壺135，甕11），土製品２点（球状土錘），鉄製品１点（不明）が覆土下層から床面にかけて出土している。ほとんどが破片で，接合関係が数多く見られ，大半は廃棄されたものと考えられる。166は北コーナー部付近の床面に分布していた６点が接合し，168は北東壁の直下の床面，169は中央部付近の覆土下層からそれぞれ出土している。第９層を中心とする覆土下層からは，焼土ブロックや炭化材が多量に出土している。これらの範囲はほぼ全域に及び，ほとんどが床面に分布して，上屋が焼失した痕跡と認められる。炭化材の形状には丸太材と角材や板材をはじめ，北部では篠や藁などの屋根材と推定されるものも多量に出土している。それらは，壁に直交ないし平行あるいは中央から放射状に分布していることから，ほとんどが上屋の建築材と推定される。さらに，Ｐ３・Ｐ４の柱痕跡の覆土上面には，径８cmほどの



第72図　第32号住居跡実測図



第73図　第32号住居跡・出土遺物実測図



第74図　第32号住居跡出土遺物実測図

丸太材が直立したまま出土しており，柱材であった可能性が極めて高い。また，混入したナイフ形石器１点，縄文土器片18点も出土している。

所見　焼失住居である。しかし，遺棄された遺物が見られないことから，廃絶後の意図的な焼却と推測される。２か所の主柱穴で柱痕跡が確認されていることから，柱は抜き取らず，上屋の解体もなされなかったと考えられる。炭化材は，その分布状況から上屋の建築材であり，壁際を中心とした床面に堆積している焼土層は，土屋根の存在を想起させる。炉は中央部の北側に位置し，コーナー部寄りに貯蔵穴を設けるなど，住居形態に特徴が見られ，第26・31・35号住居跡と類似している。また，炉を通る主軸が竪穴の中心軸よりも北東に70cmほど偏っていることは，第８・25・28・35号住居跡に類似している。これは，炉を中心とした活動空間が北東部に偏っており，南西壁側は床に敷物などが存在していた寝間と考えられ，住居内部の用途を反映していると推測される。時期は，出土遺物の様相などから，前期中葉（４世紀初頭～４世紀前葉）と考えられる。

第32号住居跡出土遺物観察表(第73･74図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
166	土師器	高坏	(26.6)	14.8	12.7	石英・長石	明赤褐	普通	坏部ハケ目後ヘラミガキ，脚部外面ヘラミガキ，内面ハケ目，３孔	床面	70%　PL26
167	土師器	高坏	(26.6)	(5.8)	－	石英・長石・赤色粒子	にぶい橙	普通	外面横ナデ・ヘラミガキ，内面ヘラミガキ	床面	10% 内・外面摩滅
168	土師器	壺	16.8	(6.9)	－	石英・赤色粒子	橙	普通	折り返し口辺部外面ヘラナデ，頸部～体部外面ヘラケズリ，口辺部内面ヘラナデ，体部内面ハケ目	床面	20%
169	土師器	壺	11.6	(9.9)	－	石英・赤色粒子	橙	普通	口辺部外面ハケ目後横ナデ・ヘラナデ，体部外面ヘラナデ，口辺部内面ハケ目後ヘラナデ，体部内面指頭圧痕	下層	20%
170	土師器	壺	－	(11.0)	3.6	石英・長石・赤色粒子	にぶい黄褐	普通	外面ヘラミガキ	床面	20% 内面摩滅
171	土師器	壺	12.5	(3.8)	－	石英・長石	にぶい橙	普通	外面ハケ目後横ナデ・ヘラナデ，内面ヘラミガキ・ハケ目	床面	20%
172	土師器	坩	(10.4)	(3.7)	－	石英	橙	普通	赤彩，外面ヘラミガキ，内面ヘラナデ	覆土中	5%
173	土師器	甕	(16.8)	(9.4)	－	石英	褐	普通	口辺部外面ヘラナデ後横ナデ，口辺部内面・体部ヘラナデ	下層	10%　煤付着
174	土師器	甕	(16.8)	(5.6)	－	石英・長石・雲母	橙	普通	口辺部ハケ目，体部ハケ目・ヘラナデ	床面	5%

第33号住居跡（第75･76図）

位置　調査区北部のB3b2区で，標高23.8mの台地平坦部に位置している。

重複関係　第３号土坑に西壁の南側の上部を掘り込まれているが，遺存状況は良好である。

形状　長軸3.90m，短軸3.84mの方形である。壁は高さ27～30cmで，外傾して立ち上がっている。主軸方向はN－２°－Wである。

床　ほぼ平坦である。中央部はよく踏み固められている。西部は広い部分が軟弱である。

貯蔵穴　底面は皿状を呈し，深さは25cmと比較的浅い。覆土は４層からなり，含有物の少ない暗褐色及び黒褐色土を基調としている。土質及び堆積状況から自然堆積と考えられる。

貯蔵穴土層解説

1　暗 褐 色　ロームブロック・焼土ブロック・炭化粒子微量
2　黒 褐 色　ローム粒子・焼土粒子微量
3　暗 褐 色　ロームブロック微量
4　暗 褐 色　ロームブロック・焼土粒子・炭化粒子微量

炉　4か所。いずれも地床炉で掘り込みは極浅く，ほぼ中央部に位置している。炉床はほぼ床面と同じ高さで，火熱により赤変硬化している。規模及び位置から炉1が主炉と考えられ，その東側に位置している炉2～炉4は，床が火熱により赤変した程度である。それらは形状及び使用状況から同時に使用されていたと推測され，覆土は単一層である。

炉土層解説

1　に赤い暗色　焼土ブロック中量，ロームブロック・炭化物少量

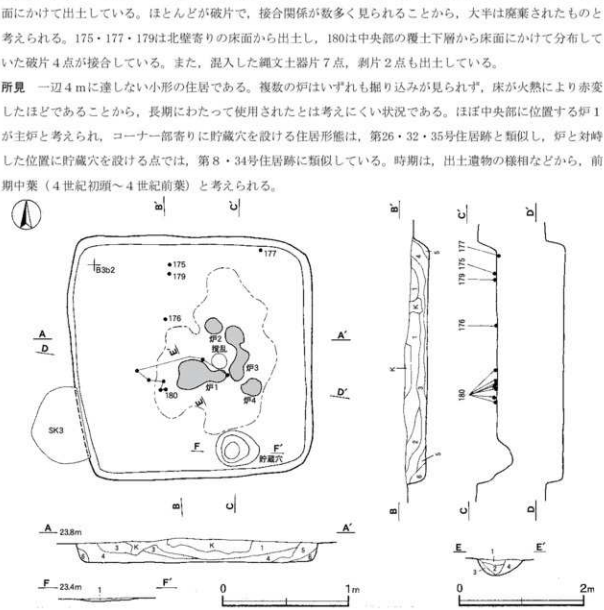
覆土　6層からなる。第1～4層はロームブロックを微量含む暗褐色及び黒褐色土を基調とし，レンズ状堆積を示して，上層から下層を形成している。第5・6層はロームブロックを少量含む暗褐色土を基調として，壁際に三角形状に堆積し，土質及び堆積状況から自然堆積と考えられる。

土層解説

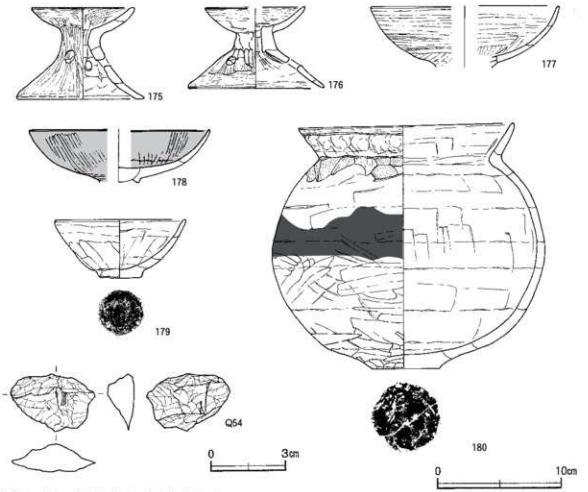
1　暗 褐 色　ローム粒子・焼土粒子・炭化物微量
2　黒 褐 色　ローム粒子・炭化粒子微量
3　暗 褐 色　ロームブロック・焼土粒子・炭化粒子微量
4　黒 褐 色　ロームブロック・焼土ブロック・炭化物微量
5　暗 褐 色　ロームブロック少量，炭化物微量
6　暗 褐 色　ロームブロック少量，炭化粒子微量

遺物出土状況　土師器片189点（器台4，高坏11，壺54，甕35，細片85），滑石製砝片1点が覆土下層から床面にかけて出土している。ほとんどが破片で，接合関係が数多く見られることから，大半は廃棄されたものと考えられる。175・177・179は北壁寄りの床面から出土し，180は中央部の覆土下層から床面にかけて分布していた破片4点が接合している。また，混入した縄文土器片7点，剥片2点も出土している。

所見　一辺4mに達しない小形の住居である。複数の炉はいずれも掘り込みが見られず，床が火熱により赤変したほどであることから，長期にわたって使用されたとは考えにくい状況である。ほぼ中央部に位置する炉1が主炉と考えられ，コーナー部寄りに貯蔵穴を設ける住居形態は，第26・32・35号住居跡と類似し，炉と対峙した位置に貯蔵穴を設ける点では，第8・34号住居跡に類似している。時期は，出土遺物の様相などから，前期中葉（4世紀初頭～4世紀前葉）と考えられる。



第75図　第33号住居跡実測図



第76図　第33号住居跡出土遺物実測図

第33号住居跡出土遺物観察表(第76図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
175	土師器	器台	8.4	7.3	10.2	長石・赤色粒子	にぶい橙	普通	器受部外面ハケ目後横ナデ，内面ハケ目後ヘラミガキ，中央部穿孔，脚部外面ヘラミガキ，内面ヘラナデ，3窓	下層	80% PL.25
176	土師器	器台	[8.2]	6.5	11.1	石英・長石・赤色粒子	橙	普通	器受部ヘラナデ後横ナデ，中央部穿孔，脚部外面ハケ目後ヘラナデ，内面ヘラナデ・横ナデ，3窓	床面	65% PL.25
177	土師器	高坏	[15.4]	(4.9)	－	石英・長石	にぶい黄橙	普通	ヘラミガキ	床面	25%
178	土師器	高坏	[14.6]	(4.1)	－	長石	にぶい赤褐	普通	赤彩・ヘラミガキ	覆土中	15%
179	土師器	鉢	10.6	4.8	3.5	石英・長石・赤色粒子	にぶい橙	普通	ヘラナデ	下層	75% PL.28
180	土師器	甕	17.5	19.8	5.3	石英・赤色粒子	にぶい橙	普通	口辺部ヘラナデ後指頭圧痕，体部外面ハケ目後ヘラナデ，内面・底部外面ヘラナデ	下層～床面	85% PL.30 煤付着

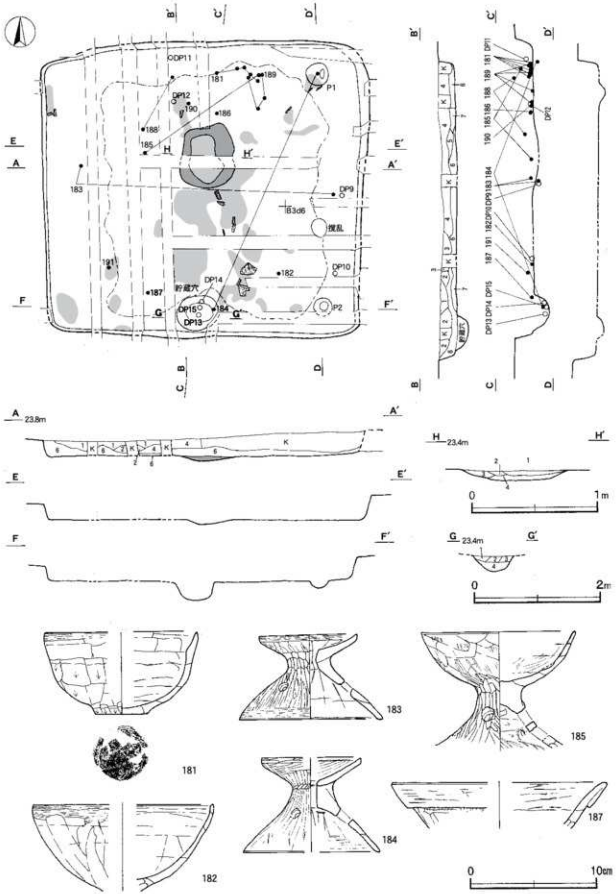
番号	種別	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特徴	出土位置	備考
Q54	剥片	2.3	3.4	1.1	7.4	滑石	両面擦痕・線条痕	覆土中	

第34号住居跡（第77・78図）

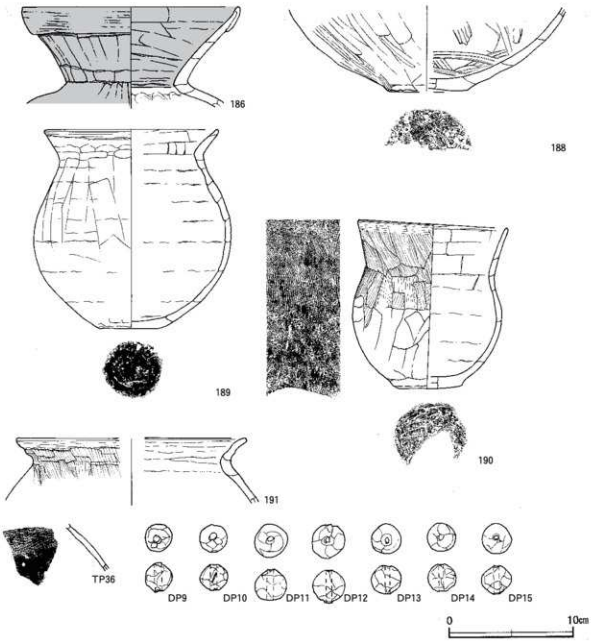
位置　調査区北部のB3c5区で，標高23.8mの台地平坦部に位置している。

確認状況　縦横にトレンチャーの攪乱を受けているが，壁や床及び内部施設のほぼ全容を確認した。遺存状況は不良である。

形状　長軸5.07m，短軸4.67mの方形である。壁は高さ32～38cmで，外傾して立ち上がっている。主軸方向はN－2°－Wである。



第77図　第34号住居跡・出土遺物実測図



第78図　第34号住居跡出土遺物実測図

床　ほぼ平坦である。壁際を除いて踏み固められている。壁際の軟弱な範囲は，東部と西部で幅広く，南部は狭くなっている。中央部の炉の南側を中心に，火熱により赤変した２か所の範囲が見られる。

ピット　２か所。Ｐ１・Ｐ２は性格不明で，深さは13cmである。

貯蔵穴　底面は皿状を呈し，深さは26cmと比較的浅い。覆土は４層からなり，含有物の少ない黒褐色土を基調としている。土質及び堆積状況から自然堆積と考えられる。

貯蔵穴土層解説

1　黒褐色　ロームブロック・炭化粒子微量
2　褐　色　ロームブロック少量
3　黒褐色　ロームブロック・焼土粒子微量
4　黒褐色　ロームブロック・焼土粒子・炭化粒子微量

炉　地床炉で床面から10cmほど掘りくぼめられ，中央部の北側に位置している。炉床は火熱により赤変硬化し，覆土は４層からなる。

炉土層解説

1　黒褐色　焼土ブロック少量，ロームブロック・炭化粒子微量　3　黒褐色　ロームブロック・焼土ブロック微量
2　暗赤褐色　焼土ブロック中量，ロームブロック・炭化粒子微量　4　暗赤褐色　焼土ブロック少量，ローム粒子・炭化粒子微量

覆土　7層からなる。第1～4層はロームブロックを少量含む暗褐色及び褐色土を基調とし，上層から中層を形成している。第5・6層はロームブロックと焼土ブロックを少量含む暗褐色土を基調とし，床面のほぼ全域を覆っている。第7層は床面上に点在した焼土層で，多量の焼土ブロックや炭化材などを含有していることから，焼失に伴って形成されたと考えられる。全体的に乱れた堆積状況を示し，また壁際に三角形状に堆積していないことなどから，焼失後，時間をあけずに埋め戻されたと推測される。

土層解説

1　暗褐色　ロームブロック少量
2　褐　色　ロームブロック少量，炭化物微量
3　褐　色　ロームブロック少量
4　暗褐色　ロームブロック・炭化粒子少量
5　暗褐色　ロームブロック・焼土ブロック少量，炭化粒子微量
6　暗褐色　ロームブロック・焼土ブロック少量，炭化物微量
7　明赤褐色　焼土ブロック・炭化材中量，ロームブロック微量

遺物出土状況　土師器片242点（椀21，器台9，坩3，高坏16，壺157，甕36），土製品7点（球状土錘）が覆土下層から床面にかけて出土している。中央部にはあまり遺物が見られず，北部と南部にややまとまっている。そのほとんどが破片で，接合関係が数多く見られることから，大半は廃棄されたものと考えられる。183は東壁の中央部，190は炉の北側の床面からそれぞれ出土している。DP9～DP12は壁際の床面，DP13～DP15は貯蔵穴の底面付近からそれぞれ出土している。さらに，ほぼ全域の覆土下層から床面にかけて多量の焼土ブロックが分布し，炭化材も中央部を中心に覆土下層や床面から出土している。また，混入した縄文土器片1点，剥片3点も出土している。

所見　焼失住居である。炭化材は微量であるが，上屋の建築材などと推定される。中央部の床が火熱により赤変しており，かなりの燃焼であったと推測される。さらに，床面に点在している焼土層は，土屋根の存在を想定させる。出土した遺物は，接合関係が多数認められるが，焼失に前後して廃棄されたものが大半と推測される。また，炉と対峙した位置に貯蔵穴を設ける住居形態は，第8・33号住居跡と類似している。時期は，出土遺物の様相などから，前期中葉（4世紀初頭～4世紀前葉）と考えられる。

第34号住居跡出土遺物観察表（第77・78図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
181	土師器	椀	[12.0]	6.5	4.2	石英・長石	明褐	普通	外面ヘラナデ後ヘラケズリ，内面ヘラナデ，底部外面ヘラケズリ	床面	50%
182	土師器	椀	[19.4]	(4.8)	－	石英・長石	橙	普通	外面横ナデ後ヘラナデ，内面ヘラナデ	床面	30%
183	土師器	器台	11.4	6.7	7.8	石英・長石	にぶい褐	普通	脚受部外面ハケ目後ヘラミガキ，内面ヘラナデ，中央部穿孔，脚部外面ハケ目後ヘラミガキ，内面ヘラナデ，3窓	下層～床面	75%　PL25
184	土師器	器台	[7.8]	7.5	10.8	石英・長石	明赤褐	普通	脚受部ヘラミガキ，中央部穿孔，脚部外面ハケ目後ヘラミガキ，内面ヘラナデ・ヘラミガキ，3窓	床面	55%　PL25
185	土師器	高坏	12.3	(9.2)	－	石英・長石	明赤褐	普通	坏部ハケ目後ヘラミガキ，脚部外面ヘラミガキ，内面ヘラケズリ・ハケ目，3窓	中層～下層	60%　PL27　内面摩滅
186	土師器	壺	17.7	(8.2)	－	石英	橙	普通	外面赤彩，折り返し口辺部外面ヘラミガキ，口辺部内面赤彩・ヘラナデ，頸部ヘラナデ	床面	10%
187	土師器	壺	[17.0]	(3.6)	－	長石・赤色粒子	暗灰黄	普通	折り返し口辺部外面ハケ目後ヘラナデ，体部外面ハケ目後ヘラナデ，内面ハケ目	床面	5%　内・外面摩滅
188	土師器	壺	－	(6.9)	[6.6]	石英・長石・赤色粒子	にぶい橙	普通	外面ヘラナデ，内面ハケ目・ヘラナデ，底部外面ヘラナデ	中層～下層	10%　内面摩滅
189	土師器	甕	14.2	16.1	4.9	石英・長石	にぶい橙	普通	口辺部外面横ナデ・指頭圧痕・ヘラナデ，内面・体部外面・底部外面ヘラナデ	下層～床面	60%　内面摩滅
190	土師器	甕	12.0	13.4	5.5	石英・長石・赤色粒子	にぶい橙	普通	口辺部横ナデ，体部外面ハケ目・ヘラナデ，内面・底部外面ヘラナデ	床面	85%　PL29
191	土師器	甕	[18.4]	(5.3)	－	石英・長石	にぶい黄橙	普通	外面ハケ目後横ナデ，内外ヘラナデ・S字状口縁	下層	5%
TP36	土師器	壺	－	(3.6)	－	石英・長石	橙	普通	体部外面に網目状撚糸文を施す　内面ナデ	覆土中	PL32

番号	種別	径	厚さ	孔径	重量	材　質	特　　徴	出土位置	備　考
DP 9	球状土錘	2.20	2.30	0.6	10.7	粘土	ナデ調整，中央部一方向からの穿孔	床面	PL31
DP10	球状土錘	2.30	2.12	0.5	10.9	粘土	ナデ調整，中央部一方向からの穿孔	床面	PL31
DP11	球状土錘	2.70	2.55	0.5	17.7	粘土	ナデ調整，中央部一方向からの穿孔	下層	PL31
DP12	球状土錘	2.70	2.70	0.4	19.2	粘土	ナデ調整，中央部一方向からの穿孔	床面	PL31
DP13	球状土錘	2.45	2.30	0.4	13.7	粘土	ナデ調整，中央部一方向からの穿孔	貯蔵穴	PL31
DP14	球状土錘	2.35	2.70	0.4	11.4	粘土	ナデ調整，中央部一方向からの穿孔	貯蔵穴	PL31
DP15	球状土錘	2.40	2.30	0.4	12.8	粘土	ナデ調整，中央部一方向からの穿孔	貯蔵穴	PL31

第35号住居跡（第79・80図）

位置　調査区北部のB3d8区で，標高23.8mの台地平坦部に位置している。

確認状況　壁の上部や覆土，特に北部の床面などはトレンチャーの撹乱を受けており，遺存状況は不良である。

形状　長軸4.85m，短軸4.45mの方形である。壁は高さ30～53㎝で，ほぼ直立して立ち上がっている。主軸方向はN－34°－Wである。

床　ほぼ平坦である。壁際を除いて踏み固められている。壁際の軟弱な範囲は，北東壁側で1.3～1.4mほどと他所よりも広く，その境界は極めて明瞭である。北東壁側の床には，敷物などが存在していた可能性が考えられる。中央部の炉の東側を中心に，火熱により赤変した範囲が見られる。

貯蔵穴　南コーナー部寄りに位置し，底面はほぼ平坦で，深さは10㎝である。覆土はローム ブロックや焼土ブロックを少量含む黒褐色土の単一層である。10㎝と極めて浅いため，性格は不明であるが，位置を考慮して貯蔵穴の可能性を指摘しておきたい。

貯蔵穴土層解説

1　黒 褐 色　ローム ブロック・焼土ブロック・炭化物少量

炉　地床炉で床面から10㎝ほど掘りくぼめられ，中央部の西側に位置している。炉床は特に南側が火熱により赤変硬化し，覆土は2層からなる。

炉土層解説

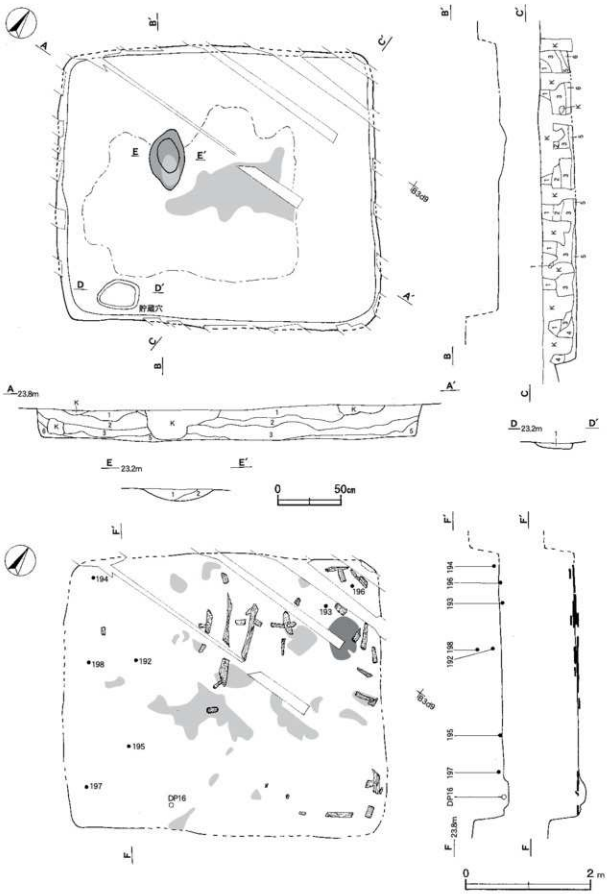
1　暗 褐 色　ローム ブロック・焼土ブロック・炭化粒子微量　　2　暗赤褐色　焼土ブロック中量祢，炭化粒子微量

覆土　6層からなる。第1～2層はローム ブロックを少量から中量含む暗褐色土を基調とし，レンズ状堆積で上層から中層を形成している。土質及び堆積状況から，自然堆積と考えられる。第3・4層はローム ブロックを中量から多量含む褐色土を基調として，全域にわたって下層を形成している。ほぼ全域の床を覆っている第5層は，多量の炭化材や焼土ブロックなどを含有していることから，焼失に伴って形成されたと考えられる。第3～5層は乱れた堆積状況を示しており，埋め戻されたと推測される。第6層は壁際に三角形状に堆積している。

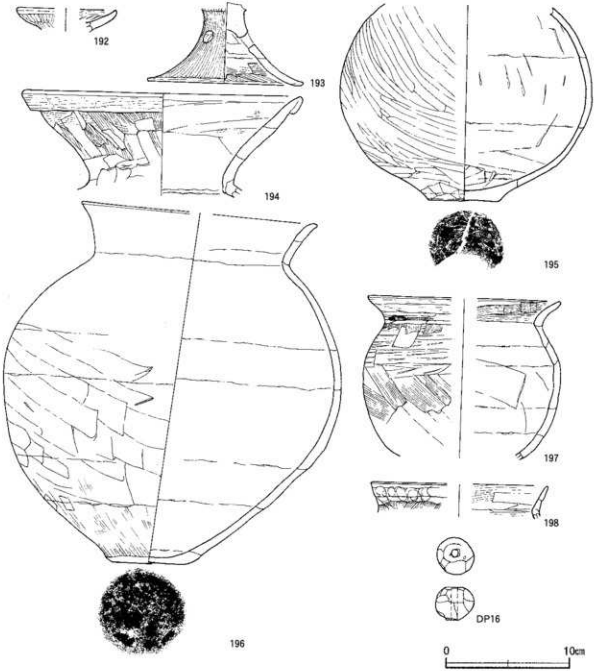
土層解説

1　暗 褐 色　ローム ブロック少量，焼土粒子・炭化粒子微量　　4　褐　　色　ローム ブロック中量，焼土粒子・炭化物微量
2　暗 褐 色　ローム ブロック中量，炭化粒子微量　　5　暗赤褐色　焼土ブロック・炭化材多量，ローム ブロック少量
3　褐　　色　ローム ブロック多量，焼土粒子・炭化粒子微量　　6　暗 褐 色　ローム ブロック少量，炭化粒子微量

遺物出土状況　土師器片214点（器台5，高坏15，壺77，甕117），土製品1点（球状土錘）が覆土下層から床面にかけて出土している。ほとんどが破片で，大半は廃棄されたものと考えられる。大形破片はいずれも壁際を中心とする覆土下層から床面にかけて分布し，196は北コーナー部の床面からほぼ正位の状態で出土している。その南側の床面から，白色粘土塊がまとまって出土している。また，覆土最下層の第5層からは，炭化材や焼土ブロックが多量に出土している。焼土ブロックはほぼ全域，炭化材は中央部の北側や北東壁際を中心に分布しており，焼失した痕跡と認められる。炭化材の形状には丸太材と角材や板材が見られ，壁に直交ないし平行して分布していることから，上屋の建築材と推定される。



第79図　第35号住居跡実測図



第80図　第35号住居跡出土遺物実測図

所見　焼失住居と推測される。しかし，遺棄された遺物が見られず，中央部の床は火熱により赤変しているが，壁際の三角形状の堆積土の上位から焼土ブロックや炭化材が出土していることから，廃絶されてわずかに窪地化した段階で意図的に焼却されたと推測される。全域の床面に点在して堆積している焼土層は，土屋根の存在を想起させる。炉は中央部の西側に位置し，コーナー部寄りに貯蔵穴を設けるなど住居形態に特徴が見られ，第26・31・32号住居跡と類似している。また，炉を通る主軸が，貯穴の中心軸よりも一方に偏っている点は，第８・25・28・32号住居跡に類似している。これは，炉を中心とした活動空間が北西部に偏っており，北東壁側は床に敷物などが存在していた寝間と考えられ，住居内部の用途を反映していると推測される。時期は，出土遺物の様相などから，前期後葉（４世紀中葉～４世紀末葉）と考えられる。

第35号住居跡出土遺物観察表（第80図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
192	土師器	器台	－	(1.8)	[8.0]	石英・長石	にぶい赤褐	普通	外面ヘラミガキ，内面ハケ目後横ナデ	下層	5%
193	土師器	器台	－	(6.0)	12.6	石英・長石	灰褐	普通	外面ヘラミガキ，内面ヘラナデ・ハケ目，3段	床面	40%
194	土師器	壺	22.5	(8.2)	－	石英	橙	普通	折り返し口辺部外面ハケ目後横ナデ，頸部ハケ目後ヘラナデ	中層	20% 内面摩滅
195	土師器	壺	－	(15.8)	5.8	石英・長石	明赤褐	普通	ヘラナデ	下層	25%
196	土師器	甕	29.3	(19.0)	6.3	長石・白色粒子	にぶい橙	普通	体部外面ハケ目後ヘラナデ，底部外面ヘラナデ	床面	35%　PL30 内面摩滅
197	土師器	甕	(15.6)	(12.8)	－	石英・赤色粒子	明赤褐	普通	口辺部外面横ナデ，口辺部内面・体部外面ハケ目，体部内面ヘラナデ	床面	20%
198	土師器	甕	[14.4]	(2.7)	－	石英・長石	灰褐	普通	口辺部外面輪積痕・指頭圧痕・ハケ目，口辺部内面ハケ目後ヘラナデ	上層	5%

番号	種別	径	厚さ	孔径	重量	材質	特徴	出土位置	備考
DP16	球状土錘	3.1	2.7	0.5	22.3	粘土	ナデ調整，中央部片側穿孔	床面	

第36号住居跡（第81図）

位置　調査区北部のB3b0区で，標高23.8mの台地平坦部に位置している。

重複関係　第32号土坑を掘り込んでいる。遺存状況はほぼ良好で，東部は調査区域外に含まれている。

形状　長軸4.73m，短軸4.01mの長方形である。壁は高さ17～32cmで，外傾して立ち上がっている。主軸方向はN－49°－Wである。

床　ほぼ平坦である。壁際を除いて踏み固められている。

ピット　1か所。P 1は性格不明で，深さは13cmである。底面は皿状を呈し，深さは26cmである。覆土は3層からなり，ロームブロックを少量から中量含む暗褐色及び褐色土を基調としている。土質及び堆積状況から，埋め戻されたものと推測される。

貯蔵穴　底面は皿状を呈し，深さは26cmである。覆土は3層からなり，ロームブロックを少量から中量含む暗褐色及び褐色土を基調としている。土質及び堆積状況から埋め戻されたものと推測される。

貯蔵穴土層解説

1　暗褐色　ロームブロック少量
2　褐　　色　ロームブロック中量
3　褐　　色　ロームブロック少量

炉　2か所。炉1は地床炉で掘り込みは極浅く，中央部の北西側に位置している。炉2も地床炉で掘り込みは見られず，北西壁の中央部寄りに偏っている。どちらの炉底も火熱により赤変硬化し，形状や使用状況及び位置から炉1が主炉と推測され，覆土は単一層である。

炉土層解説

1　赤褐色　焼土ブロック中量，ロームブロック・炭化粒子微量

覆土　10層からなる。第1～6層はロームブロックや焼土ブロックを微量から少量含む暗褐色及び黒褐色土を基調とし，上層から中層を形成している。第7～9層は暗褐色土のロームブロックや焼土ブロック及び炭化材を少量含む暗褐色土を基調とし，下層を形成している。全体的に周囲から土砂の流入を示す堆積状況のため，自然堆積と考えられる。

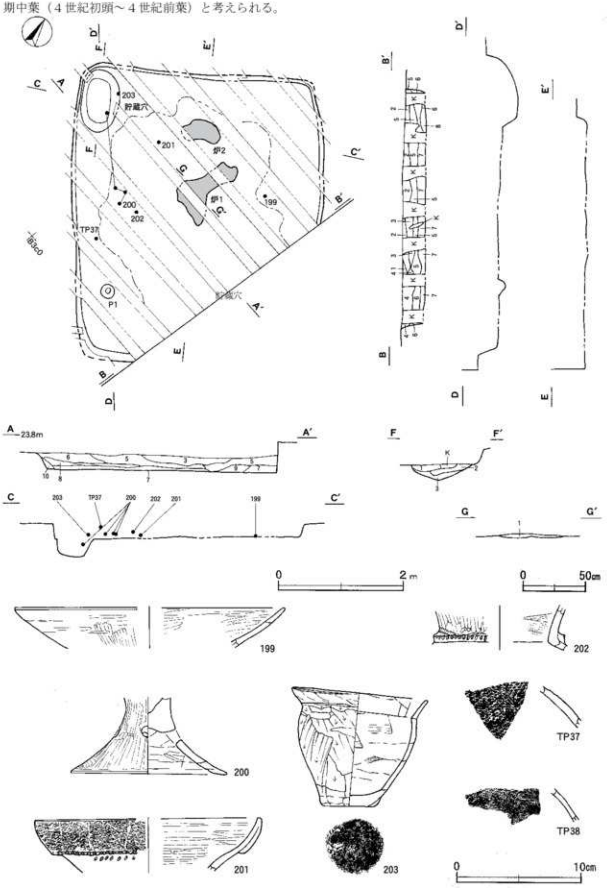
土層解説

1　暗褐色　ロームブロック・焼土粒子微量
2　黒褐色　ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子微量
3　黒褐色　焼土ブロック少量，ローム粒子・炭化粒子微量
4　黒褐色　炭化物少量，ローム粒子・焼土粒子微量
5　暗褐色　ロームブロック・焼土ブロック少量，炭化物微量
6　暗褐色　ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子微量
7　暗褐色　ロームブロック少量，焼土粒子・炭化粒子微量
8　暗褐色　ロームブロック・焼土ブロック・炭化物微量
9　暗褐色　炭化材中量，ロームブロック・焼土ブロック少量
10　褐　　色　ロームブロック少量

遺物出土状況　土師器片296点（器台2，高坏20，壺107，甕167）が覆土下層から床面にかけて出土している。ほとんどが破片で，大半は廃棄されたものと考えられる。200は東部の覆土下層から床面にかけて分布していた破片4点が接合し，203は西コーナー部の覆土下層，TP38は貯蔵穴覆土からそれぞれ出土している。

所見　平面形が長方形を呈し，西コーナー部に貯蔵穴を設けている点など，他の住居形態と著しく異なってい

る。出土遺物では網目状撚糸文を施した南関東系の壺などが注目され，時期は，出土遺物の様相などから，前期中葉（４世紀初頭～４世紀前葉）と考えられる。



第81図　第36号住居跡・出土遺物実測図

第36号住居跡出土遺物観察表(第81図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
199	土師器	高坏	(21.6)	(3.2)	－	石英	灰黄褐	普通	ヘラミガキ	床面	5%
200	土師器	高坏	－	(6.0)	12.4	石英・長石	橙	普通	外面ヘラミガキ，内面ヘラナデ，４窓	下層・貯蔵穴	45%
201	土師器	壺	(18.0)	(4.2)	－	石英・長石・赤色粒子	にぶい橙	普通	折り返し口辺部外面網目状撚糸文施文，端部木口状工具によるキザミ，内面ヘラミガキ	床面	10% 外面摩滅
202	土師器	壺	－	(3.5)	－	石英・赤色粒子	にぶい黄橙	普通	外面ヘラミガキ・キザミを有する粘土紐貼付，内面ハケ目	下層	5%
203	土師器	小形甕	10.7	9.4	4.4	石英・長石	にぶい橙	普通	外面ヘラナデ・ヘラケズリ，内面・底部外面ヘラナデ	下層	90% PL28
TP37	土師器	壺	－	(3.2)	－	石英・長石	橙	普通	体部外面に網目状撚糸文を施す　内面ナデ	下層	PL32
TP38	土師器	壺	－	(2.6)	－	石英・長石	橙	普通	体部外面に網目状撚糸文を施す　内面ナデ	P1	PL32

(2) 炉跡

第１号炉跡（第82図）

位置　調査区南部のD3d4区で，標高24.0mの台地縁辺部に位置している。

確認状況　全体的に削平を受けており，遺存状況は不良である。

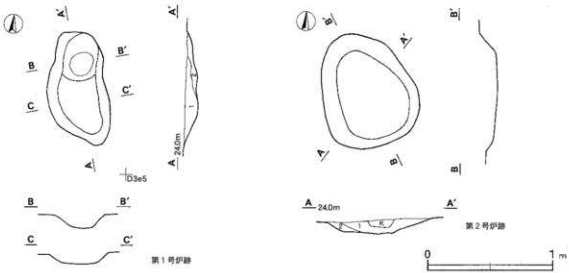
規模と形状　長径0.93m，短径0.47mの楕円形で，深さは11cmである。壁は緩やかに立ち上がっている。長径方向はN－10°－Wである。炉床はやや凹凸のある皿状を呈している。

覆土　２層からなる。

土層解説

1　赤褐色　焼土ブロック少量，ロームブロック微量　　2　褐　色　ロームブロック・炭化粒子微量

所見　確認状況から，竪穴住居に伴う炉の可能性が高い。出土遺物がないため時期は不明であるが，規模や形状及び覆土の様相などから，古墳時代前期～中期と推定される。



第82図　第１・２号炉跡実測図

第２号炉跡（第82図）

位置　調査区南部のD3c3区で，標高24.0mの台地縁辺部に位置している。

確認状況　全体的に削平を受けており，遺存状況は不良である。

規模と形状　長径0.94m，短径0.77mの楕円形で，深さは12cmである。壁は緩やかに立ち上がっている。長径方向はN－27°－Wである。炉床は皿状を呈している。

覆土　2層からなる。

土層解説
1　暗赤褐色　焼土ブロック少量，ロームブロック微量　　2　赤褐色　ロームブロック・焼土ブロック少量

所見　周辺部に床の掘り方と考えられる不整な暗褐色土の範囲が見られたが，柱穴などは確認されなかった。確認状況から，竪穴住居に伴う炉の可能性が高い。出土遺物がないため時期は不明であるが，規模や形状及び覆土の様相などから，古墳時代前期～中期と推定される。

(3)　土坑

第４号土坑（第83図）

位置　調査区北西部のＢ２e1 区で，標高24.4mの台地縁辺部に位置している。

確認状況　調査区内に同時期の遺構は確認されていない。遺存状況は良好である。

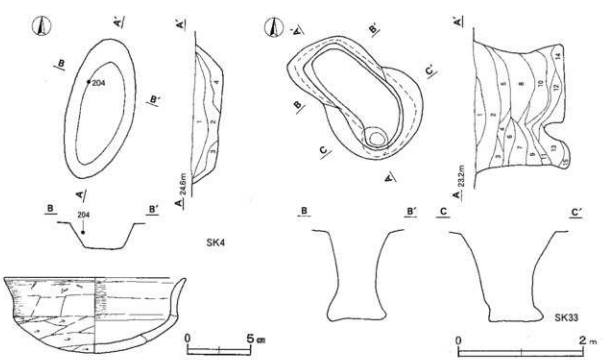
規模と形状　長径2.25m，短径1.06mの長楕円形で，深さは42cmである。長径方向はＮ－14°－Ｅで，壁は外傾して立ち上がり，底面はほぼ平坦である。

覆土　４層からなる。堆積状況は不自然なレンズ状を呈し，第２・４層に粘土ブロックを含んでいることから，人為的に埋め戻されたものと考えられる。

土層解説
1　黒褐色　ロームブロック少量，炭化粒子微量　　3　暗褐色　ローム粒子微量
2　暗褐色　ロームブロック・粘土ブロック少量，炭化物微量　　4　褐　色　粘土ブロック・ローム粒子微量

遺物出土状況　土師器片３点（坏２，高坏１）が覆土中層から出土している。また，混入した縄文土器片10点，磨石２点も出土している。

所見　時期は，出土した土師器坏から古墳時代後期（５世紀末葉～６世紀前葉）と考えられる。覆土が埋め戻



第83図　第４号土坑・出土遺物実測図，第33号土坑実測図

第４号土坑出土遺物観察表（第83図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
204	土師器	坏	14.3	6.0	－	石英・長石	橙	普通	口辺部横ナデ，体部外面手持ちヘラケズリ，口辺部内面横ナデ，体部内面丁寧なナデ	中層	95%　Pl.25

されていることや，完形の椀が出土していることなどから，墓壙と推定される。

第33号土坑（第83図）

位置　調査区中央部のC3d0区で，標高23.8mの台地平坦部に位置している。

重複関係　上部を古墳時代前期の第5号住居跡に掘り込まれている。

規模と形状　長径2.22m，短径1.50mの楕円形で，深さは140cmである。フラスコ状で，壁は長径方向でほぼ直立し，短径方向でオーバーハングして立ち上がっている。底面はほぼ平坦で，南端に1か所のピットが穿たれている。長径方向はN－45°－Wである。

覆土　15層からなる。全体的に土層の締まりが弱く，ロームブロックなどを多量に含むことから，埋め戻された可能性がある。

土層解説

1　暗褐色　ロームブロック・炭化粒子微量
2　暗褐色　ロームブロック少量，炭化粒子微量
3　暗褐色　ロームブロック・炭化粒子少量
4　暗褐色　ロームブロック・炭化物微量
5　暗褐色　ロームブロック少量，炭化物微量
6　暗褐色　ロームブロック少量
7　暗褐色　ロームブロック微量
8　褐　色　ロームブロック中量
9　黒褐色　ロームブロック少量
10　褐　色　ロームブロック中量，白色粘土粒子微量
11　暗褐色　ロームブロック・炭化物少量
12　褐　色　ロームブロック中量，白色粘土ブロック微量
13　黒褐色　ロームブロック中量
14　黒褐色　ロームブロック少量，白色粘土ブロック微量
15　灰黄褐色　白色粘土ブロック多量，ロームブロック微量

所見　白色粘土層を掘り込んでいるため，粘土採掘坑の可能性がある。時期は，覆土の様相から第5号住居跡よりも以前で縄文時代までは遡らないと考えられる。弥生時代後期～古墳時代前期と想定される。

表5　住居跡一覧表

番号	位置	主軸方向 長軸方向	平面形	規模（m） （長軸×短軸）	壁高 （cm）	床面	壁構	内部施設					覆土	主な出土遺物	備考 （時期・旧→新）
								主穴	主以外	ピット	炉跡	炉			
1	C2g2	N-25°-W	方形	3.70×3.45	10～20	平坦	－	－	1	1	－	1	自然	土師器（高坏・甕・ミニチュア土器）	前期中葉（4世紀初頭～前葉）
2	C2e9	N-32°-W	方形	6.45×5.93	10～35	平坦	－	4	1	3	1	1	自然	土師器（高坏・壺・甕），焼成粘土塊，礫	前期中葉（4世紀初頭～前葉）
3	C2e0	N-35°-W	隅丸方形	3.85×3.55	15～27	平坦	－	4	1	1	－	1	自然	土師器（高坏・壺・甕），礫	前期前葉（3世紀中葉～末葉）
4	C3b1	N-57°-W	［方形］	［3.82×3.72］	20～26	平坦	－	－	－	－	－	1	自然	土師器（器台・高坏・壺・甕），砥石，鉄鏃，焼成粘土塊，礫	前期前葉（3世紀中葉～末葉）　SI4→SK1
5	C3c0	N-32°-W	［方形］	［9.90×9.05］	36～70	平坦	全周	4	1	1	1	1	自然	土師器（器台・高坏・壺・甕），礫	前期中葉（4世紀初頭～前葉）　SK33→本跡
6	C4d4	N-40°-W	［方形］	［9.20×9.18］	26～40	平坦	－	4	－	－	1	2	自然	土師器（甕），礫	中期前葉
7	C4g7	N-31°-W	［長方形］	［5.52×4.57］	10	平坦	－	－	－	1	－	1	自然	土師器（高坏・甕・ミニチュア土器）	前期中葉（4世紀初頭～前葉）
8	C5g9	N-49°-W	長方形	4.47×4.02	5～18	平坦	－	－	－	－	1	1	自然	土師器（高坏・壺・甕），焼成粘土塊，礫	前期中葉（4世紀初頭～前葉）
9	C5f8	N-16°-W	方形	5.88×5.71	22～30	平坦	－	4	－	－	1	1	自然	土師器（高坏・壺・甕），礫	中期前葉
10	C5f2	N-33°-W	［長方形］	［5.78×4.82］	8～20	平坦	－	4	－	－	－	－	自然	土師器（器台・高坏・壺・甕），砥石，鉄鏃，焼成粘土塊，礫	前期前葉（3世紀中葉～末葉）
11	C2g3	N-15°-W	［方形］	［3.78×3.52］	45～56	平坦	－	4	－	－	1	1	自然	土師器（器台・高坏・壺・甕），礫	前期前葉（3世紀中葉～末葉）
14	C3i2	N-62°-W	長方形	7.55×6.92	5～36	平坦	－	－	－	3	1	1	自然	土師器（高坏・壺・甕），焼成粘土塊，礫	中期前葉　本跡→SK2
18	C4j2	N-50°-W	方形	3.76×3.52	18～28	平坦	－	－	－	－	－	1	自然	土師器（甕），礫	前期中葉～後葉（4世紀代）
19	D4b3	N-52°-W	方形	4.14×4.12	13～18	平坦	－	－	－	－	－	1	自然	土師器（高坏・甕・ミニチュア土器）	前期中葉（4世紀初頭～前葉）
20	D6c5	N-39°-W	方形	8.82×8.80	27～58	平坦	全周	4	1	1	1	1	自然	土師器（高坏・壺・甕），焼成粘土塊，礫	前期前葉（3世紀中葉～末葉）
22	D3c0	N-31°-E	［長方形］	［5.97×5.46］	6～36	平坦	－	－	－	－	1	1	自然	土師器（器台・高坏・壺・甕），砥石，鉄鏃，焼成粘土塊，礫	中期中葉
23	D4a6	N-75°-W	方形	4.26×3.73	34～50	平坦	全周	－	－	－	1	1	自然	土師器（器台・高坏・壺・甕），礫	中期中葉
24	D4e6	N-46°-E	方形	4.78×4.67	8～25	平坦	－	－	1	6	1	1	自然	土師器（甕），礫	前期中葉～後葉（4世紀代）
25	D4f4	N-35°-W	方形	4.82×4.58	20～38	平坦	－	－	1	5	1	1	自然	土師器（高坏・甕・ミニチュア土器）	前期後葉（4世紀中葉～末葉）
26	C4j7	N-45°-W	方形	5.25×4.87	52～55	平坦	－	－	1	1	1	1	自然	土師器（高坏・壺・甕），焼成粘土塊，礫	前期中葉（4世紀初頭～前葉）　本跡→SI1
27	C5j4	N-33°-E	方形	4.01×3.98	28～32	平坦	－	－	－	－	2	－	自然	土師器（高坏・壺・甕），礫	前期中葉（4世紀初頭～前葉）
28	D3b8	N-49°-W	方形	6.58×5.92	20～30	平坦	全周	4	1	1	1	1	自然	土師器（器台・高坏・壺・甕），砥石，鉄鏃，焼成粘土塊，礫	前期中葉（4世紀初頭～前葉）
29	D5j9	N-45°-W	方形	6.32×6.14	46～34	平坦	－	4	－	1	1	1	自然	土師器（器台・高坏・壺・甕），礫	中期中葉

番号	位置	主軸方向 長軸方向	平面形	規模（m） （長軸×短軸）	壁高 （cm）	床面	壁溝	内部施設 主柱穴	主入口	ピット	貯蔵穴	炉	覆土	主な出土遺物	備考 （時期・旧→新）
31	A2j4	N-35°-W	方形	4.60×4.53	35～42	平坦	－	－	1	1	1	1	自然	土師器（高坏・甕・ミニチュア土器）	前期中葉（4世紀初頭～前葉）　SK29→本跡
32	B2e7	N-37°-W	方形	5.40×5.00	20～33	平坦	平坦	4	－	－	1	1	自然	土師器（高坏・壺・甕），焼成粘土塊，礫	前期中葉（4世紀初頭～前葉）
33	B3b2	N-2°-W	方形	3.90×3.84	27～30	平坦	－	－	－	－	1	4	自然	土師器（高坏・壺・甕），礫	前期中葉（4世紀初頭～前葉）　本跡→SK3
34	B3c5	N-2°-W	方形	5.06×4.67	32～38	平坦	－	－	－	2	1	1	自然	土師器（器台・高坏・壺・甕），砥石，鉄鏃，焼成粘土塊，礫	前期中葉（4世紀初頭～前葉）
35	B3d8	N-34°-W	方形	4.85×4.45	30～33	平坦	－	－	－	－	1	1	自然	土師器（器台・高坏・壺・甕），礫	前期後葉（4世紀中葉～末葉）　SK32→本跡
36	B3b0	N-49°-W	長方形	4.73×4.01	17～32	平坦	－	－	－	1	2	1	自然	土師器（甕），礫	前期中葉（4世紀初頭～前葉）SK32→本跡

表６　炉跡一覧表

番号	位置	長径方向	平面形	規模 長径×短径（m）	規模 深さ（cm）	覆土	底面	壁面	主な出土遺物	備考 （時期・旧→新）
1	D3d4	N-10°-W	不整楕円形	0.93 × 0.47	11	自然	皿状	緩斜	－	古墳時代前期～中期
2	D3c3	N-27°-W	楕円形	1.88 ×[1.46]	192	自然	皿状	緩斜	－	古墳時代前期～中期

表７　土坑一覧表

番号	位置	長径方向	平面形	規模 長径×短径（m）	規模 深さ（cm）	覆土	底面	壁面	主な出土遺物	備考 （時期・旧→新）
4	B2e1	N-14°-E	長楕円形	2.25×1.06	42	人為	平坦	外傾	土師器（坏）	古墳時代後期（５世紀末葉～６世紀前葉）
33	C3d0	N-45°-W	不整楕円形	(2.22×1.50)	140	人為	平坦	外傾	－	古墳時代前期　本跡→S15

5　中世以降の遺構と遺物

今回の調査で確認した中世以降の遺構は，火葬土坑１基，道路跡１条，溝２条，土坑25基である。

ここでは，中世以降に位置づけられる遺構について，その特徴と出土した遺物について記述する。土坑については，実測図と土層解説を掲載し，詳細は一覧表に記載する。

(1)　火葬土坑

第２号土坑（第84図）

位置　調査区中央部のC3i2区で，標高24.2mの台地平坦部に位置している。

重複関係　第14号住居跡を掘り込んでいる。

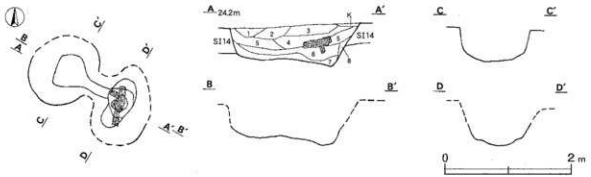
規模と形状　燃焼部・開口部・通気孔からなり，全体は「T字状」を呈している。燃焼部の推定長径1.2m，短径0.85mの楕円形で，深さは66cmである。壁は外傾して立ち上がっている。底面は中央部が一段掘りくぼめられており，二段構造を呈している。開口部は燃焼部の約40cm西側に付設され，推定長径1.17m，短径0.98mの楕円形で，深さは52cmであり，長径方向はN－74°－Eである。壁は下部で外傾して立ち上がり，上部でほぼ直立し，底面は皿状を呈している。通気口は下端で長さ約40cm，幅約15cmで，開口部の底面から燃焼部の底面へとなだらかに下っている。

覆土　８層からなる。覆土上層の第１～４層は，土質や堆積状況から自然堆積と考えられる。第５～８層は，炭化物や炭化材を多く含む黒褐色土を基調として，締まりが弱く，人為的に埋め戻されたと考えられる。

土層解説

1　黒褐色　ローム粒子微量
2　黒　　色　ローム粒子微量
3　黒褐色　ロームブロック少量，炭化粒子微量
4　暗褐色　ロームブロック少量，炭化物微量
5　黒褐色　ロームブロック・炭化材中量
6　黒褐色　炭化材中量，ロームブロック少量
7　黒褐色　ロームブロック・炭化物中量
8　暗褐色　ロームブロック・炭化物中量

所見　形態から火葬土坑と考えられるが，骨粉などは検出できなかった。火葬の実施については判断できない。出土遺物がないため，時期は不明であるが，類例などから15世紀代と推定される。



第84図　第２号土坑実測図

(2)　道路跡

第１号道路跡（第85図）

位置　調査区南西部から南部のD2c7～D3c1区で，標高23.9～24.1mの台地縁辺部から平坦部に位置している。

確認状況　確認面及び第２号溝の覆土中で，掘り込みのない細長く延びる硬化面を確認した。

規模と形状　２条の硬化面からなると推定される。南側の硬化面は第２号溝の覆土中で確認され，遺存状況は不良である。北側の硬化面は長さ16.8mが確認され，最大幅40cm，南に緩やかな弧を描きながら東西方向に延びている。

覆土　２層からなる。第１層は硬化面上位に堆積した締まりのない土層で，第２号溝の覆土でもある。土質や堆積状況から自然堆積と考えられる。第２層は硬化面を形成する土層である。

土層解説
1　暗 褐 色　ローム ブロック・炭化粒子微量　　2　暗 褐 色　ローム ブロック少量

所見　２条の硬化面は轍の痕跡と推定され，道路跡と推定した。掘り方や側溝などは確認できなかった。第２号溝とは走行する方向が異なり，その関係は不明である。時期は，覆土の様相などから，中世を遡ることはないと考えられる。

(3)　溝

第１号溝（第85図）

位置　調査区南部のD2e2～D4f5区で，標高23.8～24.0mの台地平坦部に位置している。

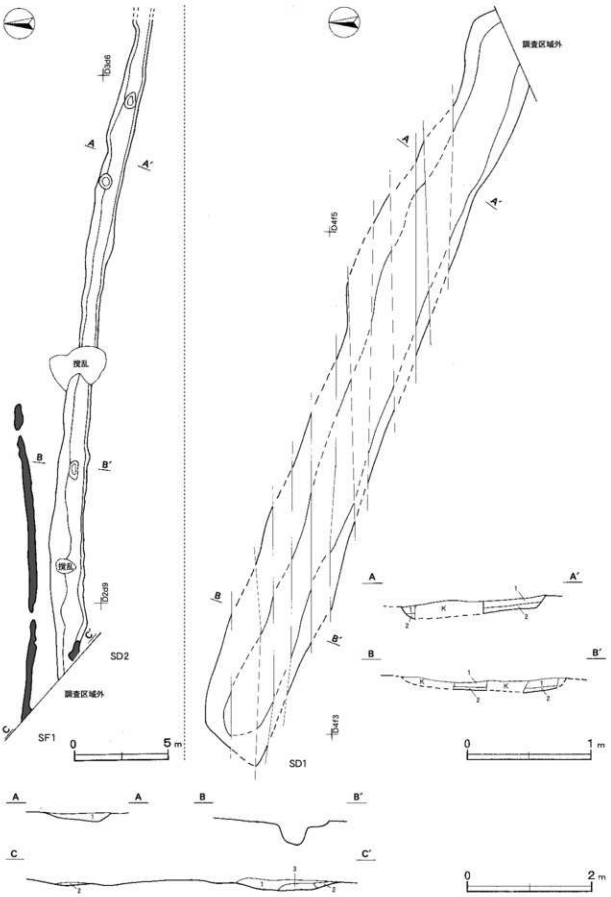
重複関係　第25号住居跡を掘り込んでいる。

規模と形状　長さ12.0mで，上幅1.0～1.4m，下幅0.55～0.65m，深さ８～16cmで，断面形は浅いU字状を呈している。壁は緩やかに立ち上がり，底面はほぼ平坦である。走行する方向はN－66°－Wで，ほぼ直線的に延びている。

覆土　２層からなる。土質や堆積状況から自然堆積と考えられる。

土層解説
1　黒 褐 色　ローム粒子・炭化物微量　　2　褐　色　ローム ブロック中量

所見　第２号溝とほぼ走行する方向が一致し，覆土の様相なども類似しているため，本来は同一の溝であった可能性が高い。時期は，覆土の様相などから，中世を遡ることはないと考えられる。



第85図　第１号道路跡・第１・２号溝跡実測図

第２号溝（第85図）

位置　調査区南西部から南部のD2d9 ～D3d6 区で，標高23.9～24.1mの台地縁辺部から平坦部に位置している。

確認状況　中央部は撹乱，東側は削平を受けて，幅及び深さが次第に減小している。

規模と形状　長さ37.5mで，上幅0.78～1.84m，下幅0.48～1.22m，深さ５～40cmで，断面形は扁平Ｕ字状を呈している。壁は北側は緩やかに立ち上がり，南側は外傾して立ち上がっている。底面は小さな凹凸が見られ，３か所にピットが掘られている。走行する方向はN－80°－Wで，北に緩やかな弧を描きながら東西方向に延びている。

覆土　３層からなる。土質や堆積状況から自然堆積と考えられる。

土層解説
1　暗 褐 色　ロームブロック・炭化粒子微量
2　暗 褐 色　ロームブロック少量
3　黒 褐 色　ロームブロック・炭化粒子微量

所見　第１号溝とほぼ走行する方向が一致し，覆土の様相なども類似しているため，本来は同一の溝であった可能性が高い。時期は，覆土の様相などから，中世を遡ることはないと考えられる。

(4)　土坑

規模と形状から３つに分類することができる。Ａ類は長径１ｍ以上の楕円形を呈する土坑，Ｂ類は長径50cm以上１ｍ未満の楕円形を呈する土坑，Ｃ類は長径50cm未満の円形を呈し，柱穴状に深く掘り込んだ土坑である。分布状況に著しい偏りは認められず，トレンチャーによる撹乱が少ない調査区の北部で，比較的多く確認されているが，いずれも性格は不明である。時期は，覆土の様相などから，近世を遡ることはないと考えられる。

第１号土坑土層解説
1　黒 褐 色　ロームブロック・炭化粒子少量
2　暗 褐 色　ロームブロック少量，焼土粒子・炭化粒子微量
3　暗 褐 色　ロームブロック少量，炭化粒子微量
4　暗 褐 色　ロームブロック少量
5　暗 褐 色　ロームブロック中量

第３号土坑土層解説
1　黒 褐 色　ロームブロック・炭化物微量
2　黒　　色　炭化物少量，ロームブロック・焼土粒子微量

第５号土坑土層解説
1　暗 褐 色　ロームブロック少量，炭化粒子微量
2　黒 褐 色　ロームブロック・炭化粒子少量
3　暗 褐 色　ロームブロック少量
4　黒 褐 色　ロームブロック少量

第６号土坑土層解説
1　暗 褐 色　ロームブロック・炭化粒子微量
2　黒 褐 色　ロームブロック・焼土粒子・炭化物微量
3　黒 褐 色　ロームブロック少量，焼土粒子・炭化物微量

第７号土坑土層解説
1　暗 褐 色　ロームブロック・炭化粒子微量
2　黒 褐 色　炭化材少量，ロームブロック・焼土粒子微量
3　褐　　色　ロームブロック・炭化粒子微量

第８号土坑土層解説
1　暗 褐 色　ロームブロック・焼土粒子・炭化物微量
2　褐　　色　ロームブロック少量，炭化粒子微量

第９号土坑土層解説
1　暗 褐 色　ロームブロック・炭化粒子微量
2　黒 褐 色　ロームブロック・炭化粒子微量
3　暗 褐 色　ロームブロック少量

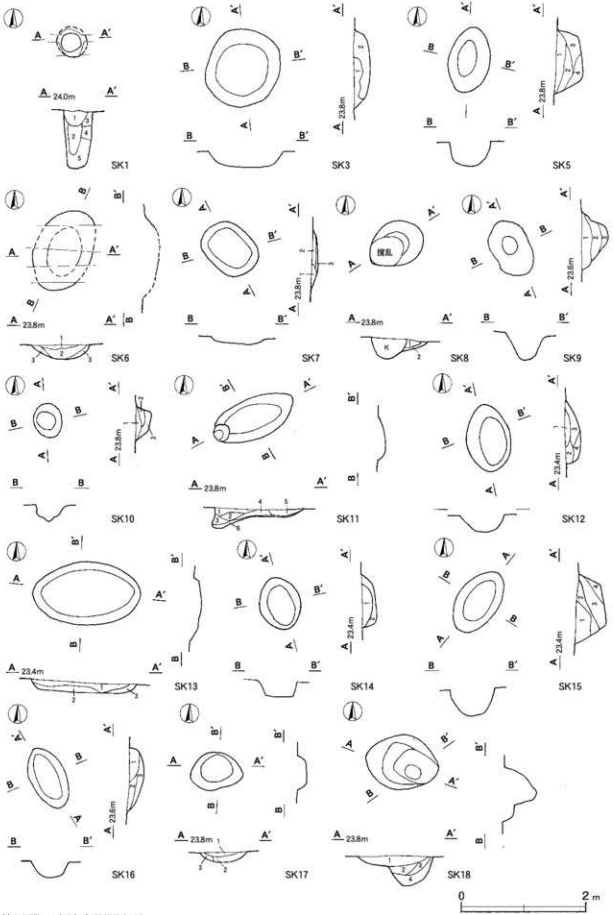
第10号土坑土層解説
1　暗 褐 色　ロームブロック・焼土粒子・炭化粒子微量
2　暗 褐 色　ロームブロック・炭化粒子微量
3　褐　　色　ロームブロック少量

第11号土坑土層解説
1　暗 褐 色　ロームブロック・炭化粒子少量
2　褐　　色　ロームブロック少量
3　黒 褐 色　ロームブロック少量，炭化粒子微量
4　黒 褐 色　ロームブロック・炭化粒子微量
5　暗 褐 色　ロームブロック少量
6　褐　　色　ロームブロック中量

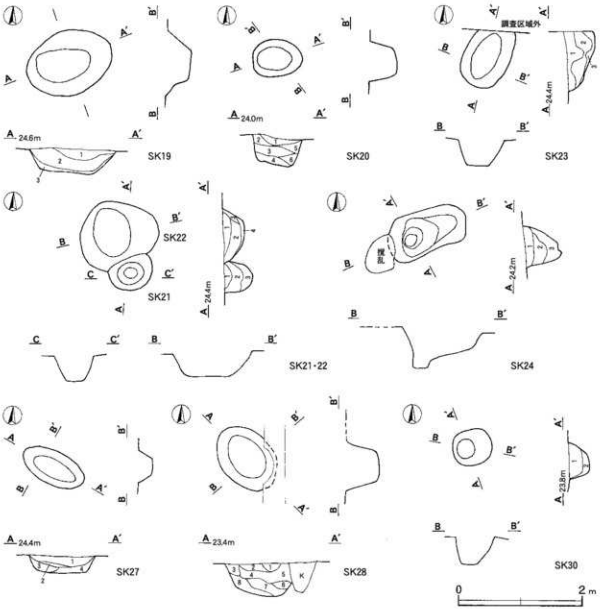
第12号土坑土層解説
1　黒 褐 色　ロームブロック・炭化物微量
2　黒 褐 色　ロームブロック少量
3　暗 褐 色　ロームブロック中量，炭化粒子微量
4　褐　　色　ロームブロック中量

第13号土坑土層解説
1　暗 褐 色　ロームブロック・焼土粒子・炭化粒子微量
2　黒 褐 色　ロームブロック・炭化物少量
3　暗 褐 色　ロームブロック・炭化粒子微量

第14号土坑土層解説
1　極暗褐色　ロームブロック・炭化粒子微量
2　褐　　色　ロームブロック少量


SK1
SK3
SK5
SK6
SK7
SK8
SK9
SK10
SK11
SK12
SK13
SK14
SK15
SK16
SK17
SK18
撹乱
0
2 m

第86図　土坑実測図（1）



第87図　土坑実測図(2)

第15号土坑土層解説
1　黒 褐 色　ロームブロック・炭化物微量
2　褐　　色　ロームブロック少量，炭化粒子微量
3　黒 褐 色　ロームブロック少量，炭化粒子微量
4　暗 褐 色　ローム粒子・炭化粒子微量

第16号土坑土層解説
1　黒 褐 色　ロームブロック微量
2　暗 褐 色　ロームブロック少量
3　暗 褐 色　ローム粒子・炭化粒子微量

第17号土坑土層解説
1　黒 褐 色　ロームブロック・焼土ブロック微量
2　黒 褐 色　ロームブロック・炭化粒子微量
3　褐　　色　ロームブロック・炭化粒子微量

第18号土坑土層解説
1　黒 褐 色　ロームブロック・炭化物微量
2　褐　　色　ロームブロック多量，焼土粒子・炭化粒子微量
3　黒 褐 色　ロームブロック・炭化物微量
4　黒 褐 色　ロームブロック・炭化物少量

第19号土坑土層解説
1　暗 褐 色　ロームブロック少量
2　暗 褐 色　ロームブロック少量，炭化粒子微量
3　褐　　色　ロームブロック少量

第20号土坑土層解説
1　褐　　色　ロームブロック少量，炭化粒子微量
2　暗 褐 色　ロームブロック・炭化粒子微量
3　褐　　色　ロームブロック・炭化粒子少量
4　暗 褐 色　ロームブロック中量
5　暗 褐 色　ロームブロック少量
6　黒 褐 色　ロームブロック・炭化粒子微量

第21号土坑土層解説
1　黒 褐 色　ロームブロック・炭化物微量
2　黒 褐 色　ロームブロック少量，炭化物微量
3　暗 褐 色　ロームブロック少量

第22号土坑土層解説
1　暗 褐 色　ローム ブロック・炭化物微量
2　暗 褐 色　ローム ブロック少量，炭化物微量
3　褐　　色　ローム ブロック中量
4　褐　　色　ローム ブロック中量，炭化粒子微量

第23号土坑土層解説
1　黒 褐 色　ローム ブロック少量，炭化粒子微量
2　黒 褐 色　ローム ブロック・炭化物少量
3　黒 褐 色　ローム ブロック少量

第24号土坑土層解説
1　黒 褐 色　ローム ブロック微量
2　褐　　色　ローム ブロック・炭化粒子微量
3　暗 褐 色　ローム ブロック少量

第27号土坑土層解説
1　暗 褐 色　ローム ブロック・炭化粒子微量
2　暗 褐 色　ローム ブロック微量
3　暗 褐 色　ローム粒子・炭化粒子微量
4　暗 褐 色　ローム粒子微量

第28号土坑土層解説
1　暗 褐 色　ローム ブロック微量
2　黒 褐 色　ローム ブロック・炭化粒子微量
3　褐　　色　ローム粒子微量
4　暗 褐 色　ローム ブロック・炭化粒子微量
5　暗 褐 色　ローム ブロック少量，炭化粒子微量
6　黒 褐 色　ローム ブロック中量，炭化粒子少量
7　黒 褐 色　ローム ブロック・炭化物少量
8　褐　　色　ローム ブロック少量

第30号土坑土層解説
1　暗 褐 色　ローム ブロック少量
2　褐　　色　ローム粒子微量

表８　溝跡一覧表

番号	位置	長軸方向	規模			断面	覆土	底面	壁面	主な出土遺物	備考（時期･旧→新）
			長さ(m)	上幅(cm)	下幅(cm)	深さ(cm)					
1	D4e2～D4f5	N-66°-W	(12.0)	100～140	55～65	8～16	横倒ゴ形	自然	平坦	緩斜	－	中世以降
2	D2(7～D3d6	N-82°-W	(37.5)	80～180	45～120	5～40	横倒ゴ形	自然	平坦	緩斜	－	中世以降

表９　土坑一覧表

番号	位置	長径方向	平面形	規模		覆土	底面	壁面	主な出土遺物	備考（時期･旧→新）	分類
				長径×短径(m)	深さ(cm)						
1	C3b1	－	［円形］	0.50 × 0.47	88	人為	平坦	垂直	－	近世以降　S14→本跡	C
3	B3b1	N-23°-E	楕円形	1.27 × 1.12	24	自然	皿状	緩斜	－	近世以降　S133→本跡	A
5	B3b3	N-9°-E	楕円形	1.04 × 0.67	40	自然	平坦	外傾	－	近世以降	A
6	B3b9	N-25°-E	楕円形	1.34 × 0.92	24	自然	平坦	緩斜	－	近世以降	A
7	B3a1	N-42°-W	楕円形	0.96 × 0.70	10	自然	平坦	緩斜	－	近世以降	B
8	B2a9	N-75°-E	楕円形	0.90 × 0.70	27	自然	平坦	緩斜	－	近世以降	B
9	B3a1	N-27°-W	楕円形	0.96 × 0.62	42	自然	平坦	緩斜	－	近世以降	B
10	B3a2	N-22°-W	楕円形	0.55 × 0.45	25	自然	平坦	緩斜	－	近世以降	B
11	B3a2	N-13°-E	楕円形	1.47 × 0.65	14	自然	平坦	緩斜	－	近世以降	A
12	A3j2	N-10°-W	楕円形	1.06 × 0.71	25	自然	皿状	緩斜	－	近世以降	A
13	A2i0	N-83°-W	楕円形	1.70 × 1.00	16	自然	平坦	緩斜	－	近世以降	A
14	A2h9	N-25°-W	楕円形	0.85 × 0.66	26	自然	平坦	外傾	－	近世以降	B
15	A3j3	N-33°-E	楕円形	1.10 × 0.66	44	自然	皿状	緩斜	－	近世以降	A
16	B3a4	N-22°-W	楕円形	1.02 × 0.55	27	自然	平坦	緩斜	－	近世以降	A
17	B3d0	N-87°-E	不整楕円形	0.84 × 0.62	16	自然	平坦	緩斜	－	近世以降	B
18	B3c3	N-72°-W	楕円形	1.18 × 0.88	55	自然	有段	緩斜	－	近世以降	A
19	B1d0	N-66°-E	楕円形	1.42 × 1.01	37	自然	平坦	緩斜	－	近世以降	A
20	B3b1	N-72°-E	楕円形	0.80 × 0.56	42	自然	平坦	外傾	－	近世以降	B
21	A2i4	N-64°-E	楕円形	0.70 ×［0.48］	45	自然	平坦	外傾	－	近世以降　本跡→SK22	B
22	A2i4	N-57°-E	楕円形	1.29 ×［1.00］	35	自然	平坦	外傾	－	近世以降　SK21→本跡	A
23	A2i4	N-28°-E	［楕円形］	(0.94) × 0.74	44	自然	皿状	外傾	－	近世以降	A
24	D2a7	N-65°-E	楕円形	1.26 × 0.67	64	自然	有段	外傾	－	近世以降	A
27	B2c6	N-60°-W	楕円形	1.06 × 0.53	24	人為	平坦	外傾	－	近世以降	A
28	A3j4	N-39°-W	楕円形	1.16 × 0.78	51	人為	平坦	緩斜	－	近世以降	A
30	B3b1	－	円形	0.64 × 0.62	42	自然	皿状	外傾	－	近世以降	B

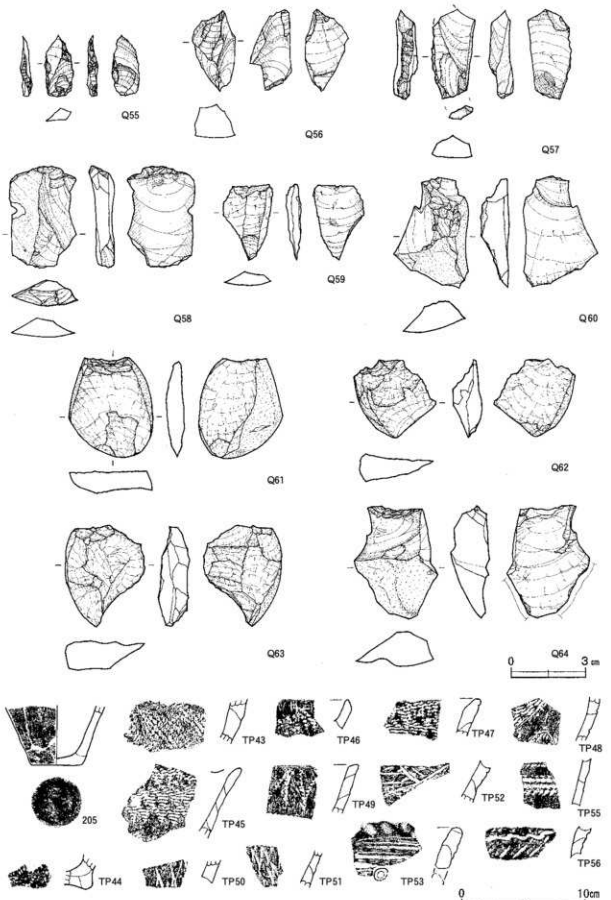
６　遺構外出土の遺物

今回の調査では，遺構に伴わない旧石器時代から近世に至るまでの遺物が出土している。以下，各時代の特色ある遺物を抽出し，拓影図，実測図及び観察表で記載する。

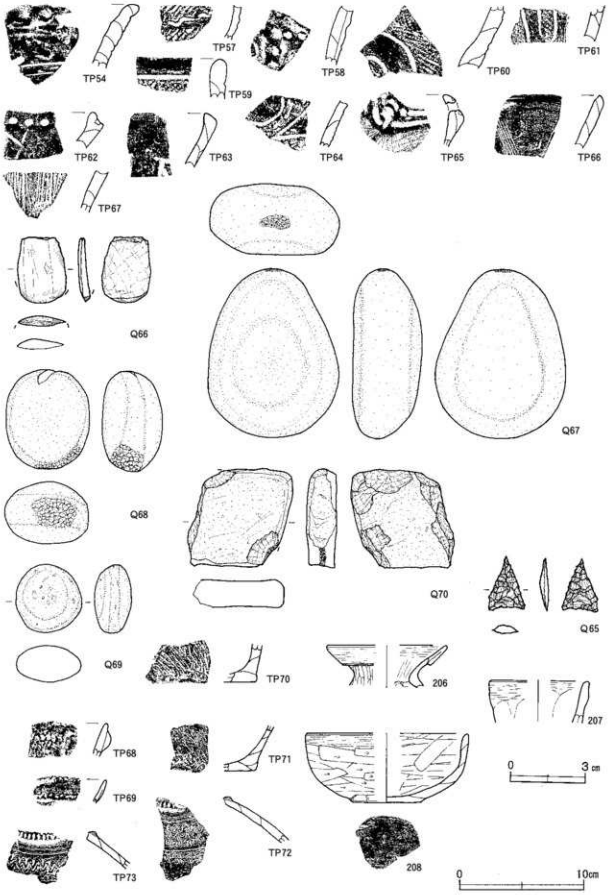
遺構外出土遺物観察表(第88～90図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴		出土位置	備考
205	縄文土器	深鉢	－	(4.7)	4.0	石英・長石・小礫	橙	普通	無文，ナデ調整		SI31	10%
206	土師器	壺	[9.6]	(3.4)	－	石英	にぶい黄橙	普通	折り返し口辺部横ナデ，頸部外面・内面ヘラミガキ，指頭圧痕		SI25覆土	5%
207	土師器	ミニチュア土器	[3.8]	(1.7)	－	石英・赤色粒子	にぶい褐	普通	口辺部横ナデ，体部指頭ナデ		SI 3覆土	5%
208	土師器	椀	[13.0]	5.5	5.4	長石・赤色粒子	にぶい橙	普通	口辺部外面横ナデ，体部外面・底部外面ヘラケズり，内面ヘラナデ		表土	10%
209	土師器	高台付坏	－	(2.5)	[6.2]	石英・長石・赤色粒子	橙	普通	体部ロクロナデ，内面ヘラミガキ・黒色処理，底部外面回転糸切り，高台貼り付け後ナデ		表土	5%
210	陶器	天目茶碗	[12.0]	(3.9)	－	石英	灰褐	普通	外面ロクロ目，内・外面鉄釉（黒褐色）施釉		SI11	5% 瀬戸・美濃系
211	土師質土器	かわらけ	[7.8]	1.6	(6.2)	石英・長石	橙	普通	内・外面横ナデ，底部外面回転糸切り		SI 5覆土	5%
TP43	縄文土器	深鉢	－	(3.6)	－	石英・長石・雲母・繊維	にぶい橙	普通	体部外面に複節縄文組文を施す　内面ナデ		SF 1	PL31
TP44	縄文土器	深鉢	－	(4.3)	－	石英・長石・雲母・繊維	にぶい橙	普通	体部外面に縄文を施す		SF 1	
TP45	縄文土器	深鉢	－	(3.6)	－	石英・長石・雲母	灰褐	普通	波状を呈し，口辺部外面に波状貝殻文を施す　内面ナデ		SI32	PL31
TP46	縄文土器	深鉢	－	(3.6)	－	石英・長石・雲母	にぶい赤褐	普通	口唇部刻み，口辺部外面に波状貝殻文を施す　内面ナデ		SI 4	
TP47	縄文土器	深鉢	－	(4.3)	－	石英・長石・雲母	にぶい赤褐	普通	体部外面に波状貝殻文を施す　内面ナデ		SI32	
TP48	縄文土器	深鉢	－	(3.6)	－	石英・長石・雲母	にぶい黄褐	普通	体部外面に沈線区画の貝殻条痕文を施す　内面ナデ		SI32	PL31
TP49	縄文土器	深鉢	－	(3.6)	－	石英・長石・雲母	にぶい黄褐	普通	体部外面に波状貝殻文を施す　内面ナデ		SI31	PL31
TP50	縄文土器	深鉢	－	(4.3)	－	石英・長石・雲母	橙	普通	体部外面に波状貝殻文を施す　内面ナデ		SI32	
TP51	縄文土器	深鉢	－	(3.6)	－	石英・長石・雲母	にぶい赤褐	普通	体部外面に波状貝殻文を施す　内面ナデ		SI32	
TP52	縄文土器	深鉢	－	(3.6)	－	石英・長石・雲母	にぶい橙	普通	体部外面に平行沈線文を施す		SI31	
TP53	縄文土器	深鉢	－	(4.3)	－	石英・長石	にぶい橙	普通	口唇部に指頭による刻み，口辺部外面に平行沈線文を施す		表土	補修孔 PL31
TP54	縄文土器	深鉢	－	(3.6)	－	石英・長石・赤色粒子	にぶい橙	普通	口唇部に指頭による刻み，口辺部外面に平行沈線文を施す　内面ナデ		SI32	
TP55	縄文土器	深鉢	－	(3.6)	－	石英・長石・雲母	にぶい赤褐	普通	体部外面に半截竹管による結節沈線文・押引文・連続刺突文を施す		SI31	
TP56	縄文土器	深鉢	－	(4.3)	－	石英・長石・雲母	橙	普通	体部外面に無節縄文L・S字状結節文を施す　内面ナデ		SI31	PL31
TP57	縄文土器	深鉢	－	(3.6)	－	石英・長石・雲母	橙	普通	体部外面に無節縄文L・S字状結節文を施す　内面ナデ		SK 4	
TP58	縄文土器	深鉢	－	(3.6)	－	石英・長石・雲母	橙	普通	体部外面に棒状工具による刺突を有する隆帯を施す　内面ナデ		表土	
TP59	縄文土器	深鉢	－	(4.3)	－	石英・長石・雲母	橙	普通	口辺部外面に沈線を巡らし，単節縄文を施す　内面ナデ		SI33	
TP60	縄文土器	深鉢	－	(3.6)	－	石英・長石・雲母	明褐	普通	体部外面に平行沈線で J 字状のモチーフを描出し，充填縄文を施す　内面ナデ		SI33	PL31
TP61	縄文土器	深鉢	－	(3.6)	－	石英・長石・雲母	橙	普通	体部外面に沈線区画の懸垂文を施す　内面ナデ		SI33	
TP62	縄文土器	深鉢	－	(4.3)	－	石英・長石・雲母	橙	普通	口唇部に円形の刺突文を施す		表土	
TP63	縄文土器	深鉢	－	(3.6)	－	石英・長石・雲母	明褐	普通	口辺部外面に沈線区画の列点文を施す		表土	
TP64	縄文土器	深鉢	－	(3.6)	－	石英・長石・雲母	明褐	普通	体部外面に沈線区画の列点文を施す　内面ナデ		SI32	PL31
TP65	縄文土器	深鉢	－	(4.3)	－	石英・長石・雲母	明黄褐	普通	波頂部に沈線を伴う隆帯で環状モチーフを作出，沈線の結節部に円形の刺突文を施す		SI31	PL31
TP66	縄文土器	深鉢	－	(3.6)	－	石英・長石・雲母	明褐	普通	体部外面に櫛歯状工具による集合沈線文を施す　内面ナデ		表土	PL31
TP67	縄文土器	深鉢	－	(3.6)	－	石英・長石・雲母	明褐	普通	体部外面に櫛歯状工具により集合沈線文を施す		SI11	
TP68	弥生土器	壺	－	(4.3)	－	石英・長石・雲母	橙	普通	口辺部外面に円形刺突文と貼瘤を施す		SI12覆土	PL32
TP69	弥生土器	壺	－	(3.6)	－	石英・長石・雲母	明褐	普通	口辺部外面に円形刺突文を巡らす		SI 1覆土	PL32
TP70	弥生土器	壺	－	(3.6)	－	石英・長石・雲母	橙	普通	体部外面に付加条（一種）縄文を施す　底部外面ナデ		表土	
TP71	弥生土器	壺	－	(4.3)	－	石英・長石・雲母	明褐	普通	体部外面に付加条（一種）縄文を施す　底部外面ナデ		SI12覆土	
TP72	土師器	壺	－	(3.6)	－	石英・長石・雲母	褐	普通	体部外面に刻みを有する粘土帯を巡らし，櫛状工具により平行沈線文・波状文・結節沈線文・赤彩を施す　内面ナデ		SI28覆土	PL32
TP73	土師器	壺	－	(4.3)	－	石英・長石・雲母	褐	普通	体部外面に刻みを有する粘土帯を巡らし，櫛状工具により平行沈線文・波状文・結節沈線文・赤彩を施す　内面ナデ		表土	PL32
TP74	土師器	壺	－	(4.3)	－	石英・長石・雲母	黒褐	普通	内・外面ヘラナデ		表土	体部外面機条痕，転用紡錘車 PL32

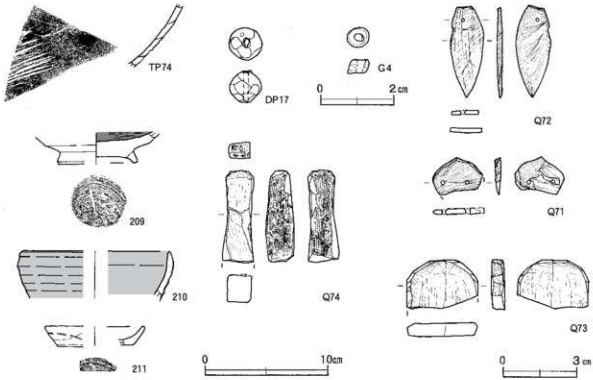
番号	種別	径	厚さ	孔径	重量	材質	特徴	出土位置	備考
DP17	球状土錘	2.6	2.5	0.4	12.6	粘土	ナデ調整，中央部一方向からの穿孔	SI 2覆土	



第88図　遺構外出土遺物実測図（1）



第89図　遺構外出土遺物実測図(2)



第90図　遺構外出土遺物実測図（3）

番号	種　別	長さ	幅	厚さ	重量	材　質	特　　徴	出土位置	備　考
Q55	ナイフ形石器	2.5	1.2	0.4	0.9	黒曜石	縦長剥片を素材とし，2側縁に主要剥離面側から急角度のブランティングを施す	SI11	PL33
Q56	石核	3.3	1.9	1.7	5.8	黒曜石	厚みのある剥片を素材とし，背面の前段階の剥離面を打面として，横長剥片を剥離している	SI11	PL33
Q57	ナイフ形石器	(3.6)	1.8	1.1	(4.9)	黒曜石	縦長剥片を素材とし，1側縁に主要剥離面側から急角度のブランティングを施す　右側縁は節理面を残し，急角度のエッジをなす　打面は剥離面打面　先端部欠損	SI32	PL33
Q58	2次加工を有する剥片	4.1	2.7	1.0	8.8	黒曜石	縦長剥片，背面は節理面と同一方向の剥離痕からなる　下端は主要剥離面側からの蝶番状剥離で切断されている　打面は丁寧に調整された複剥離面打面	表土	
Q59	剥片	3.1	2.0	0.6	2.7	黒曜石	縦長剥片，打面は主要剥離面側から除おされ，左側縁の一部は背面側からの加撃により，折られている	SI26	
Q60	剥片	4.4	3.0	1.2	10.4	珪質頁岩	縦長剥片，背面は礫面を大きく残し，稜上の微細剥離痕や多方向からの剥離痕からなる　打面は背面側からの加撃により除おされている	SI26	
Q61	楔形石器	4.0	3.3	0.9	17.1	安山岩	扁平な小円礫を素材とし，両面は両極打法による対向する剥離痕と礫面からなる	SI31	PL33
Q62	剥片	3.1	3.3	1.1	7.6	安山岩	縦長剥片，素材は扁平な小円礫で，背面に上下方向からの剥離痕を有する　打面は礫面打面で，楔形石器から剥離された剥片と考えられる	SI31	
Q63	楔形石器	4.0	3.2	1.3	15.2	安山岩	扁平な小円礫を素材とし，両面は両極打法による対向する剥離痕と礫面からなる	SI31	PL33
Q64	微細剥離痕を有する剥片	4.5	3.4	1.6	17.0	緑色凝灰岩	厚みのある縦長剥片，大きく礫面を残した背面の上端部に打面の周辺調整が連続し，2側縁に微細剥離痕を有する　打面は複剥離面打面	SF 1	PL33
Q65	石鏃	2.2	1.5	0.4	0.8	チャート	両面調整の平基無茎鏃，中央部に三稜を有する	表土	PL33
Q66	磨製石斧	(5.2)	(3.9)	(0.8)	(20.2)	緑色片岩	片刃，全面研磨調整，擦痕を有する	表土	PL33
Q67	磨石	13.5	10.5	5.5	1266.1	砂岩	全面研磨痕，上端部敲打痕	SI 6視乱	PL31
Q68	磨石	7.9	6.7	4.9	396.6	砂岩	全面研磨痕，上端部敲打痕	SK 4	PL31
Q69	磨石	5.5	5.3	2.9	116.9	安山岩	全面研磨痕	SK 4	PL31
Q70	磨石	(7.9)	(8.3)	2.5	(246.9)	安山岩	両面研磨痕，擦痕を有する　破損後周辺再加工	SI31	PL31
Q71	双孔円板	(1.5)	(2.0)	0.3	1.19	滑石	両面平滑，全面研磨調整，2か所穿孔，孔径0.17cm，欠損	表土	PL34
Q72	剣形模造品	3.7	1.4	0.2	2.2	滑石	両面平滑，全面研磨調整，上部穿孔，孔径0.1cm	表土	PL34
Q73	砥石	(2.0)	2.8	0.6	(5.2)	凝灰岩	全面使用，研磨痕・擦痕を有する　欠損	SI 9視乱	
Q74	砥石	7.4	2.6	2.3	66.4	凝灰岩	両面使用，上端部・側面削り痕，下端部欠損	SI 5視乱	PL31

番号	種　別	径	厚さ	孔径	重量	材　質	特　　徴	出土位置	備　考
G4	小玉	0.6	0.4	0.25	0.2	青色ガラス	擦痕，中央部穿孔	SI6視乱	PL34

第4節　ま　と　め

調査の結果，旧石器時代の石器集中地点２か所，縄文時代の竪穴住居跡１軒，陥し穴２基，炉穴１基，土坑２基，弥生時代の竪穴住居跡４軒，古墳時代の住居跡29軒，炉跡２基，土坑２基，中世以降の火葬土坑１基，道路跡１条，溝２条，土坑25基を確認した。当遺跡は旧石器時代から近世にかけての複合遺跡であり，中でも古墳時代前期の集落跡が中心であることが明らかとなった。ここでは，土地利用の変遷を概観し，出土土器と住居形態などについて，その変遷過程を中心に検討したい。

1　土地利用の変遷

当遺跡における最初の活動痕跡は，旧石器時代に遡る。確認された２か所の石器集中地点は，両者とも小規模な剥片剥離が行われ，不要とされた剥片や砕片を廃棄した痕跡と考えられる。第１号石器集中地点の石材は，遠隔地石材の透明な信州産の黒曜石を用いており，小形のナイフ形石器を含む茨城県後期旧石器時代編年のⅡａ期新段階に，第２号石器集中地点は，珪質頁岩や安山岩などの在地石材を用いており，石核や礫面を残した剥離初期段階の剥片などが見られ，茨城県後期旧石器時代編年のⅡｃ期に位置づけられる[1]。また，後世の遺構覆土からも比較的多くの旧石器時代の剥片などが出土している。特に，第31号住居跡の覆土中から出土したQ61～Q63は，安山岩製の楔形石器とそれに関連する剥片と考えられる。周辺では土浦市下郷古墳群の楔形石器を中心とする石器群との時期的な関連が注目される[2]。町域には谷ノ沢遺跡や実穀寺子遺跡，星合遺跡など，旧石器時代の遺跡が比較的多く調査されており，徐々に資料の蓄積もなされている。今後は，霞ヶ浦南西部における石材の利用や石器集中地点の様相などの比較検討が課題である。

縄文時代の土地利用痕跡は，前期後葉の竪穴住居跡や早期から中期の陥し穴や炉穴などである。調査区南部よりも北部において縄文土器片の出土が目立ち，量的には前期後葉の浮島式や興津式土器と，後期前葉の称名寺式土器が主体である。同一台地上の約200m南に位置する牛久市と阿見町にまたがっているナギ山遺跡[3]からは，中期後葉から後期前葉の縄文土器片や住居跡が確認されていることからも，当遺跡の周辺部には縄文時代前期や後期の小規模な集落が営まれていた可能性がある。

本格的な集落は，弥生時代後期後半（３世紀前半）になって形成され始める。確認された３軒の住居跡の平面形は，いずれも隅丸長方形を呈し，中央部のやや壁寄りに炉を設け，４本の主柱穴と出入口施設に関連するピットを有している。この平面形は土浦市原田北・原田西・西原遺跡などで数多く確認されているもので周辺地域を含めた当該期の基本的な住居形態と考えられる[4]。出土した弥生土器は，口辺部に２列の刺突文と貼瘤を施した根鹿北式土器や上稲吉式土器に比定される。第11号住居跡から出土した壺形土器（57）の類例は，沈線区画の有無で相違はあるが，付加条１種と撚糸文の羽状施文と赤彩された無文帯を特徴とする，岩井市北前遺跡第36号住居跡から出土した壺形土器（TP12）があげられる[5]。基本的な施文技法や南関東地域で見られる壺形土器の器形を忠実に模倣しながら，施文原体を変容させている点で，その共通性は極めて高いと考えられる。北前遺跡第36号住居跡は出入口施設脇に貯蔵穴を設けており，住居形態やその他の出土土器の様相から，前期前葉に位置づけられている。当遺跡の第３・11号住居跡は出土遺物が少なく，時期を明確にしがたいが，弥生時代後期後半の住居形態を継承しつつ，コーナー部の丸みが失われ，古墳時代前期以降の方形ないし長方形の平面形を採用していることから，弥生時代後期末葉から古墳時代初頭に位置づけたい。

町域や周辺地域においては，古墳時代前期になると遺跡が急増する傾向にあり，桂川・乙戸川流域の低地

や谷津田の開発が，当該期に本格的に開始されたと考えられる。集落は前期前葉（3世紀中葉～末葉）から中葉（4世紀初頭～前葉）にかけて隆盛するが，前期後葉（4世紀中葉～末葉）には衰退し始め，中期中葉（5世紀中葉）には廃絶したと考えられる。なお，前述したナギ山遺跡では，古墳時代中期後葉（5世紀後葉）以降から集落の形成が開始されており，当遺跡からナギ山遺跡へと集落が移動したものと推定される。それは乙戸川本流から分岐した谷津田を眼下に望む当遺跡の立地から，より広大な低地の広がる乙戸川本流に面した台地上へと集落の占地を替えたと想定され，両遺跡は関連が極めて高いと考えられる。薬師入遺跡では中期中葉（5世紀中葉）に集落が廃絶し，後期前葉（5世紀末葉～6世紀前葉）には墓域の一部として利用され，ナギ山遺跡の集落も6世紀後葉には終末を迎えている[6]。

再び，この台地上が生活域や墓域となるのは中世以降で，当遺跡からは火葬土坑，ナギ山遺跡からは掘立柱建物跡や地下式坑が確認されている。その他の土坑や溝は，大半が近世以降の耕作に伴う土地利用の痕跡と考えられる。

2　古墳時代前期における土器・集落・住居形態の様相

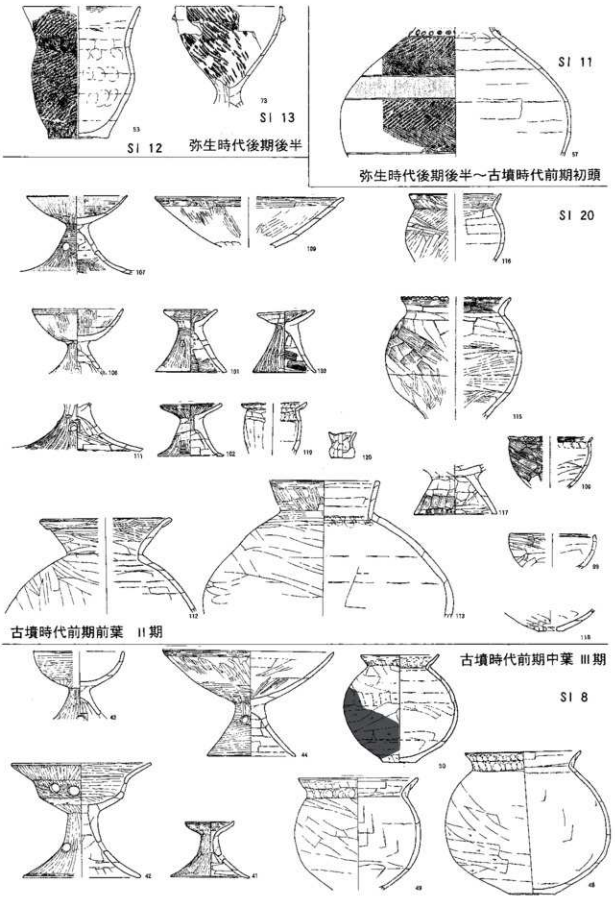
確認された集落跡は，弥生時代後期後半に出現し，古墳時代前期にその規模を拡大させ，中期中葉まで継続している。以下では，古墳時代前期における土器と住居形態の変化について検討し，集落の変遷過程についてまとめてみたい。土器編年については，2003年に浅井哲也氏が茨城県の古墳時代前期6期区分と，龍ヶ崎市及びつくば市出土の土器編年[7]などを示しているが，本報告における時期の判定については，浅井編年を基に先行研究の諸説[8]を加味して判断した。また，本報告書内では浅井編年を表10のように対応させ，表記している。

表10　時期区分対応表

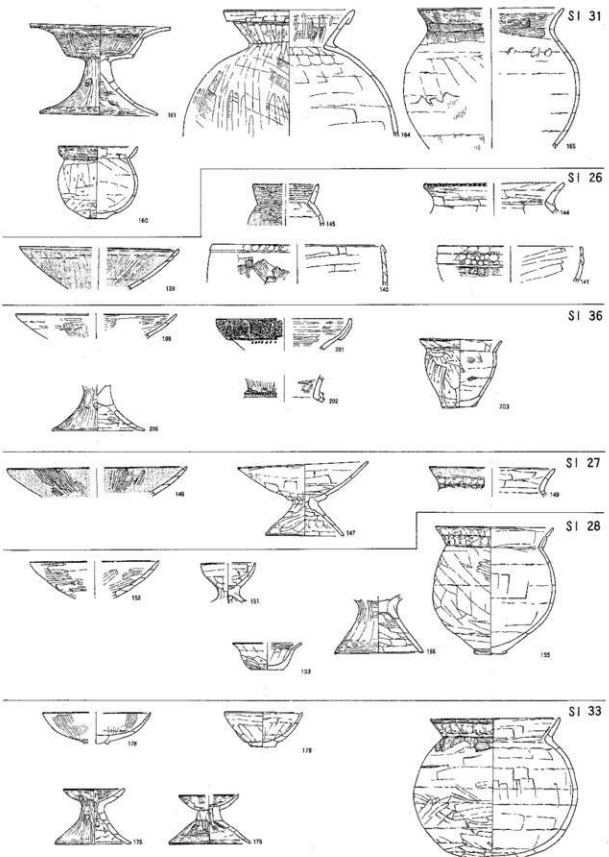
浅井編年		本報告書内		
Ⅰ期	250 ～ 275年	古墳時代前期前半	古墳時代前期前葉	3世紀中葉 ～ 3世紀末葉（3世紀後半）
Ⅱ期	275 ～ 300年			
Ⅲ期	300 ～ 325年		古墳時代前期中葉	4世紀初頭 ～ 4世紀前葉（4世紀前半）
Ⅳ期	325 ～ 350年	古墳時代前期後半		
Ⅴ期	350 ～ 375年		古墳時代前期後葉	4世紀中葉 ～ 4世紀末葉（4世紀後半）
Ⅵ期	375 ～ 400年			

(1)　土器の形態と器種組成の変化について

浅井編年による各期の概要は次の通りである[9]。Ⅰ期は高坏・壺・甕から構成される。高坏は坏部が深く，中位から外反するものと内彎気味に伸びるものがあり，脚部は太く外傾している。甕の口唇部にはキザミ，台付甕の口辺部には輪積み痕跡が残る。小形甕の口辺部は受け口状を呈している。壺は複合口縁で棒状・円形浮文・網目状撚糸文を施している。Ⅱ期は高坏・器台・鉢・甕から構成される。高坏は坏部に段をもち，脚部は内彎気味になり，器台は受け部が比較的小さい。脚はハの字状に広がり，装飾器台も見られる。甕は長胴形で，有孔鉢も存在する。Ⅲ期は高坏・器台・鉢・坩・S字状口縁台付甕（以後，S字甕と記載する）から構成される。高坏は短脚を特徴とし，小形高坏は坏部が深く，器台は受け部が比較的小さい。脚部は直線的に外傾して伸びていく。装飾器台は坏部下位の突出が小さくなる。鉢は小型坩の祖形になるような形態で，坩は口頸部と体部の高さがほぼ同じ位であり，台付甕は単純口縁で輪積み痕跡やS字状を呈している。大形甕は口唇部にキザミ，口辺部に輪積み痕跡を残し，この時期以降は消滅する。壺は複合口縁と有段口縁がある。Ⅳ期は器種が多様化し，高坏・器台・鉢・小型坩・坩・S字甕から構成される。高

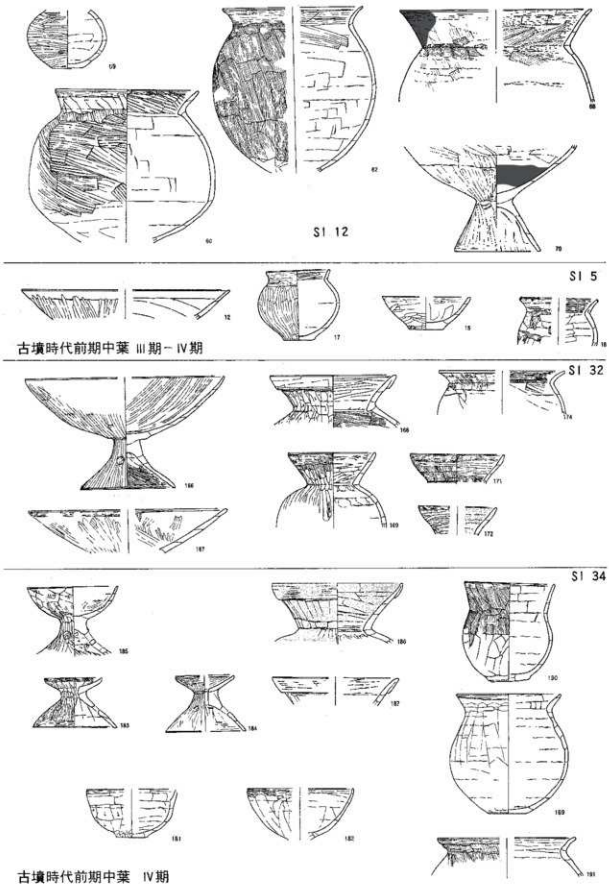


第91図 出土土器の変遷（1） （S＝1/8）

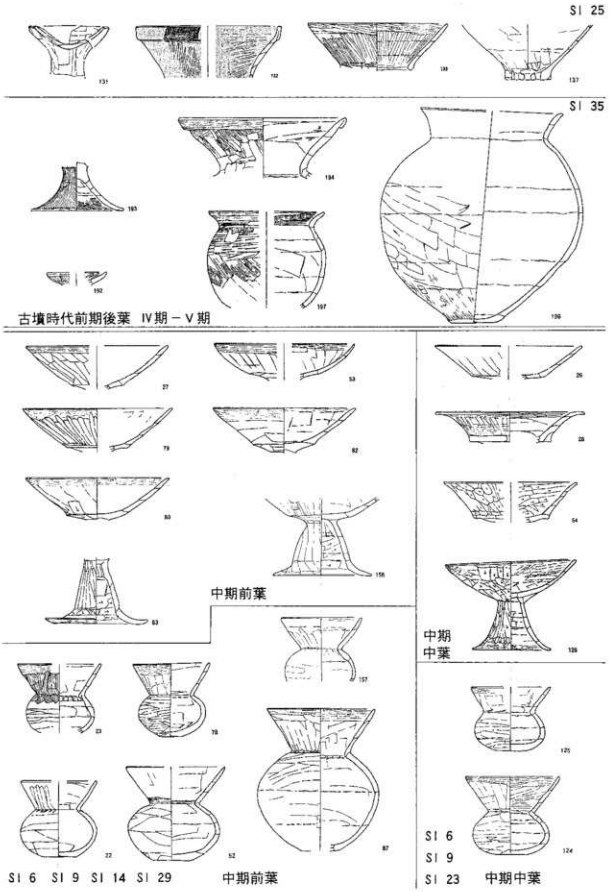


古墳時代前期中葉 Ⅲ期

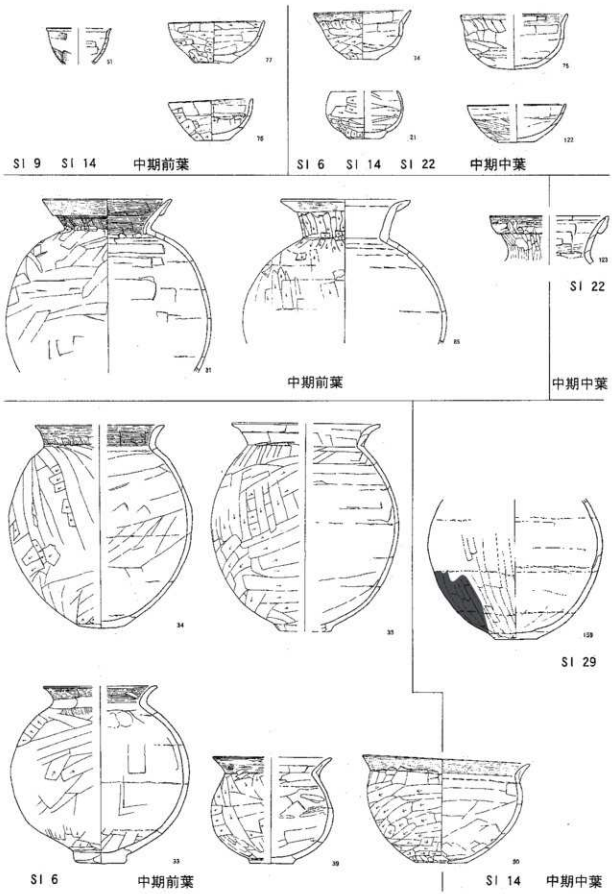
第92図　出土土器の変遷(2)　(S=1/8)



第93図 出土土器の変遷(3) (S=1/8)



第94図 出土土器の変遷(4) (S=1/8)



第95図 出土土器の変遷(5) (S=1/8)

坏の脚部は長く外反して伸び，小形高坏は減少する。器台は受け部が小さく内彎状を呈し，高坏同様に脚部が長く外反している。小型坩が出現し，体部に比べて口辺部が長く，坩も口頸部が長い。大形甕は長胴形から球形となり，S字甕はピークを迎え，以降出土量は減少する。Ⅴ期は高坏・器台・鉢・小型坩・坩で構成される。高坏は坏部が小形化し，屈曲して外上方に伸び，脚部は直立気味に伸びたあと外反して開く。脚内部は中位以下が中空状となる。器台も脚部が直立気味で，全体的に脚部が長い。小型坩は前段階より口辺部がやや短くなり，体部はソロバン玉状から球形となる。坩は体部が球形で，口頸部が内彎気味に立ち上がり，大形甕はより球形になる。Ⅵ期は高坏・器台・鉢・小型坩・坩で構成される。高坏の脚内部が中実となり，器台も脚部が前段階よりも長くなる。小型坩は口辺部の縮小化と体部の球形化が進み，坩は口頸部が長大化し，大形壺の有段口縁は直立気味に立ち上がっている。

また，比田井克仁氏は，東関東地方における古墳時代前期の土器様相について，前期前葉には「十王台式，上稲吉式の伝統は消滅する。この段階では小型丸底坩や，南関東系の網状文壺などが新たに認められる。外来土器としてはS字状口縁台付甕があげられる」。前期中葉は「南部で輪積痕台付甕，ナデ調整平底甕をベースにし」，前期後葉は「柱状脚部高坏の波及と定着によって元屋敷系高坏が消滅し，二重口縁壺，単口縁ハケ調整甕，単口縁ナデ調整甕，X型器台，小型丸底坩，S字状口縁鉢で構成される」[10]と簡潔にまとめている。

以上のような，茨城県における古墳時代前期土器の代表的な編年観を参考にしながら，当遺跡出土の前期土器について，その形態と器種組成の移り変わりを示したのが第91～94図である。土器編年では分類の基準を明確にすべきであるが，今回は特定の器種の形態と器種組成の変化を大きく捉えるため，住居跡ごとの資料提示とした。また，中期の土器編年については，樫村宣行氏[11]による茨城県南部における様相と，白田正子氏[12]による牛久地域についての細分案が提示されているが，基本的には両氏の土器編年を参考にしながら，周辺地域の様相を検討して時期の判定を行った。その結果，第6・9・14号住居跡から出土した土器は樫村編年のⅠ期，第22・23・29号住居跡から出土した土器は樫村編年のⅡ期にそれぞれ比定され，第94・95図に器種ごとの変化を示した。なお，住居跡によっては両期の土器が一部混在している状況も見られる。

(2) 集落の変遷と外来系土器について

第91～95図の土器の変遷に従い，住居跡の時期をまとめたのが表11である。

集落として見た場合，各期を通して住居は1～3軒程度で，特に古墳時代前期中葉のⅢ期に規模が拡大している。調査区域外にも集落が広がっていることを考慮すると，一時期の集落は多く見ても3～8軒程度の住居で形成されていたと推定される。また，前期後葉のⅥ期に集落は衰退ないし断絶した可能性も考えられるが，後続する中期前葉の3軒は前代の住居跡と重複することはなく，血縁集団による集落としての継続性がうかがえる。

次に，比田井氏が指摘する前期前葉に見られる南関東系の網目状文壺や，外来系土器のS字甕について若干触れておきたい。比田井氏は外来土器について，広範囲に定着する土器を「外来性土器」，定着までには至らない土器を「外来系土器」として区別している[13]。まず，いわゆる南関東系の網目状撚糸文を施した壺形土器は，破片ではあるが比較的多く出土している。可能な限り図示したが，ほとんどが網目状撚糸文で，わずかに羽状構成の縄文やS字状結節文なども見られる。さらに第36号住居跡から出土した202のように，頸部下端にキザミを施した突帯をめぐらせた壺形土器など，その系譜が西遠江に求められ

るものも少量ではあるが出土している。特に第28号住居跡の攪乱層から出土したTP72・TP73は，細い棒状工具ないし櫛歯状工具で平行沈線や波状文などの精緻な文様を施している。これらは新治郡玉里町権現平2号墳から出土したパレス文様壺に類例を求めることができる[14]。次に外来系土器を代表するS字甕は，第34号住居跡から出土した191の1点のみで，「霞ヶ浦周辺地域では前期の集落が多いにもかかわらず，なぜ『S字甕』が出土しないのか」[15]といった問題提起や，茨城県「南部では輪積痕台付甕，ナデ調整平底甕をベースにし，S字状口縁台付甕や大廓式系壺は認められない」[16]という指摘を裏付けている。第34号住居跡出土のS字甕は，口縁部の屈曲が弱く，退化現象の進行した末期的な特徴を有し，茨城県におけるS字甕の編年案によれば，「茨城S字Ⅳ段階」[17]に位置づけられる。その他，畿内系や北陸系などの外来土器は出土していない。

表11　時期別による住居跡の軒数と住居形態

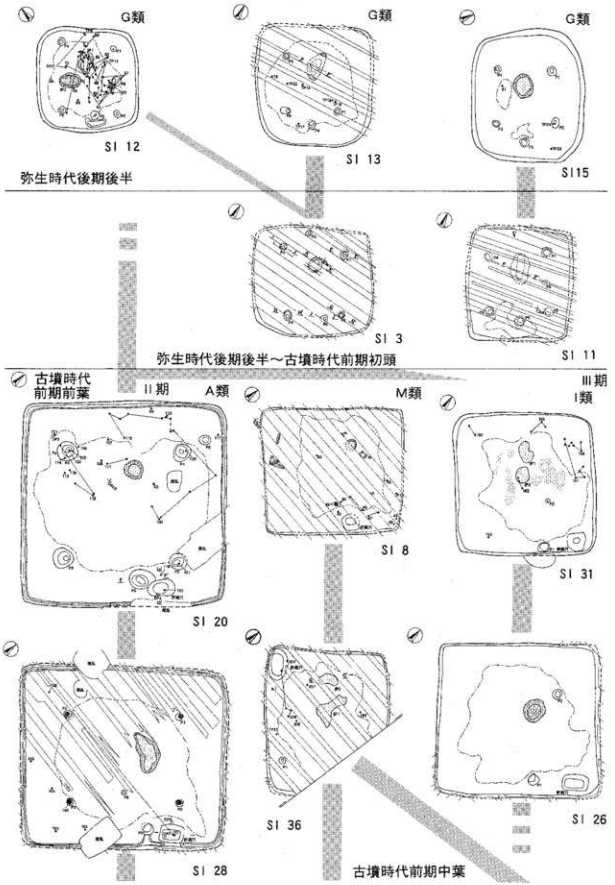
時期区分			住居跡	軒数	住居形態
弥生時代後期後半			第12・13・15号住居跡	3	G類
古墳時代前期	前葉	浅井編年Ⅰ～Ⅱ期	第3・11・20号住居跡	3	G類
	中葉	浅井編年Ⅲ期	第8・26・27・28・31・33・36号住居跡	7	A・I・M・Q類
		浅井編年Ⅲ～Ⅳ期	第2・5号住居跡	2	A類
		浅井編年Ⅳ期	第32・34号住居跡	2	B・M類
	後葉	浅井編年Ⅴ期	第25・35号住居跡	2	I・M類
		浅井編年Ⅵ期			
古墳時代中期前葉			第6・9・14号住居跡	3	K・M類
古墳時代中期中葉			第22・23・29号住居跡	3	K・M類

(3)　住居形態とその変化について

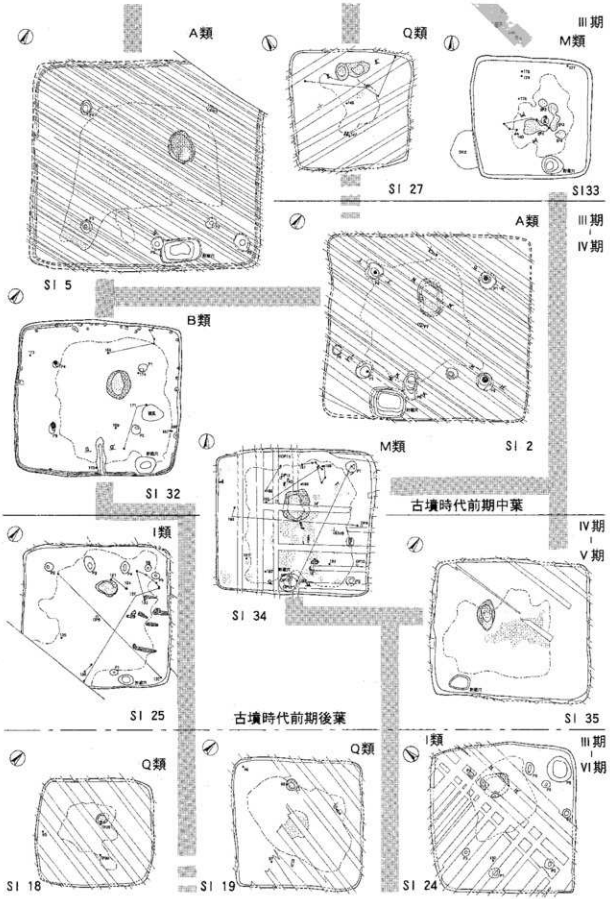
茨城県南部における古墳時代前期の住居形態について，その内部施設のあり方から分類したものが表12で，想定される形態を含めて22タイプが考えられる。

表12　茨城県南部の古墳時代前期を中心とした住居形態の分類

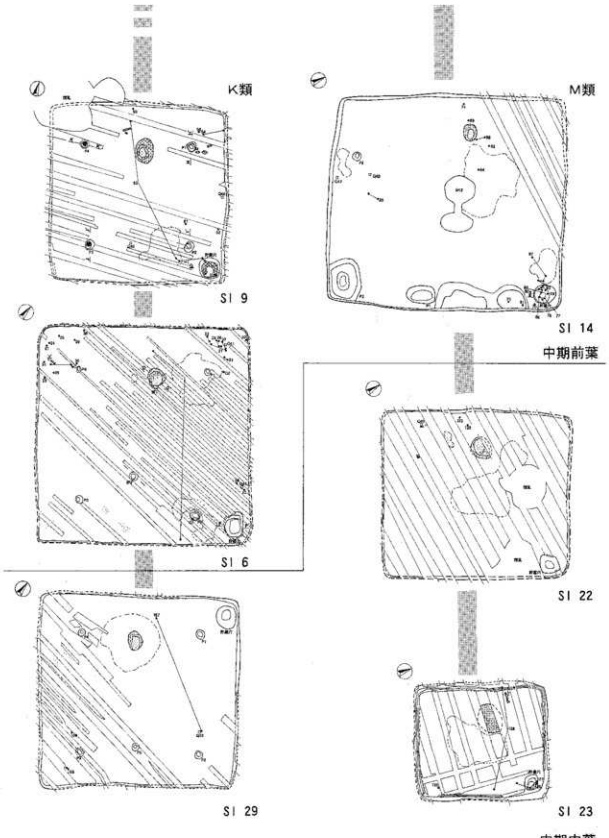
分類	内部施設				
	炉	主柱穴	出入口施設のピット	貯蔵穴	間仕切り溝
A類	中央部壁寄り	4か所	1か所	コーナー部付近1か所	無
B類	中央部壁寄り	4か所	1か所	コーナー部付近1か所	有
C類	中央部壁寄り	4か所	1か所	コーナー部付近2か所	無
D類	中央部壁寄り	4か所	1か所	コーナー部付近2か所	有
E類	中央部壁寄り	不規則	1か所	無	無
F類	中央部壁寄り	不規則	1か所	無	有
G類	中央部壁寄り	4か所	1か所	無	無
H類	中央部壁寄り	4か所	1か所	無	有
I類	中央部壁寄り	無	1か所	コーナー部付近1か所	無
J類	中央部壁寄り	無	1か所	コーナー部付近1か所	有
K類	中央部壁寄り	4か所	無	コーナー部付近1か所	無
L類	中央部壁寄り	4か所	無	コーナー部付近1か所	有
M類	中央部壁寄り	無	無	コーナー部付近1か所	無
N類	中央部壁寄り	無	無	コーナー部付近1か所	有
O類	中央部壁寄り	無	1か所	無	無
P類	中央部壁寄り	無	1か所	無	有
Q類	中央部壁寄り	無	無	無	無
R類	中央部壁寄り	無	無	無	有
S類	無	4か所	無	無	有・無
T類	無	無	1か所	無	有・無
U類	無	無	無	コーナー部付近1か所	有・無
V類	無	無	無	無	無



第96図　住居形態の変遷(1)　〈S=1/120〉



第97図　住居形態の変遷(2)　〈SI5:S=1/160,その他:S=1/120〉



第98図　住居形態の変遷（３）〈SI6:S＝1/160, その他:S=1/120〉

なお，A～D類は間仕切り溝の有無と貯蔵穴の数，E・F類，G・H類，I・J類，K・L類，M・N類，O・P類，Q・R類は間仕切り溝の有無で細分したもので，大きくは12類となる。当遺跡の住居形態について，時期別出現傾向をまとめたものが表13である。また，住居の規模については，便宜上，平面空間が50～80㎡を大型，20～50㎡を中型，20㎡未満を小型とした。

その結果は，弥生時代後期後半は小型のG類で占められている。前述したように，G類は土浦市原田北・原田西・西原遺跡などで数多く確認されているタイプであり，周辺地域を含めた当該期の基本的な住居形態と理解することができる。古墳時代前期前葉は前代のG類に突如として大型のA類が出現する。主柱穴4か所と出入り口施設に関連するピット脇に貯蔵穴を設けるタイプである。前期中葉になるとG類は完全に消滅し，前代から継続するA類に加えて，炉と貯蔵穴を備えたタイプの大型・中型のI類や中型・小型のM類，炉のみの小型のQ類が見られる。また，中葉も後半になるとA類に間仕切り溝を加えたB類が出現している。前期後葉には中型のI・M類と，小型のQ類の3タイプが認められる。これらのタイプは前期中葉以降に出現するタイプで，特にM類は，後続する時期にも引き継がれるタイプである。中期には大型のK・M類となる。大型の住居はA・B・I・K・M類に見られ，それらの形態は十分な内部施設を有していることから，集落内の中核となる住居であり，各期の集落の中心的な集団の居住施設と推定される。中型と小型の住居はG・I・M・Q類に見られ，基本的な内部施設を有していることから，基本的には居住施設であり，状況に応じて釜屋的な機能や，納屋的な機能を分担していたと考えられる。

最後になるが，前期中葉から後葉のA・B・I・M類の住居には，中央部の炉が中心軸（ほぼ住居を二等分する軸線）から大きく偏在するタイプが存在している。これらは床の硬化面の状況から，敷物や寝間の存在が想定されるタイプでもあり，住居内部の機能分化を反映したものと考えられる。当遺跡の住居形態に見られる一つの特性と考えられ，時期を越えて継承されていることから，血縁集団によって受け継がれた伝統的な内部区分と推定される。特定の集落だけに見られる特徴なのか，周辺地域でも認められるものなのかなど，今後の検討課題の一つとしたい。まずは比較検討の資料集成を行い，土器編年と住居形態の変化の総合的な分析を通して，集落変遷はもとより，集団間の交流や地域性などについて明らかにしていきたい。

註

1) 橋本勝雄「茨城県における旧石器時代の編年」『ひたちなか市埋蔵文化財調査センター開館10周年記念シンポジウム　茨城県における旧石器時代研究の到達点－その現状と課題－発表要旨・資料集』ひたちなか市教育委員会　茨城県考古学協会　2002年12月
2) 平石前和「一般国道354号道路改良事業地内埋蔵文化財調査報告書　下郷古墳群」『茨城県教育財団文化財調査報告』第167集　2000年3月
3) 石川義信・後藤孝行「ナギ山遺跡Ⅰ　柏峯B遺跡　一般国道468号首都圏中央連絡自動車道新設工事地内埋蔵文化財調査報告書」『茨城県教育財団文化財調査報告』第233集　2005年3月
4) ・緑川正實・海老澤稔「土浦北工業団地造成地内埋蔵文化財調査報告書Ⅰ　原田北遺跡Ⅰ　原田西遺跡」『茨城県教育財団文化財調査報告』第80集　1993年3月
・江幡良夫「土浦北工業団地造成地内埋蔵文化財調査報告書Ⅱ　原田北遺跡Ⅱ　西原遺跡」『茨城県教育財団文化財調査報告』第85集　1994年3月
5) 大森雅之「茨城県自然博物館（仮称）建設用地内埋蔵文化財調査報告書Ⅰ　原口遺跡　北前遺跡」『茨城県教育財団文化財調査報告』第83集　1993年3月
6) 註3）に同じ
7) 茂井哲也「茨城県における古墳時代前期の土器」『領域の研究－阿久津久先生還暦記念論集－』阿久津久先生還暦記念事業実行委員会　2003年4月
8) ・鈴木幹男『松戸市諏訪原遺跡』松戸市教育委員会　1974年3月
・比田井克仁「古墳出現前段階の様相について」『考古学基礎論』3　考古学談話会　1981年7月
・比田井克仁「古墳出現段階における伝統性の消失」『古代』91　早稲田大学考古学会　1991年3月

・古墳時代土器研究会編著『土器が語る－関東古墳時代の黎明－』第一法規出版株式会社　1993年５月
・比田井克仁「小さな壺から－西方社会へのささやかな抵抗－」『史館』第24号　史館同人　1993年９月
・比田井克仁「南関東における庄内式併行期前後の土器移動」『庄内式土器研究』Ⅴ　庄内式土器研究会　1994年６月
・比田井克仁「南関東における庄内式併行期の土器」『庄内式土器研究』Ⅶ　庄内式土器研究会　1994年６月
・滝澤　亮ほか『土器が語る－関東古墳時代の黎明』古墳時代土器研究会　1997年５月
・加藤修司「房総地方における前期古墳の展開－重要遺跡確認調査の成果と課題４－土器編年案」『研究紀要』21　千葉県文化財センター　2000年９月
・比田井克仁『関東における古墳出現期の変革』雄山閣出版　2001年７月
・片根義幸・藤田直也「古墳時代前期の甕形土器について－栃木県における甕形土器の形態と消長－」『研究紀要－埋蔵文化財センター創立10周年記念論集－』９　財団法人とちぎ生涯学習文化財団埋蔵文化財センター　2001年３月
・高花宏行「印旛地域における古墳時代開始期の土器様相」『印旛郡市文化財センター研究紀要』２　印旛郡市文化財センター　2001年３月
・石川功ほか『常名台遺跡群確認調査　神明遺跡（第３次調査）－土浦市総合運動公園建設事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書　第６集－』土浦市教育委員会　2002年３月
・石丸敦史「野方台遺跡の再検討（1）－古墳時代前期その１－」『専修考古学』第９号　専修大学考古学会　2002年11月
・鈴木芳英「古墳出土土器編年のための集落出土土器編年」『栃木県考古学会誌』第23集　栃木県考古学会　2002年12月
・石丸敦史「下野地域における古墳時代前期の土器様相－とくに住居跡における土器構成について－」『法政考古学』第30集　法政考古学会　2003年３月
・中山英樹「栃木県佐野市松山・エグロ遺跡の検討」『研究紀要』11　財団法人とちぎ生涯学習文化財団埋蔵文化財センター　2003年３月
・鈴木芳英「小貝川・五行川流域における古墳出現期の様相」『唐澤考古』23　2004年５月

9）註７）に同じ

10）比田井克仁「（本文）関東・東北地方南部の土器」『考古資料大観　第２巻　弥生・古墳時代　土器Ⅱ』小学館　2002年12月
・樫村宣行「茨城県南部における鬼高式土器について」『研究ノート』第２号　財団法人茨城県教育財団　1992年６月

11）樫村宣行「和泉式土器編年考－茨城県を中心にして－」『研究ノート』第５号　財団法人茨城県教育財団　1996年６月

12）白田正子「古墳時代中期後葉における土器編年細分案－牛久地域を取り上げて－」『茨城県考古学協会誌』第８号　1996年７月

13）比田井克仁「東国における外来土器の展開」『翔古論集』　久保哲三先生追悼論文集刊行会　1993年５月

14）伊藤重敏『権現平古墳群　附・木舟Ⅱ号石棺，富士峯Ⅰ～Ⅲ号石棺，山田峯Ⅴ，Ⅵ号石棺』（玉里村埋蔵文化財調査報告第１号）茨城県新治郡玉里村教育委員会　1994年３月

15）古墳時代研究班（集落グループ）「茨城の『Ｓ字状口縁部台付甕』について（3）」『研究ノート』第７号　財団法人茨城県教育財団　1998年６月

16）註10）に同じ

17）註15）に同じ

写　真　図　版

住居跡出土土器

薬師入遺跡遠景（西方から）

完掘全景

第１号石器集中地点
土　　層

第１号石器集中地点
遺 物 出 土 状 況

第２号石器集中地点
土　　層

第 2 号石器集中地点
遺 物 出 土 状 況

第 2 号石器集中地点
遺 物 出 土 状 況

第 2 号石器集中地点
遺 物 出 土 状 況

第1号住居跡
完掘状況

第2号住居跡
完掘状況

第2号住居跡
遺物出土状況

第 3 号 住 居 跡
完　掘　状　況

第 5 号 住 居 跡
完　掘　状　況

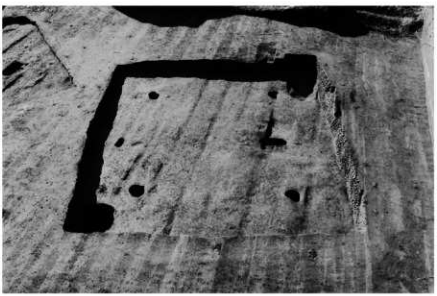
第 5 号住居跡貯蔵穴
完　掘　状　況

第 6 号 住 居 跡
完 掘 状 況

第 6 号 住 居 跡
遺 物 出 土 状 況

第 8 号 住 居 跡
完 掘 状 況

第 8 号 住 居 跡
遺 物 出 土 状 況



第 9 号 住 居 跡
完 掘 状 況

第 9 号住居跡貯蔵穴
炭化材等出土状況

第 10 号 住 居 跡
完　掘　状　況

第 11 号 住 居 跡
完　掘　状　況

第 12 号 住 居 跡
完　掘　状　況

第 12 号 住 居 跡
遺 物 出 土 状 況

第 13 号 住 居 跡
完 掘 状 況

第 14 号 住 居 跡
完 掘 状 況

第 14 号 住 居 跡
遺 物 出 土 状 況

第14号住居跡貯蔵穴
遺 物 出 土 状 況

第 15 号 住 居 跡
完 掘 状 況

第15号住居跡
遺物出土状況

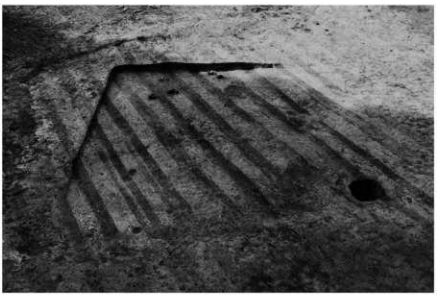
第18号住居跡
完掘状況

第19号住居跡
完掘状況

第20号住居跡
完掘状況

第20号住居跡
遺物出土状況

第20号住居跡
遺物出土状況



第 22 号 住 居 跡
完　掘　状　況

第 23 号 住 居 跡
完　掘　状　況

第 24 号 住 居 跡
完　掘　状　況

第25号住居跡
遺物出土状況

第26号住居跡
完掘状況

第26号住居跡
遺物出土状況

第26号住居跡貯蔵穴
遺物出土状況

第27号住居跡
完掘状況

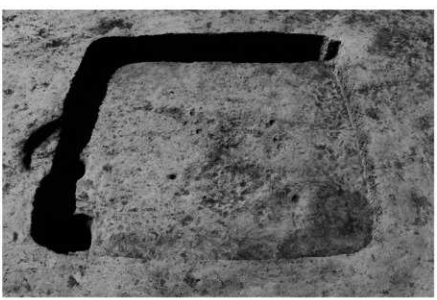
第27号住居跡
遺物出土状況

第 28 号 住 居 跡
完 掘 状 況

第28号住居跡貯蔵穴
遺 物 出 土 状 況

第 29 号 住 居 跡
完 掘 状 況

第 30 号 住 居 跡
完　掘　状　況



第 31 号 住 居 跡
完　掘　状　況

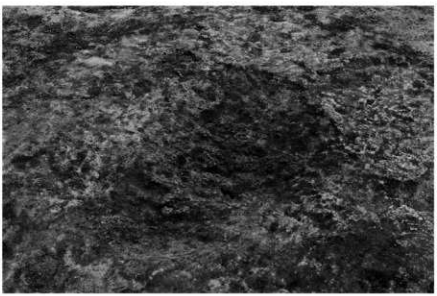
第 31 号 住 居 跡
遺 物 出 土 状 況

第31号住居跡
遺物出土状況

第32号住居跡
完掘状況

第32号住居跡
遺物出土状況

第32号住居跡
遺物出土状況



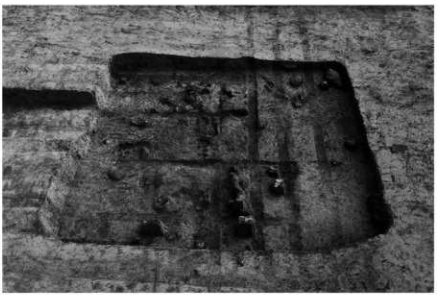
第32号住居跡炉
完掘状況

第32号住居跡貯蔵穴
遺物出土状況

第33号住居跡
完　掘　状　況

第33号住居跡
遺物出土状況

第34号住居跡
完　掘　状　況



第34号住居跡
遺物出土状況

第35号住居跡
完掘状況

第35号住居跡
遺物出土状況

第36号住居跡
完掘状況

第36号住居跡
遺物出土状況

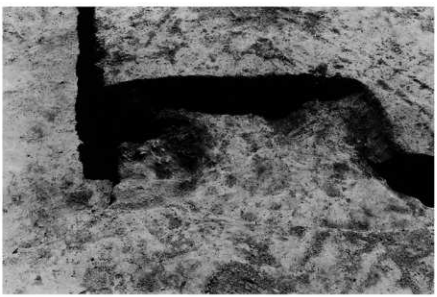
第34号住居跡炉
完掘状況

第 2 号 土 坑
完 掘 状 況

第 4 号 土 坑
完 掘 状 況

第 4 号 土 坑
遺 物 出 土 状 況

第 25 号 土 坑
完 掘 状 況



第 29 号 土 坑
完 掘 状 況

第 32 号 土 坑
完 掘 状 況

S12-6

S15-20

S120-120

S120-121

S18-41

S133-175

S134-183

S133-176

S134-184

S120-102

S120-101

S120-103

第2・5・8・20・33・34号住居跡出土土器

S16-22

S19-52

S123-125

S123-124

S114-78

S112-59

S114-87

S132-166

第6・9・12・14・23・32号住居跡出土土器

S18-43

S120-106

S127-147

S134-185

S131-161

S123-126

S18-42

S18-44

第8・20・23・27・31・34号住居跡出土土器

SI28-153

SI14-74

SI14-76

SI14-77

SI22-122

SI14-75

SI33-179

SK 4-204

SI36-203

SI31-160

第14・22・28・31・33・34・36号住居跡，第４号土坑出土土器

SI5-17

SI34-190

SI8-49

SI8-50

SI12-58

SI13-73

SI14-90

第5・8・12・13・14・34号住居跡出土土器

S128-155

S133-180

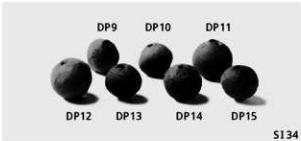
S112-60

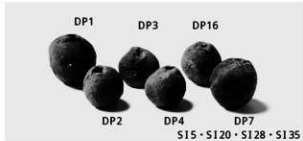
S111-57

S135-196

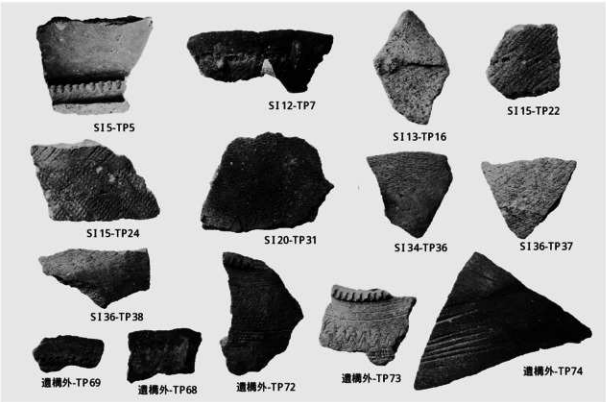
S131-164

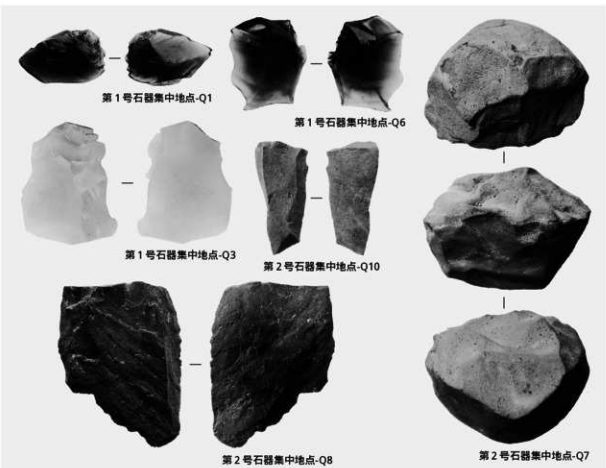
第11・12・28・31・33・35号住居跡出土土器



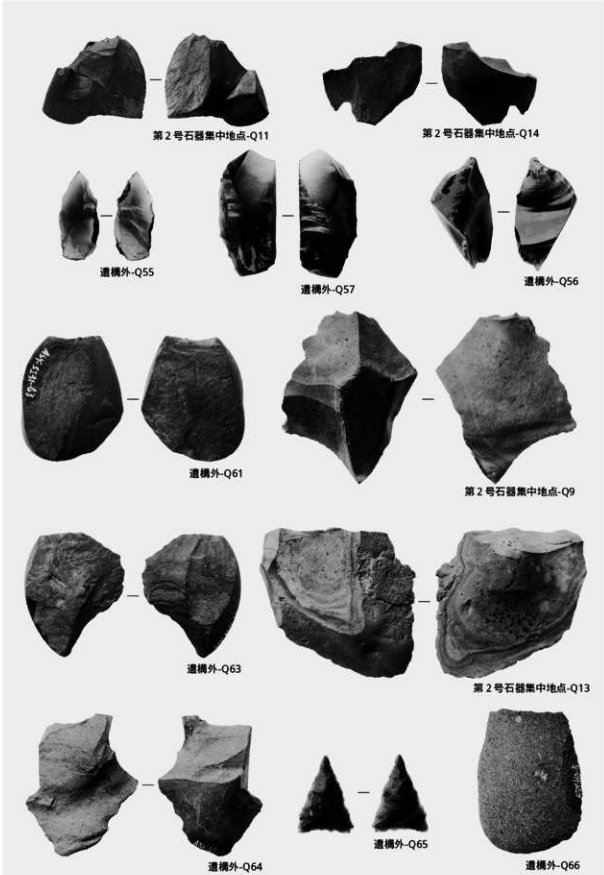


第５・20・28・34・35号住居跡出土土製品，第６号住居跡，遺構外出土石器・石製品
第30号住居跡，第26・31号土坑，遺構外出土土器

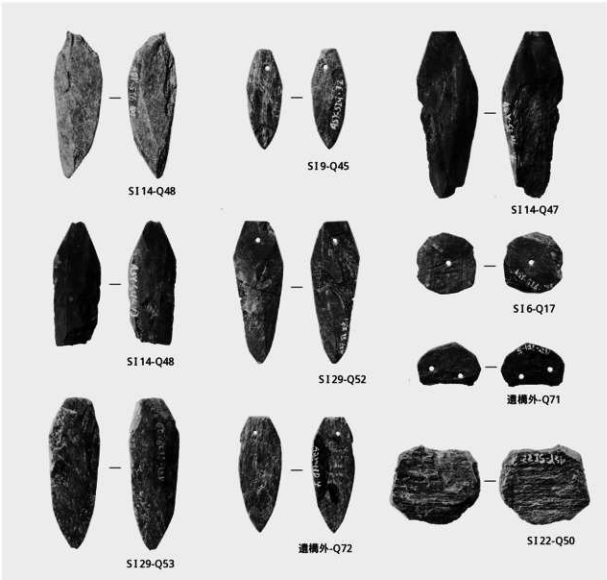


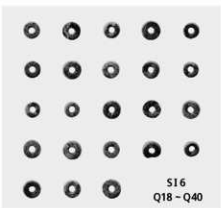


第５・12・13・15・20・34・36号住居跡出土土器，第１・２号石器集中地点出土石器



第 2 号石器集中地点，遺構外出土石器





第６・９・14・22・29号住居跡，遺構外出土石製品，第６・20号住居跡，遺構外出土ガラス小玉，第26号住居跡出土炭化米

茨城県教育財団文化財調査報告第239集

薬　師　入　遺　跡

阿見吉原土地区画整理事業地内
埋蔵文化財調査報告書　Ⅱ

平成17(2005)年3月22日　印刷
平成17(2005)年3月25日　発行

発行　財団法人　茨城県教育財団
〒310-0911　水戸市見和1丁目356番地の2
茨城県水戸生涯学習センター分館内
TEL　029-225-6587

印刷　山三印刷株式会社
〒311-4153　水戸市河和田町4433の33
TEL　029-252-8481